岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 140

田益田中（笹ヶ瀬川調節池）遺跡

笹ヶ瀬川調節池建設に伴う発掘調査

1999

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　140

田益田中（笹ヶ瀬川調節池）遺跡

―笹ヶ瀬川調節池建設に伴う発掘調査―

1999

岡山県教育委員会

巻頭カラー　周辺航空写真　　平成６年11月撮影

巻頭図版Ⅱ

7区方形周溝遺構と周辺土壙群（南から）

4区河道11出土線刻人面土製品

5区弥生河道出土漆・朱塗り土器（338）

2区河道出土弥生後期の壺（746）

序

岡山市街地の北部に位置する、津高地区における最近の再開発は、すざましい勢いで進んでいます。つい最近までは、静かなたたずまいの中でマスカットと桃の産地として著名であった津高。そこでの開発は、いまや中央を東西に横断する山陽自動車道、南北に縦断して走る国道53号北バイパス、さらに吉備新線周辺地域の住宅団地の建設等々その勢いは止まるところを知りません。そして、いずれの開発についても埋蔵文化財との競合は避けることが出来ず、今後とも市街地の拡大が進めば進むほど、この問題は大きな課題となるに違いありません。

今回報告いたします笹ヶ瀬川調節池関係の田益田中遺跡については、現在岡山市南方にある国立岡山病院が手狭になってきたことから移転の検討が始まり、この田益地区が候補地に上がってきたのは昭和62年頃のことで、その後、山陽自動車道北側の水田地帯に決定され、用地買収が行われました。この地は山陽自動車道建設に先立つ発掘調査において弥生時代以降の遺跡が拡がっていることがわかっていました。また、この地の南側の笹ヶ瀬川は、蛇行いちじるしく、大雨が降ると本流に放流できないで、耐水する地区であったそうです。病院が建設されることにより、これまで一時的に貯水の役目を果ていた水田が無くなると一層困難になることが予想されるため、調整池の建設が必要となりました。県河川開発室は病院建設予定地の西側と、山陽道の南側に調節池の建設の計画を進め、こうして病院建設とは別の発掘調査が必要となってきました。

発掘調査は平成７年から９年にかけて行い縄文時代の河道や、弥生時代前期の川とそれに伴う井堰のほか、土壙墓などが発見され、いろいろと新しい事実が判明しました。特に弥生時代前期の川の中から出土した入れ墨をした人面土器は、当時の人々の風習を垣間見ることが出来る貴重なもので、当時、新聞等を賑やかした遺物の一つです。

発掘調査の実施・報告書の作成にあたっては、旧地権者・地元住民の方々をはじめ、岡山県文化財保護審議委員会の先生、岡山地方振興局建設部、さらに直接作業にあたられた皆様方に多くのご協力を得ました。関係各位に対し記して厚くお礼申し上げます。

平成11年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　葛原克人

例　　言

1　本報告書は、国立岡山病院建設にさいし、笹ヶ瀬川調節池建設に伴う発掘調査で、岡山県土木部の委託を受け発掘調査を実施した田益田中遺跡の報告書である。

2　田益田中遺跡は、岡山市田益に所在する。

3　発掘調査は、平成６年12月12日から19日まで48㎡の確認調査を、平成７年度は１万８千㎡を３名で行い、平成８年度は２斑６名で３万６千㎡、平成９年度は２名で1500㎡の調査を４月から６月まで行った。

4　報告書の作成は平成９年７月から平成10年３月まで当センターにおいて、２名の調査員が行った。

5　発掘調査、報告書作成にあたっては、岡山県文化財保護審議会委員の近藤義郎、水内昌康両委員から有益な助言・指導を得た。また 線刻人面土製品については、国立歴史民俗博物館の佐原真・春成秀爾・設楽博己の各氏からは種々の教示を得た。

6　本報告書の編集は、伊藤、三宅が中心となって行い、各遺構の執筆については、発掘担当者が分担し、文責は文末に明記した。

7　本報告書に関わる自然遺物についての鑑定・同定および分析を次の方と機関に依頼し有益な教示を得た。

石器・石材鑑定	妹尾　護（吉備国際大学助教授）
花粉分析	岡山理科大学基礎理学科　三好教夫研究室
花粉分析及び木製品樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社

8　出土遺物・図面・写真類は岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

9　頁数の関係で土器観察表・石器観察表は割愛した。

凡　　例

1　本書で使用した標高は、海抜高であり、方位は、第４・８・９・30・31～33図は真北、それら以外は磁北である。なお遺跡付近の磁北は西遍６度40分を測る。

2　本書第１図は、国土地理院発行の1/25000「岡山北部」を一部改変して使用している。

3　国土座標は、病院建設地も含めＸ軸を算用数字でＹ軸をアルハベットで表示し，調節池北西端の16－Ｃ地点は、Ｘ＝143400000，Ｙ＝39650000である。

4　本書の遺構・遺物実測図の縮尺は、それぞれに明記し、例外はあるが、主なものについては以下のように統一している。

遺構	竪穴住居・建物（1/60）	井戸・土壙（1/30）		
	溝断面（1/20，1/30）			
遺物	土器（1/4）	土製品（1/3）	石器・石製品（1/2，1/3）	木器（1/6）

遺物写真のについては、江尻泰幸の撮影によるものである。

笹ヶ瀬川調節池田益田中遺跡本文目次

序
例言
目次
第1章　調査の経緯 …… 1
第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　調査の概略 …… 2
第3節　調査体制 …… 3
第4節　遺跡の位置と環境 …… 4
第5節　確認調査の概要 …… 6
第2章　上池調査区の調査 …… 11
第1節　調査区の設定 …… 11
第2節　縄文時代の遺構・遺物 …… 14
第3節　弥生時代の遺構・遺物 …… 28
（1）土壙・土壙墓 …… 28
（2）溝 …… 50
第4節　古墳時代以降の遺構・遺物 …… 57
（1）竪穴住居 …… 57
（2）土壙 …… 59
（3）溝 …… 66
第5節　弥生時代以降の河道とその遺物 …… 69
（1）弥生時代前期の河道 …… 69
（2）弥生時代後期の河道 …… 104
（3）古墳時代の河道 …… 112
第3章　下池調査区 …… 136
第1節　下池調査区の概略 …… 137
第2節　縄文時代の遺構・遺物 …… 137
（1）土壙 …… 139
（2）溝 …… 139
（3）河道 …… 142
第3節　弥生時代の遺構・遺物 …… 150
（1）土壙 …… 151
（2）溝 …… 153
第4節　古墳時代以降の遺構・遺物 …… 155
（1）竪穴住居 …… 155
（2）土壙 …… 155
（3）溝 …… 156
第4章　まとめ …… 165
第1節　河道を中心とする弥生土器について …… 165
第2節　岡山県下出土の弥生時代人面表現について …… 169
付載　自然科学分析 …… 175

図 版 目 次

巻頭カラーⅠ　周辺航空写真　平成６年11月撮影

巻頭カラーⅡ　上池調査区６区弥生時代前期の方形周溝遺構と土壙群・線刻人面土製品・後期漆・塗り壺・後期大壺

第１図　田益遺跡位置図 …… 1

第２図　富原遺跡・富原北廃寺出土遺物 …… 4

第３図　周辺地形図及び主要遺跡位置図（国土地理院1/25000） …… 6

第４図　笹ヶ瀬川調節池位置図(1/2000)と第１次調査トレンチ位置 …… 7

第５図　T-1～T-6平・断面図(1/80) …… 8

第６図　T-7・T-8平・断面図(1/80) …… 9

第７図　土層柱状模式図相関(深さ 1/30・幅任意) …… 10

第８図　調査区配置図(1/2500) …… 11

第９図　上池地区縄文時代の河道図(1/1000) …… 12

第10図　上池１・２・３・４・５区縄文時代の河道(1/500) 13

第11図　１区河道１断面図(1/30) …… 14

第12図　１区河道２・３・４断面図(1/50) …… 14

第13図　２区河道５・６・７断面図(1/50) …… 14

第14図　２区河道８・９断面図(1/30) …… 15

第15図　４区河道11出土遺物 …… 15

第16図　４区河道13断面図(1/50) …… 15

第17図　８区河道７断面図(1/80) …… 16

第18図　10区河道断面図(1/60) …… 17

第19図　縄文時代前期・中期の遺物 …… 18

第20図　河道14出土縄文時代後期前葉の遺物(1) …… 18

第21図　河道14出土縄文時代後期前葉の遺物(2) …… 19

第22図　河道14出土縄文時代後期前葉の遺物(3) …… 19

第23図　河道14出土縄文時代後期中葉の遺物(1) …… 20

第24図　河道14出土縄文時代後期中葉の遺物(2) …… 21

第25図　河道14出土縄文時代後期後葉の遺物(1) …… 21

第26図　河道14出土縄文時代後期の遺物 …… 22

第27図　河道14出土縄文時代後期の遺物 …… 22

第28図　河道14出土縄文時代後期・晩期の遺物(底部) … 23

第29図　河道14出土縄文時代後期の遺物(石器) …… 23

第30図　上池調査区上層(弥生時代以降)遺構配置図(1/1000) …… 24

第31図　上池調査区上層(弥生時代以降)遺構配置図(1/500) 1 …… 25

第32図　上池調査区上層(弥生時代以降)遺構配置図(1/500) 2 …… 26

第33図　上池調査区上層(弥生時代以降)遺構配置図(1/500) 3 …… 27

第34図　上池調査区１～３区(弥生時代以降)遺構配置図(1/300) …… 28

第35図　土壙１平・断面図(1/30)及び出土物 …… 28

第36図　土壙２平・断面図(1/80)及び出土遺物 …… 29

第37図　土壙３平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 29

第38図　土壙４平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 30

第39図　土壙５・６平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 30

第40図　土壙７平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 31

第41図　土壙８・９・10平・断面図及び出土遺物 …… 31

第42図　土壙11平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 32

第43図　土壙12断面図(1/30)及び出土遺物 …… 32

第44図　土壙13平・断面図(1/30) …… 32

第45図　土壙14平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 33

第46図　土壙15平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 33

第47図　７区土壙集中地区拡大図(1/100) …… 34

第48図　方形周溝断面図(1/20)及び出土遺物 …… 35

第49図　土壙16平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 35

第50図　土壙17平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 36

第51図　土壙18平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 36

第52図　土壙19平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 37

第53図　土壙20平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 37

第54図　土壙21断面図(1/30)及び出土遺物 …… 38

第55図　土壙22平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 38

第56図　土壙23平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 38

第57図　土壙24平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 39

第58図　土壙25平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 39

第59図　土壙26・27平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 40

第60図　土壙28平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 40

第61図　土壙29平・断面図(1/30) …… 41

第62図　土壙30平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 41

第63図　土壙31・32・33平・断面図(1/30)及び出土遺物 … 41

第64図　土壙34・35平(1/50)・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 42

第65図　土壙36平・断面図(1/30) …… 43

第66図　土壙37・38平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 43

第67図　土壙39平・断面図(1/40) …… 44

第68図　土壙40・41平・断面図(1/30) …… 44

第69図　１１区遺構配置図(1/200) …… 45

第70図　土壙42・43平・断面図(1/30) …… 46

第71図　土壙44・45・46平・断面図(1/30)及び出土遺物 … 46
第72図　土壙47平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 47
第73図　土壙48平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 47
第74図　土壙49平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 48
第75図　土壙50・51・52平・断面図(1/30) …… 49
第76図　溝1出土遺物 …… 50
第77図　溝2断面図(1/30)及び出土遺物 …… 50
第78図　溝3(西半)断面図(1/30)及び出土遺物 …… 51
第79図　溝3(東半)断面図(1/20)及び出土遺物 …… 52
第80図　溝4断面図(1/30)及び出土遺物 …… 52
第81図　溝5断面図(1/30)及び出土遺物 …… 53
第82図　溝6出土遺物 …… 53
第83図　溝7断面図(1/20)及び出土遺物 …… 53
第84図　溝8出土遺物 …… 54
第85図　溝9出土遺物 …… 54
第86図　溝10断面図(1/30)及び出土遺物 …… 54
第87図　溝11・11'断面図(1/20・1/30)及び出土遺物 …… 55
第88図　1・2区ピット内出土遺物 …… 55
第89図　7・9区ピット内出土遺物 …… 56
第90図　1・2・3区古墳時代以降の遺構配置図(1/400)　57
第91図　竪穴住居1・2平・断面図(1/80)及び出土遺物　57
第92図　土壙53平・断面図(1/30) …… 58
第93図　土壙54平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 58
第94図　土壙55(井戸)平・断面図(1/30)及び出土遺物 … 58
第95図　土壙56平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 59
第96図　土壙57平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 60
第97図　土壙58平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 60
第98図　土壙59・60平・断面図(1/30) …… 61
第99図　土壙61・62平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 61
第100図　土壙63平・断面図(1/50)及び出土遺物 …… 62
第101図　土壙64平・断面図(1/40)及び出土遺物 …… 62
第102図　土壙65平・断面図(1/80) …… 63
第103図　土壙66・67平・断面図(1/30) …… 63
第104図　土壙62～72平・断面図(1/30) …… 64
第105図　土壙73・74平・断面図(1/30) …… 65
第106図　溝12断面図(1/30) …… 66
第107図　溝13断面図(1/30)及び出土遺物 …… 66
第108図　溝14・15断面図(1/30)及び出土遺物 …… 66
第109図　溝16断面図(1/30)及び出土遺物 …… 67
第110図　溝17断面図(1/30)及び出土遺物 …… 67
第111図　溝18断面図(1/30)及び出土遺物 …… 67
第112図　溝19断面図(1/20)及び出土遺物 …… 68
第113図　溝20断面図(1/30)及び出土遺物 …… 68
第114図　1区河道最下層出土縄文土器 …… 69
第115図　4区河道平面図(1/400) …… 69
第116図　1区河道南壁断面図(1/100) …… 70
第117図　2区河道中央断面図(1/100) …… 70
第118図　1区河道最下層出土遺物 …… 71
第119図　4区河道断面図(1/350) …… 72
第120図　4区河道11出土遺物(1) …… 74
第121図　4区河道11出土遺物(2) …… 75
第122図　4区河道12出土遺物 …… 75
第123図　4区河道13出土遺物 …… 75
第124図　6区河道内井堰状杭列群
平(1/50)断面図(1/20) …… 76
第125図　6区河道出土遺物(1) …… 77
第126図　6区河道出土遺物(2) …… 78
第127図　6区河道出土遺物(3) …… 79
第128図　7区河道出土遺物 …… 80
第129図　9区弥生河道出土遺物(1) …… 81
第130図　9区弥生河道出土遺物(2) …… 82
第131図　10・11区河道平面図(1/400) …… 83
第132図　10区河道18断面図(1/50) …… 83
第133図　10区河道17・18断面図(1/50) …… 84
第134図　10区河道17出土遺物(1) …… 85
第135図　10区河道17出土遺物(2) …… 86
第136図　10区河道16出土遺物(1) …… 86
第137図　10区河道16出土遺物(2) …… 87
第138図　10区河道18出土遺物 …… 88
第139図　11区河道17出土遺物(1) …… 89
第140図　11区河道17出土遺物(2) …… 90
第141図　11区河道17出土遺物(3) …… 91
第142図　11区河道19・20合流部出土遺物 …… 91
第143図　河道及び周辺出土石器(1－石鏃1) …… 92
第144図　河道及び周辺出土石器(2－石鏃2) …… 93
第145図　河道及び周辺出土石器(3－石鏃3) …… 94
第146図　河道及び周辺出土石器(4－錐) …… 95
第147図　河道及び周辺出土石器(5－磨製石包丁) …… 96
第148図　河道及び周辺出土石器
(6－磨製石包丁・打製石包丁) …… 97
第149図　河道及び周辺出土石器
(7－抉り入り石斧・鑿状石斧他) …… 98
第150図　河道及び周辺出土石器
(8－蛤刃石斧・打製石鍬？) …… 99
第151図　河道及び周辺出土石器
(9－楔状石器・スクレイパー・石鏃・石匙) …… 100

第152図 河道及び周辺出土石器
(10－スクレイパー・石鎌・石匙) …… 101
第153図 河道及び周辺出土石器
(11－叩き石状・皿状石器) …… 102
第154図 河道及び周辺出土石器(12－石皿・砥石) …… 103
第155図 河道及び周辺出土石器(13－礫錐・不明石器) … 104
第156図 6区 河道出土木器(1/6) …… 104
第157図 1・2区弥生後期河道1内井堰
平・断面図(1/30) …… 105
第158図 1区河道1第4層出土遺物(1) …… 106
第159図 1区河道1第4層出土遺物(2) …… 107
第160図 1区河道1第4(5・6)層出土遺物(3) …… 108
第161図 3区河道1第4層出土遺物(1) …… 109
第162図 2区河道1第(3)4(5)層出土遺物(1) …… 110
第163図 2区河道1第(3)4(5)層出土遺物(2) …… 111
第164図 2区河道1第5・6層出土遺物(3) …… 112
第165図 2区河道1第5・6層出土遺物(4) …… 113
第166図 2区河道1第3・4層出土遺物 …… 114
第167図 4区河道22出土遺物(1) …… 115
第168図 4区河道22出土遺物(2) …… 116
第169図 4区河道22出土遺物(3) …… 117
第170図 6区河道出土遺物 …… 118
第171図 4区河道24の下層(22)出土遺物(1) …… 119
第172図 4区河道24の下層(22)出土遺物(2) …… 120
第173図 4区河道24の下層(22)出土遺物(3) …… 121
第174図 10区河道23出土遺物(1) …… 121
第175図 10区河道23出土遺物(2) …… 122
第176図 1区河道1第2層出土遺物(1) …… 123
第177図 1区河道1第2層出土遺物(2) …… 124
第178図 2区河道1第2・3・4層出土遺物 …… 125
第179図 2区河道1第1・2層出土遺物 …… 126
第180図 4区河道24断面図(1/40) …… 127
第181図 1区河道24出土遺物 …… 127
第182図 4区河道(22)24出土遺物(1) …… 128
第183図 4区河道24出土遺物(2) …… 129
第184図 4区河道24出土遺物(3) …… 130
第185図 4区河道24出土遺物(4) …… 131
第186図 4区河道24出土遺物(5) …… 132
第187図 7区河道24出土遺物 …… 133
第188図 5区河道24出土遺物 …… 134
第189図 10区河道24断面図(1/50) …… 134
第190図 10区河道24出土遺物 …… 135
第191図 上池調査区出土紡錘車 …… 135
第192図 6区河道24出土木製品・
上池調査区出土石製紡錘車・石帯 …… 135
第193図 上池地区包含層出土遺物 …… 136
第194図 下池調査区縄文時代遺構配置図(1/1000) …… 137
第195図 Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区縄文時代の遺構と河道(1/600) …… 138
第196図 Ⅸ区土壙1平・断面図(1/30) …… 139
第197図 Ⅸ区土壙2平・断面図(1/30) …… 139
第198図 Ⅸ区ピット81(下層)出土の土器 …… 140
第199図 Ⅸ区溝1土層断面図(1/30・1/60) …… 140
第200図 Ⅸ区溝1出土土器 …… 141
第201図 Ⅸ区溝1出土石器 …… 142
第202図 Ⅱ区河道2出土縄文土器 …… 142
第203図 Ⅲ区河道4出土縄文土器及び石器 …… 143
第204図 Ⅶ・Ⅷ区河道9出土縄文土器 …… 143
第205図 Ⅶ・Ⅷ区北半河道9出土縄文土器(1) …… 144
第206図 Ⅶ・Ⅷ区南半河道9出土縄文土器(2) …… 145
第207図 Ⅸ区河道8断面図(1/60)及び出土縄文土器 … 146
第208図 Ⅸ区河道9断面図(1/100) …… 147
第209図 Ⅸ区河道9出土土縄文土器(1) …… 148
第210図 Ⅸ区河道9出土土縄文土器(2) …… 149
第211図 下池地区弥生時代以降の遺構配置図(1/800) … 150
第212図 Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区弥生時代以降の遺構配置図(1/400) 151
第213図 Ⅸ区土壙3平・断面図(1/30)及び出土遺物 …… 152
第214図 Ⅸ区土壙4・5・6平・断面図(1/30)
及び出土遺物 …… 152
第215図 Ⅸ区土壙6出土遺物 …… 153
第216図 Ⅸ区溝3～8断面図(1/20・1/30) …… 153
第217図 Ⅸ区竪穴住居1平・断面図1/60) …… 155
第218図 Ⅸ区土壙7平・断面図(1/60) …… 155
第219図 Ⅸ区土壙8平・断面図(1/60)及び出土遺物 …… 156
第220図 Ⅸ区溝7～11断面図(1/20) …… 156
第221図 Ⅸ区溝15断面図(1/50)及び出土遺物(1) …… 158
第222図 Ⅸ区溝15出土遺物(2) …… 159
第223図 Ⅸ区溝15出土遺物(3) …… 160
第224図 Ⅸ区溝14断面図(1/20)及び出土遺物 …… 161
第225図 Ⅸ区溝17断面図(1/20) …… 161
第226図 Ⅶ・Ⅷ区北半溝18断面図(1/20) …… 161
第227図 Ⅶ・Ⅷ～Ⅸ区溝19平(1/50)・断面図(1/40) …… 162
第228図 Ⅶ・Ⅷ～Ⅸ区溝19断面図(1/40)及び出土遺物 … 163
第229図 下池地区包含層出土石器 …… 164
第230図 土器編年表 …… 168
第231図 人面土器・土製品出土位置図 …… 169
第232図 岡山県における人面土器・土製品集成図 …… 171

写真図版目次

1－1　上池調査区遺跡遠景（南西大岩遺跡より）
　2　1区全景（南西より）
　3　1区河道断面（北より）
2－1　1区河道井堰（北西より）
　2　1区竪穴住居1（南より）
　3　1区竪穴住居2（南より）
3－1　2区北半（南西より）
　2　2区南半（南東より）
　3　2区河道断面（北東から）
4－1　3区土壙49（南より）
　2　4区北半（南より）
　3　4区南半河道22（南西より）
5－1　4区南半河道10（南西より）
　3　4区河道13（南西より）
　2　4区河道24（南西より）
6－1　5区河道（南より）
　2　5区河道（北より）
　3　5区河道（南西より）
7－1　6区全景（北より）
　2　6区全景（南西より）
　3　6区河道底部井堰（北東より）
8－1　6区河道　木製品出土状態（南より）
　2　7区縄文河道（北より）
　3　7区河道14（北より）
9－1　7区土壙群（南西より）
　2　7区土壙群（南より）
　3　7区方形周溝遺構
10－1　7区土壙群（南東より）
　2　土壙15（東より）
　3　土壙23・30（北から）
11－1　7区溝19（北より）
　2　7区溝19内遺物出土状況（東より）
12－1　8区縄文河道14（北より）
　2　8区縄文河道14（西より）
　3　8区縄文河道14（南東より）
13－1　10区全景（西より）
　2　10区河道15・16（北東より）
　3　10区河道15・16（東より）
14－1　10区河道9・10（北より）
　2　10区河道11（西より）
　3　10区溝2（南より）
15－1　10区縄文前期土器溜まり（東より）
　2　10区縄文前期土器溜まり（南西より）
16－1　11区全景（西より）
　2　11区南部遺構群（西より）
　3　11区河道（北より）
17－1　12区縄文河道14全景（西より）
　2　12区河道14北部（東より）
　3　12区河道14底部出土縄文土器（西より）
18－1　Ⅰ区溝状遺構1・2・3（西より）
　2　Ⅰ区河道2・3（東より）
　3　Ⅱ区河道2（東より）
19－1　Ⅲ区全景（北より）
　2　Ⅲ区河道（南西より）
　3　Ⅳ区全景（南西より）
20－1　Ⅶ・Ⅷ区北半河道9（西より）
　2　Ⅶ・Ⅷ区北半河道9（南より）
　3　Ⅶ・Ⅷ区南半河道9（北より）
21－1　Ⅸ区南半全景（弥生面）
　2　Ⅸ区河道8（南東より）
　3　Ⅸ区河道9（南東より）
22－1　Ⅸ区竪穴住居1（南西より）
　2　Ⅸ区溝15（南西より）
　3　Ⅸ区溝2（南西より）
23－1　ⅦⅧ区北半溝19及び断面（西より）
　2　Ⅶ・Ⅷ区北半溝19（東より）
　3　Ⅸ区溝19（西より）
24－1　10区河道上面出土縄文前期の土器
　2　河道14出土縄文時代中期・後期前葉の土器
25　河道14出土縄文時代後期前葉・中葉の土器
26　河道14出土縄文時代後期中葉の土器
27　河道14出土縄文時代後期中葉・
　後葉の土器及び河道出土石器
28　河道出土弥生前期の土器（1）
29　河道出土弥生前期の土器（2）
30　4区河道22出土弥生後期の土器
31－1　4区河道内出土篦目の付着した土器
　2　4区河道出土弥生後期の壺
32　河道24出土土器（須恵器）
33　弥生河道内出土石器（1）
34　弥生河道内出土石器（2）
35　下池調査区各地点出土縄文土器（1）
36　下池調査区各地点出土縄文土器（2）
37　下池調査区各地点出土縄文土器（3）
38　下池Ⅸ区河道9出土縄文土器
39　下池調査区各地点出土石器
40　下池Ⅸ区溝15の土器（1）
41　下池Ⅸ区溝15の土器（2）

第1章　調 査 の 経 緯

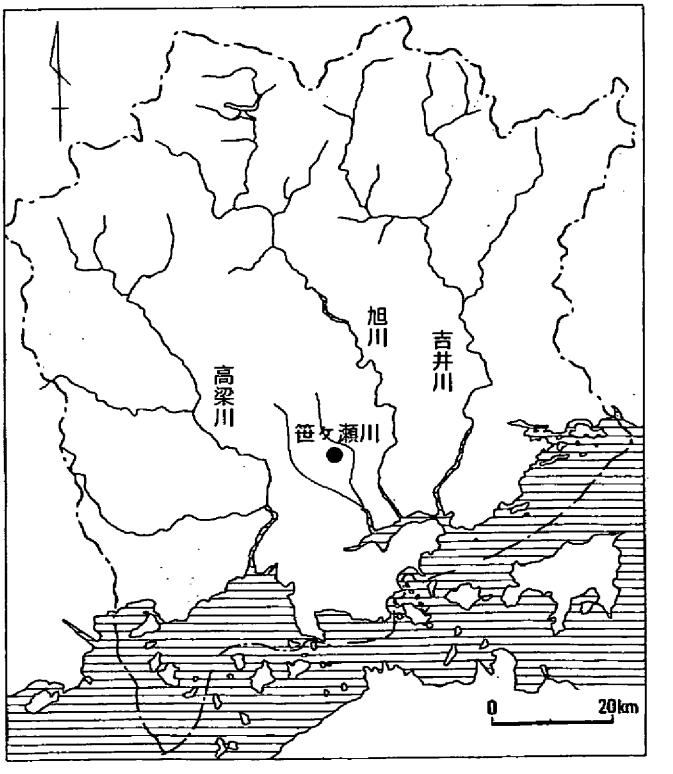
第１節　調査に至る経緯

岡山市南方にある国立岡山病院は、敷地が手狭になってきたことにより郊外に移転することが昭和60年頃から考えられてきた。その候補地の１つとして田益地区が選ばれたのは、山陽自動車道岡山インターチェンジに近接していること、国道53号北バイパスあるいは吉備新線等々が建設される予定であることなど、交通の利便性を考えてのことと考えられる。

用地買収は、岡山県土地開発公社が担当し、平成６年度においてそのほとんどが完了していた。

この地は山陽自動車道の建設時に発掘調査が行われ遺跡の拡がっていることは判明していた（註－１）。平成６年12月に全域の確認調査が行われ、この結果、濃淡はあるものの全域に弥生時代を中心とする遺構が拡がっていることを再確認した。さらに病院建設と連動して、病院とは別の地点に調整池の建設計画があった。これはこの地域に大雨が降ると笹ヶ瀬川に排水されず、この地に耐水することが想定されたために計画されたものである。この総面積は４万㎡近くあり、病院建設予定地西側（上池地区）約３万㎡と、新たに山陽自動車道の南側、笹ヶ瀬川堤防下までの区域（下池地区）約1.2万㎡、合計４万㎡を越えるものであった。そして病院建設地造成完了までに調節池の工事が完了していなければならないという、地元との協議が済まされていた。このような状況であったため、岡山県教育委員会は、２年計画で発掘調査を行う予定で進めた。

発掘調査は、弥生時代を中心とする面と、確認調査時ではわからなかったが、弥生面からさらに60～120㎝下層に縄文時代後期と考えられる面があり、この面を切って河道が走っていることが確認された。この河道内から縄文時代後期の遺物が散見したため、これら河道の調査も順次行っていった。（伊藤）



第１図　田益田中遺跡位置図

註

1　「田益田中遺跡・白壁遺跡・大岩遺跡」－山陽自動車道建設に伴う発掘調査６－「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」122　日本道路公団広島支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会　1997

第２節　調査の概略

発掘調査は1995年度事業として、調査員１班３名で４月10日から上池調査区の11区から開始し、順次６区、８区、12区、７区 、５区の調査を実施し、翌96年度は２班６名体制で、１・２区、５区、11区、下池調査区のⅠ～Ⅸ区、さらに３ｍ程造成されていた４区の調査を行った。97年度においては農道、水路などで調査が行えなかった部分の調査を４月から６月まで２名の調査員で３区、９区、山陽自動車道下の連結管部分２カ所の調査を行い、以後その２名がセンターにおいて整理作業に入った。

調査日誌抄

94.　12／12～19　第１次確認調査
95.　４／11　発掘調査開始
　　11区側溝、河道掘り下げ
　６／22　11区調査終了
　６／28　区区調査開始
　７／３から10まで梅雨で作業できず
　９／６　調査開始、６区調査開始
　９／28　12区調査開始
　11／２～14　11区拡張
　　15　８区調査終了
　11／21～12／４　８区拡張
　　26　５区調査開始
　12／20　７区調査開始
　12／22　12区上面終了
96.　２／７　12区縄文河道終了
　３／４　７区上面終了
　３／22　95年度作業終了
96.　４／４　５区、７区、１区調査開始
　４／９　10区調査開始
　４／26　２区開始
　５／14　下池Ⅰ区調査開始
　５／16　５区縄文河道終了
　５／27　下池Ⅲ区調査開始
　６／13　下池Ⅴ区調査開始
　６／17　Ⅰ区調査終了
　７／15　下池Ⅳ・Ⅵ区調査開始
　７／22　Ⅱ区調査終了
　８／２　Ⅶ・Ⅷ区調査開始
　８／５　１・２区調査終了、下池Ⅸ区調査開始
　11／26　11区調査開始
　12／２　Ⅶ・Ⅷ区調査終了
　12／16　３区調査開始
97.　１／７　４区調査開始
　２／10　埋蔵文化財保護専門委員会
　　（近藤・水内両委員出席）
　２／14　10区弥生面調査終了
　３／３　９区農道下調査開始
　３／18　96年度調査終了
　３／19　事務所撤収
97.　４／７　３区調査開始
　４／17　１区拡張
　６／２　13－１清掃
　６／10　14－２清掃
　６／31　調査終了現場撤収
　７／1～３／31　報告書作成作業
99.　２／12　報告書に関する埋蔵文化財保護専門委員会
　　（近藤・水内両委員出席）

第３節　調査体制

1994（平成６）年度

岡山県教育委員会　教育長	森崎岩之助
岡山県教育庁　教育次長	岸本　憲二
文化課　課長	大場　　淳
課長代理	松井　新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）	高畑　知功
主　任	若林　一憲
岡山県古代吉備文化財センター	
所　長	河本　　清
次　長	葛原　克人
総務課長	丸尾　洋幸
課長補佐（総務係長）	杉田　卓美
主　査	石井　善晴
調査第１課長	正岡　睦夫
課長補佐	松本　和男
主　事	杉山　一雄

1995（平成７）年度

岡山県教育委員会　教育長	森崎岩之助
岡山県教育庁　教育次長	黒瀬　定生
文化課　課長	大場　　淳
課長代理	樋本　俊二
参　事	葛原　克人
課長補佐（埋蔵文化財係長）	高畑　知功
主　任	若林　一憲
岡山県古代吉備文化財センター	
所　長	河本　　清
次　長	高塚　惠明
次長（文化課本務）	葛原　克人
総務課長	丸尾　洋幸
課長補佐（総務係長）	井戸　丈二
主　査	石井　善晴
調査第２課長	伊藤　　晃
課長補佐	井上　　弘
文化財保護主事	山本　昌彦
主　事	佐藤　寛介（６月まで）
主　事	日下　隆春（６月～３月まで）

1996（平成８）年度

岡山県育委員教会　教育長	森崎岩之助
岡山県教育庁　教育次長	黒瀬　定生
文化課　課長	大場　　淳
課長代理	松井　英治
課長代理	臼井　洋輔
参　事	葛原　克人
課長補佐（埋蔵文化財係長）	平井　　勝
主　任	若林　一憲
岡山県古代吉備文化財センター	
所　長	河本　　清
次　長	高塚　惠明
次長（文化課本務）	葛原　克人
文化財保護参事	正岡　睦夫
総務課長	丸尾　洋幸
課長補佐（総務係長）	井戸　丈二
総務主幹	守安　邦彦
主　査	木山　伸一
調査第２課長	伊藤　　晃
課長補佐	山磨　康平
文化財保護主幹	下澤　公明
文化財保護主査	中務　和彦
文化財保護主任	三宅　勝己
文化財保護主事	速水　章人

1997（平成９）年度

岡山県教育委員会　教育長	黒瀬　定生
岡山県教育庁　教育次長	平岩　　武
文化課　課長	高田　朋香
課長代理	西山　　猛
課長代理	臼井　洋輔
課長補佐（埋蔵文化財係長）	平井　　勝
主　事	三宅　美博
岡山県古代吉備文化財センター	
所　長	藪本　克之
次　長	正岡　睦夫
総務課長	小倉　　昇
課長補佐（総務係長）	井戸　丈二
主　査	木山　伸一
調査第２課長	伊藤　　晃
課長補佐	山磨　康平
文化財保護主任	三宅　勝己

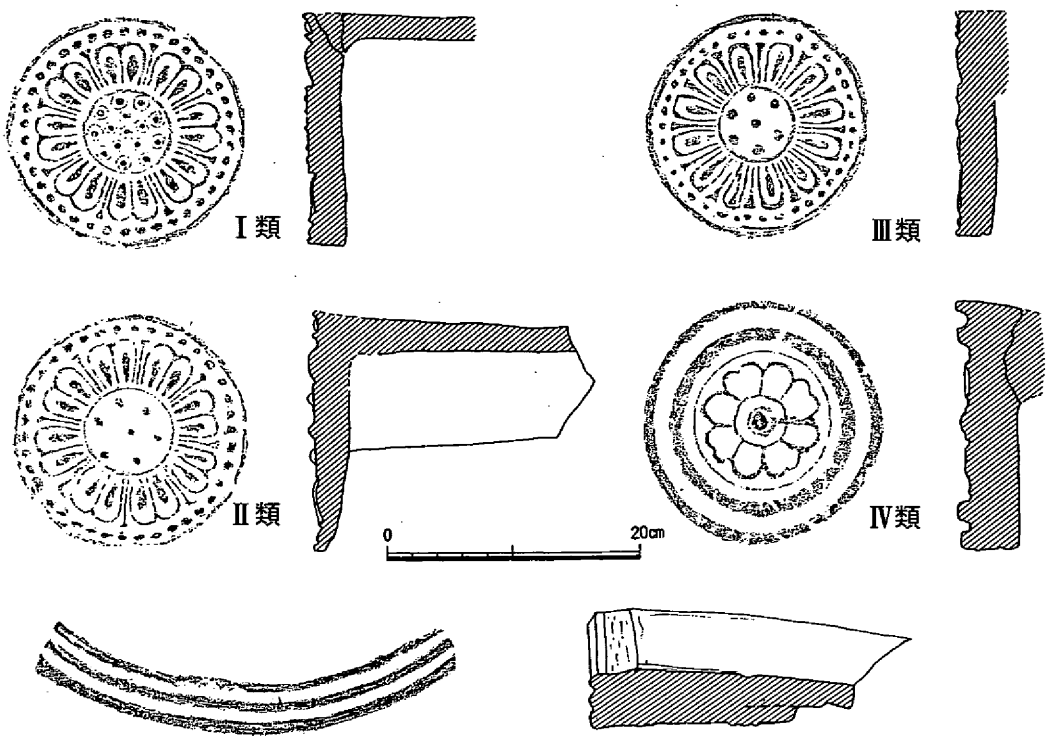
発掘調査にあたっては、上田匡文の協力を得た。

またこの報告書作成にあたって以下の方々にお世話になりました。

土器・石器の実測・渡邊恵里子、小林利晴、蛯原啓介、米田克彦、伊原史子、丸山啓子、峠田秀子、山本恵美子、河内一美、阿部典子、三垣佐知子、トレース・田中淑子、中野晴美

第４節　遺跡の位置と環境

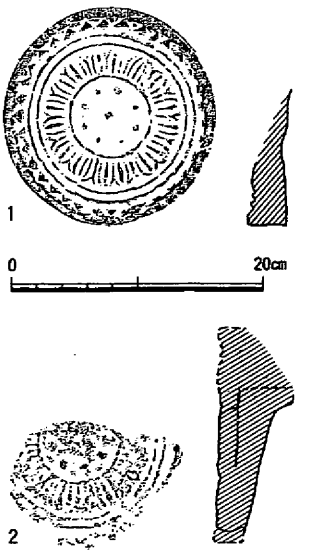
岡山平野の北部に位置する津高は、昭和46年岡山市に合併するまでは御津郡津高町であった。東西に山が迫り、南北に細長い平野中央部を笹が瀬川が蛇行しながら南に流路を取る。北から東は霊山金山から派生する山並みが連なり、南にも続くこの支丘稜線が旧御野郡との境界をなす半田山山塊とな



第２図　富原遺跡・富原北廃寺出土遺物

る。西は吉備高原から続く低丘陵をなし旧一宮町に接する。三迫峠筋は古代からの街道としての役割を果たしてきた。北は辛香峠の稜線で御津郡御津町との境になる。

この調査にはいる以前に津高地域で知られいた遺跡は余り多くない。縄文時代については山陽自動車道の発掘調査において弥生時代の河道内からローリングを受けた後期と思われる土器片、晩期の土坑・溝などの遺構と共に多くの土器片が出土している。集落遺跡の実態についてはわかっていない。弥生時代前期から中期にかけての土坑・溝・自然河道内から多くの土器片等が出土し、集落が近辺にあったと想定できるが、その中心的な位置等に関しては不明な点が多い。中期から後期にかけては、かつて香和中学校の北西から弥生土器１点が出土していた森元・国司遺跡を、平成元年国道53号線北バイパス工事に伴って調査が行われたが、遺構・遺物は発見されなかった（註２）。山陽自動車道の建設に伴って発掘調査が行われた田益遺跡の調査において竪穴住居・土壙・土壙墓・井戸など生活の



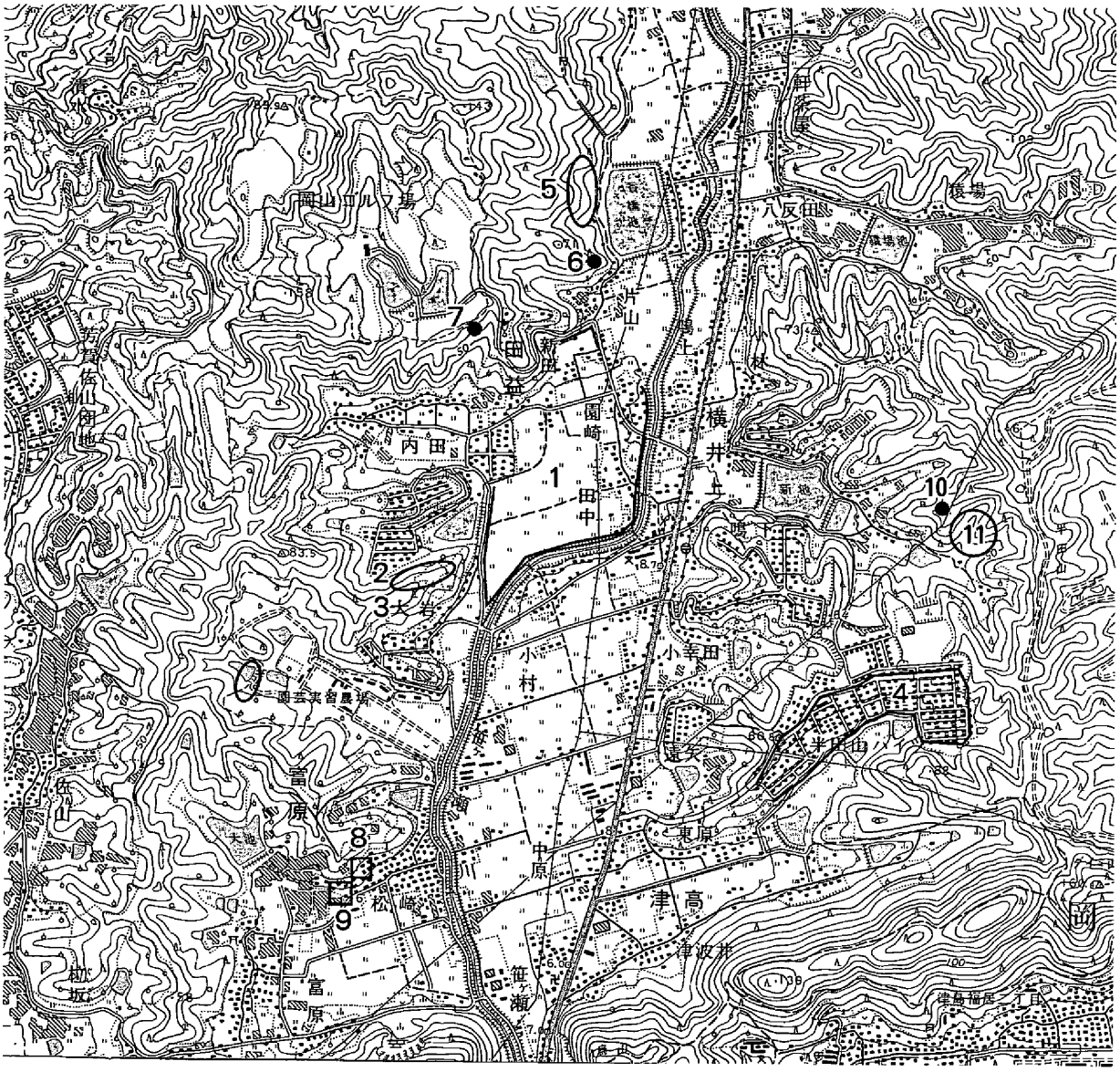
様相が推察されるものが検出された（註３）。また平成３年笹が瀬川の東に位置する低丘陵部において、津高団地建設に伴って発掘調査が行われ、中期末から後期の竪穴住居などが検出されている（註４）。この田益遺跡の西の丘陵に存する大岩遺跡は、中期後半から後期にかけての竪穴住居・袋状土壙などを検出している（註５）。

この東西の低丘陵上あるいは山裾に横穴式石室を持つ古墳時代後半の古墳群が多数存在している。単独で存在する終末期の富原西奥古墳・白壁古墳は山陽自動車道の建設に伴って発掘調査が行われ（註６）、また国道53号線北バイパス建設に伴って、横穴石室を中心とする12基の西山古墳群の調査が行われている（註７）。吉備新線－青谷５号墳（註８）。古墳時代から古代にかけてと考えられる製鉄関係の遺跡は、白壁奥遺跡において製鉄炉14基・炭窯などが調査され津高における鉄生産の実態も明らかに成りつつある。また先に触れた津高団地建設地においても炭窯・製鉄炉が発見され、その周辺の後期古墳との関連のあることが明らかになっている。

笹が瀬川右岸・坊主山北側部の富原字荒神には白鳳期創建と考えられる富原北廃寺があり、その南400mの山裾富原字才の木には、奈良時代の瓦が出土する富原遺跡が存在する。かつてこの遺跡は富原南廃寺・才の木廃寺あるいは矢望城廃寺と呼ばれてきた。この遺跡の瓦を焼成した上の段窯跡は、北西の山裾に存在する。古代山陽道がこの遺跡の南側を通ると想定され、これに関連する津高駅館あるいは津高郡衙と考えられる（註９）

註

2　柳瀬昭彦「森元・国司遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』20　1990.3
3　二宮治夫他「田益遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』128　1998.3
4　乗岡　実「津高住宅団地造成地内の遺跡」－岡山市域における最近の発掘調査－『古代吉備』第13号　1991
5　二宮治夫他「大岩遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』128　1998.3
6　松本和男「富原奥古墳」「白壁奥古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』83－山陽自動車建設に伴う発掘調査　7－1993
7　福田正継他「田益新田遺跡・西山古墳群」－一般国道53号（岡山北バイパス）建設工事に伴う発掘調査－『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』109　建設省岡山国道工事事務所・岡山県教育委員会　1997
8　氏平昭則「田益新田遺跡・青谷５号墳」－一般県道岡山・賀陽線（吉備新線）建設に伴う発掘調査『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』112　岡山県教育委員会　1996
9　「富原北廃寺・富原遺跡」　岡山県史『考古資料』　岡山県史編纂委員会　1986



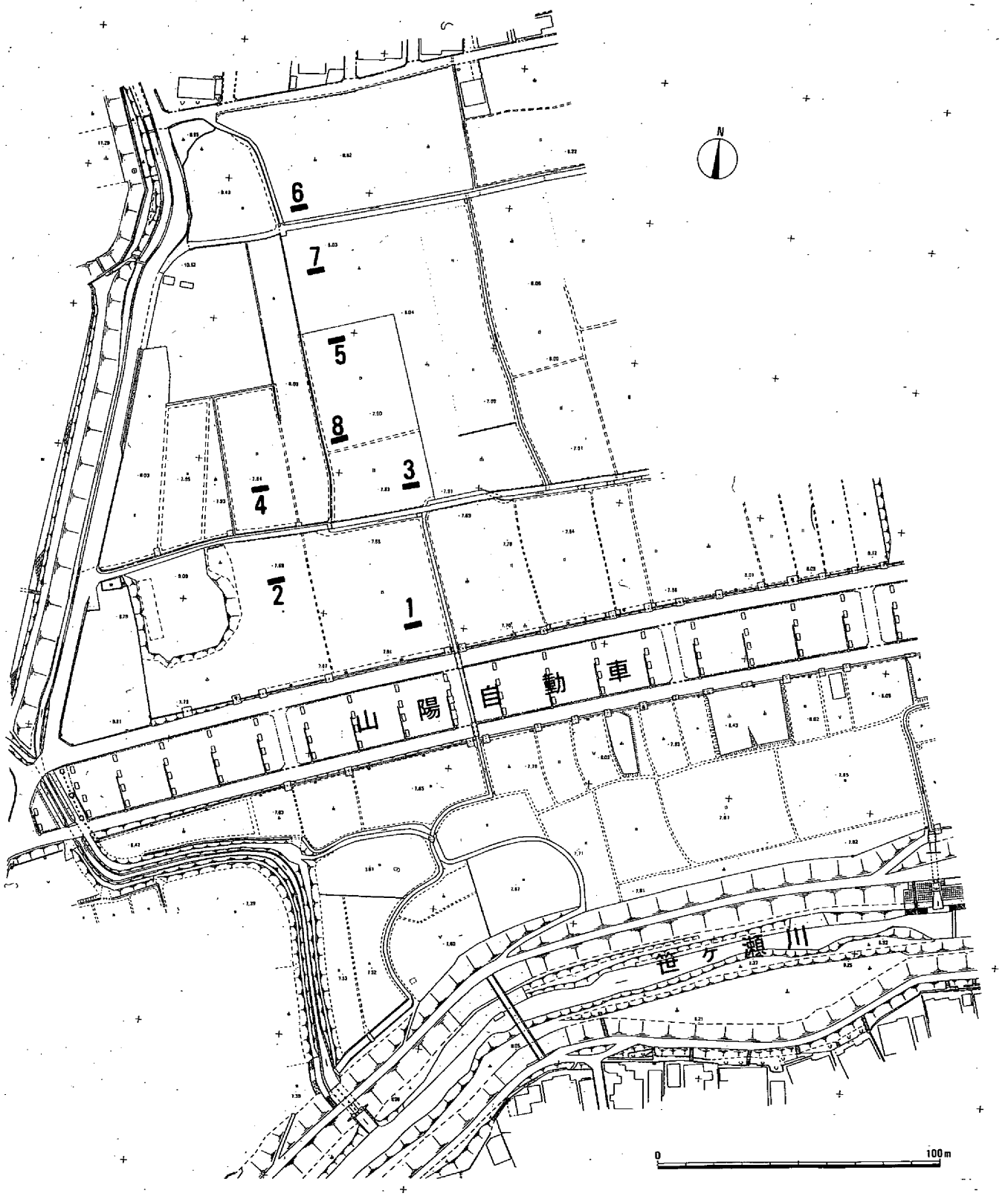
第３図　周辺地形図及び主要遺跡位置図（国土地理院 1/25,000）

1	田益田中遺跡	2	田益新田遺跡	3	大岩遺跡	4	津高住宅団地遺跡
5	西山古墳群	6	片山古墳	7	青谷５号墳	8	富原北廃寺
9	富原遺跡	10	白壁奥古墳	11	白壁奥（製鉄）遺跡	12	富原奥古墳

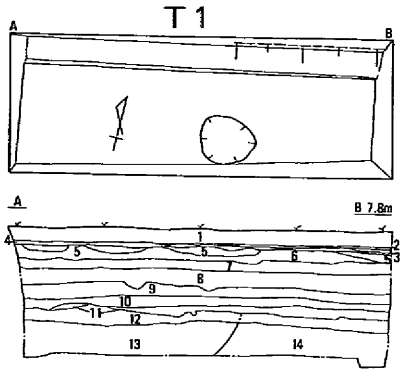
第５節　確認調査の概要

１．調査に至る経緯

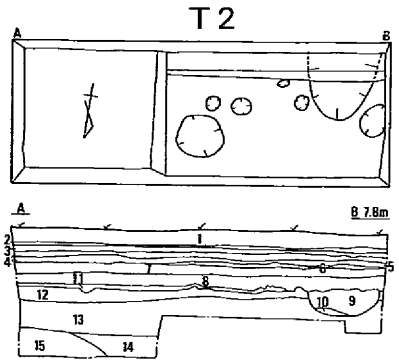
調整池の建設が予定された地区は、山陽自動車道のすぐ北側に位置する。山陽自動車道建設に先立って行われた発掘調査では、弥生時代から中世にわたる遺構や遺物が数多く確認された。したがって、建設予定地内にも同時期の遺構が存在することが容易に想像された。このため、建設に先立って平成６年12月12日から12月19日にかけて上池調査区の全面に1.5×４ｍのトレンチ８本を設定して確認調査を行った（第４図）。



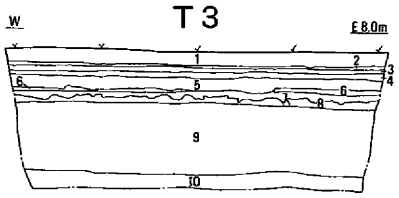
第４図　笹ヶ瀬川調節池位置図（1/2000）と第１次調査トレンチ位置



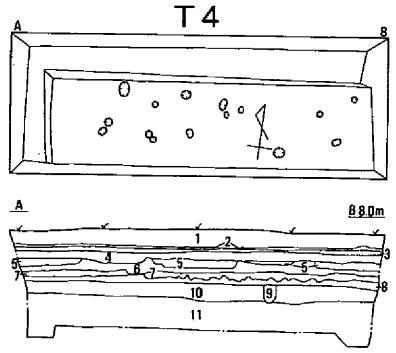
1．青灰色粘質土(耕作土)
2．明橙色砂質土
3．灰白色砂質土
4．にぶい灰白色砂質土
5．オリーブ色粘質土
6．灰褐色粘質土
7．灰褐色土(近世包含層)
8．灰褐色砂質土
9．明黄灰色粘質土
10．黄褐色砂質土
11．灰白色細砂
12．褐灰色鉄分・マンガン分沈着層
13．黒褐色粘質土(溝埋土)
14．明青灰色粘質土



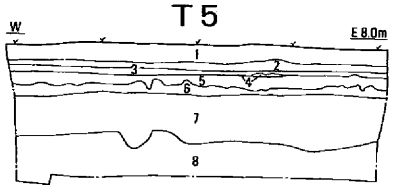
1．青灰色粘質土(耕作土)
2．明橙色砂質土
3．にぶい灰白色砂質土
4．淡オリーブ色粘質土
5．青灰色砂質土
6．灰褐色粘質土
7．灰褐色土(近世包含層)
8．灰白色砂質土
9．黒褐色土(ピット埋土)
10．黒褐色粘質土(ピット埋土)
11．暗灰色粘質土
12．明橙色粘質土
13．灰褐色土
14．暗青灰色粘性砂質土
15．暗褐灰色砂質土



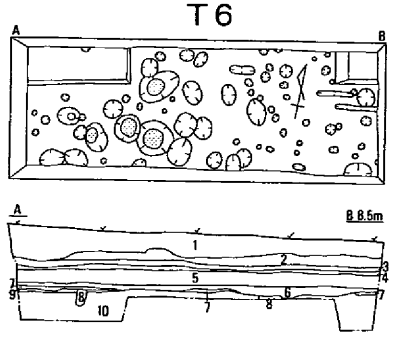
1．青灰色粘質土(耕作土)
2．明橙色砂質土
3．にぶい灰白色砂質土
4．青灰色砂質土
5．灰褐色土(近世包含層)
6．青灰色砂質土
7．灰白色砂質土
8．明橙色粘質土
9．灰褐色土
10．暗青灰色粘性砂質土



1．青灰色粘質土(耕作土)
2．明橙色砂質土
3．にぶい灰白色砂質土
4．青灰色砂質土
5．青灰色砂質土－粗砂
6．青灰色砂質土
7．灰白色粘質土
8．明橙色粘質土
9．褐灰色粘質土(ピット埋土)
10．にぶい灰褐色土
11．灰褐色土



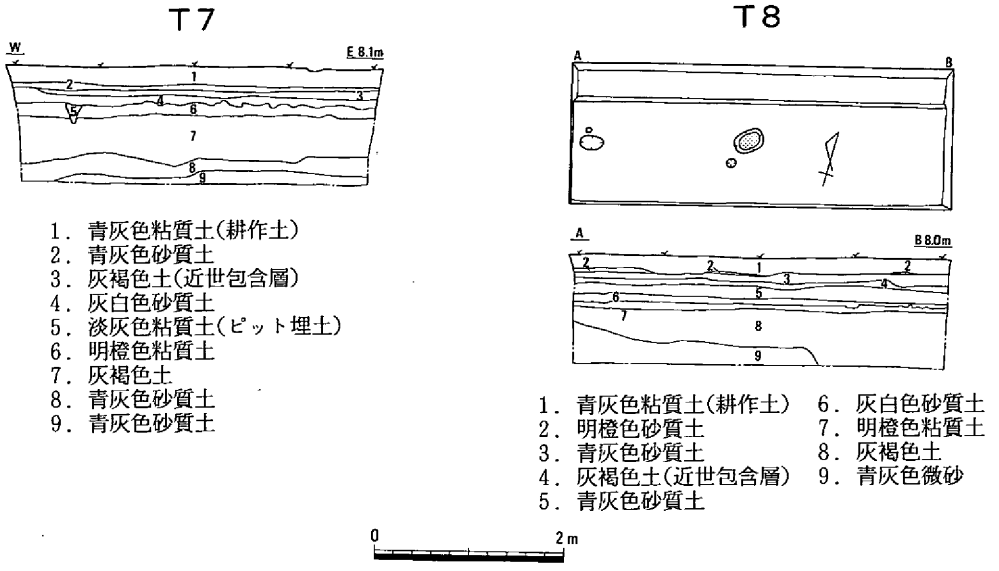
1．青灰色粘質土(耕作土)
2．青灰色砂質土
3．灰褐色土(近世包含層)
4．青灰色砂質土
5．灰白色粘質土
6．明橙色粘質土
7．灰褐色土
8．明青灰色粘性砂質土



1．造成土
2．黒色土(耕作土)
3．青灰色粘質土(耕作土)
4．明橙色砂質土
5．青灰色砂質土
6．灰褐色土(近世包含層)
7．暗灰色粘質土
8．灰褐色土(ピット埋土)
9．明橙色粘質土
10．にぶい灰褐色土

0　2 m

第５図　T-１～６平・断面図（1/80）



第6図　T-7・T-8 平・断面図（1/80）

2．確認調査の概要

T１（第５図）　現地表面から約70cmで明黄灰色粘質土層（第９層）に達し、それ以下で南へ落ちる肩をもつ流路を検出し、この流路の上面で黒色粘質土を埋土にもつピットを検出した。出土遺物は、第８層以上で中世以降の土器・陶磁器と弥生時代と推定されるサヌカイト製の錐・砕片が出土したが、それ以下の層からの出土遺物はなく流路とピット時期は不明である。

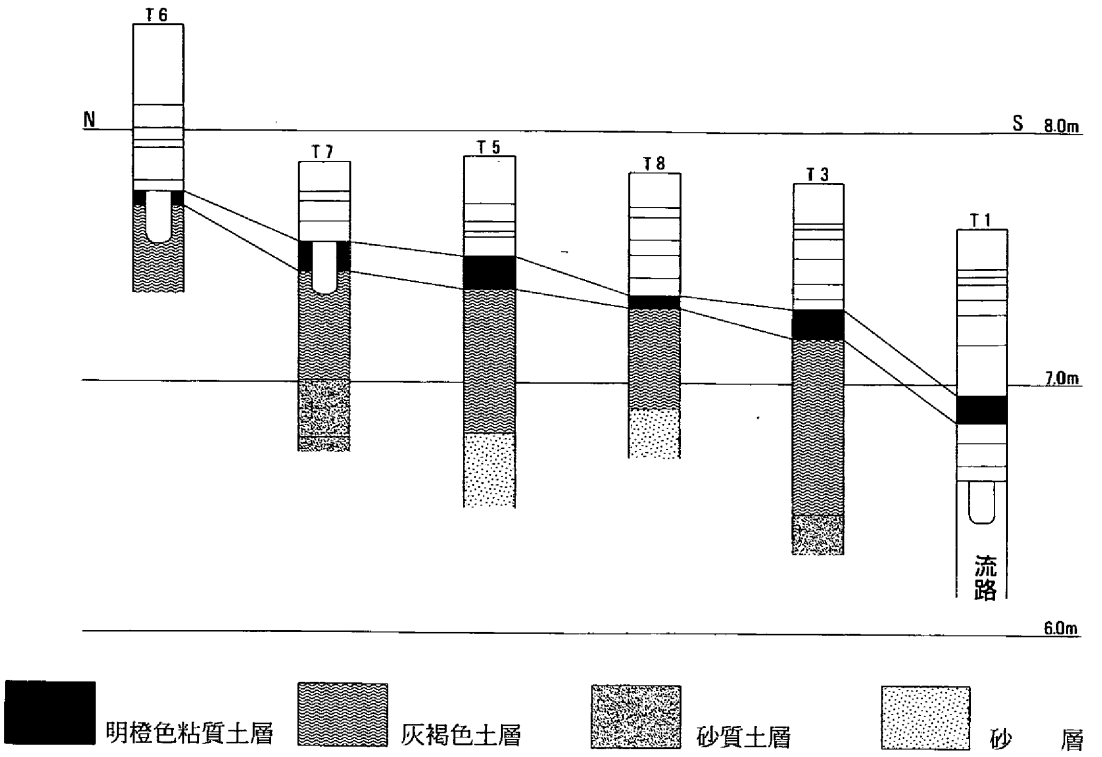
T２（第５図）　現地表面から約70cmで明橙色粘質土層（第12層）に達し、その上面で土壙・ピットを検出した。それ以下の層ではグライ化と砂質土層がみられた。出土遺物は第８層以上で中世以降の土器・陶磁器があり、それ以下ではみられない。土壙中には弥生土器の細片がみられるのみで時期は不明瞭である。

T３（第５図）　現地表面から約50cmで明橙色粘質土層(第８層)に達し、それ以下の層ではグライ化と砂質土層がみられたが、遺構は検出されなかった。出土遺物は第８層中から弥生土器片があり、第７層以上では中世以降の土器・陶磁器が出土した。

T４（第５図）　現地表面から約50cmで明橙色粘質土層（第８層）に達し、この下面の第９層上面で杭状のピットを多数検出した。出土遺物は第７層以上から中世以降の土器・陶磁器が出土しているのみである。

T５（第５図）　現地表面から約40cmで明橙色粘質土層（第６層）に達し、それ以下の層ではグライ化と砂質土層がみられたが、遺構は検出されなかった。出土遺物は第６層中から弥生土器片があり、第５層以上では中世以降の土器・陶磁器が出土した。出土遺物は第５層中から14世紀前半頃の土師器椀があり、それ以上の層からは中世以降の土器・陶磁器が多くみられる。

T６（第５図）　現地表面から約60cmで明橙色粘質土層（第９層）に達し、この上面で多数の柱穴・ピットを検出した。遺構埋土は、灰褐色土と暗褐灰色土があり切り合い関係もみられることから数時期のものが存在すると考えられる。出土遺物はほとんどなく、第８層以上で弥生土器と近世頃の備前焼がみられる。



第７図　土層柱状模式図相関（深さ1/30・幅任意）

Ｔ７（第６図）　現地表面から約40cmで明橙色粘質土層（第６層）に達し、この上面でピットを確認したが、それ以下の層ではグライ化と砂質土層がみられるのみであった。出土遺物は第５層以上で中世以降の土器・陶磁器がわずかにみられる。

Ｔ８（第６図）　現地表面から約50cmで明橙色粘質土層（第７層）に達し、この上面でピットを確認したが、それ以下の層ではグライ化と砂層がみられるのみであった。出土遺物は第５層以上で中世以降の土器・陶磁器がみられる。

３．確認調査の結果

上池調査区においては調査区全体に明橙（黄）色粘質土層の上面で土壙・ピットが存在し、特にＴ６に集中する傾向が認められる。調査区の南北方向の地形を第７図の土層柱状模式図でみてみると北から南へ地形が下がっていき、Ｔ６部分が他の地点よりも高いことがわかる。Ｔ６の地点の西側のすぐそばには丘陵が迫ってきており、このためにＴ６周辺が特に高くなり遺構が集中していると考えられる。明橙（黄）色粘質土層上面で検出した遺構の時期については遺構から時期のわかる遺物が出土していないため明らかではないが、Ｔ５において14世紀前半の遺物が明橙色粘質土層の上層で出土していることからそれ以前と判断される。

また、明橙（黄）色粘質土層以下については灰褐色土層の成因が明らかでないが、それ以下ではグライ化と砂層か砂質土層がいずれのトレンチでも確認できることから、笹ヶ瀬川の旧河道が複雑な流路をとって存在しているものと推察される。しかし、これらの流路については人力による調査であったため、十分な確認ができなかったので、全面調査の際に時期・性格を検討することとして課題として残された。（杉山）

第２章　上池調査区の調査

第１節　調査区の設定

上池調査区

この調査区は、病院建設予定地の西側に当たり、田益集落の南西の谷を堰き止めた刈又池の東・山陽自動車道の北側の平地に位置する。当初から計画されていた調節池の予定地で、約３万㎡の面積を有する。現状では宅地１筆・造成地１筆以外はすべて水田である。農道・水路は下流に水田があり、初年度では調査が出来なかったため、これらを境にこの区域を10カ所に分け、２年３ヶ月かけて調査を行った。

１・２区は調節池予定地の北端部の水田で中程を通る水路・畦畔で１・２区を分けている。

３区はその水路・畦畔下と４・５区と境を東西に走る農道と水路下である。

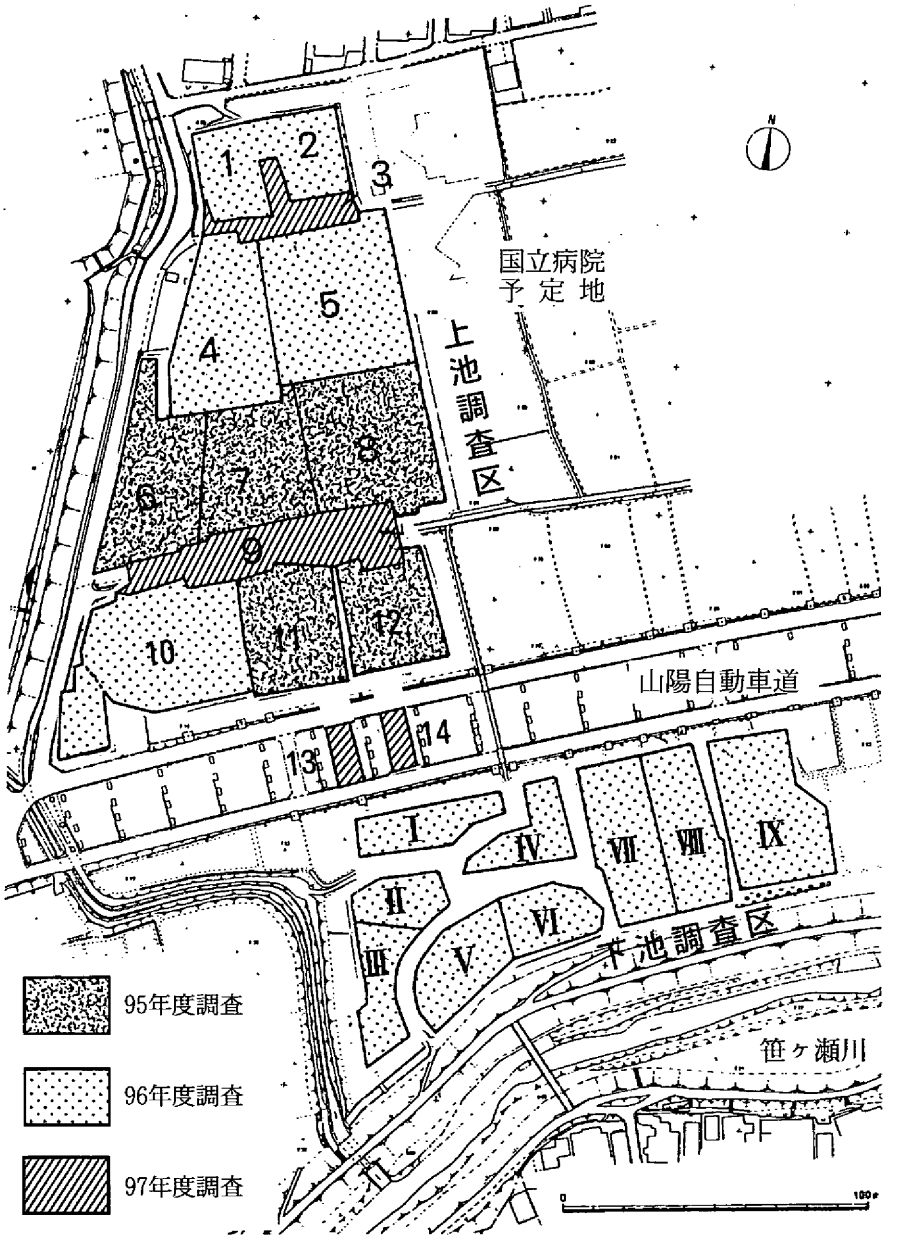
４区は３ｍほどの擁壁を造り造成されていた宅地である。

５区は４区の東の水田である。

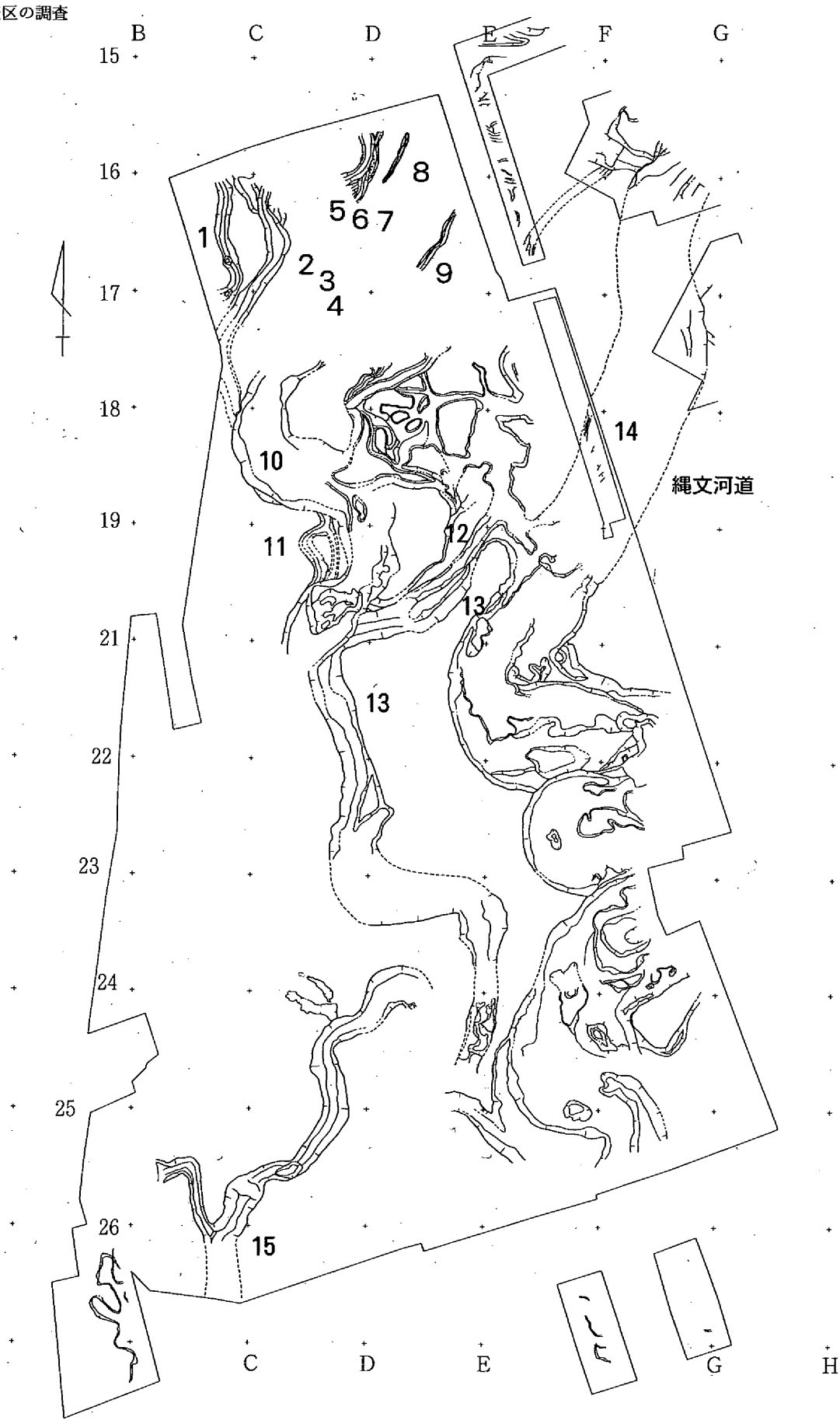
６・７・８区は４・５区の南の水田である。

９区は市道と水路下、10区は、1.5ｍ程造成され、かつて温室が建てられていたところである。

11・12区は10区の東の水田である。

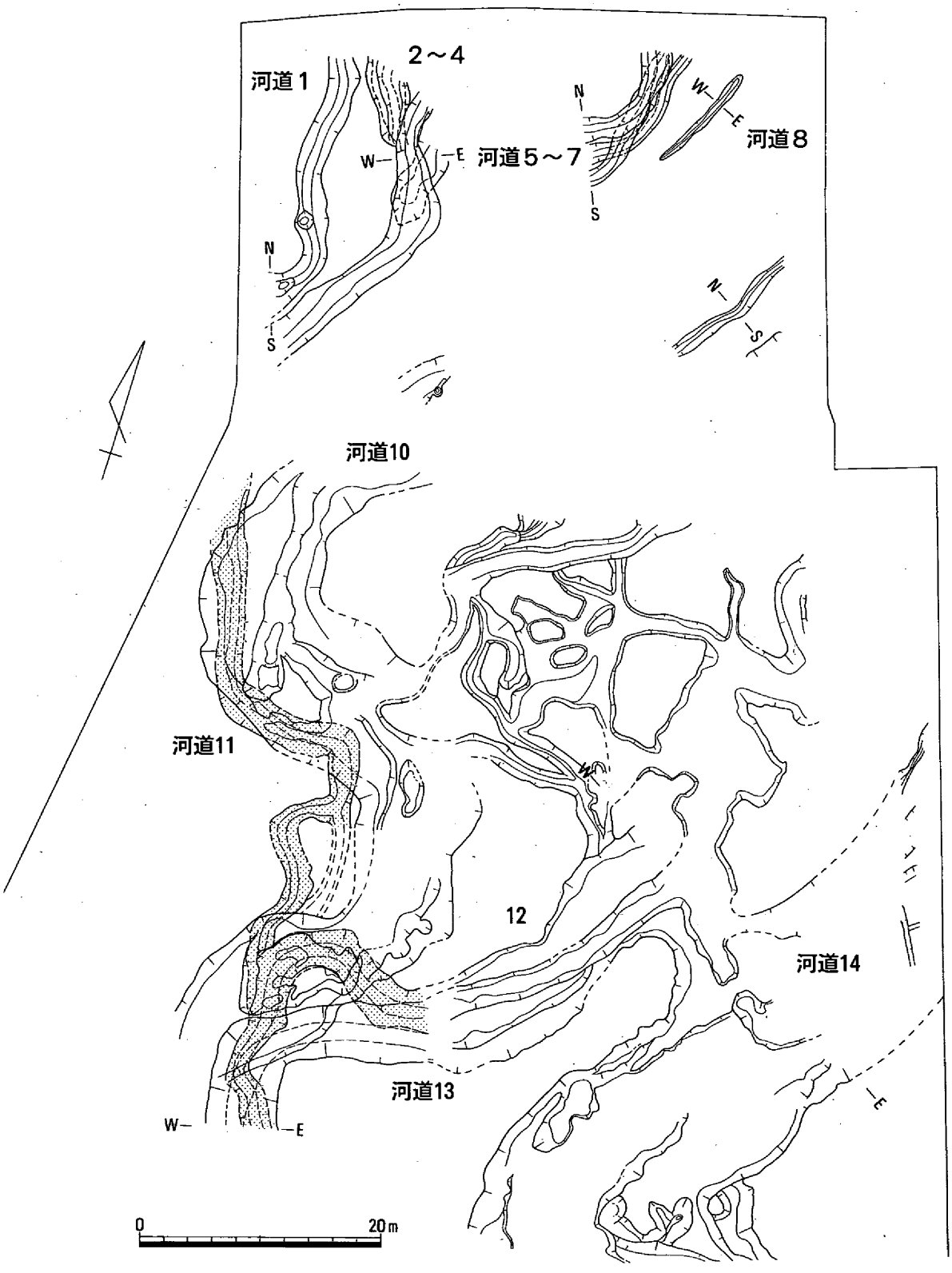


第８図　調査区配置図(1/2,500)



第９図　上池地区縄文時代の河道図(1/1,000)

0　50 m



第10図　上池１・２・３・４・５区縄文時代の河道図(1/500)

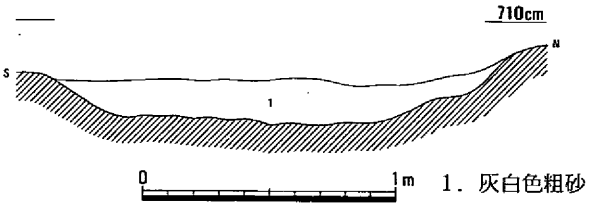
第２節　縄文時代の遺構・遺物

（１）河道

河道１（第11図）

１区西端に検出した南北方向に緩く蛇行する溝である。検出長20ｍ、幅200～250cm、最大深さ45cmである。断面は浅い皿状を呈し、灰白色粗砂が堆積している。河道底面は南端で25cm低く、北端の溝底面は海抜高700cmである。

時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが検出面等から縄文時代と考えられる。

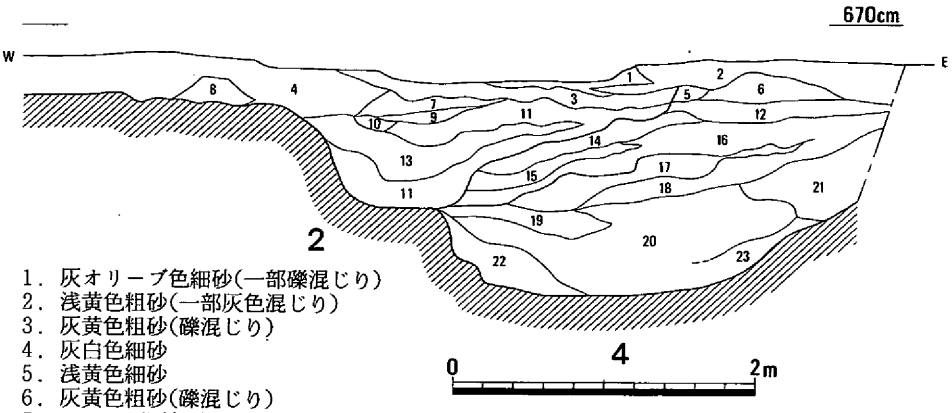


第11図　１区河道１断面図(1/30)

河道２～４

（第12図）

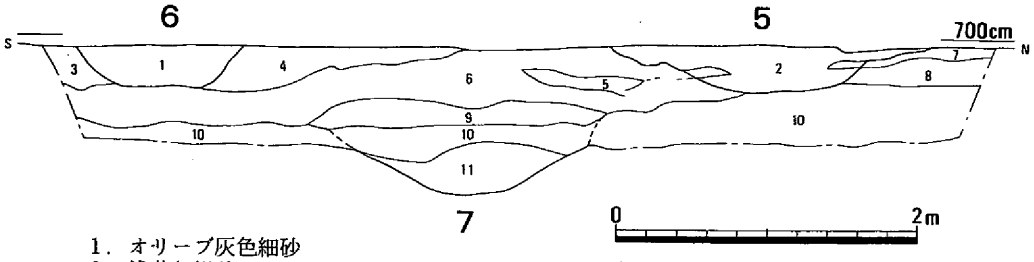
１区西半に河道１と接し南北方向に重複し検出した河道群である。河道２が最も新しく検出長25ｍ、最大幅400cm、深さ60～90cmである。断面は逆台形をなし、埋土は粘質微砂や礫混じり粗砂が堆積している。溝底面の海抜高620cmで、南端で10cm程低下しいる。



1．灰オリーブ色細砂(一部礫混じり)
2．浅黄色粗砂(一部灰色混じり)
3．灰黄色粗砂(礫混じり)
4．灰白色細砂
5．浅黄色細砂
6．灰黄色粗砂(礫混じり)
7．オリーブ灰色礫
8．灰色粗砂
9．オリーブ灰色粗砂(一部礫混じり)
10．灰色粗砂
11．明緑灰色礫
12．青灰色粗砂(一部浅黄混じり)
13．灰色粗砂
14．青灰色細砂
15．暗緑灰色粘質土
16．青灰色粘質微砂
17．青灰色粗砂
18．暗緑灰色粘質微砂
19．暗緑灰色粗砂
20．灰色粗砂(礫混じり)
21．暗緑灰色粘質微砂
22．腐植土
23．暗緑灰色粗砂

第12図　１区河道２・３・４断面図(1/50)

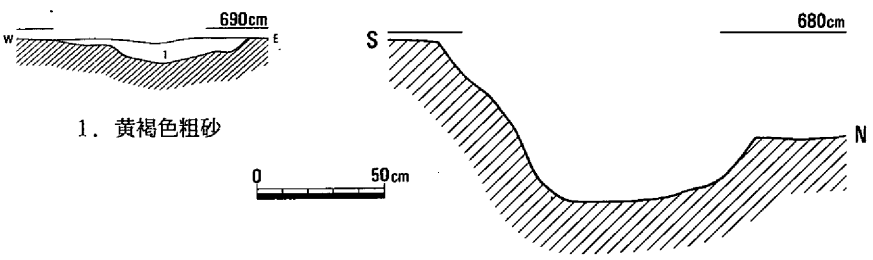
河道３～４は幅２～３ｍ、深さ60cmほどでほぼ同規模である。南半は河道２との重複で



1．オリーブ灰色細砂
2．浅黄色粗砂
3．暗緑灰色細砂(粗砂混じり)
4．灰色粘質微砂(小礫混じり)
5．灰色粘質微砂(粗砂小礫混じり)
6．緑灰色粘質微砂(粗砂混じり)
7．浅黄色粘質微砂(グライ化)
8．明黄褐色粘質微砂(粗砂混じり)
9．オリーブ黒色粘質微砂(粗砂混じり)
10．灰色粘質微砂(粗砂混じり)
11．緑灰色粗砂

第13図　２区河道５・６・７断面図(1/50)

不明瞭である。時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが検出面等から縄文時代と考えられる。



第14図　２区河道８・９断面図(1/30)

河道５・６・７（第13図）

２区東半に検出した北東から南西に向く３本の重複した河道群である。河道７が最も古く河道５と６は同一面で検出でき河道５が最も新しい。規模はいずれも同程度で検出長12m、幅150cm、である。深さは河道５・６が30cm、河道15がやや深く60cmである。断面は椀状を呈し、埋土はいずれも砂質土が堆積している。河道底面の海抜高は河道５・６が660～670cm、７がやや深く590cmである。

時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが検出面等から縄文時代と考えられる。

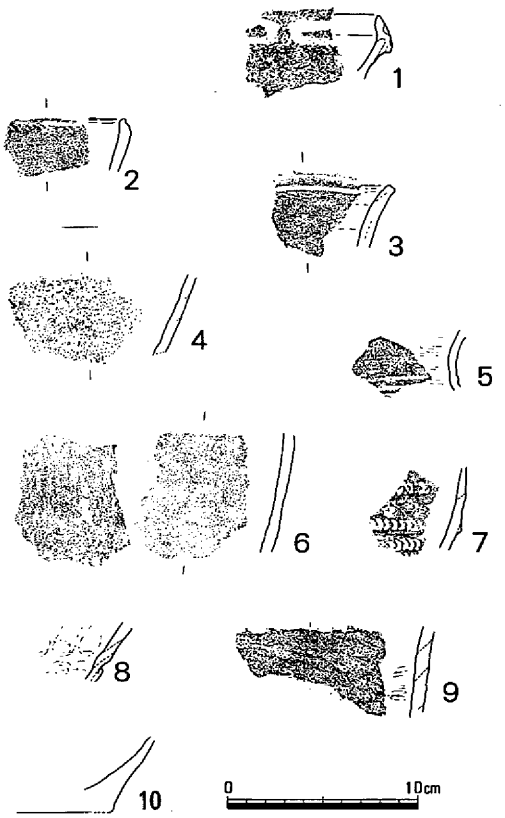
河道９（第14図）

２区南東端に検出の北東から南西に向く河道である。検出長12m、幅100cm、深さ60cmである。河道底面の海抜高610cmで高低差はほとんど認められない。河道断面は逆台形状で、埋土に主に灰白色粗砂が堆積している。

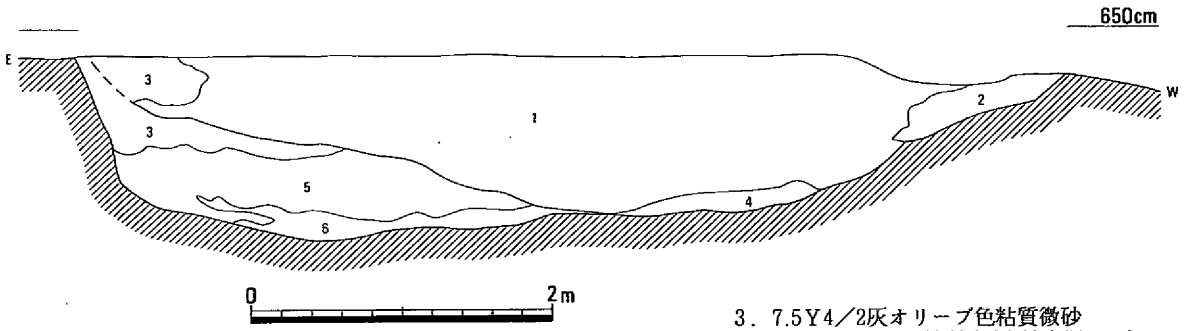
時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが検出面等から縄文時代と考えられる。

河道10（第15図）

４区を南北にS字状に縦断する。北側１・２区と南側10区では弥生時代以降の河道と錯綜していたため明瞭に検出できなかった。検出長50m、幅８～13m、深さ90～110cmである。断面は逆台形もしくは深椀状で、底面は

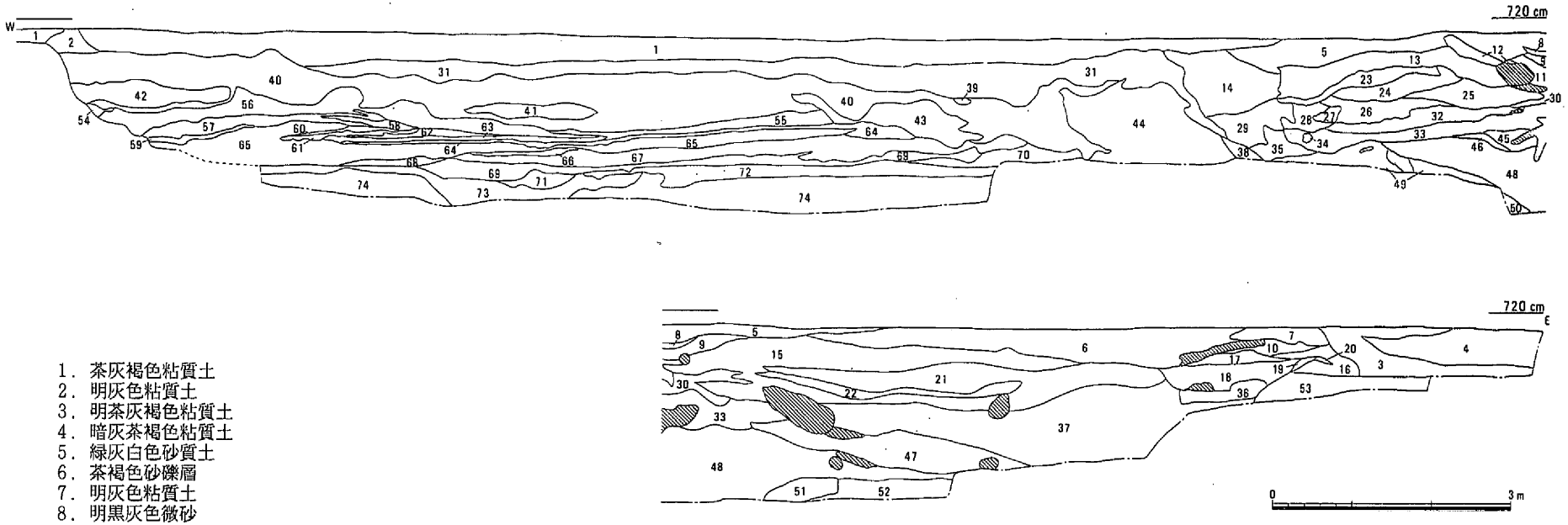


第15図　４区河道11出土遺物



1．オリーブ灰色粗砂(小礫２㎜～５㎜混じり)
2．暗緑灰色粘質土
3．7.5Y4／2灰オリーブ色粘質微砂
4．暗オリーブ灰色粘質土(腐植土混じり)
5．灰色粗砂(灰黄色粘質土・腐植土混じり)
6．黒褐色粘質土

第16図　４区河道13断面図(1/50)



1．茶灰褐色粘質土
2．明灰色粘質土
3．明茶灰褐色粘質土
4．暗灰茶褐色粘質土
5．緑灰白色砂質土
6．茶褐色砂礫層
7．明灰色粘質土
8．明黒灰色微砂
9．暗灰褐色砂
10．暗灰色粘性砂質土
11．暗灰色粘性砂質土
12．黄灰色微砂
13．暗黒灰色流木堆積層
14．緑灰色粘性砂質土
15．灰褐色砂礫層
16．緑灰色粘質土
17．暗茶褐色砂（流木片含む）
18．暗黄褐色砂（流木片含む）
19．黒灰色粘性砂質土（流木含む）
20．灰白色微砂
21．灰色砂
22．暗灰色砂
23．明灰褐色粗砂
24．灰白色粗砂（14より粒やや小さめ）
25．灰褐色粗砂
26．暗灰白色粗砂（流木片多く含む）
27．暗緑灰色粘質土
28．黒灰色粘性砂質土（流木堆積層）
29．暗灰褐色粘性砂質土（流木小量含む）
30．黒褐色流木堆積層
31．青灰色粘質土
32．黄灰色細砂
33．砂礫層
34．暗緑灰色粘質土
35．黒灰色粘性砂質土（流木堆積層）
36．灰白色砂（流木片かなり多く含む）
37．砂礫層
38．黄白色砂
39．青灰白色砂質土（流木片含む）
40．暗青灰白色粘性砂質土
41．砂礫層
42．オリーブ灰色粗砂
43．暗灰白色砂
44．灰褐色粗砂混じり粘質土
45．黒褐色流木堆積層
46．暗灰色粗砂
47．灰白色微砂（流木片かなり多く含む）
48．灰褐色粗砂（礫含む）
49．灰色微砂
50．明緑灰色粘質土
51．明緑灰色粘質土
52．灰色砂
53．黒灰色粘土
54．明オリーブ灰色粘質土
55．暗灰色粘土混じり微砂
56．暗灰色粗砂（１cm程度の小石小量含む）
57．明灰色微砂
58．暗灰色砂
59．暗黒灰色微砂
60．灰色微砂
61．淡黒灰色微砂
62．明灰色砂（57より粒やや大きめ）
63．暗灰色砂（58より粒やや小さめ）
64．淡黒灰色微砂
65．明灰色砂（57より粒やや大きめ）
66．淡黒灰色微砂
67．灰色粗砂
68．灰色砂
69．黒灰色砂混じり粘質土（流木片含む）
70．暗灰色粗砂（全体的に粒大きめ）
71．暗灰色粘土混じり粗砂
72．暗青灰色粘性砂質土
73．青灰色粘質土（流木片小量含む）
74．暗灰色粗砂（全体的に粒大きめ）

第17図　８区河道断面図（1/80）

かなりの凹凸がある。埋土は主に粗砂や礫層で流木が多く、直径50cm近い大木も認められた。なお、４区南半では調査時に上下２層に分層して新旧の河道として検出したが、その後の北側調査区では同一河道と認識して掘り下げた。河道底面は海抜600cm前後で高低差は不明瞭である。

出土遺物は河道の主に下層より縄文時代後期後半の縁帯文土器**1**、晩期の爪形文土器**7**が出土している。時期もほぼこの間であろう。

河道11（第15図）

４区中央を南北にＳ字状に縦断する。河道10とほぼ重複し途中二股に分かれ、南端で河道13と接する。新旧関係は河道14より古いが河道13との前後関係は不明である。検出長45ｍ、幅200～300cm、深さ60～100cmで、深椀状の断面を呈す。埋土は灰色粗砂の均一な堆積である。河道北端の底面海抜高は595cmで南端の河道13との接合付近で50cm程低下している。

時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが、検出状況や埋土から縄文時代後晩期以前であろう。

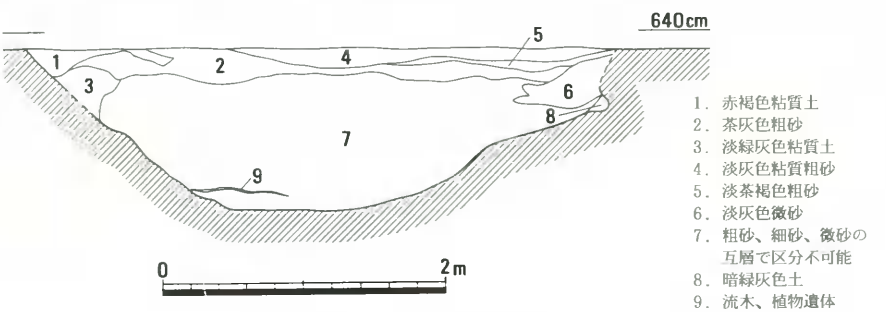
（山磨）

河道14（第17図）

調節池予定地北東の５区から始まり、蛇行を繰り返しながら８・９・11・12区を南下している。幅15～25ｍを測り、深さは検出面から２～４ｍに達し凹凸が激しい。部分的に直径12～15ｍほどの円形状になる箇所が見られる。河道肩部の海抜は、５区で710～730cm前後で、河道底部は630～480cm、調査区の最下流の12区では580～470cmである。河道内の堆積は基本的に砂層が主流であるが、他に大小多くの流木が有り、中には直径１ｍ、長さ10数ｍ近くのイチョウ・カシの流木が何本も存在した。またカシ、トチ、カヤの堅果類・ツバキ・フジなど、マツの実、サクラの樹皮などが多く出土している。詳細についてはパリノ・サーヴェイK•Kによる自然科学的分析を行い、その結果を付載として掲載しているので参照されたい。河道の底部は濃い緑色の粘質土で海抜500cmより低くなるとさらに下層の灰白色の砂層になる。北東部は病院建設予定地に続いている。

河道14の出土の遺物

河道14からの出土遺物のほとんどは、下層に近い砂利層からの出土で縄文時代後期に含まれる土器細片でローリングを受けているものが多い。有舌ポイント**S-1**、石器は局部磨製石斧**S-2**などである。ピット状の遺構が８区の河道肩部を中心に何カ所かが検出されているが出土遺物は見られない。大きさも大小有り、木根痕跡の可能性が強い。（伊藤）



第18図　10区河道15断面図(1/60)

（２）縄文時代前期・中期の遺物（第19図）

11は、10区河道９上面から50数片がまとまって出土したもので、推定口径40㎝を測る深鉢である。口縁部は内傾し、口縁部から体部への移行は緩やかである。この屈曲部には、棒状工具による刺突を施文し、体部にはアルカ属のナナメの条痕を認める。内面は、口縁から屈曲部にかけてヨコ方向のアルカ属の条痕が、体部にはナナメの条痕が認められる。一部には、条痕の上からナデが認められる。

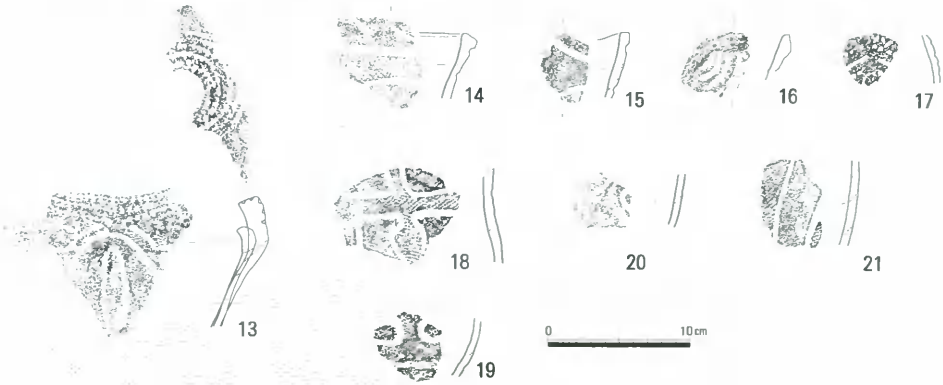
12は、８区河道内から出土した口縁部の破片である。口縁端部はすぼまる形状で、押圧痕の関係で、やや波状気味を呈する。内外面とも器面の風化が激しく、調整などは不明である。時期は、口縁の形状と胎土から中期に入るものと判断した。

第19図　縄文時代前期・中期の遺物

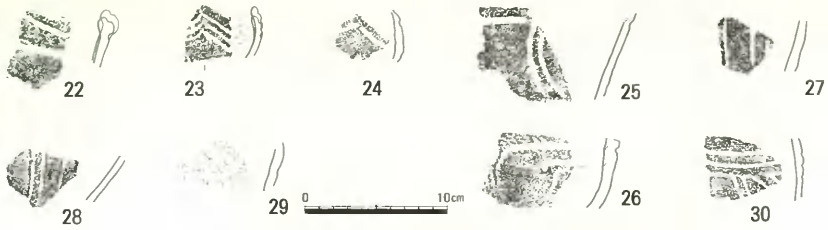
（３）縄文時代後期の遺物（第20図）

13～**21**は、中津式とされるものである。**13**と**17**は、刺突文を施文するものである。沈線は途中で切れて、対向する沈線というようになり中津式でも新しい時期のものである。**18**・**20**は、太い沈線で曲線を施文し、その内の**19**は縄文が認められない。

22～**30**は、福田ＫⅡ式とされるものである。何れも前時期よりも沈線が細くなり、**23**・**26**は沈線の先端が巻き込むようになり、対向する沈線は連続しない特徴的な文様を持つものである。なお、**29**は風化のため文様の内容が明確さに欠けるが、中津式の**19**と同じ文様を有する可能性がある。

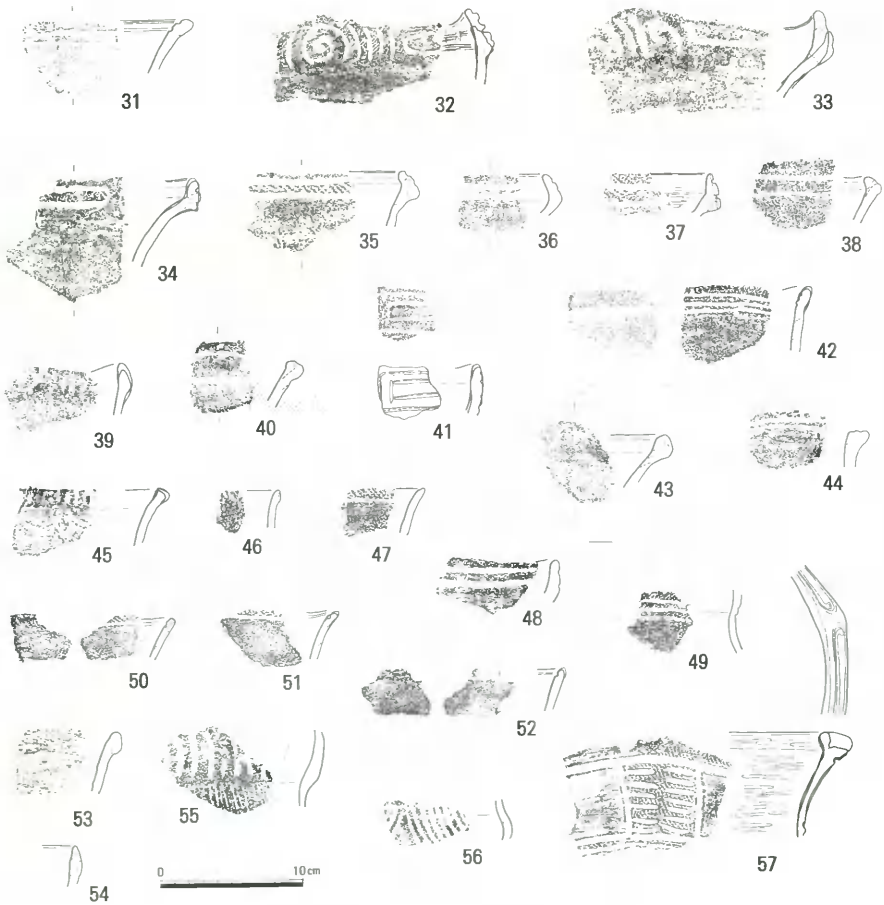


第20図　河道14出土縄文時代後期前葉の遺物（１）

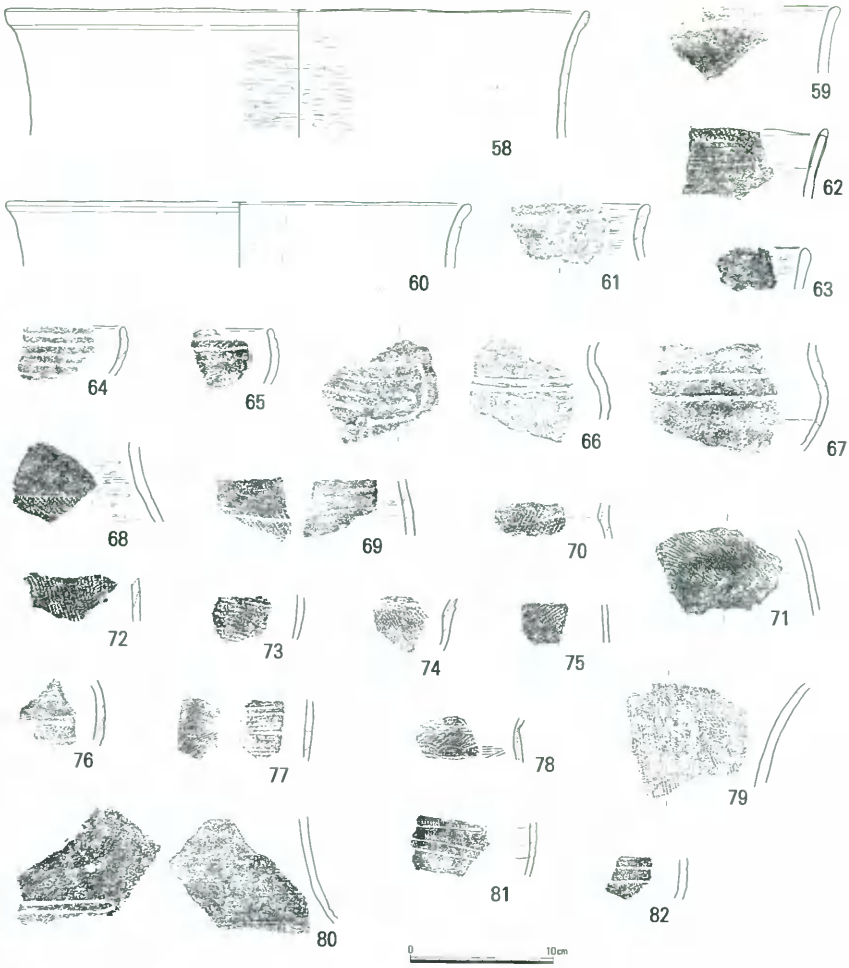


第21図　河道14出土縄文時代後期前葉の遺物（２）

31は、口縁内面を、**32**～**44**・**55**は口縁外面を肥厚させるものである。後者は、**32**と**33**のように口縁外面に弧文を重ねるものと方形区画を施文するもの、**35**・**38**のように直線文などの磨消縄文帯を設け、頸部を無文帯とする。**55**は、垂下条線が頸部屈曲部に認められる。**45**は、口縁端面に刺突文を施文し



第22図　河道14出土縄文時代後期前葉の遺物（３）



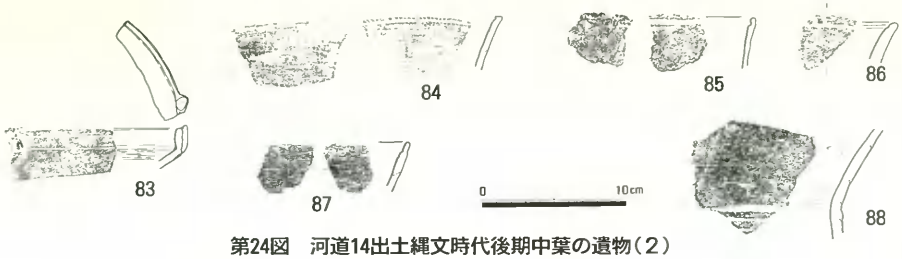
第23図　河道14出土縄文時代後期中葉の遺物（１）

ている。

46・47・50～52は、口縁端部の肥厚がなく、端部内面に沈線とＲＬの縄文を施文する。**57**は、口縁端部外面に磨消しとなる部分とそうでない文様の施文が認められる。

58～67は、口縁端部の肥厚が顕著でないものである。**58**は、この中でも肥厚が認められるが、端部には縄文の施文などは認められなかった。**62**は、波状口縁となり口縁端部外面にＲＬの縄文を施文している。頸部外面は、巻貝条痕の後に平滑に仕上げられている。

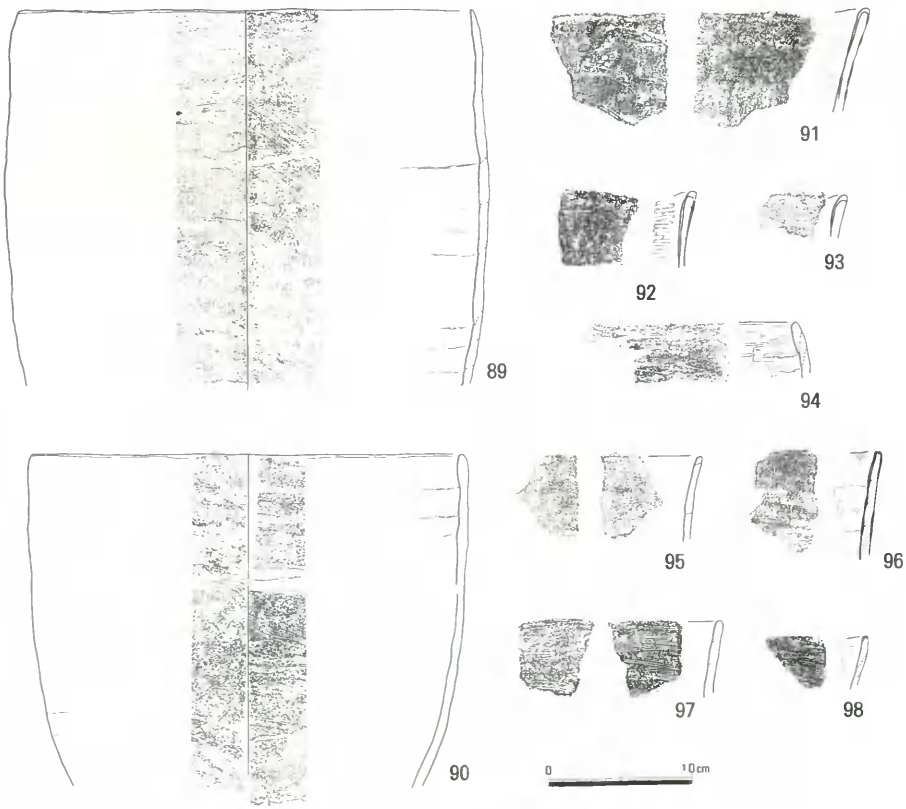
66～82は、胴部の破片である。**66**と**67**は、沈線を認めることができるが縄文の施文については器面の磨滅で不詳である。**68**と**69**は、頸部は無文帯で胴部にはＲＬの縄文を施している。この頸部と胴部の文様の境は、沈線によってなされている。**70**はＬＲ、**71～73**はＲＬの縄文の施文が認められる。**98**



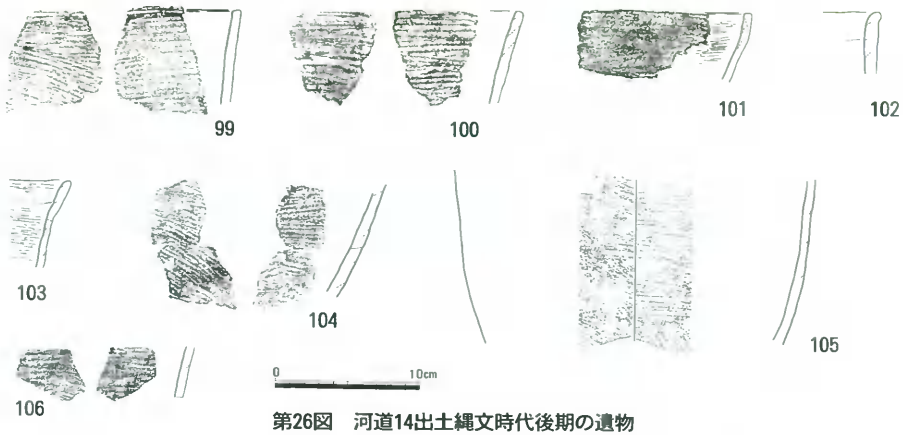
第24図　河道14出土縄文時代後期中葉の遺物（２）

は磨消縄文が、**77**には擬縄文、内面の調整は巻貝条痕による。**78**は、胴屈曲部下の沈線間に刺突文、擬縄文、弧文を充填する。**79**は、垂下条線が施文される。**80**は、胴屈曲部に磨消縄文を施す。**82**は、擬縄文が施文される。**83**は、立ち上がった口縁部外面に擬縄文が施され、内外面とも丁寧な磨きが認められる。**86**は、磨滅で内面に沈線を認めるが口縁部の形態から縄文が施されていた可能性がある。**87**もこの時期のものとされよう。

84・85・88は、後期後葉期のものである。**84**と**85**は、口縁部内面にキザミと沈線を施す。**84**は、口



第25図　河道14出土縄文時代後期後葉の遺物

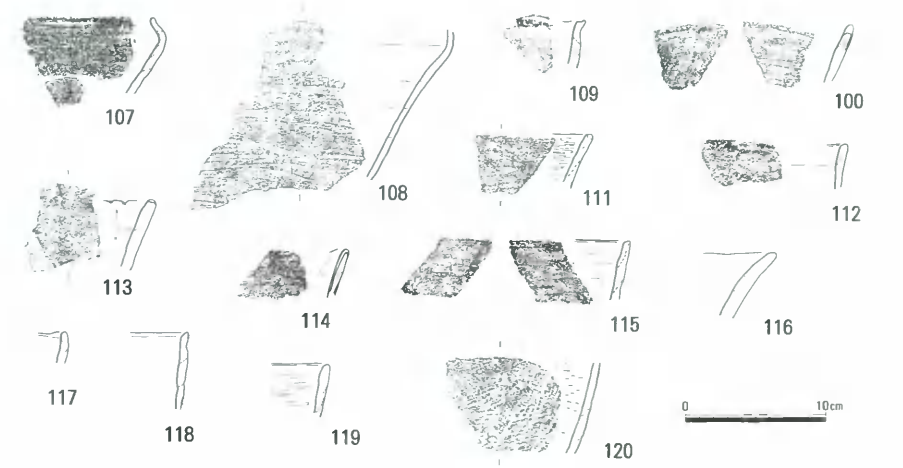


第26図　河道14出土縄文時代後期の遺物

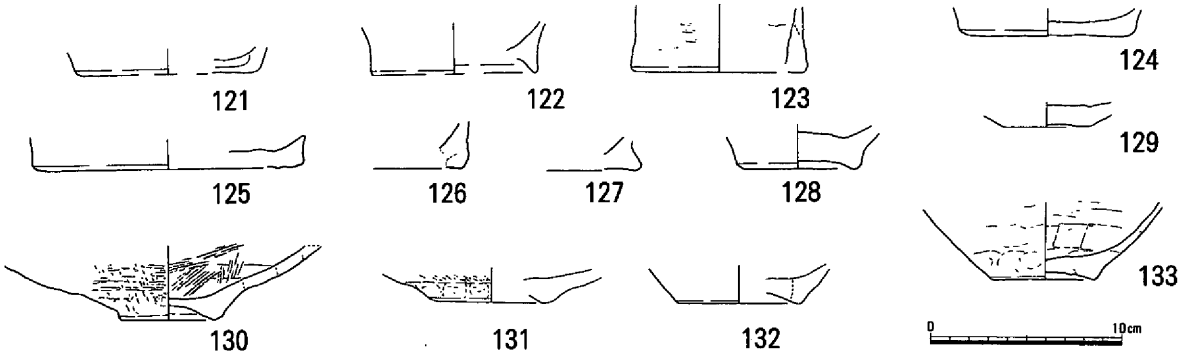
縁部内面端部にキザミメを施した後に沈線を施文する。内外面とも調整は、巻貝条痕後平滑に仕上げられている。**85**は、口縁部内面端部にキザミメと沈線を施す。**86**は、磨滅しているため内面の沈線が観察できたにすぎない。**88**は、頸部と胴部の屈曲部に沈線を施文し、その間にキザミメを施している。

89は、口径31.4cmを測る深鉢である。口縁部がやや内径気味となり、胴部はほとんど張りが無く、底部へ移行する器形となる。調整は、外面がヨコ、内面がナナメの巻貝の条痕が認められる。**90**は、口径30cmを測る深鉢である。口縁部から胴部の張がなく、底部へと移行する。調整は、外面がタテの巻貝条痕の後平滑にし、胴部下半はサッ痕が認められる。内面にはヨコの巻貝条痕が認められる。

91は、波状口縁を呈し、頂部に刺突を加える。**92**は、口縁部が肥厚気味となる。**94**は、内傾する口縁となる。**96**と**97**は開き気味の口縁部で、器面の調整は巻貝条痕による。**98**は、口縁部が内傾気味と



第27図　河道14出土縄文時代晩期の遺物



第28図　河道14出土縄文時代後期・晩期の遺物（底部）

なるもので、器面外面の調整は巻貝条痕による。**99**は、口唇部に沈線を施し、内外面の調整は巻貝条痕による。**100**は、口唇部を平坦にし、内外面の調整は巻貝条痕による。**101**は、外反頸部から口縁部が立ち上がる。口縁部外面に拓本では、不鮮明であるが3本の凹線が認められる。**104・106**は、胴部、胴部から底部にかけての破片である。何れも、内外面の調整は巻貝条痕による。

縄文時代晩期の土器　**107・120**は、晩期の土器である。**107**と**108**の口縁部が屈曲するほかは、外方に広がる。**107**は、波状口縁となる。**108**の調整は、外面にアルカ属の条痕が、内面には細かい条痕の上からサッ痕が認められる。**109**は、口唇部に沈線が認められる。**110**は、波状口縁を呈し、外面調整は条痕の後平滑に仕上げられている。**111**は、内外面とも平滑に仕上げられているが、外面には条痕が認められる。**113**は、口縁端面にキザミメを施している。**114**は、波状口縁を呈し、平滑に仕上げられている。**115**は、口縁端面が平坦となり、内外面の調整はアルカ属条痕の後に平滑に仕上げられている。**118**は、口縁部内外面に押圧痕が認められる。**120**は、内外面ともサッ痕が認められるが、内面は平滑に仕上げられている。

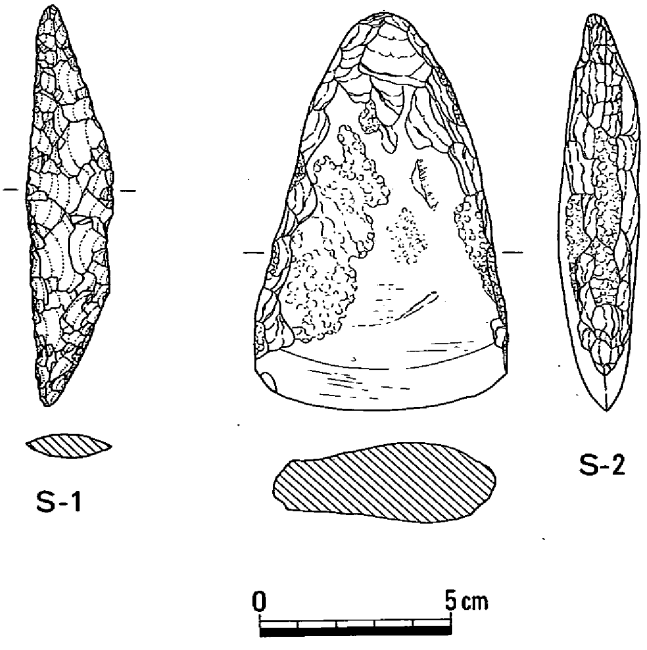
縄文時代後期・晩期の底部（第28図）

121～133は、底部の破片である。底部の形態は、平底、蛇の目高台、凹み等を呈する。調整は、磨滅しているものが多く、明確さに欠けるのである。その明らかなものは、サッ痕が多く認められる。

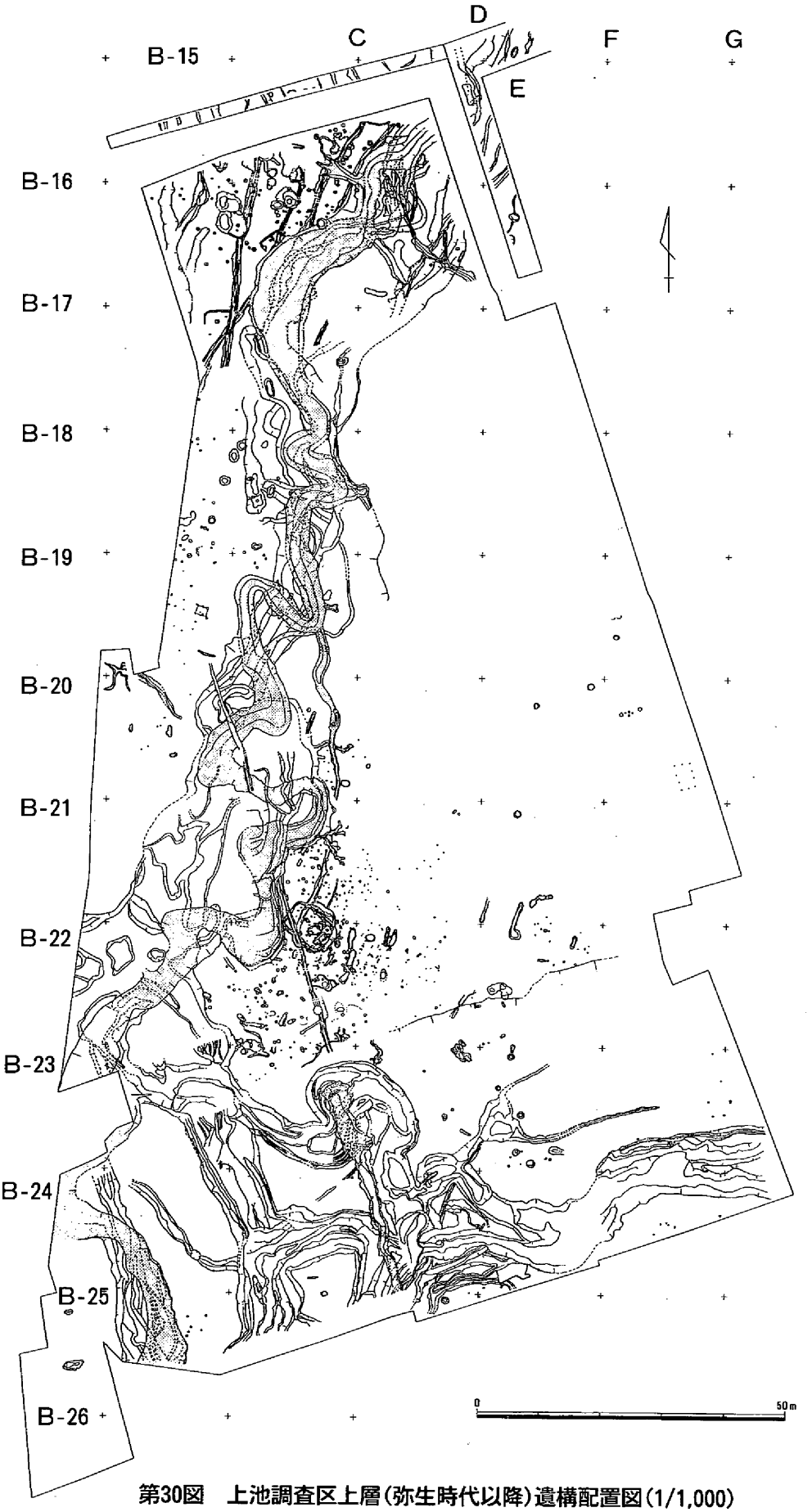
石器（第29図）

S-1は、９区河道底部出土で、長さ10.5cm、幅2.3cm、厚さ0.7cmを測るポイントとされるが、両側に抉りを有する。石材は、サヌカイトである。

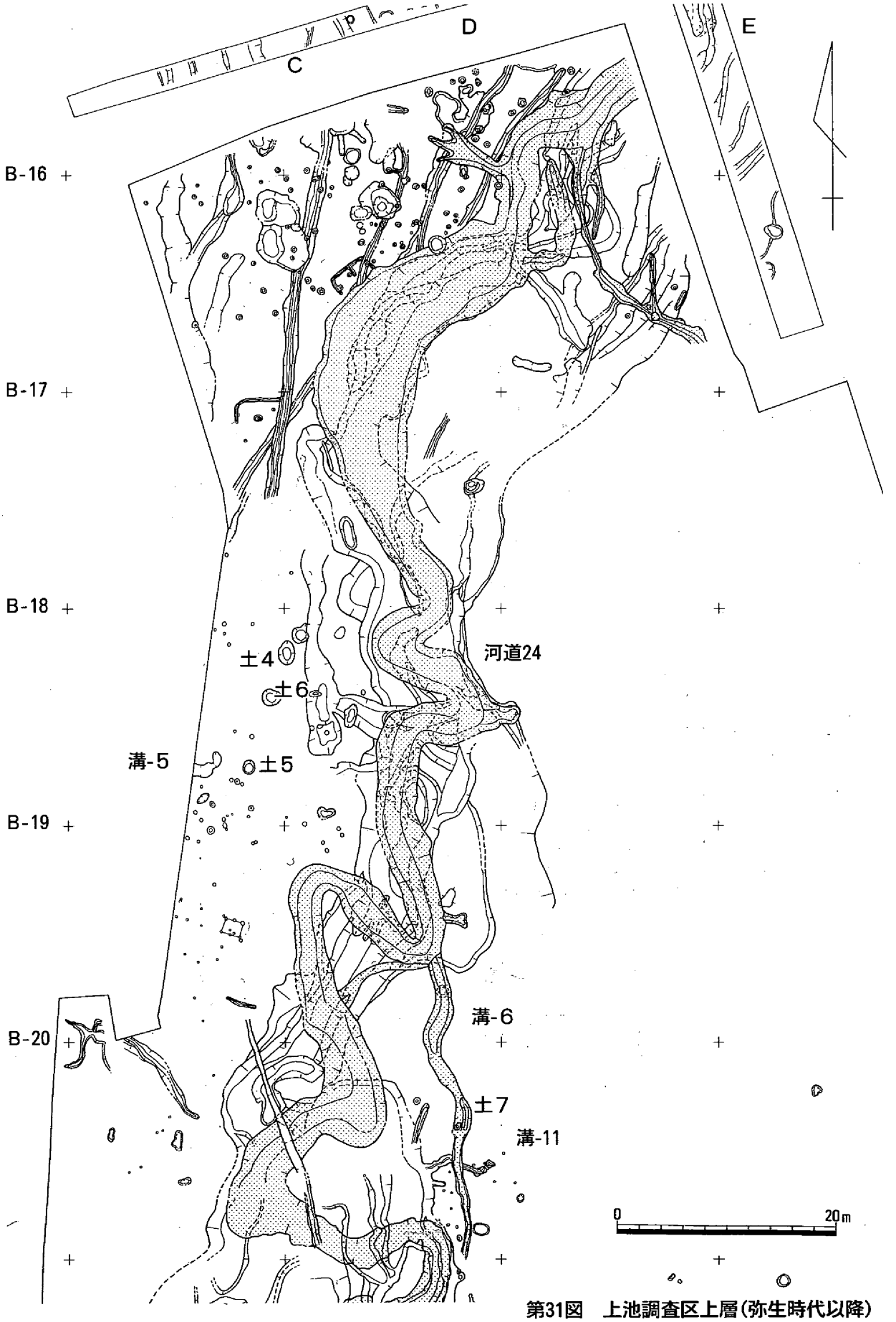
S-2は、12区河道底部から出土で、長さ10.4cm、幅6.6cm、厚さ2.1cmを測る石斧である。両側には敲打が見られるが、刃部は磨かれている。石材は、安山岩である。（下澤）



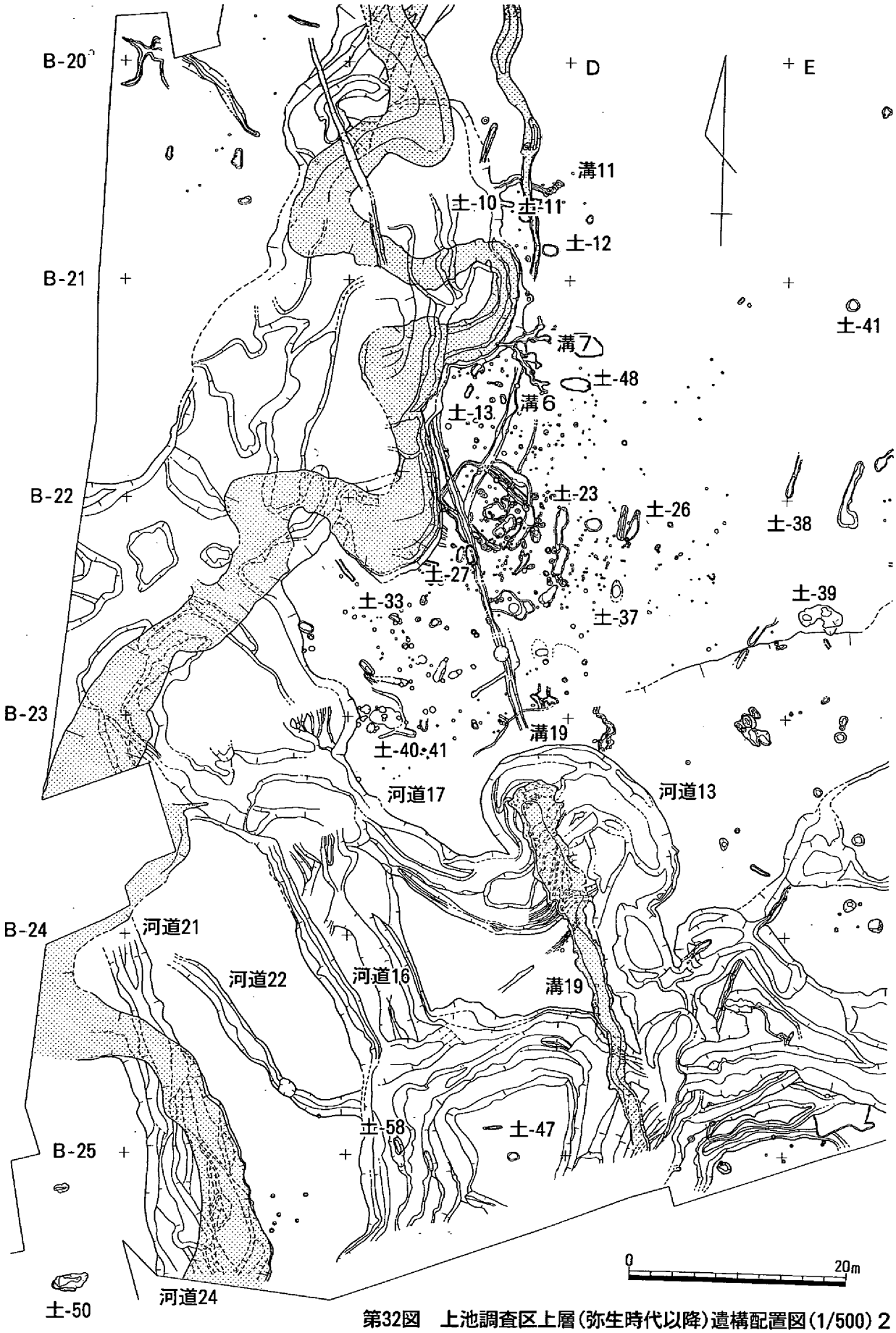
第29図　河道14出土縄文時代後期の遺物（石器）



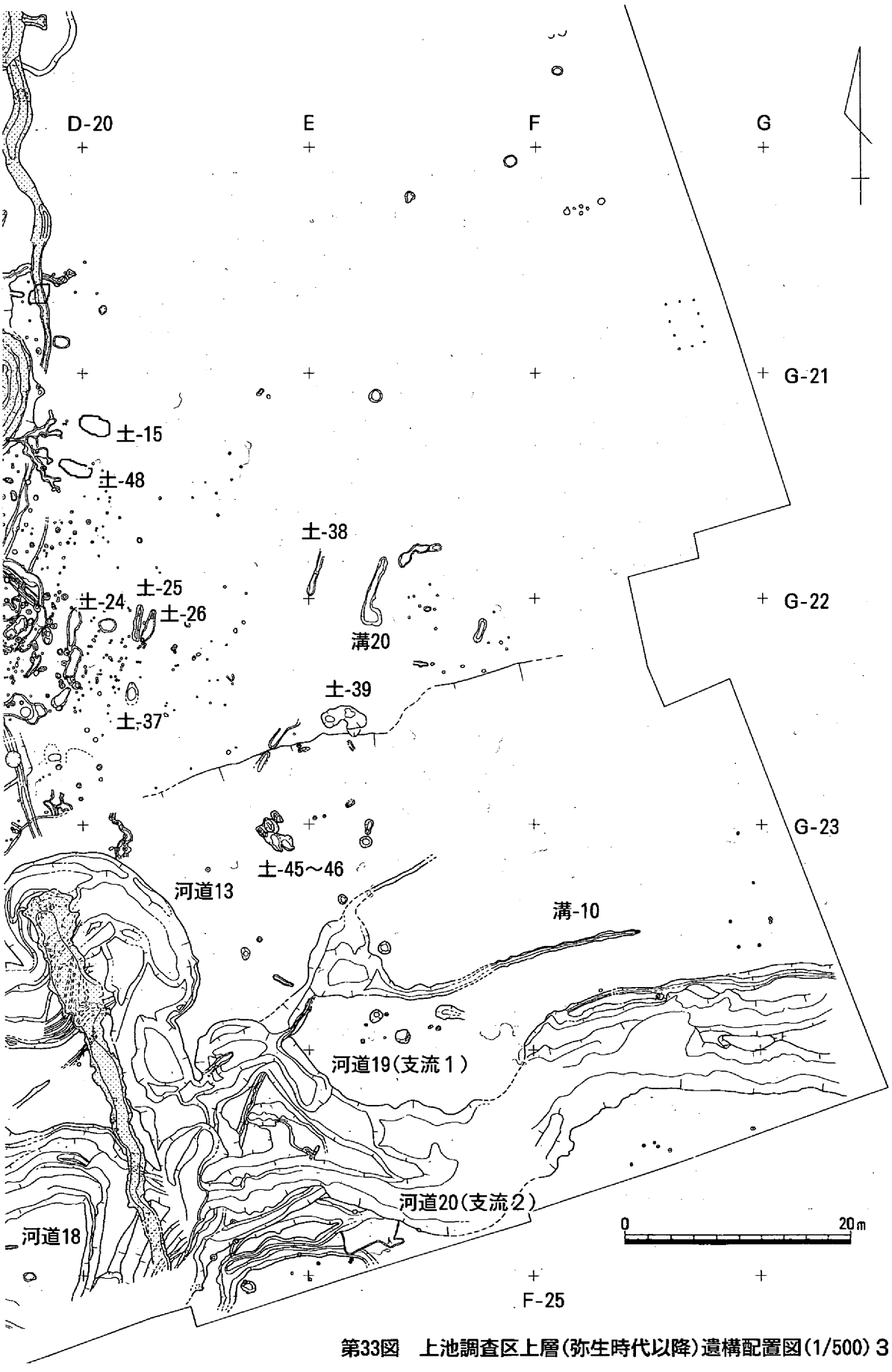
第30図　上池調査区上層（弥生時代以降）遺構配置図（1/1,000）



第31図　上池調査区上層（弥生時代以降）
遺構配置図（1/500）1

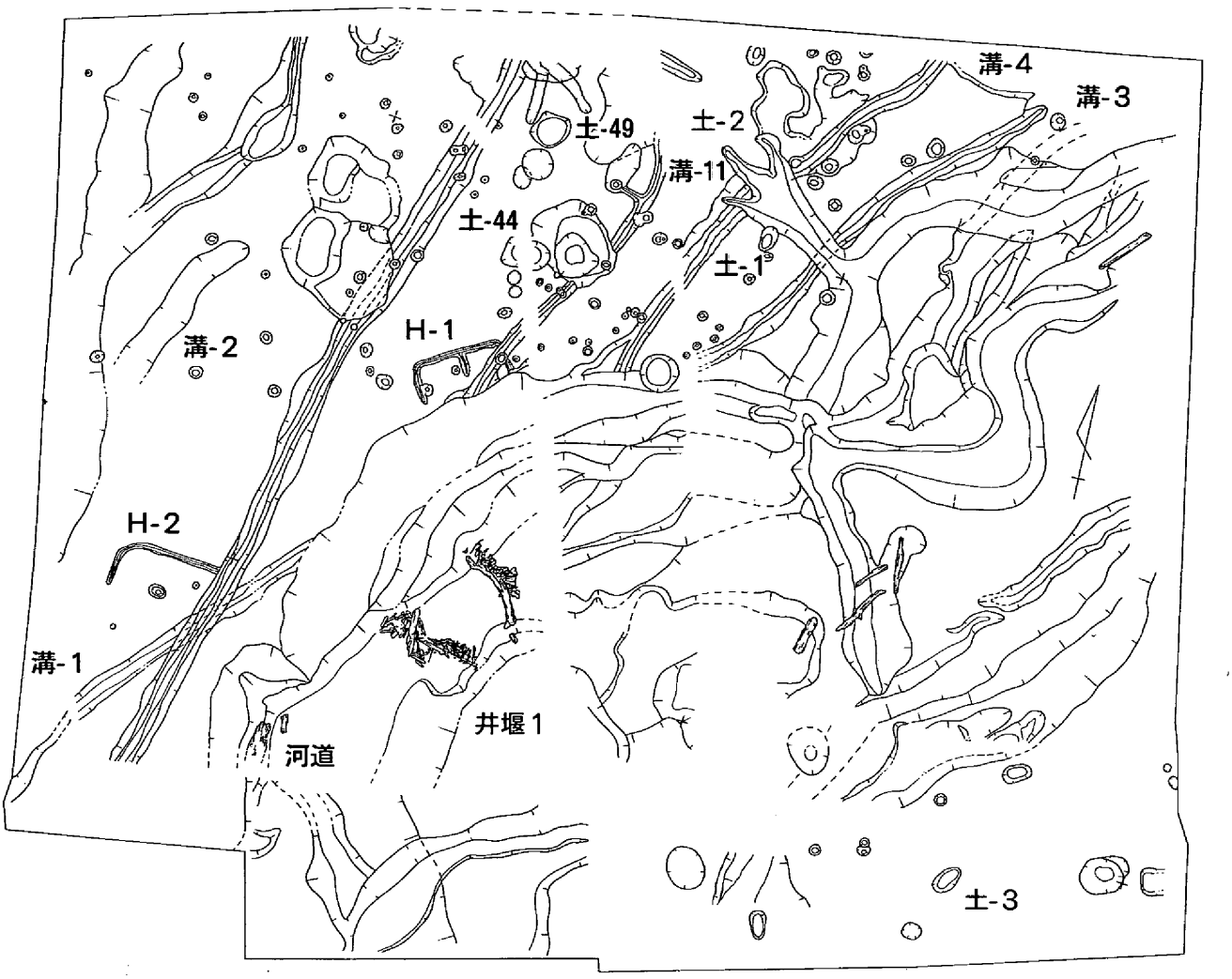


第32図　上池調査区上層（弥生時代以降）遺構配置図（1/500）２

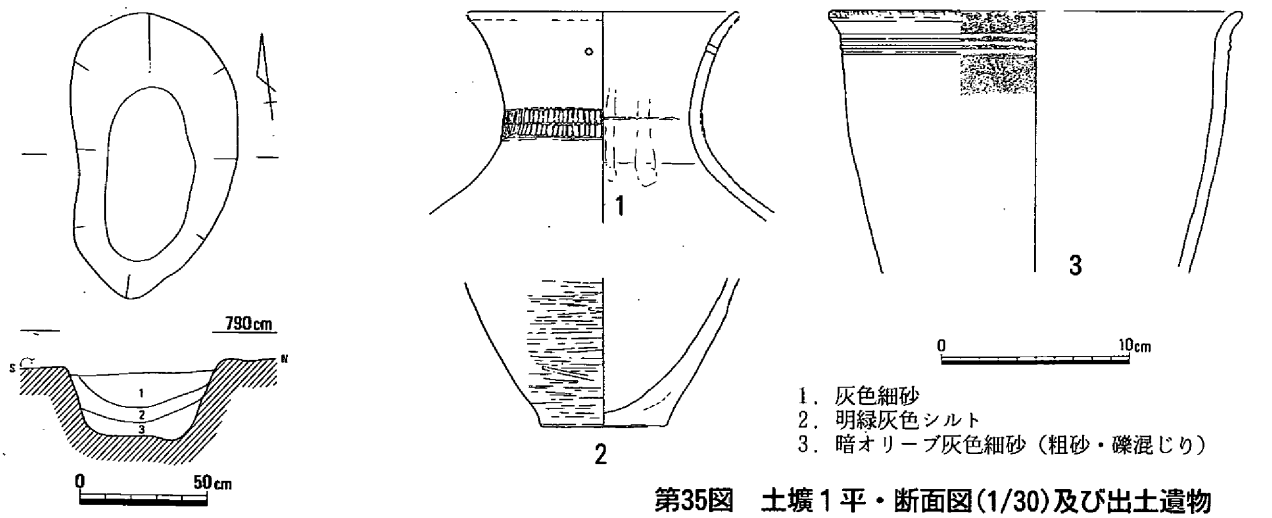


第33図　上池調査区上層(弥生時代以降)遺構配置図(1/500) 3

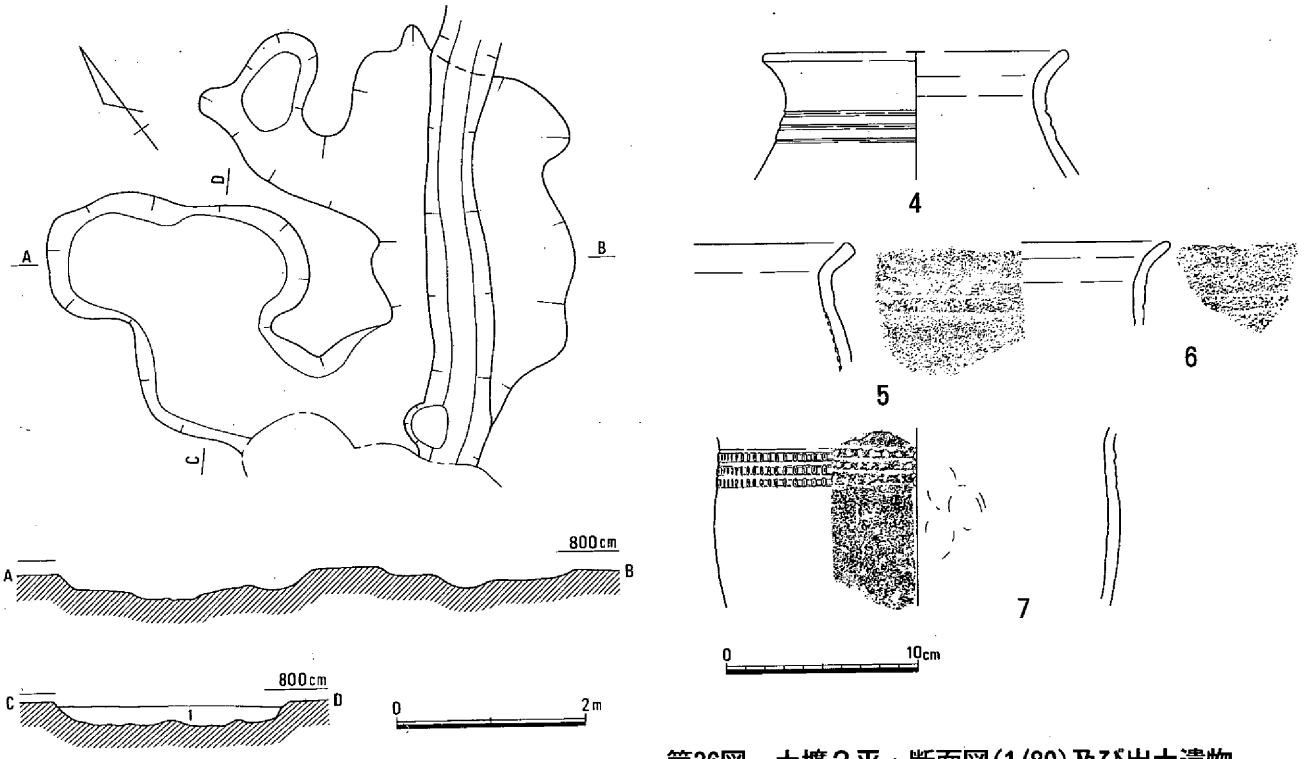
第３節　弥生時代の遺構・遺物



第34図　上池調査区１～３区（弥生時代以降）遺構配置図（1/300）



第35図　土壙１平・断面図（1/30）及び出土遺物



1．褐灰色細砂(粗砂混じり)

第36図　土壙２平・断面図(1/80)及び出土遺物

弥生時代の遺構は、全調査区において土壙・溝などが見られた。１・２・３区と４区の河道西半からは、西から延びる丘陵の東端部に当たり溝・土壙が、11区の河道の東からは、方形に囲まれた溝の周辺に弥生時代前期のを中心とする多くの遺構が見られた。

（１）土壙・土壙墓

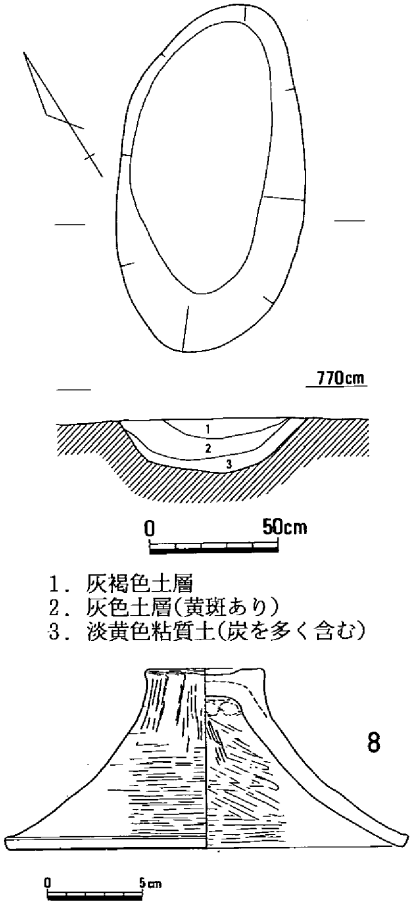
土壙１（第35図）

２区北東半の微高地上に検出した小形の土壙で一部旧河道と重複する。平面形は楕円形を呈し、長径115cm、短径65cm、深さ30cmである。掘り方断面は逆台形状を呈し、底面はほぼ平らである。埋土は３層に分層できる。検出面は海抜780cmである。

遺物は頸部に沈線を施す甕、凸帯を施す壺等が出土している。時期は出土遺物や検出状況から弥生時代前期中頃と考えられる。

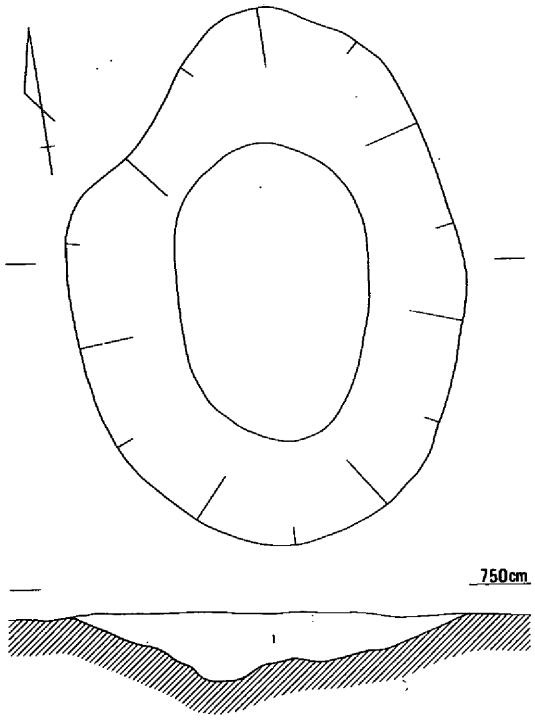
土壙２（第36図）

２区北端の微高地上に検出した不定形な浅い窪み状の土壙である。土壙の南半を古墳時代前半期の河道の一部により削平を受け、南東半は弥生時代前期の溝９と重複している。規模は南北長500cm、東西長530cm、最大深さ30cmである。埋土は褐灰色細砂の１層のみで、底面は凹凸が若干ある。検出面は海抜785cmである。遺物は頸部にヘラ描き沈線を施す甕、壺等の弥生時代前期の土器が出土している。時期は溝９との前後関係は不明であるが、出土遺物や検出状況等から弥生時代前期と考えられる。

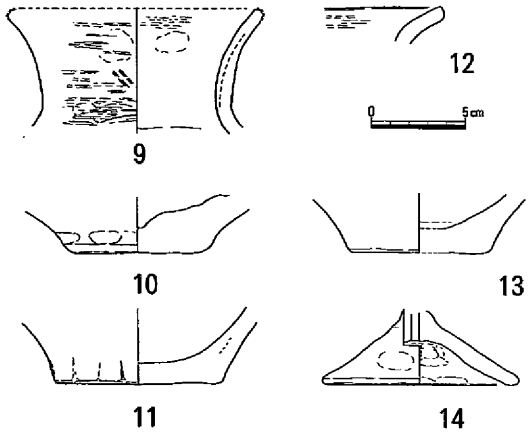


1．灰褐色土層
2．灰色土層(黄斑あり)
3．淡黄色粘質土(炭を多く含む)

第37図　土壙３平・断面図(1/30)及び出土遺物



第38図　土壙４平・断面図(1/30)及び出土遺物



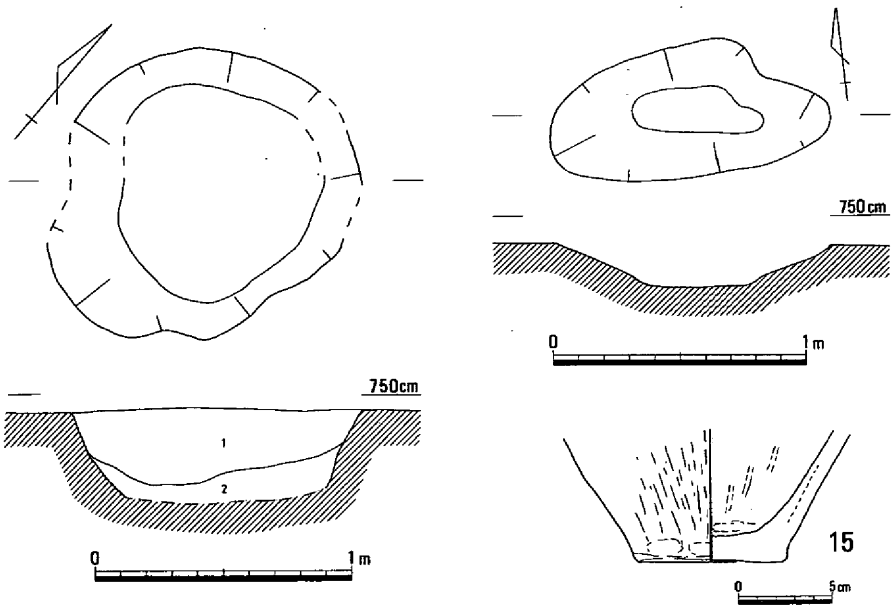
土壙３（第37図）

３区南半に検出した小判形の土壙である。規模は長径140cm、短径70cm、深さ20cmを測る。断面はＵ字状を呈し、最下層の淡黄色粘質土は、炭を多く含んでいる。検出面は海抜758cmである。土壙内から弥生時代前期の蓋形土器８が出土している。

土壙４（第38図）

４区北半に検出した楕円形に近い形状の窪み状の土壙である。規模は長径215cm、短径156cm、深さ26cmである。断面はⅢ状をていし、灰色粘質微砂の埋土である。検出面は海抜740cmである。

時期は壺形土器の口縁部や底部の特徴から弥生時代前期と見られる。



第39図　土壙５・６平・断面図(1/30)及び出土遺物

土壙５（第39図）

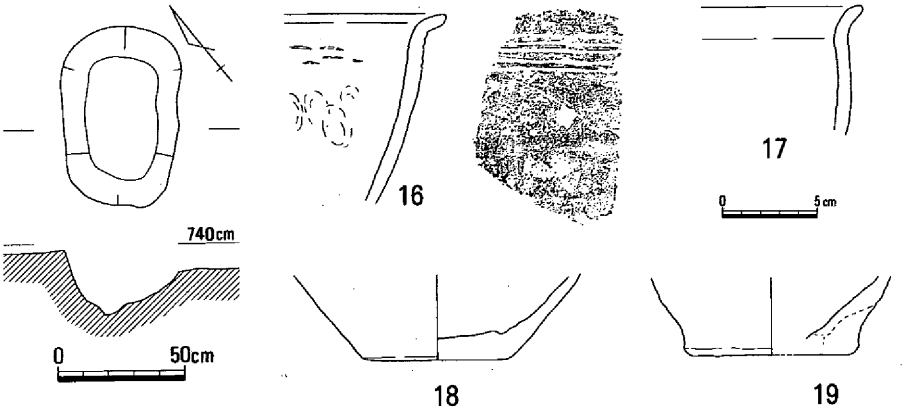
４区北半に検出した円形に近い形状の土壙である。規模は長径128cm、短径108cm、深さ38cmである。断面は逆台形状をなし、上層に灰色粘質微砂、下層に灰白色粘質微砂の２層の埋土である。検出面は海抜745cmである。

時期は細片のため図示できなかったが、出土遺物の特色から弥生時代前期と想定される。

土壙６（第39図）

４区北半に検出した楕円形に近い形状の土壙である。規模は長径112cm、短径53cm、深さ17cmであ

る。断面は浅いすり鉢状をなす。検出面は海抜740cmである。時期は出土遺物の特色から弥生時代前期と想定される。

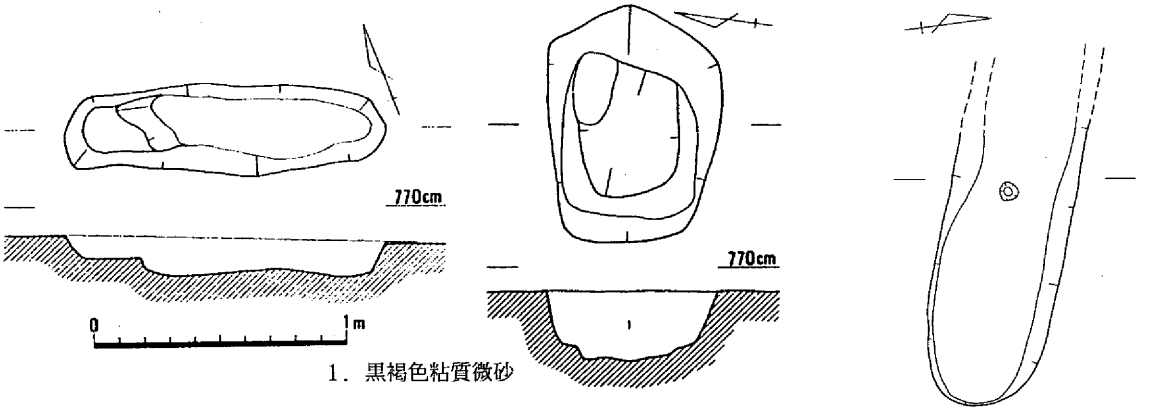


第40図　土壙７平・断面図(1/30)及び出土遺物

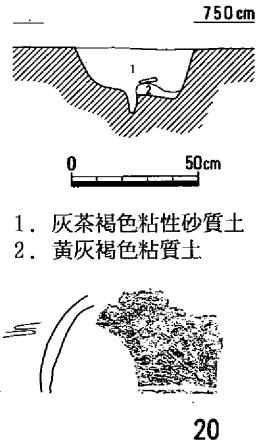
土壙７（第40図）

４区南端の溝１と重複して、底面に検出した小形の土壙である。平面形は隅丸長方形をていす。規模は長辺72cm、短辺47cm、深さ25cmである。断面は椀状をなし、底面は若干の凹凸がある。検出面は海抜735cmである。

遺物は埋土中から頸部に沈線を施した甕**16**施さない甕**17**と底部**18・19**、サヌカイトの剥片が出土している。時期は重複する弥生時代前期の溝１との新旧の関係は明瞭でないが、出土遺物や検出状況等から弥生時代前期中葉ごろと考えられる。（山磨）



第41図　土壙８・９・10平・断面図(1/30)及び出土遺物



土壙８（第41図）

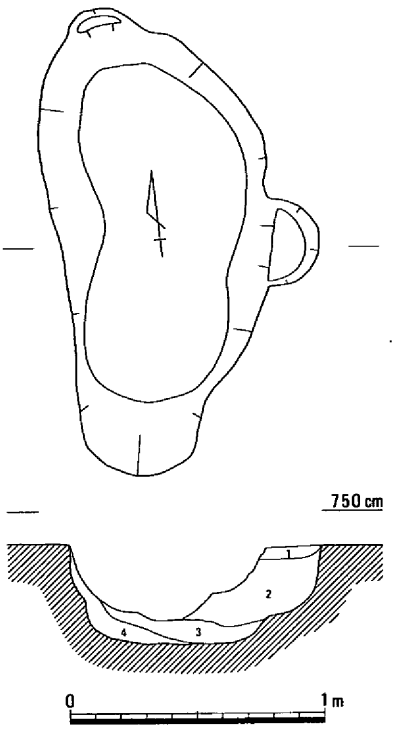
５区北端に位置し、主軸をほぼ東西に向ける。全長130cm、幅30～36cm、深さは西側で10cm、西端から30cmほどで１段低くなり14cmを測る。土壙内から削りだし凸帯の壺片が出土している。

土壙９（第41図）

５区の北側にあり、長軸92cm、短軸68cmの楕円状を呈し、深さは28cmを測る。出土遺物は見られないが、土層の状況などから前期のものと考えた。

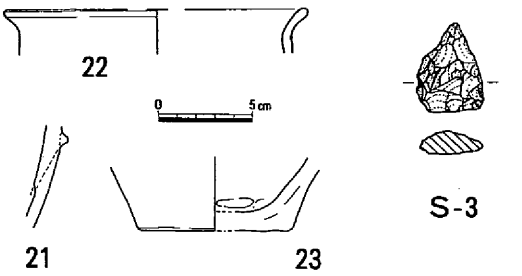
土壙10（第41図）

７区北部に位置し、略東西方向に向き西側１/２が河道に切られ、130cm残存する。中央部で幅50cm、深さ20cmで底部の標高は730cmである。弥生時代前期の壺頸部にヘラ描き沈線を持つ小片**20**が１点出土している。



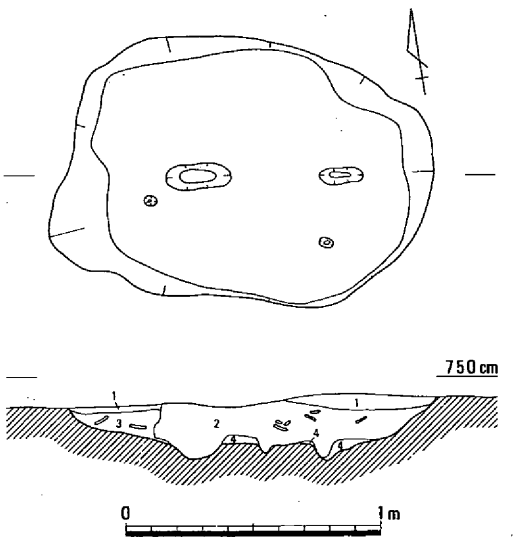
土壙11（第42図）

７区北部に位置し、南北を主軸にする長軸190㎝、幅90㎝で楕円形をなす。深さは40㎝を測る。上部を溝６に切られている。前期の壺口縁部**22**、貼り付け凸帯を持った胴部**21**、底部片**23**、サヌカイト製の石鏃（**S-3**）１点が出土している。

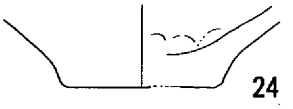


１．灰茶褐色粘性砂質土
２．暗灰茶褐色粘性砂質土
（所々に黄色が混じる）
３．黄灰と灰茶のまだら粘性砂質土
４．灰黄褐色粘質土

第42図　土壙11平・断面図(1/30)及び出土遺物



１．暗黄灰褐色粘性砂質土
２．暗灰茶褐色粘性砂質土
（多量の土器片含む）
３．暗灰茶褐色粘性砂質土（２よりやや淡色）
（多量の土器片含む）
４．黄灰褐色粘性砂質土



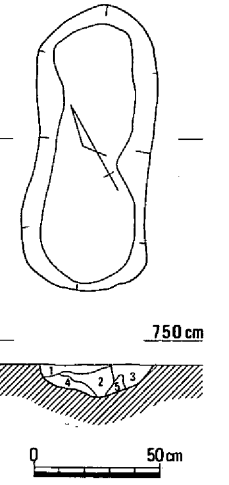
第43図　土壙12平・断面図(1/30)及び出土遺物

土壙12（第43図）

７区弥生河道東側に位置し、長軸145㎝、短軸100㎝の楕円形を呈し、深さ20㎝を測る。土壙内から前期の壺底部１点**24**が出土している。

土壙13（第43図）

形周溝遺構の北西６ｍに位置し、長軸110㎝、短軸46㎝の楕円形を呈し深さ14㎝を測る。出土遺物は見られないが前期の土壙と考えられる。

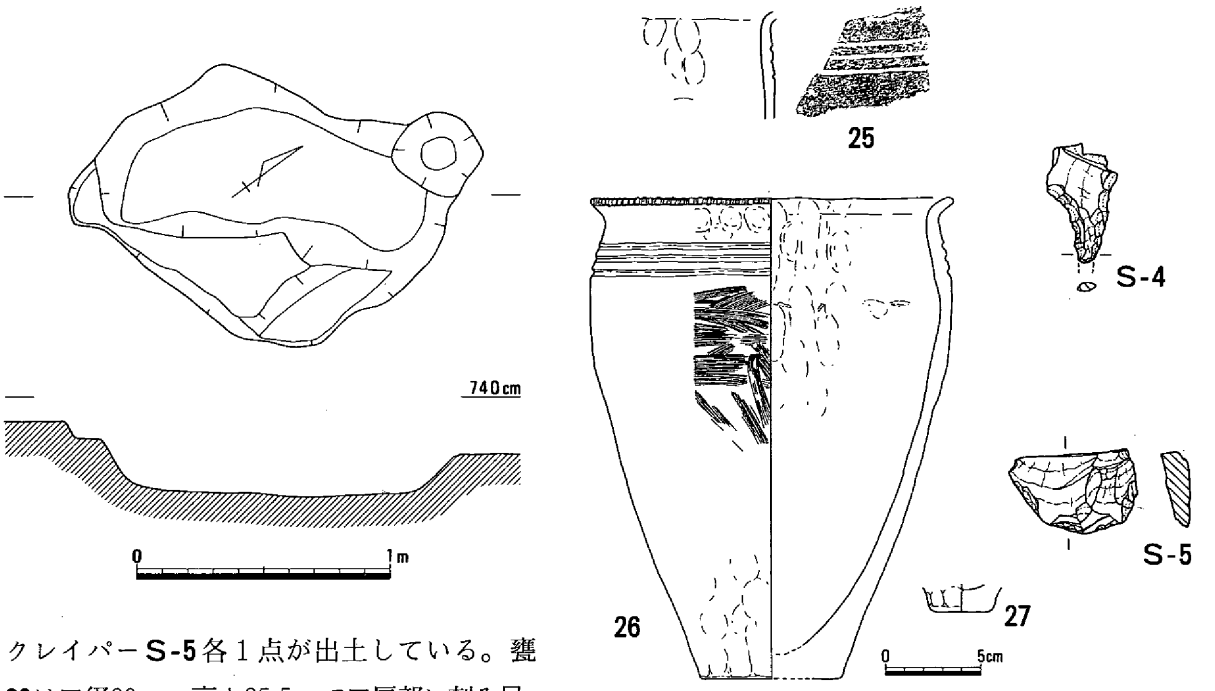


１．茶灰色粘質土
２．灰褐色粘質土
３．茶褐色粘質土
４．黄灰白色粘質土
５．茶灰色粘質土

第44図　土壙13平・断面図(1/30)

土壙14（第44図）

土壙10の北東１ｍの所に位置し、北側の上面の一部が河道に切られている。２個の土壙が切り合っている。１個は長軸140㎝、短軸50㎝前後である。土壙内から甕２点**25・26**、ミニチュア土器底部**27**、石錐**S-4**、ス

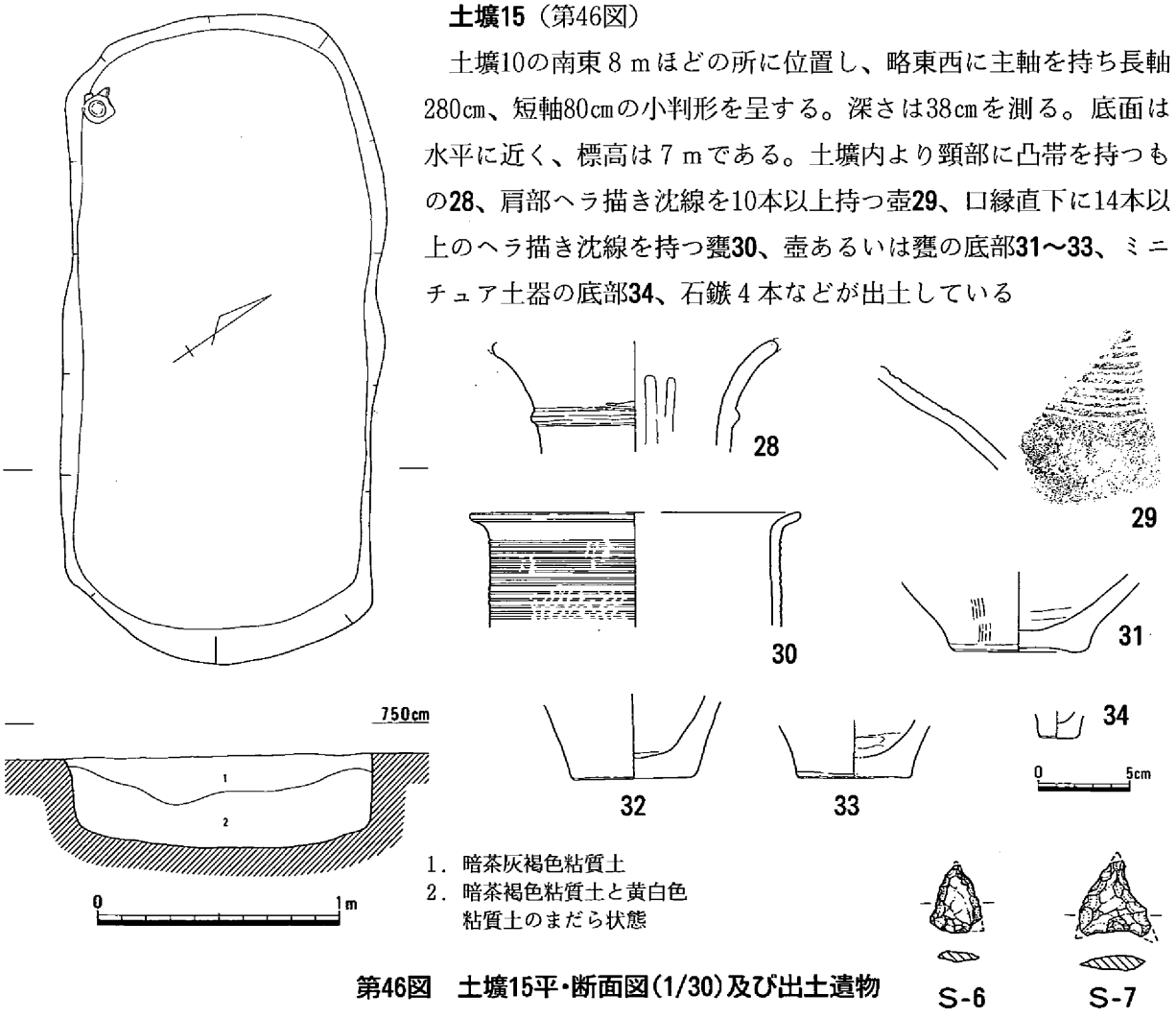


第45図　土壙14平・断面図(1/30)及び出土遺物

クレイパーS-5各１点が出土している。甕26は口径20cm、高さ25.5cmで口唇部に刻み目、頸部に３本のヘラ描き沈線３条を持つ。

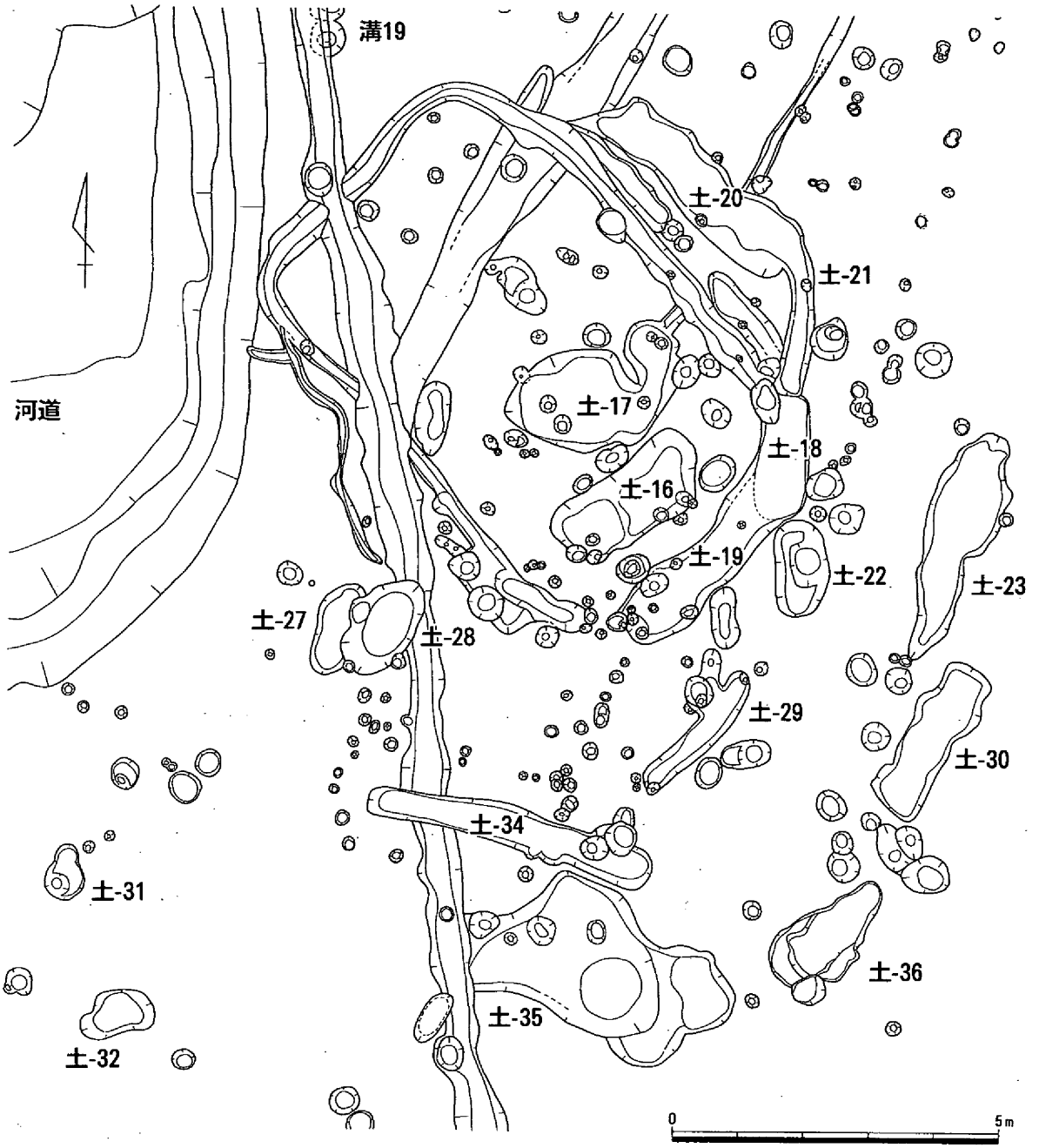
土壙15（第46図）

土壙10の南東８ｍほどの所に位置し、略東西に主軸を持ち長軸280cm、短軸80cmの小判形を呈する。深さは38cmを測る。底面は水平に近く、標高は７ｍである。土壙内より頸部に凸帯を持つもの28、肩部ヘラ描き沈線を10本以上持つ壺29、口縁直下に14本以上のヘラ描き沈線を持つ甕30、壺あるいは甕の底部31～33、ミニチュア土器の底部34、石鏃４本などが出土している



1．暗茶灰褐色粘質土
2．暗茶褐色粘質土と黄白色粘質土のまだら状態

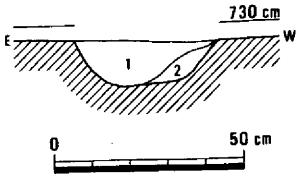
第46図　土壙15平・断面図(1/30)及び出土遺物



第47図　７区土壙集中地区拡大図(1/100)

溝で区画された内側の土壙と溝内及びその周辺に作られた土壙

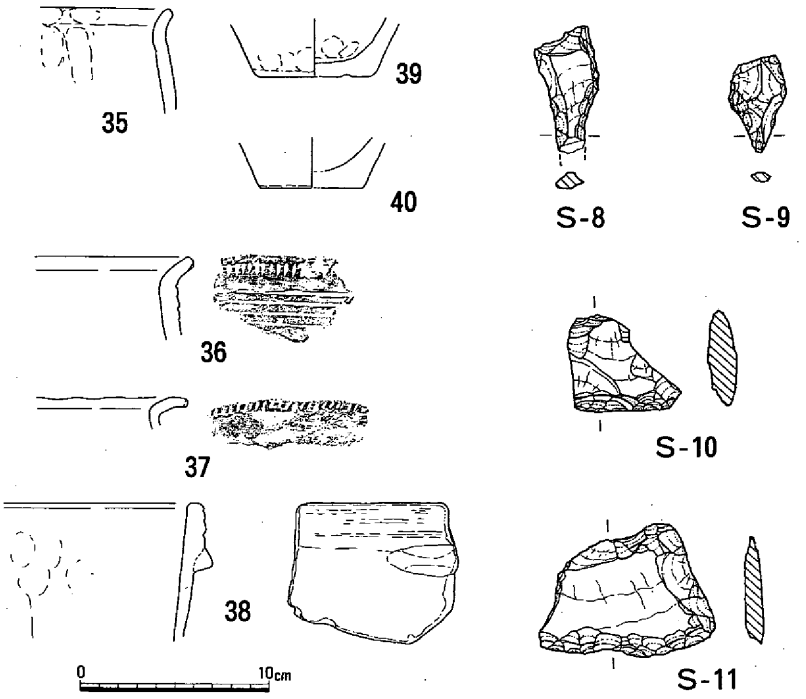
11区南側の河道よりにおいて長辺８ｍ、短辺５ｍほどの方形に巡る溝が見られる。この溝は幅50㎝深さ10㎝前後で、南角が連続しない。溝内からは前期の口唇部に刻み目、口縁直下にヘラ描き沈線を持つ甕**36・37**、鉢**35**、取手を持つ大形の鉢**38**、甕底部**39・40**、石錐２本**S-8・9**、スクレイパー２個**S-10・11**などが出土している。溝の内側には、中心部より東側に変形ではあるが５基の土壙、溝内と溝に沿うようにして北側に５基以上、東側に３基、南側に２基の土壙が集中して作られている。また周辺には方位を異にするが、５基前後の土壙が見られる。土壙14・15以外は出土遺物は見られない。遺構検出面の標高は725～730㎝、溝底面で715～720㎝である。



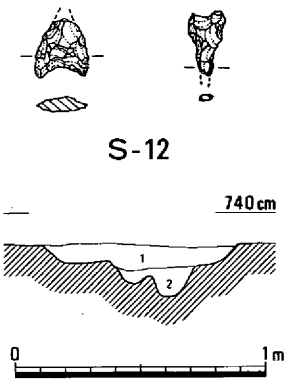
1．灰茶褐色粘質土
2．黄灰褐色粘質土

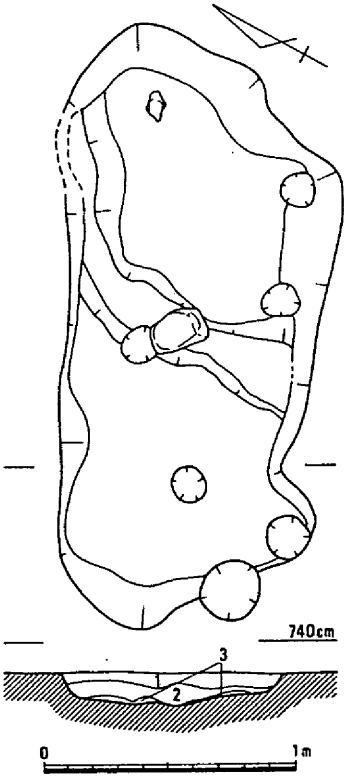
土壙16（第49図）

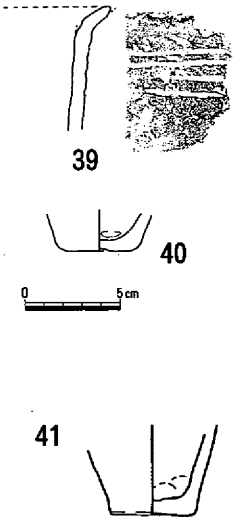
周溝に囲まれた土壙の中でもっとも東よりに位置するものである。長軸240㎝、短軸100㎝前後で長軸は北東から南西で、周溝の短辺と同方向になる。深さは10㎝で、北側と南側の２基の土壙が重なっているようにも見える。南側から口縁部直下にヘラ描き沈線４本を持つ甕**39**、ミニチュア土器底部**40**、北側からミニチュア土器底部**41**石鏃**S-12**、石錐１点などが出土している。



第48図　方形周溝断面図(1/20)及び出土遺物

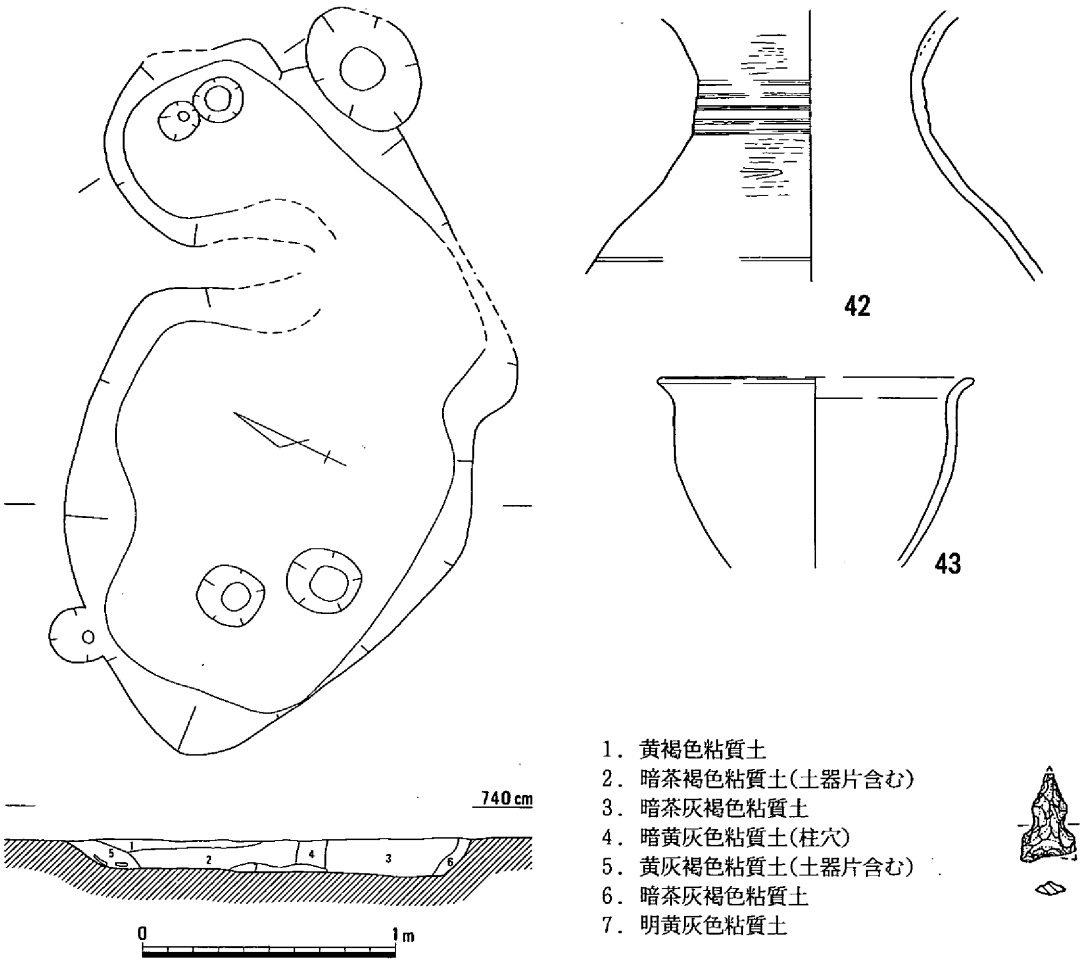






1．茶灰褐色粘性土
2．暗灰茶褐色粘土
3．灰黄褐色粘質土

第49図　土壙16平・断面図(1/30)及び出土遺物



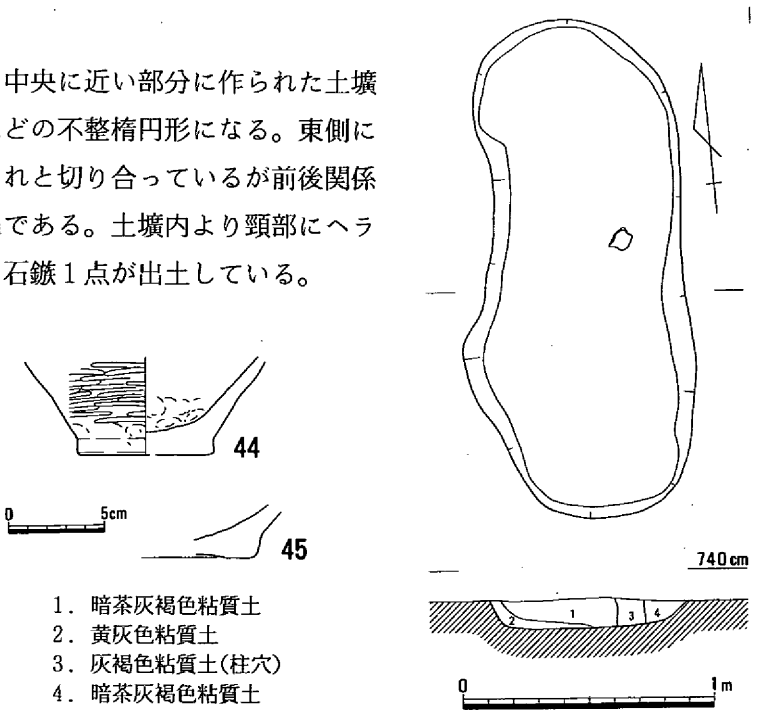
第50図　土壙17平・断面図(1/30)及び出土遺物

土壙17（第50図）

周溝に囲まれた土壙の中で最も中央に近い部分に作られた土壙である。東西190cm、南北160cmほどの不整楕円形になる。東側に１基土壙状になるものがあり、これと切り合っているが前後関係は、不明である。深さは10～14cmである。土壙内より頸部にヘラ描き沈線５条を持つ壺**42**、鉢**43**、石鏃１点が出土している。

土壙18（第51図）

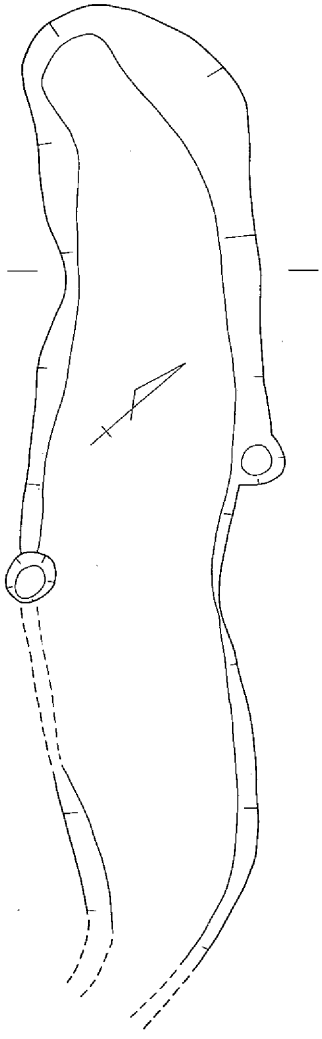
周溝の東コーナーに作られた土壙で、ほぼ南北方向の主軸になり長軸200cm短軸70cmで深さは12cmほどである。土壙内より壺の底部**44**・**45**が２個出土している。

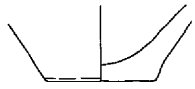


第51図　土壙18平・断面図(1/30)及び出土遺物

土壙19（第52図）

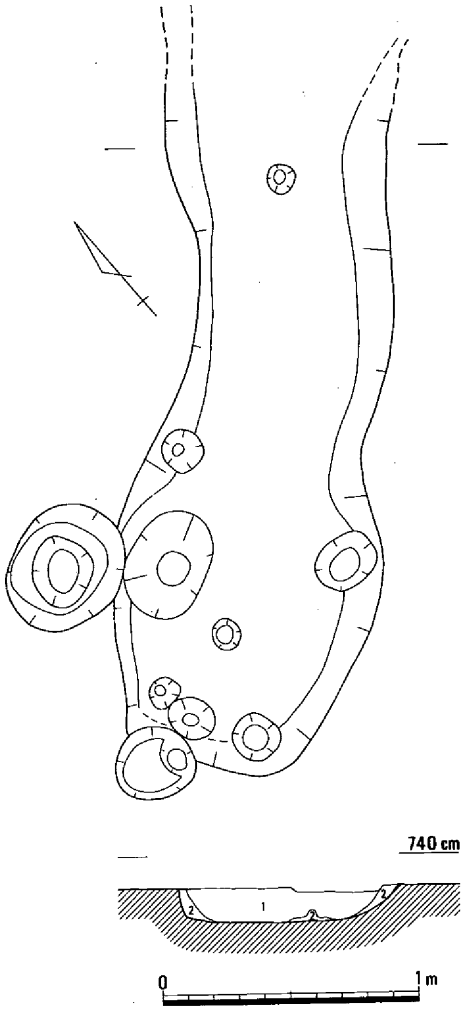
方形周溝の東辺部に位置し、土壙20のすぐ南に当たり、土壙20によって切られている。溝の続きとも考えられるが、周溝より幅が広く土壙が１～２基が切り合っているものと考えられる。全長は不明である。幅は狭い部分で75㎝、広い部分で110㎝、深さは14㎝を測る。土壙内から壺の底部１点**46**が出土している。





46

1．灰茶褐色粘性砂質土
2．灰黄褐色粘質土

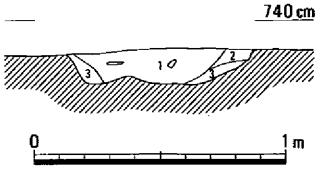


第52図　土壙19平・断面図(1/30)及び出土遺物

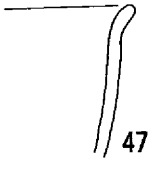
土壙20（第53図）

周溝の北辺の溝に沿うようにして作られた土壙で、２～３基の土壙が切り合っているものと思われる。全長は４ｍ前後になるが、北側の部分が少し広くなりこれを１基と考えると、２ｍ前後のものと推察できる。土壙内からは、鉢**47**、壺・甕の底部**48**・**49**が１点ずつ出土している。

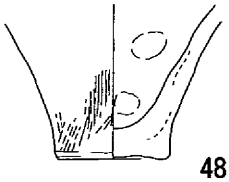
この土壙と周溝北辺の溝との間にもう２基の土壙が見られる。いずれも復元全長２ｍ前後で幅40～50㎝のものである。出土遺物は認められないが切り合い、土層などから前期のものと同じように作られた土壙と考えられる。



1．茶灰褐色粘質土
2．茶褐色粘質土
3．灰黄色粘質土



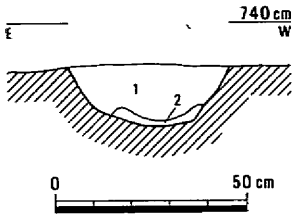
47



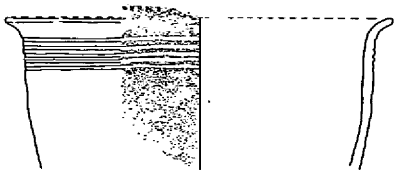
48

49

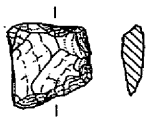
第53図　土壙20平・断面図(1/30)及び出土遺物



1．茶灰褐色粘質土
2．黄灰色粘質土



50



S-13

第54図　土壙21断面図(1/20)及び出土遺物

土壙21（第54図）

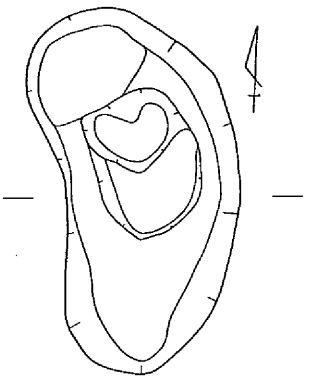
土壙20から南にのび、土壙18に切られてた土壙である。全長は不明であるが２ｍ前後のものと思われる。幅は40cm、深さ15cmを測る。土壙内から、口唇部に刻み目、口縁直下にヘラ描き沈線５本を持つ甕**50**、楔形石器１点**S-13**が出土している

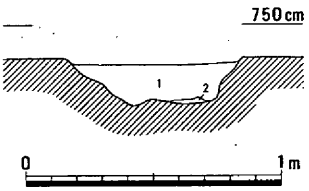
土壙22（第55図）

周溝・土壙19の東側、土壙18の南側に接して作られている。全長150cm、幅70cmの卵形をしている。深さ15cmを測る。土壙内から口唇部に刻み目、口縁直下に３条のヘラ描き沈線を持つ甕１点**51**が出土している。

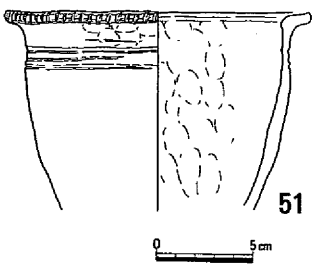
土壙23（第56図）

土壙22の東２ｍの所に位置する。この土壙も２基が切り合っているが、前後関係は不明である。全長350cmを測るが１基は２ｍ前後のものであろう。幅は北側のものが110cm、南側は70cmである。深さは北側10～18cm、南側は８～17cmを測る。土壙内から甕口縁部片**52**、壺底部**53**、石鏃**S-14**、錐**S-15**各１点が出土している。



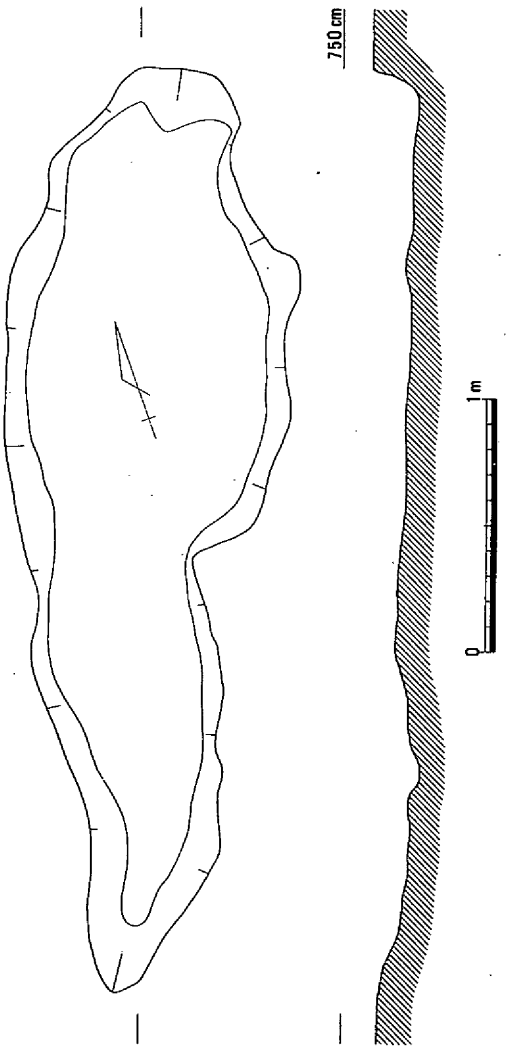


1．灰茶褐色粘性砂質土
2．灰黄褐色粘質土

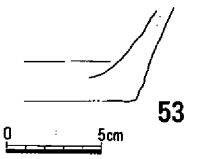


51

第55図　土壙22平・断面図(1/30)及び出土遺物

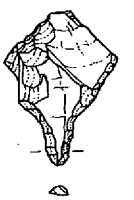


52



53

S-14

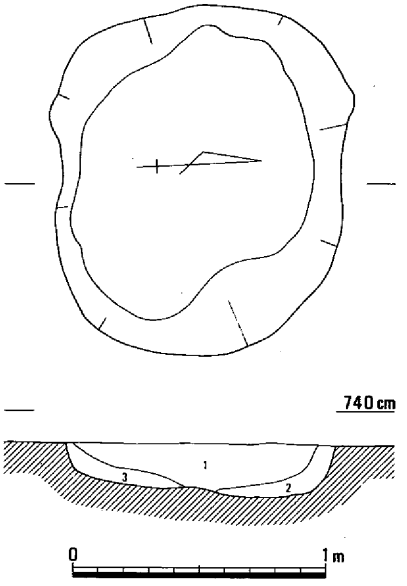


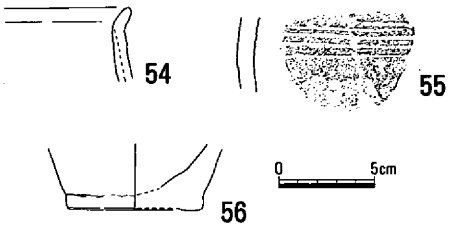
S-15

第56図　土壙23平・断面図(1/30)及び出土遺物

土壙24（第57図）

土壙23の東５ｍの所に位置する。110×140㎝の不整円形の土壙である。深さは20㎝を測る。土壙内から前期の甕口縁部片**54**・体部片**55**・底部**56**が出土している。



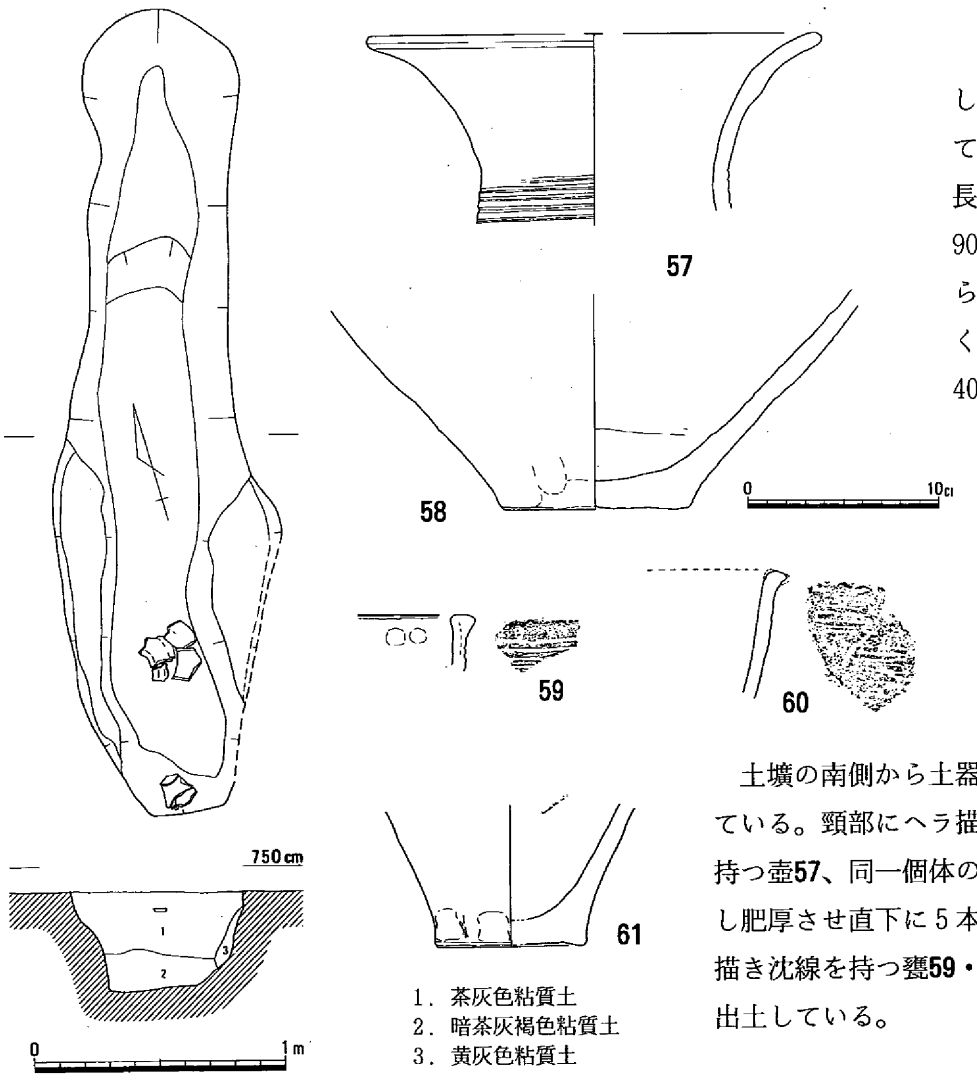


1．暗茶褐色粘質土
2．暗黄褐色粘質土
3．暗茶灰褐色粘質土

第57図　土壙24平・断面図(1/30)及び出土遺物

土壙25（第58図）

土壙24の東に位置し、さらに東に接して土壙26が存在する。長軸320㎝、幅50～90㎝である。北端から90㎝の所で１段深くなり最も深い所で40㎝を測る。



土壙の南側から土器が集中して出土している。頸部にヘラ描き沈線５条以上を持つ壺**57**、同一個体の底部、口縁部を少し肥厚させ直下に５本以上・８本のヘラ描き沈線を持つ甕**59**・**60**、底部**61**などが出土している。

1．茶灰色粘質土
2．暗茶灰褐色粘質土
3．黄灰色粘質土

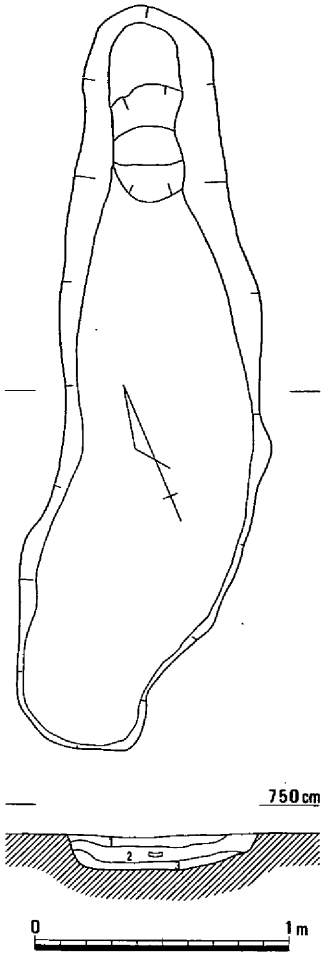
第58図　土壙25平・断面図(1/30)及び出土遺物

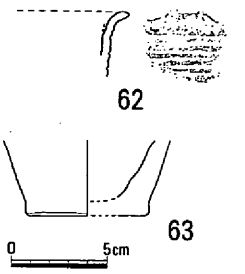
土壙26（第59図）

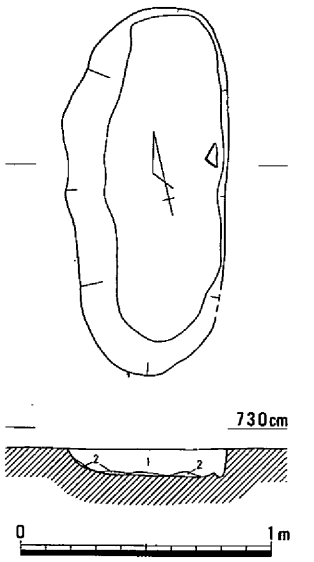
土壙25の東に接し、ほぼ並行して南北に主軸を持つ土壙である。長軸300㎝、幅50～80㎝、深さ12㎝である。土壙内から前期の甕**62**、甕底部**63**が出土している。

土壙27（第59図）

方形周溝の南２ｍの所に、土壙28に東側上部を切られ作らている。長150㎝、短軸60㎝の小判形を呈する。深さは10㎝を測る。土壙内から図化できなかったが多くの前期に属すると思われる小細片、チップ１点が出土している。



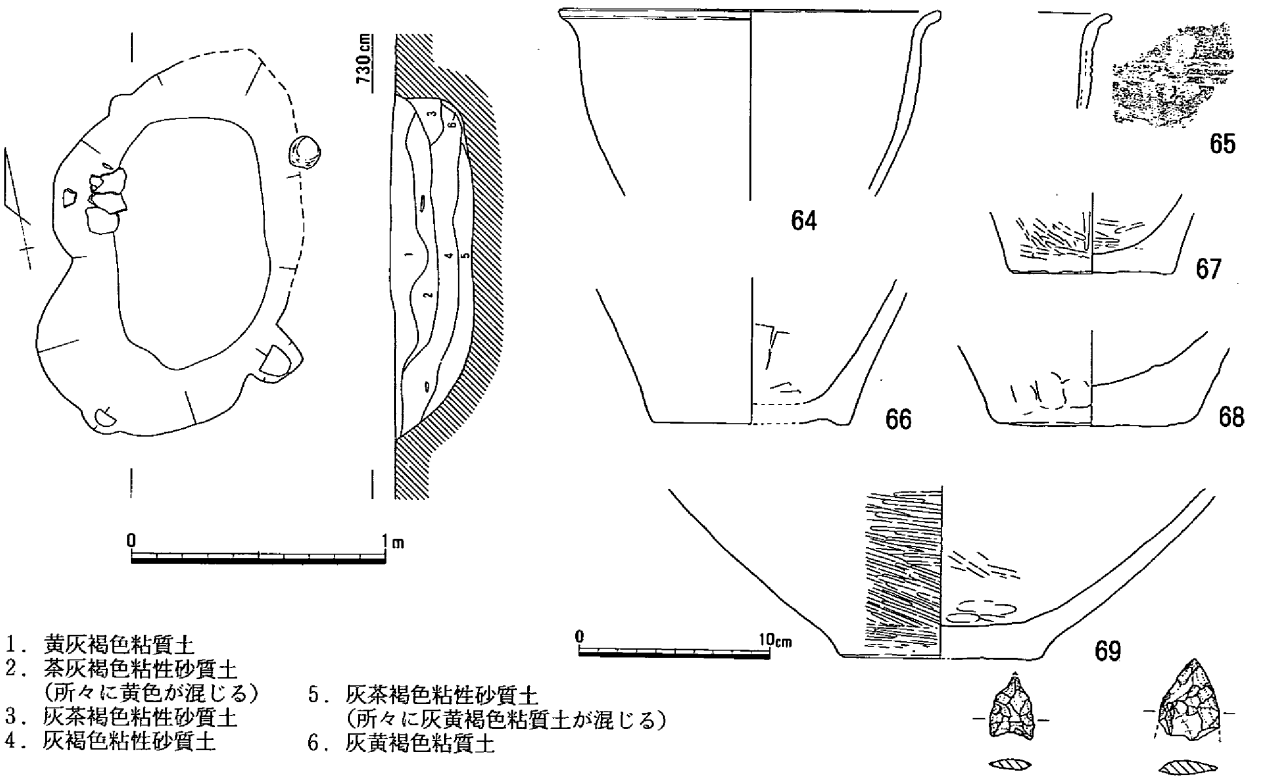




1．茶褐色粘質土
2．暗茶灰色粘質土
3．黄灰色粘質土

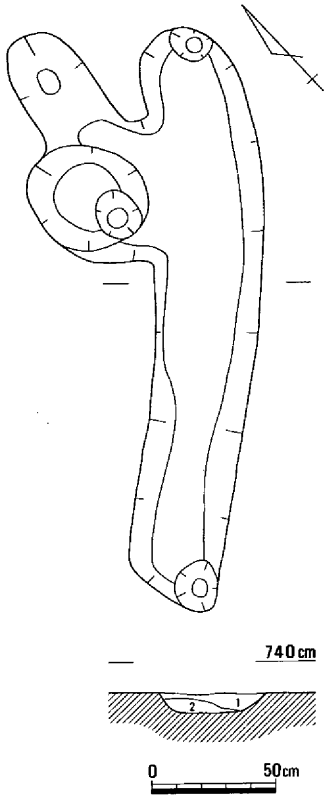
1．灰茶褐色粘性砂質土
2．灰黄褐色粘質土

第59図　土壙26・27平・面図(1/30)及び出土遺物



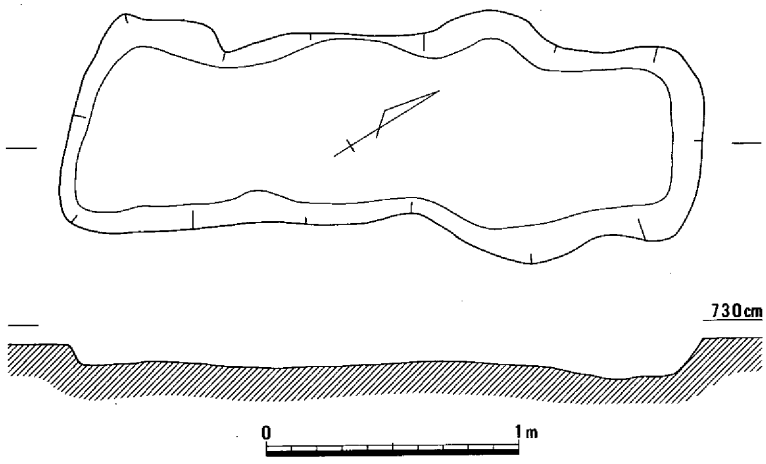
1．黄灰褐色粘質土
2．茶灰褐色粘性砂質土
（所々に黄色が混じる）
3．灰茶褐色粘性砂質土
4．灰褐色粘性砂質土
5．灰茶褐色粘性砂質土
（所々に灰黄褐色粘質土が混じる）
6．灰黄褐色粘質土

第60図　土壙28平・断面図(1/30)及び出土遺物



1．黄褐色粘質土
2．暗茶灰色粘質土

第61図　土壙29平・断面図(1/30)



第62図　土壙30平・断面図(1/30)及び出土遺物

土壙28（第60図）

土壙27を切って作られている。長径160cm、短径100cmの卵形を呈し深さは32cmを測る。土壙内から甕口縁部**64・65**、底部**66**、壺底部**67～69**、石鏃４点などが出土している。

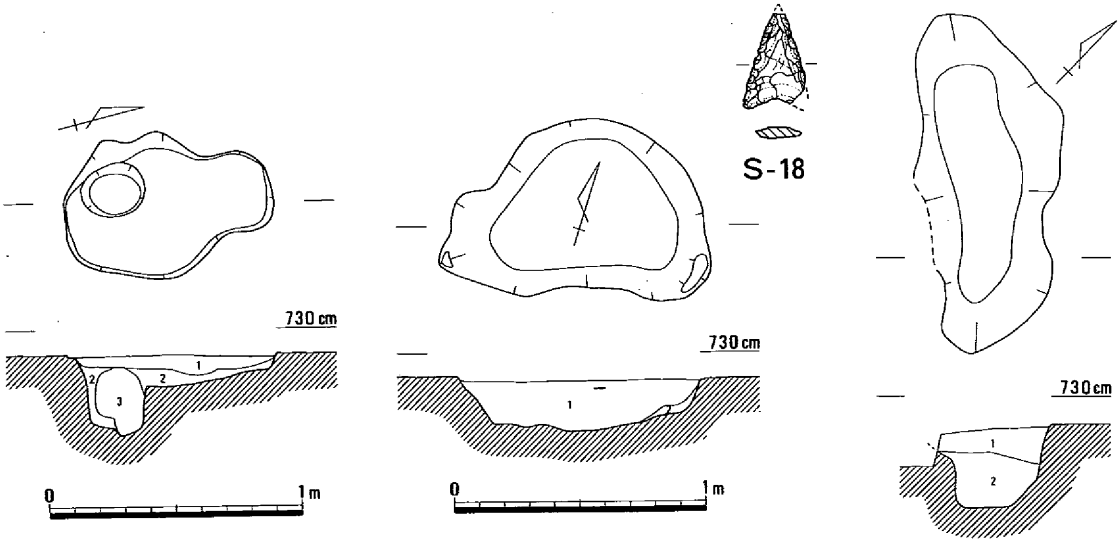
70

土壙29（第61図）

周溝の南３ｍの所に位置し、長軸220cm、幅40cm、深さ７cmを測る。土壙内からの出土遺物は見られない。

土壙30（第62図）

周溝東辺の東４ｍに位置している。主軸は北東から南西に向き、全長250cm、幅は凹凸があるが50cm前後である。深さは北東で17cm、南西で８cmである。出土遺物は**70**が出土している。

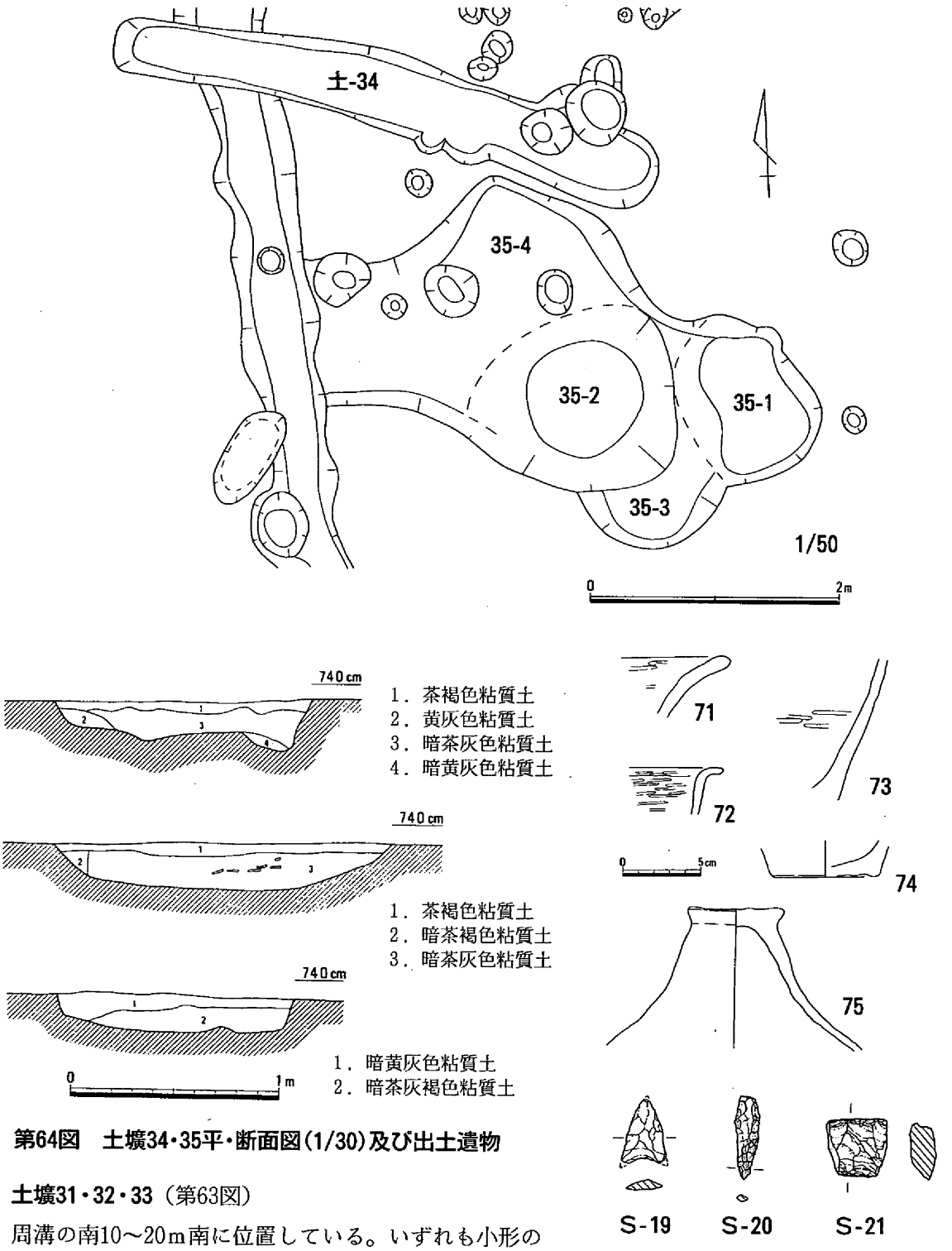


1．暗黄灰褐色粘質土
2．黄灰褐色粘質土
3．暗灰茶褐色粘性砂質土

1．灰茶褐色粘性砂質土
2．黄灰褐色粘質土

1．暗黄灰褐色粘質土
2．暗灰茶褐色粘性砂質土

第63図　土壙31・32・33平・断面図(1/30)及び出土遺物



第64図　土壙34・35平・断面図(1/30)及び出土遺物

土壙31・32・33（第63図）

周溝の南10～20ｍ南に位置している。いずれも小形の土壙である。34は長軸80㎝、短軸30～50㎝、深さ12㎝である。35は長軸100㎝、短軸68㎝の不整円形で深さ20㎝を測る。27は長軸130㎝、短軸60㎝で、深さ34㎝を測る。土壙内からの出土遺物は、28から石鏃１点以外は小細片が出土しているのみである。

土壙34（第64図）

周溝の南角の南３ｍに位置し、主軸は東西に450㎝の長さになる。幅は東側が少し広く60㎝、西側で46㎝、深さも東側が深く20㎝、西側で10㎝を測る。出土遺物は見られないが前期の土壙と考えられる。

土壙35（第64図）

土壙34の南に接している。３～５基の土壙が切り合っているようであるが、全貌のわかる土壙、前後関係は不明である。35－１から前期の壺**71**・甕の口縁部**72**、壺底部**74**、ミニチュア土器**74**、焼土塊、35-2から蓋**75**、石鏃**S-19**、石錐**S-20**、楔形石器**S-21**などが出土している。

土壙36（第65図）

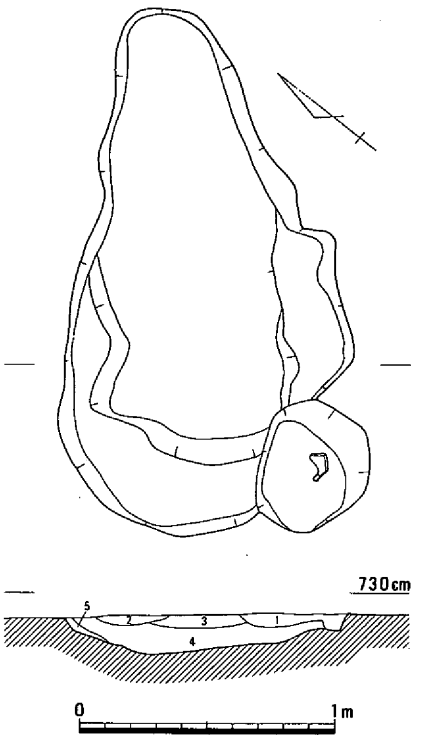
土壙35の東に位置している。主軸は北東から南西に向き、全長210cm幅は南瀬が広く114cm、北東で50cm、深さは南西部で15cmを測る。出土遺物は見られない。

土壙37（第66図）

この土壙は７区南端に位置し９区で南側が検出されている。全長200cm、幅110cmの小判形を呈している。底部は水平に近く深さは52cmを測る。この区域では最も深い土壙である。土壙内より前期の甕口縁部**76**、底部**77**、石鏃**S-22**１点が出土している。

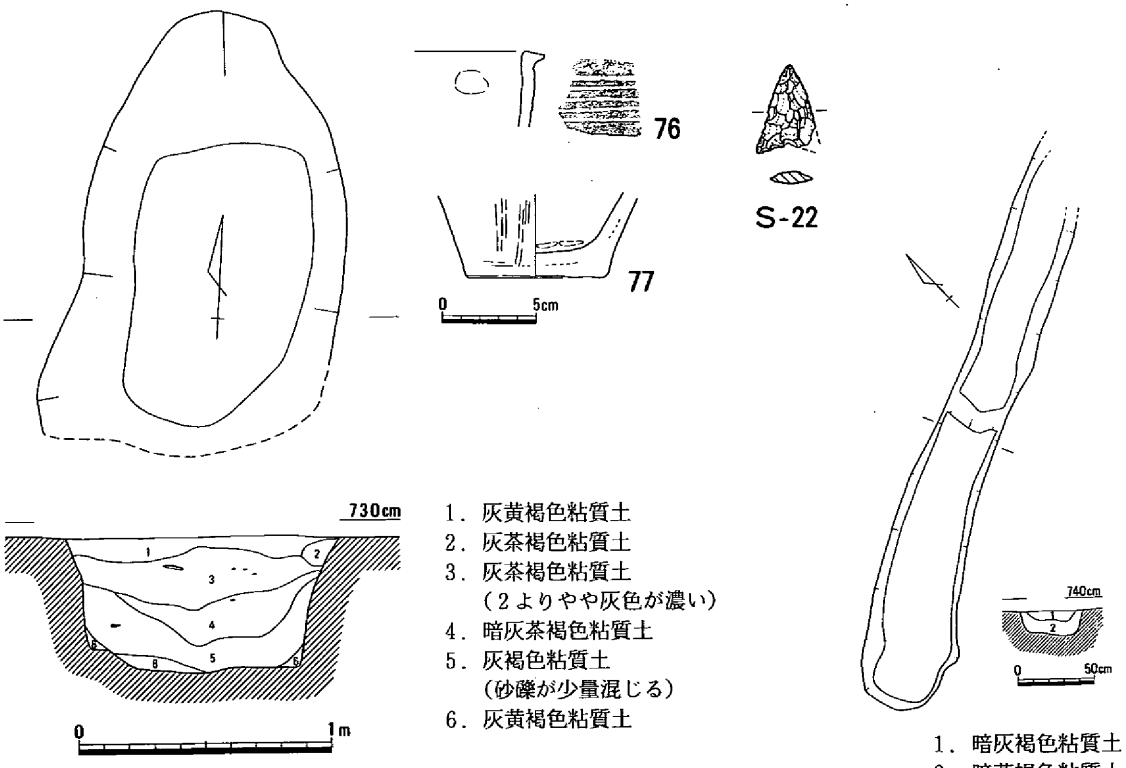
土壙38（第66図）

この土壙は７区西端にあり、北端が一部検出されていないが全長４ｍ近くになる。幅は45～55cmを測る。深さは南２ｍ程までは14cmで、それより北は30cmと深くなる。出土遺物は見られない。



1．黄灰色粘質土
2．黄白色粘質土
3．黄茶色粘質土
4．茶灰褐色粘質土
5．黄褐色粘質土

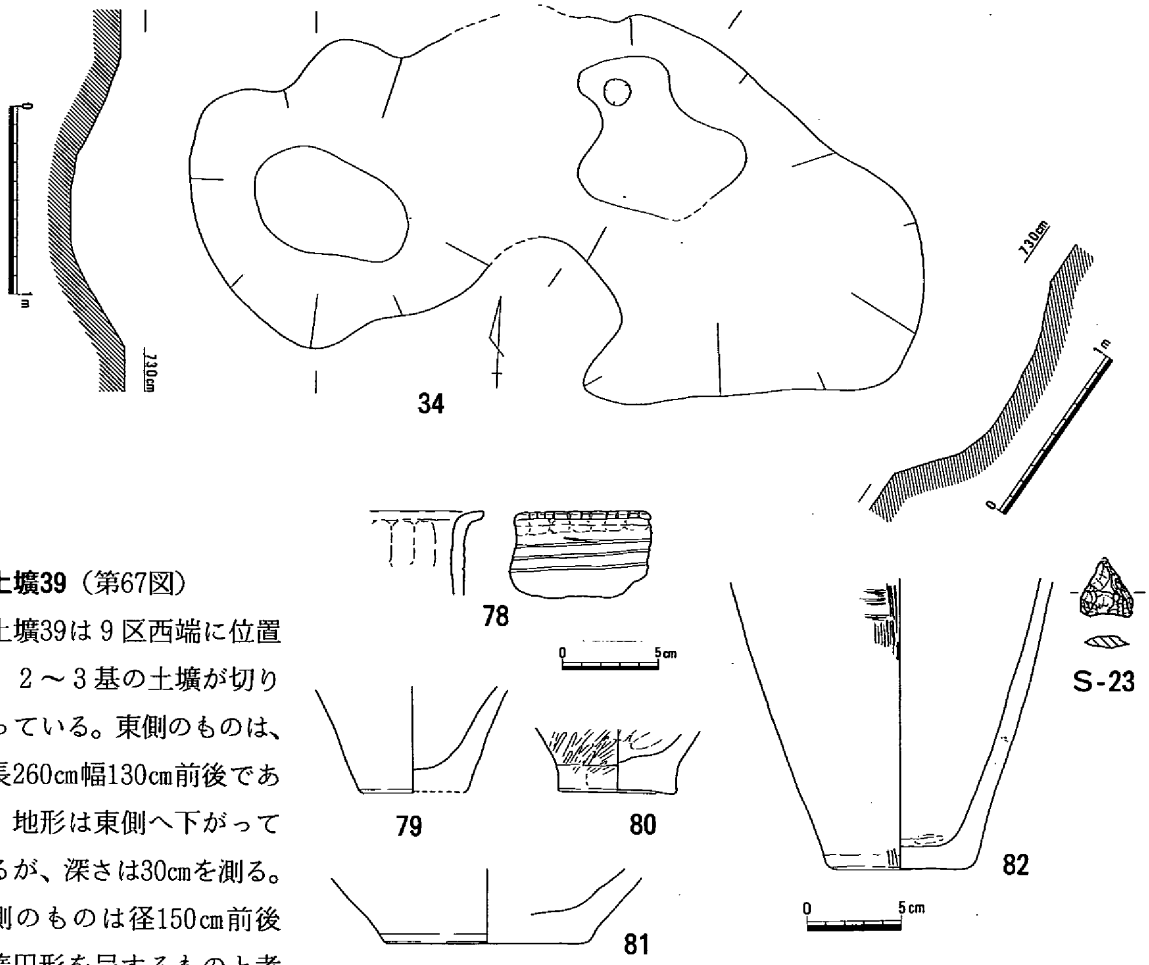
第65図　土壙36平・断面図(1/30)



1．灰黄褐色粘質土
2．灰茶褐色粘質土
3．灰茶褐色粘質土
（２よりやや灰色が濃い）
4．暗灰茶褐色粘質土
5．灰褐色粘質土
（砂礫が少量混じる）
6．灰黄褐色粘質土

1．暗灰褐色粘質土
2．暗茶褐色粘質土

第66図　土壙37・38平・断面図(1/30・1/50)及び出土遺物



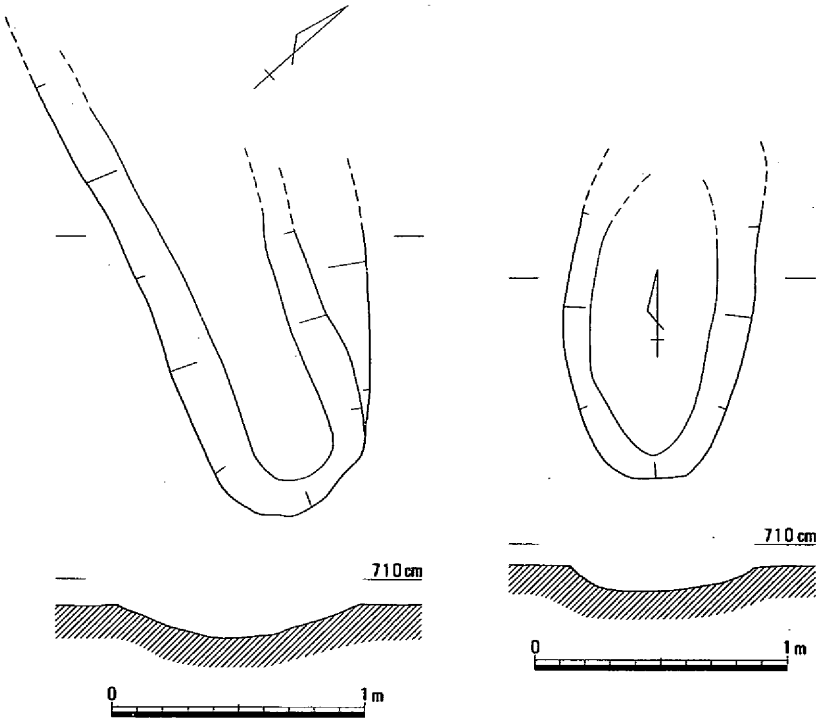
第67図　土壙39平・断面図(1/40)及び出土遺物

土壙39（第67図）

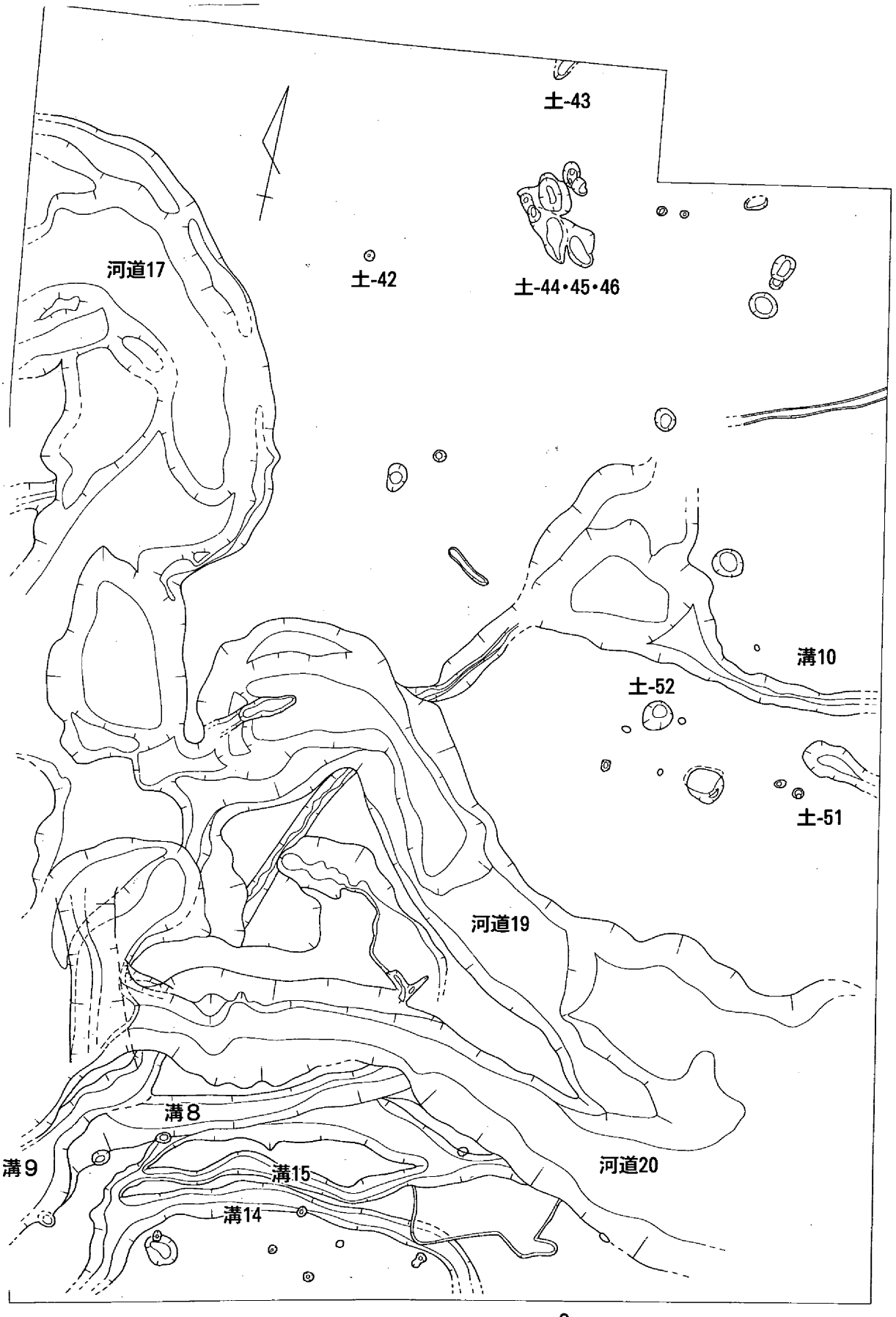
土壙39は９区西端に位置し、２～３基の土壙が切り合っている。東側のものは、全長260cm幅130cm前後である。地形は東側へ下がっているが、深さは30cmを測る。西側のものは径150cm前後の楕円形を呈するものと考えられる。東側の土壙内から前期の甕口縁部**78**・底部**82**、壺底部**79**～**81**、石鏃**S-23**が、西側から甕底部**78**が出土している。

土壙40（第68図）

９区の西端の河道近くに位置し、西側の1/2近くを後の溝、土壙に切られている。残存長160cmで、幅は65cm、深さ14cmを測る。出土遺物は見られない。



第68図　土壙40・41平・断面図(1/30)



第69図　11区遺構配置図(1/200)

土壙41（第68図）

土壙40の東北に位置し、これに直行するように存する。北1/3を欠いている。復元全長150㎝、幅70㎝の小判形を呈する。深さは40㎝を測る。

出土遺物は見られない。

土壙42（第70図）

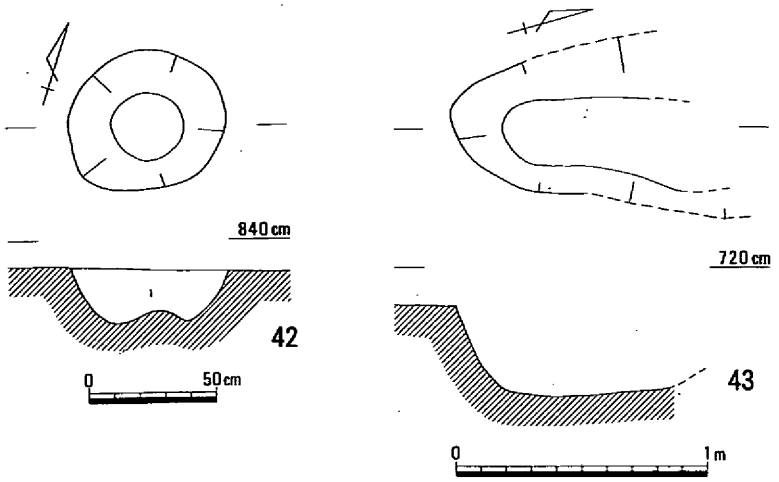
11区北部に位置し、直径60㎝の円形を呈する。深さは15～20㎝を測る。出土遺物は見られない。

土壙43（第70図）

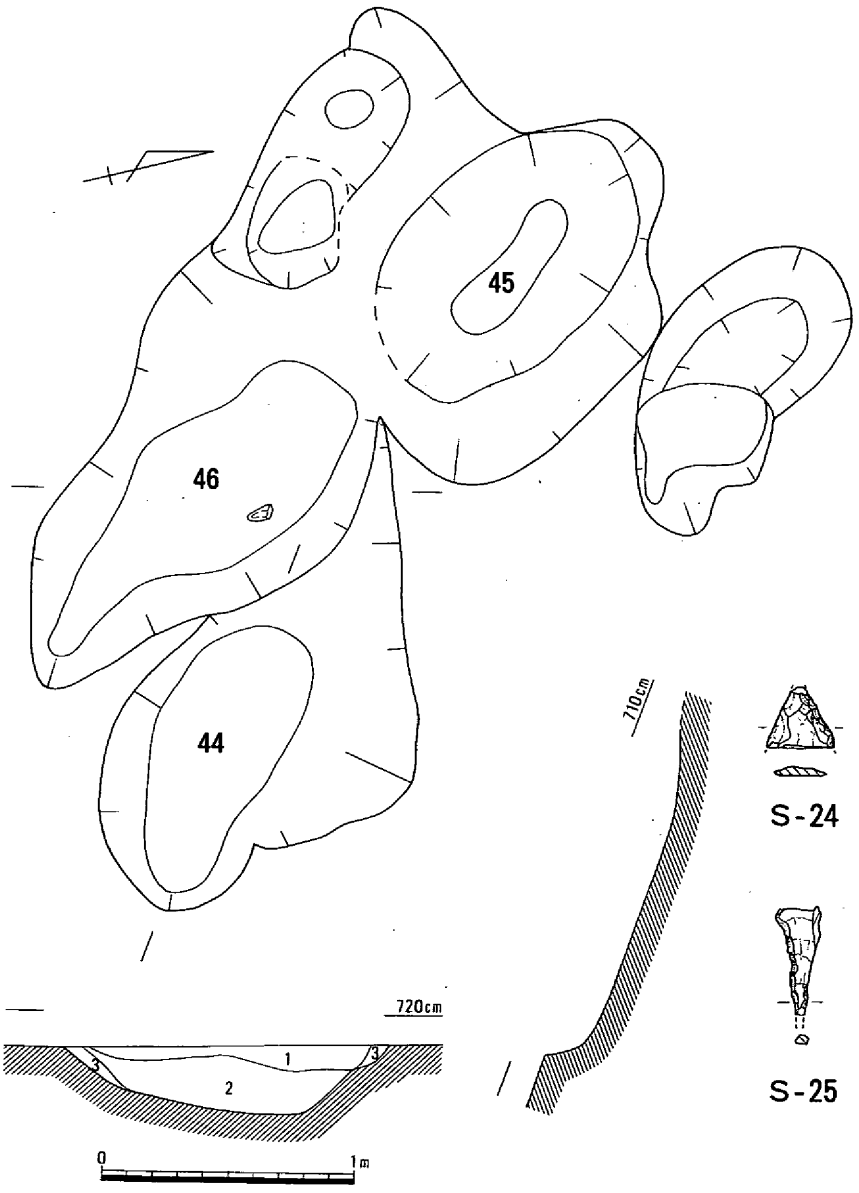
11区の北端に南側1/3ほどが残存する。幅60㎝、深さ36㎝を測る。出土遺物は見られない。

土壙44・45・46（第71図）

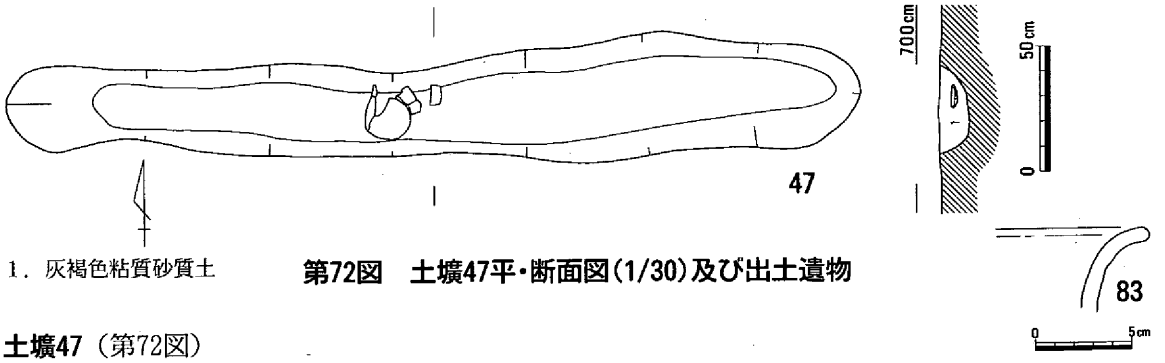
この土壙も３～４基が切り合って存在するが、前後関係は不明である。南東部のもの44は150×70㎝ほどに、北側のもの45は160×80㎝に、南西部のもの46は200×100㎝前後の土壙になるものと思われる。小片で図化出来ていないが南西部のものから壺の頸部に沈線を施すもの、甕の底部片、石鏃S-24、石錐S-25などが出土している。



第70図　土壙42・43平・断面図(1/30)



第71図　土壙44・45・46平・断面図(1/30)及び出土遺物



1．灰褐色粘質砂質土

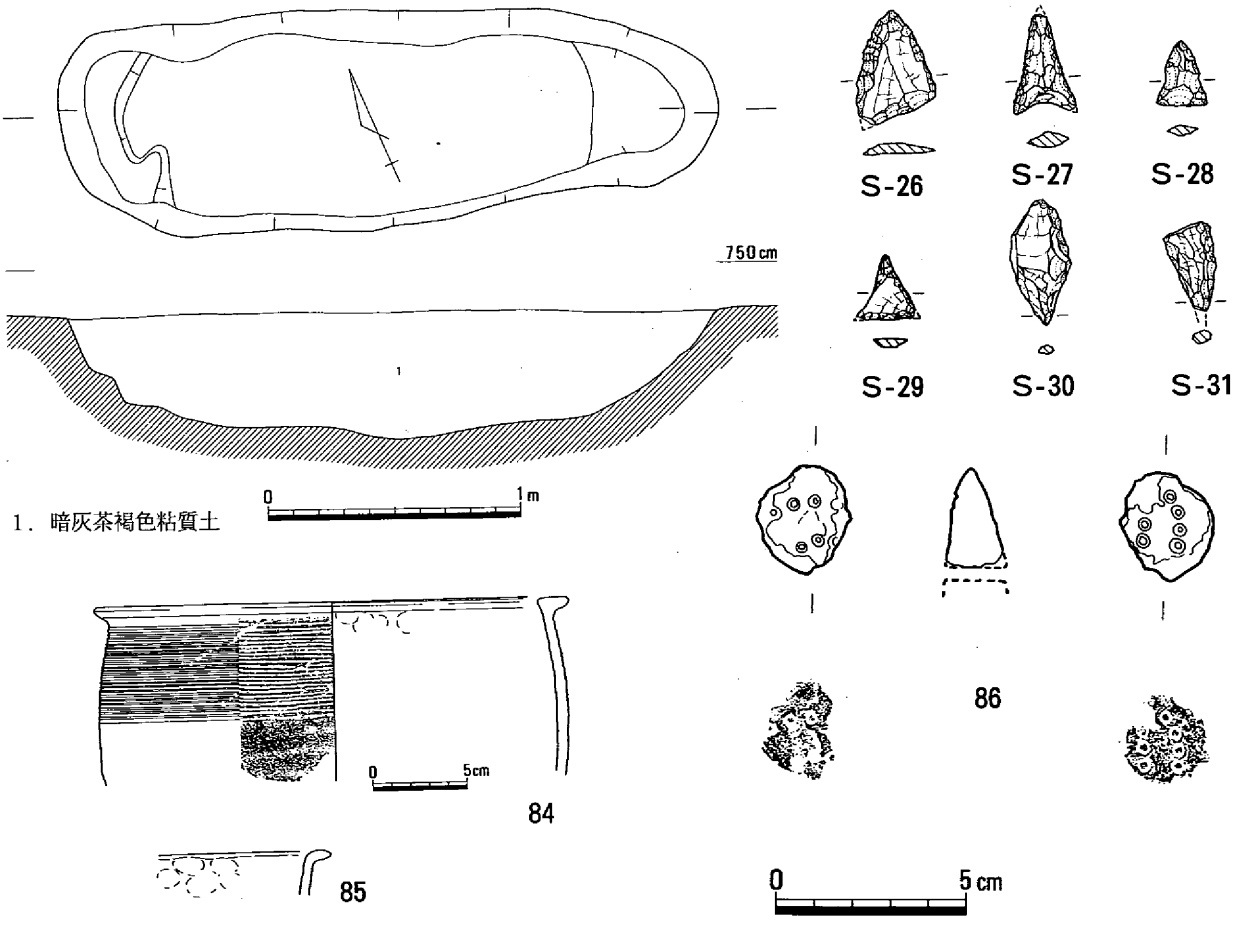
第72図　土壙47平・断面図(1/30)及び出土遺物

土壙47（第72図）

10区南端の河道**16・18**に囲まれた島状の場所に位置する。主軸は東西方向に340cmあり、この地区では最も長い。幅は狭い所で28cm、広い所で50cm、深さは12cm程である。土壙内より前期の壺口縁部片**83**が出土している。

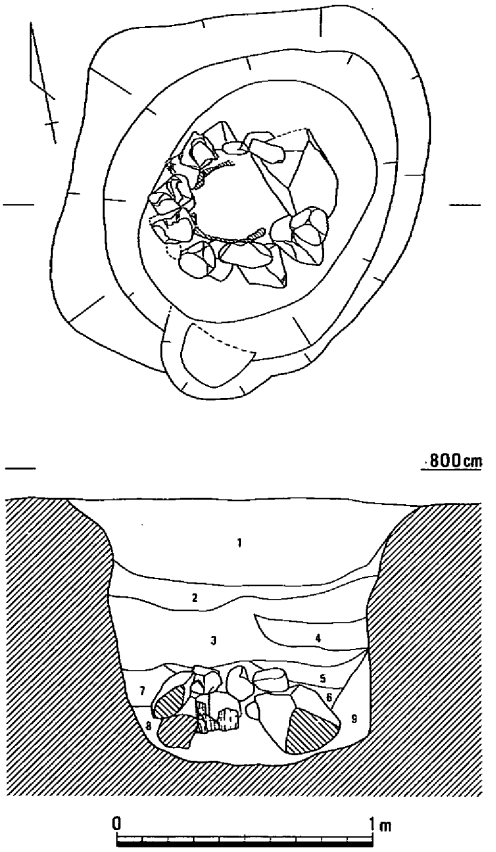
土壙48（第73図）

土壙48は、６区土壙15の南３ｍに土壙15とほとんど平行して作られている。長軸270cm、短軸90cm、深さは中央部がもっとも深く60cmを測る。土壙内から中期初頭の口縁直下に櫛描き沈線を施す甕**84**、表裏共に竹管文を施す小形の分銅形土製品**86**、石鏃４点**S-26～29**、石錐２点**S-30・31**、他に底部片、サヌカイトのチップ片、焼土塊などが出土している。この遺跡においてこの時期の土壙は、この土壙のみである。（伊藤）



1．暗灰茶褐色粘質土

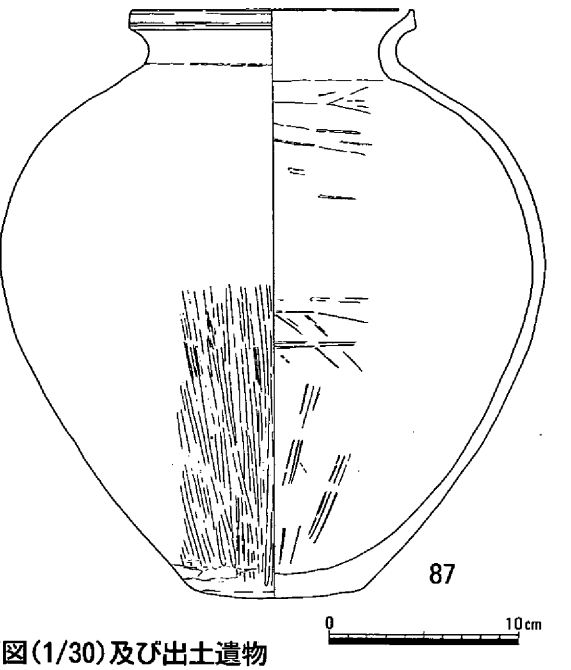
第73図　土壙48平・断面図(1/30)及び出土遺物



1．黒褐色粘質細砂(小礫２～５mm混じり)
2．灰色粘質細砂(粗砂混じり)
3．黒色粘質細砂
4．灰白色粘質土
5．灰色粗砂(小礫１～２mm混じり)
6．灰白色粘質細砂(粗砂・小礫１～２mm混じり)
7．灰色細砂(粗砂を多く含む)
8．灰色粗砂(粗砂混じり)
9．灰色粗砂(８より少し薄い)

土壙49（第74図）

１区中央の微高地上に検出した底部に石組みを伴う井戸である。掘り方は上面ではやや不正形で長径170cmであるが、下部では長径130cm、短径110cmの楕円形を呈し深さ100cmである。底面は平らで、中央に直径15cm平均、最大35cmの石材を使い内径35cmに、高さ40cmに２～３段に石組をしている。さらに石組内に厚さ２cm、幅８cm前後の板材を用いて井筒としている。板材は西側の大形の石材を使用した付近では確認できなかった。井筒の内径は30cm程である。埋土は９層に分層できるが砂質土が中心である。



第74図　土壙49平・断面図(1/30)及び出土遺物

出土遺物は埋土中から壺形土器のほぼ復元可能なものが１点87出土している。時期は出土遺物の特徴から弥生時代後期後半と考えられる。(山磨)

土壙50（第75図）

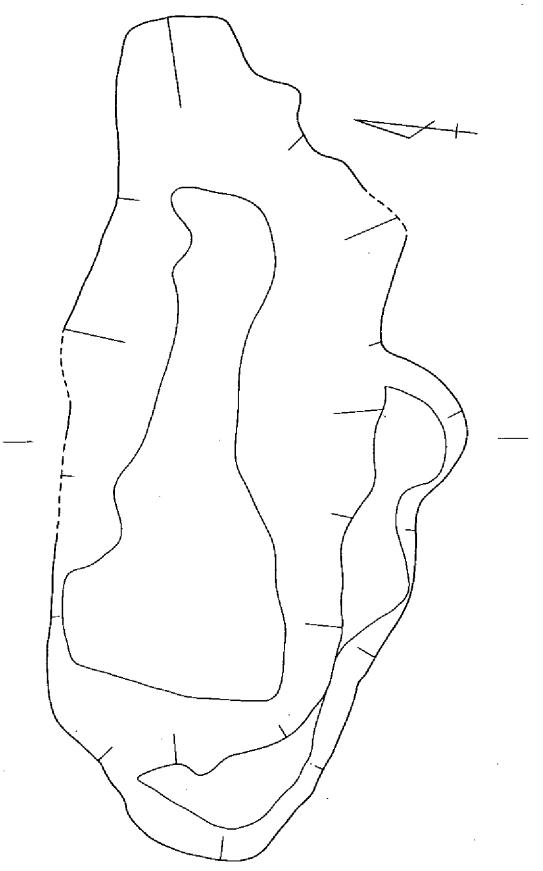
10区の西側部で検出された土壙で、２基が切り合っている。両者ともほぼ東西に主軸を持ち、長軸３ｍのものは、幅120cm、深さ60cmを測る。新しいものは長軸２ｍ幅140cm前後で、深さは20cmである。どの土壙に属するか不明であるが、土壙内から弥生時代後期と考えられる壺底部が１点出土している。

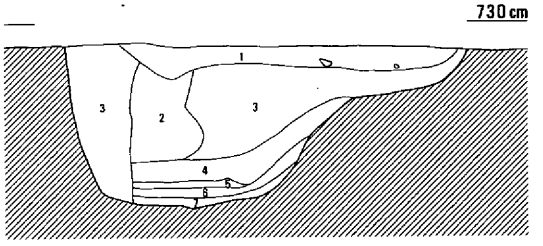
土壙51（第75図）

11区西端で検出されたもので東側部は検出できていない。残存長240cm、幅は狭いところで70cm、広い所で130cm、深さ46cmを測る。出土遺物はないが弥生後期の可能性がある。

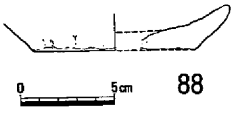
土壙52（第75図）

前記の土壙51の西６ｍの所で、弥生前期の河道との中間点に位置し、径110～130cmの円形を呈し、深さ50cmを測る。土壙内から弥生後期と考えられる壺の口縁部小片が出土している。

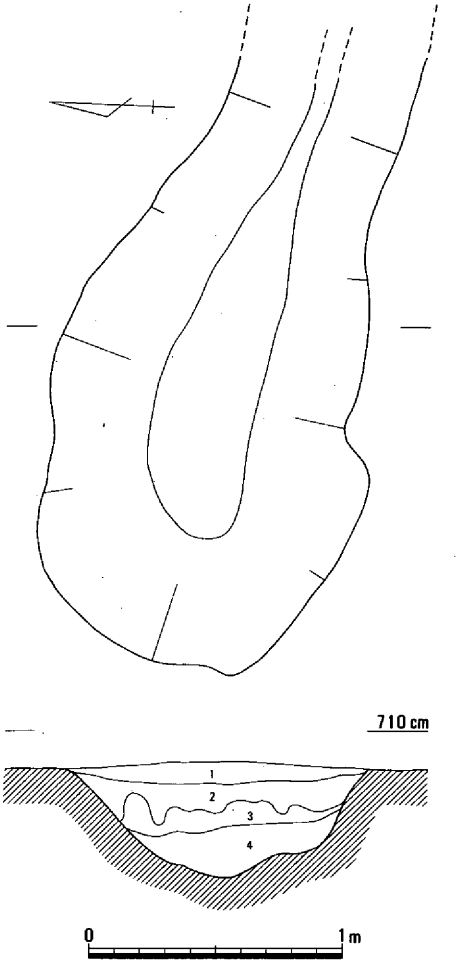




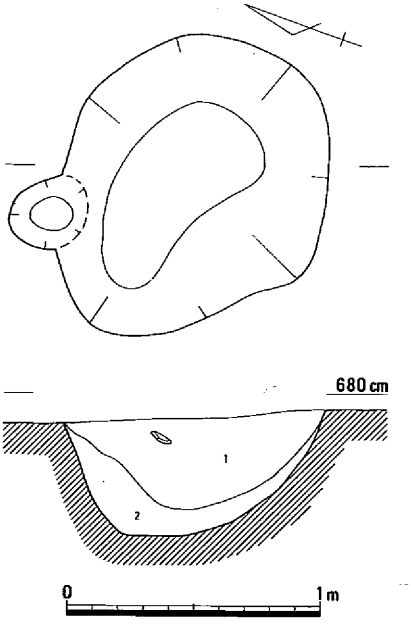
1．灰褐色粗砂
2．褐色微砂
3．灰色粗砂
4．灰色微砂
5．灰色粘質砂質土
6．淡灰色粘質砂質土
7．黄褐色粘質土



88



1．灰茶褐色粘質土
2．灰褐色粘質土
3．黄色と灰褐色のまだら粘質土
4．灰茶褐色粘質土



1．暗灰褐色粘質砂質土(少量の土器片と礫が混じる)
2．黄褐色粘質砂質土

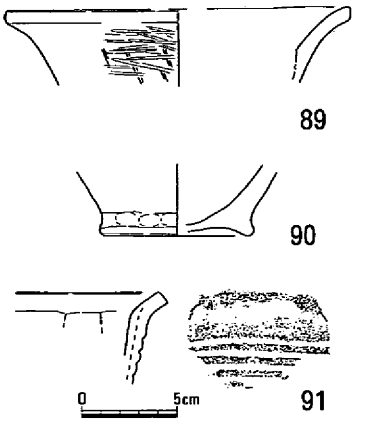
第75図　土壙50・51・52平・断面図(1/30)

（２）溝

溝１（第76図）

１区西半部の微高地上にほぼ一直線に検出した。南西端は調査区外で、北東端は旧河道で削平されている。検出長16m、最大幅100cm、深さ20cmである。断面は椀状を呈し、明黄褐色砂質土の埋土である。溝南西端の底面は海抜755cmで北東端に向かって10cm程低下している。

出土遺物は埋土中から壺、甕が出土している。時期は出土遺物等から弥生時代前期である。方向や時期等から溝８，９に続く可能性がある。

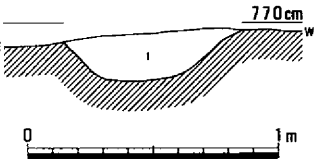


第76図　溝１出土遺物

溝２（第77図）

１区の中央やや西よりに検出した浅い溝状の遺構で、南端は溝４と重複して不明瞭である。規模は検出長７ｍ、幅110～135cm、最大深さ10cmである。断面は浅い皿状を呈す。溝底面の海抜高は780cmで、高低差は不明瞭である。

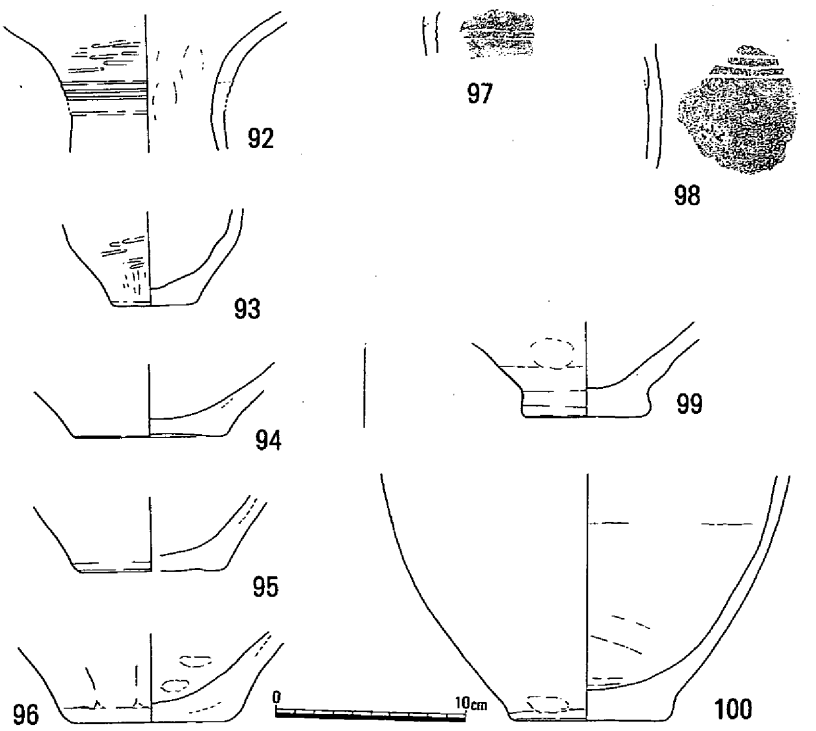
時期は出土遺物が細片のため確定しがたいが、埋土中から弥生時代前期中頃の土器片が出土していることや遺構の切り合いから弥生時代前期以降の弥生時代の範疇であろう。



1．明黄褐灰色砂質土

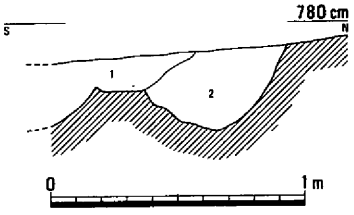
溝３（第78図）

２区北西部の微高地上に旧河道に沿うように南北方向に検出した。溝西端と中央を旧河道により削平されている。規模は検出長18,5ｍ、幅80cm前後、深さ30cmである。断面はU字形をなし、灰白色細砂が堆積している。溝北東端の底面は海抜750cmで西端で15cm程低下している。 出土遺物は溝底面や埋土中から比較的多くの土器が出土している。器種は壺形土器と甕形土器の２種類である。壺形土器は口縁部が大きく外反し、外側が肥厚しているもの（**107**）、頸部や体部上端に沈線を施しているものが多い。**103**は肩部に削り出し凸帯を施し、その

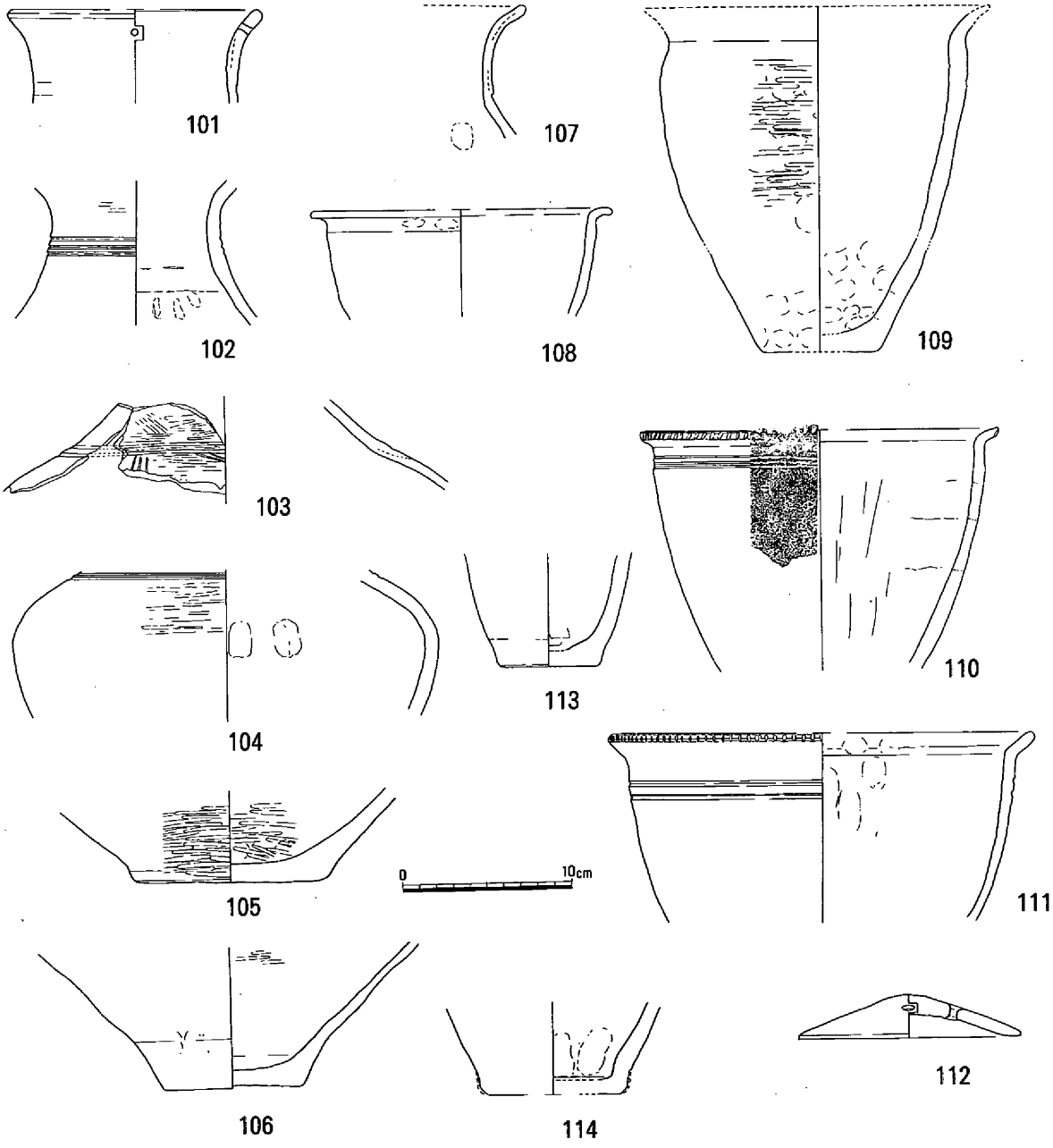


第77図　溝２断面図(1/30)及び出土遺物

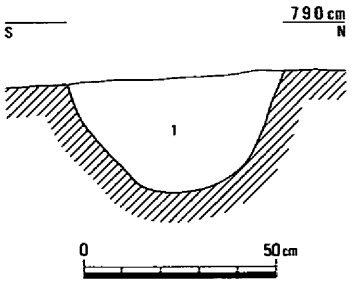
下方に図柄は不明であるが線刻を施している。**115**は２つの半月状の取手とその下端本体に２孔を穿っている。**116**は頸部下端に圧痕を施した凸帯を巡す。**101**は口縁端部に蓋受けの孔を穿っている。甕形土器は口縁部が〈L〉の字状に外反し、端部にヘラキザミメと頸部に沈線を施すものと無文のものがある。頸部の沈線は３条前後である。底部は平底か若干上げ底のものがある。**105**は内外面ともヘラ磨きを施している。時期は出土遺物の特徴から弥生時代前期中頃と考えられる。



1．灰褐色細砂
2．黄褐色細砂



第78図　溝３（西半）断面図（1/30）及び出土遺物

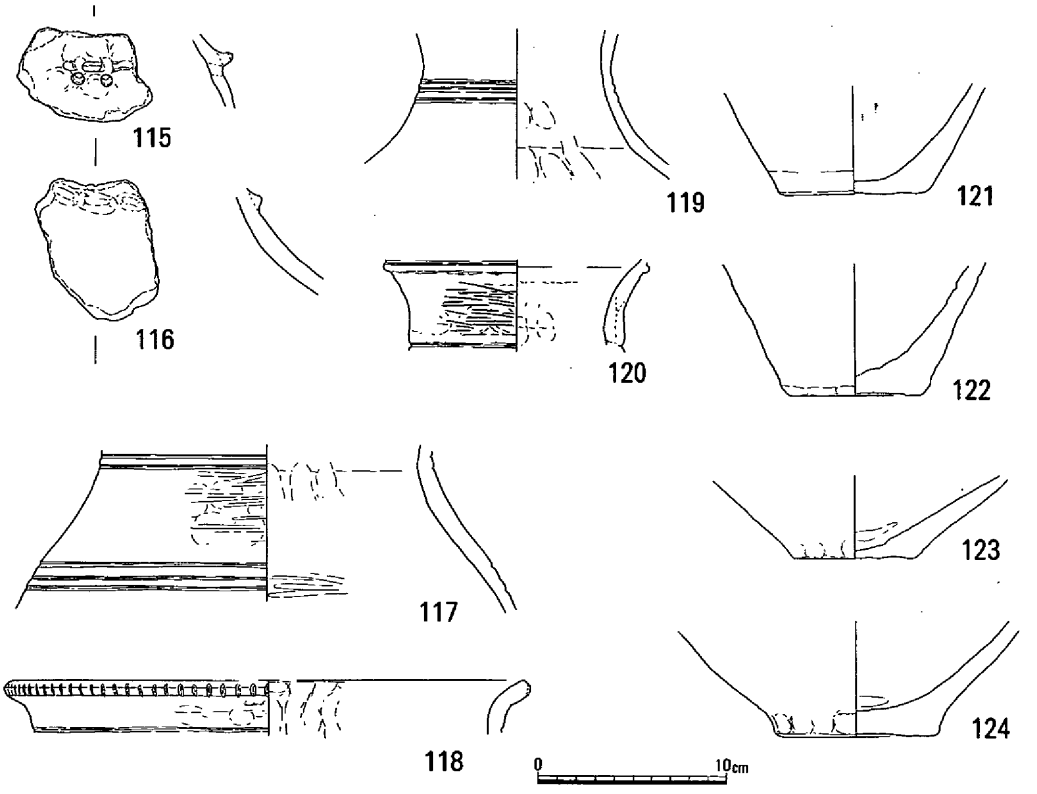


1．灰褐色細砂

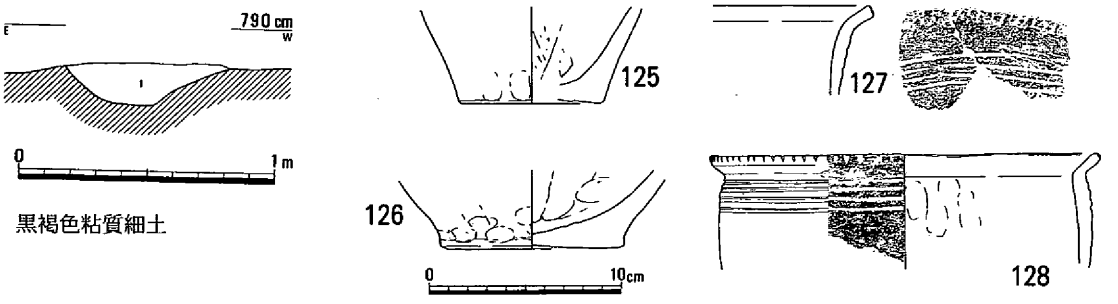
溝４（第80図）

２区中央付近の微高地上に溝２とほぼ並行し検出した。溝西端と中央付近を溝８と同様に旧河道により削平されている。検出長19m、幅80～130cm、最大深さ25cmである。断面は残存良好な中央で２段掘りの形状をなす。埋土は黒褐色粘質微砂の１層である。溝北東端の底面は海抜770cmで西端で10cm程低下している。

出土遺物は埋土中から壺、甕が出土している。時期は出土遺物の特徴から弥生時代前期中頃と考えられる。



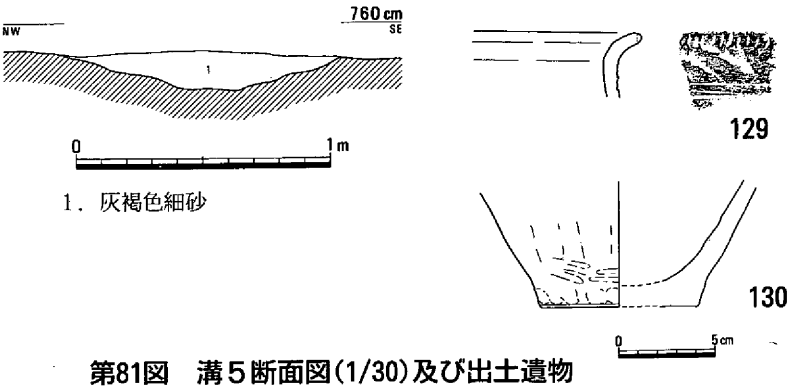
第79図　溝３（東半）断面図（1/20）及び出土遺物



第80図　溝４断面図（1/30）及び出土遺物

溝５（第81図）

４区の北西端の微高地上に検出した浅いたわみ状を呈す遺構で西側の調査区外に続く。検出長300cm、最大幅120cm、深さ20cmである。断面は浅い皿状を呈し、灰色粘質微砂の埋土である。検出底面は中央付近で海抜730cmをはかり、高低差は不明瞭である。



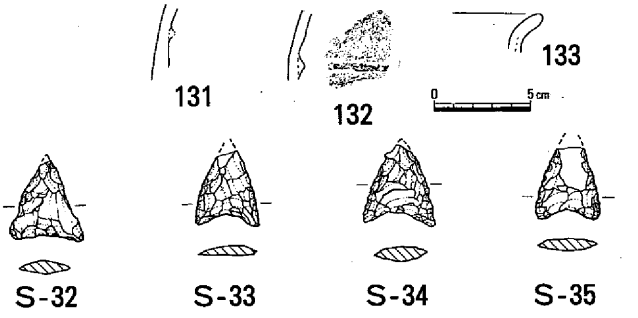
第81図　溝５断面図(1/30)及び出土遺物

出土遺物はく字状に外反する口縁の端部にキザミメを施し、頸部に複数の沈線を施す甕形土器と平底の底部片が出土している。時期は出土遺物や検出状況等から弥生時代前期中頃と考えられる。

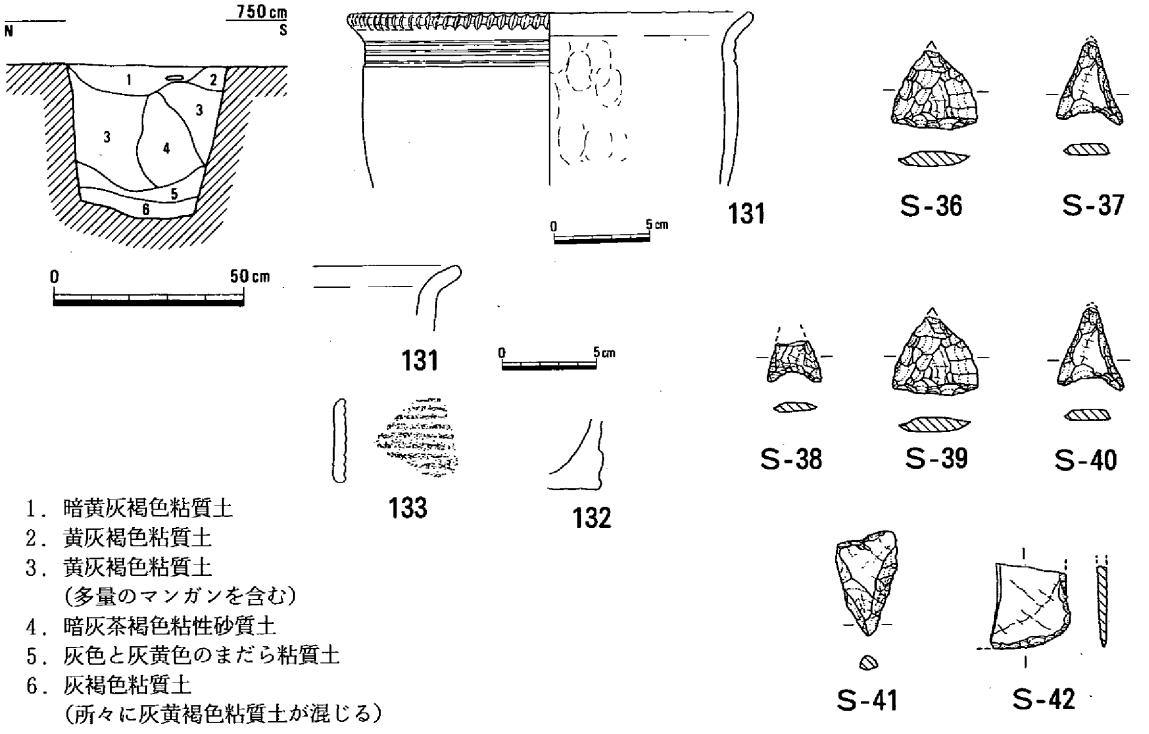
（山磨）

溝６（第82図）

弥生河道に沿ってその東岸を４区南半から６区の方形周溝遺構まで50m続き、方形周溝によって切られている。上流は河道24により切られ不明である。下流は方形周溝以南は不明である。溝の幅は、４区では２m近くあるところもあるが、６区では50cm前後である。深さは４～８cm、出土遺物は、弥生前期の壺頸部**131・132**甕口縁部小片**133**、石鏃**S-32～35**が出土している。



第82図　溝６出土遺物



1．暗黄灰褐色粘質土
2．黄灰褐色粘質土
3．黄灰褐色粘質土
（多量のマンガンを含む）
4．暗灰茶褐色粘性砂質土
5．灰色と灰黄色のまだら粘質土
6．灰褐色粘質土
（所々に灰黄褐色粘質土が混じる）

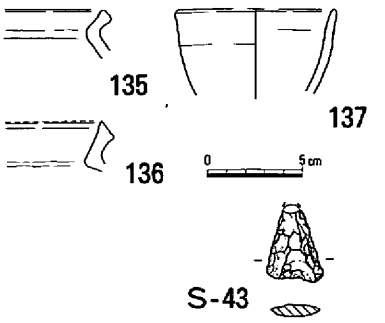
第83図　溝７断面図(1/20)及び出土遺物

溝７（第83図）

６区北側に位置し南から北に向かい蛇行して河道に流れ込む全長６ｍほどの溝である。幅は50cm程で、深さは南で10cm、河道付近で40cmを測る。溝内からは弥生前期の甕**131**，石鏃**S-36～40**、錐41などが出土している。自然河道の可能性もある。

溝８（第84図）

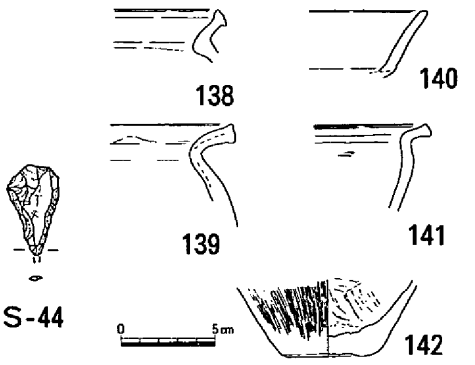
11区南側に位置し、弥生前期河道20（支流２）の南側肩部微高地上に東西に10ｍ程走る溝である。西側は南北に蛇行して走る溝９に切られている。東側は弥生前期河道を横切っていたようであるが、河道内での検出は不可能であった。溝の幅は、西側で170cm、東で120cmを測る。溝底部の標高は、西側で640cm、東で627cmを測り、西から東に向けて流路を取っていたものと考えられる。溝内からは弥生後期前半に属する壺**135・136**、椀形土器**137**、石鏃１点**S-43**が出土している。



第84図　溝８出土遺物

溝９（第85図）

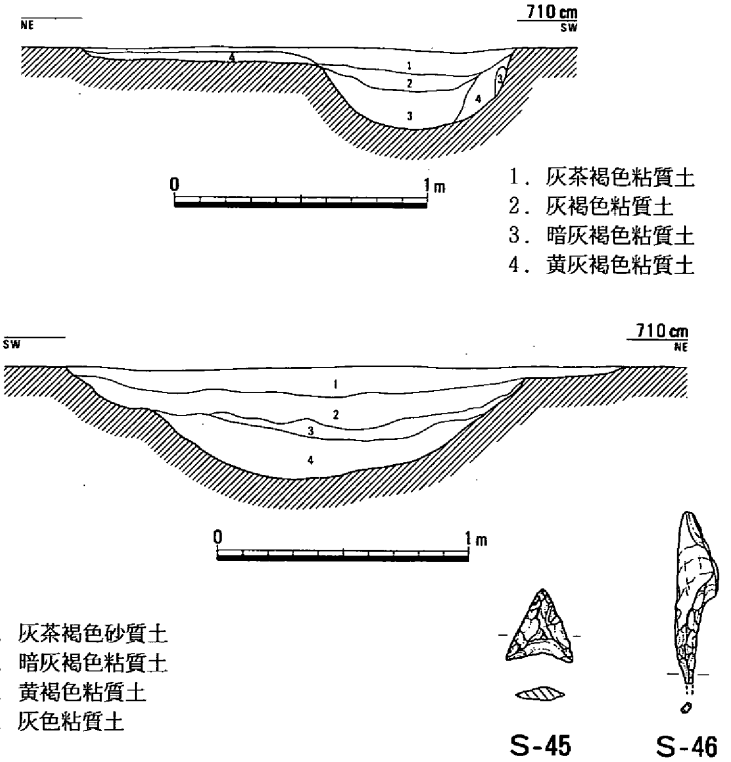
溝８と同じ11区南側に位置し、弥生前期河道20（支流２）から南に蛇行して南北に走る溝である。溝８を切っている。溝の幅は北側で100cm、南側で110cmを測る。溝底部の標高は北側で640cm、南で625cmで、北から南に向けて流路を取っていたものと思われる。溝内からは、弥生時代後期前半の壺**138**、甕**139**、鉢**140**、高坏の口縁部片**141**、甕底部**142**、石錐１点**S-44**が出土している。



第85図　溝９出土遺物

溝10（第86図）

12区中央部付近から始まり、11区に流れ一度たわみ状の遺構になり、たわみから南西に向け弥生前期河道19から20にむかう、溝９と同じ溝の可能性もある。たわみ部分まで全長24ｍ、たわみ部から河道まで６ｍを測る。12区では幅30cmほどであるが、たわみ直前では３ｍほどの広さになる。深さは上流部では10数cmで、たわみ付近では50cmを測る。溝内よりの出土遺物は、土器は見られないが石鏃１点**S-45**、石錐１点**S-46**が出土している。たわみ内は粗砂がほとんどで出土遺物は全く見られない。自然河道・たわみの可能性もある。



第86図　溝10断面図(1/30)及び出土遺物

溝11（第87図）

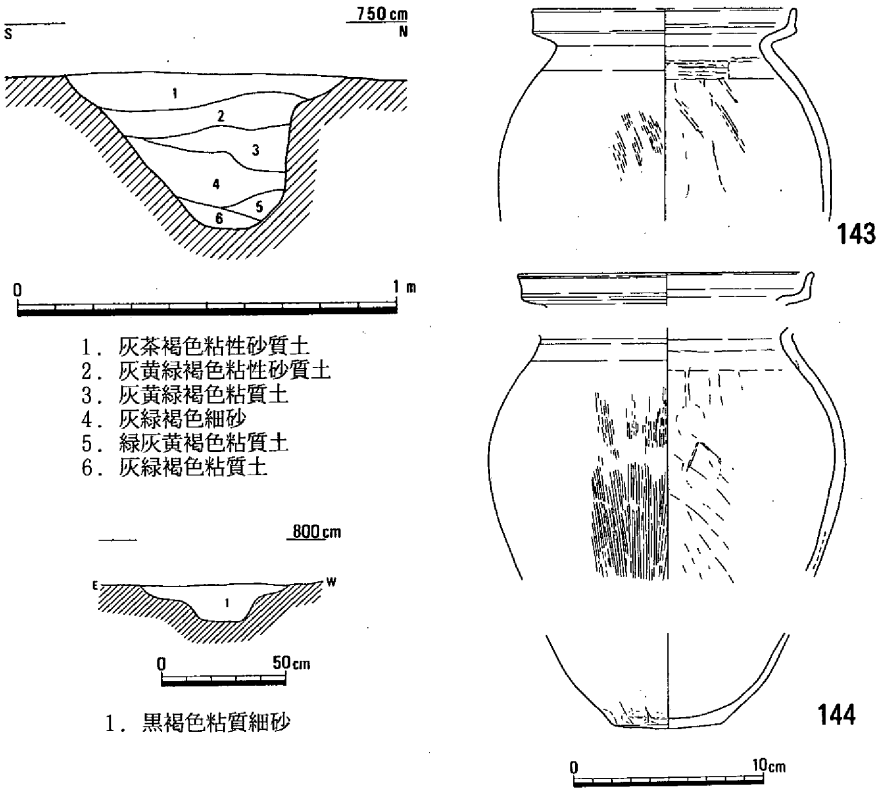
７区最北部に位置し、東側から西の河道に流れ込む全長６ｍほどの溝である。幅は東端部で40cm、河道近くで100cmを測る。深さは河道付近で60cmである。溝内からは弥生時代後期後半の甕２個体分**143・144**が出土している。自然流路の可能性もある。

（伊藤）

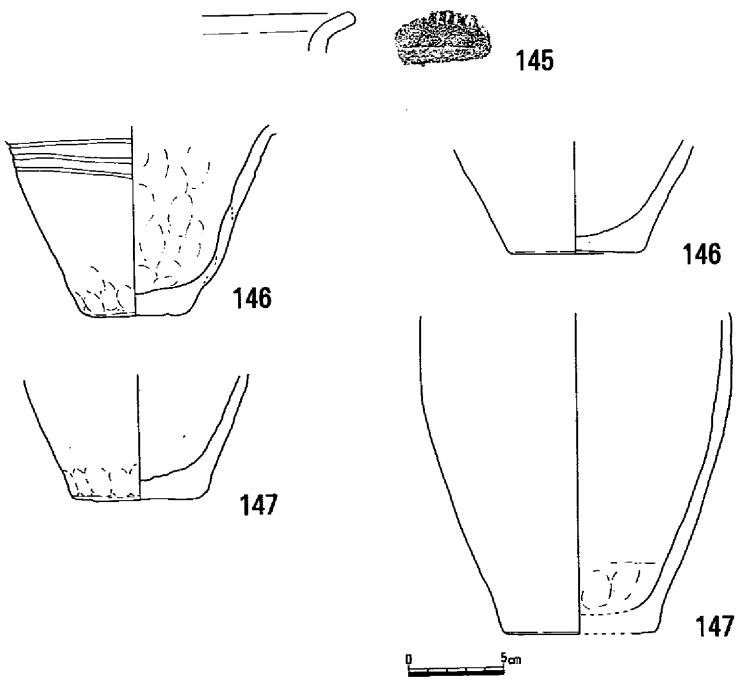
溝11′

１区中央の微高地上に溝８，９とほぼ平行し検出した。南西端は旧河道により削平されている。検出長14ｍ、幅60cm、深さ10cmほどである。断面は若干２段掘りの形状を呈し、黒褐色粘質細砂の埋土である。溝北東端の底面は海抜775cmで南西端で15cm低下している。

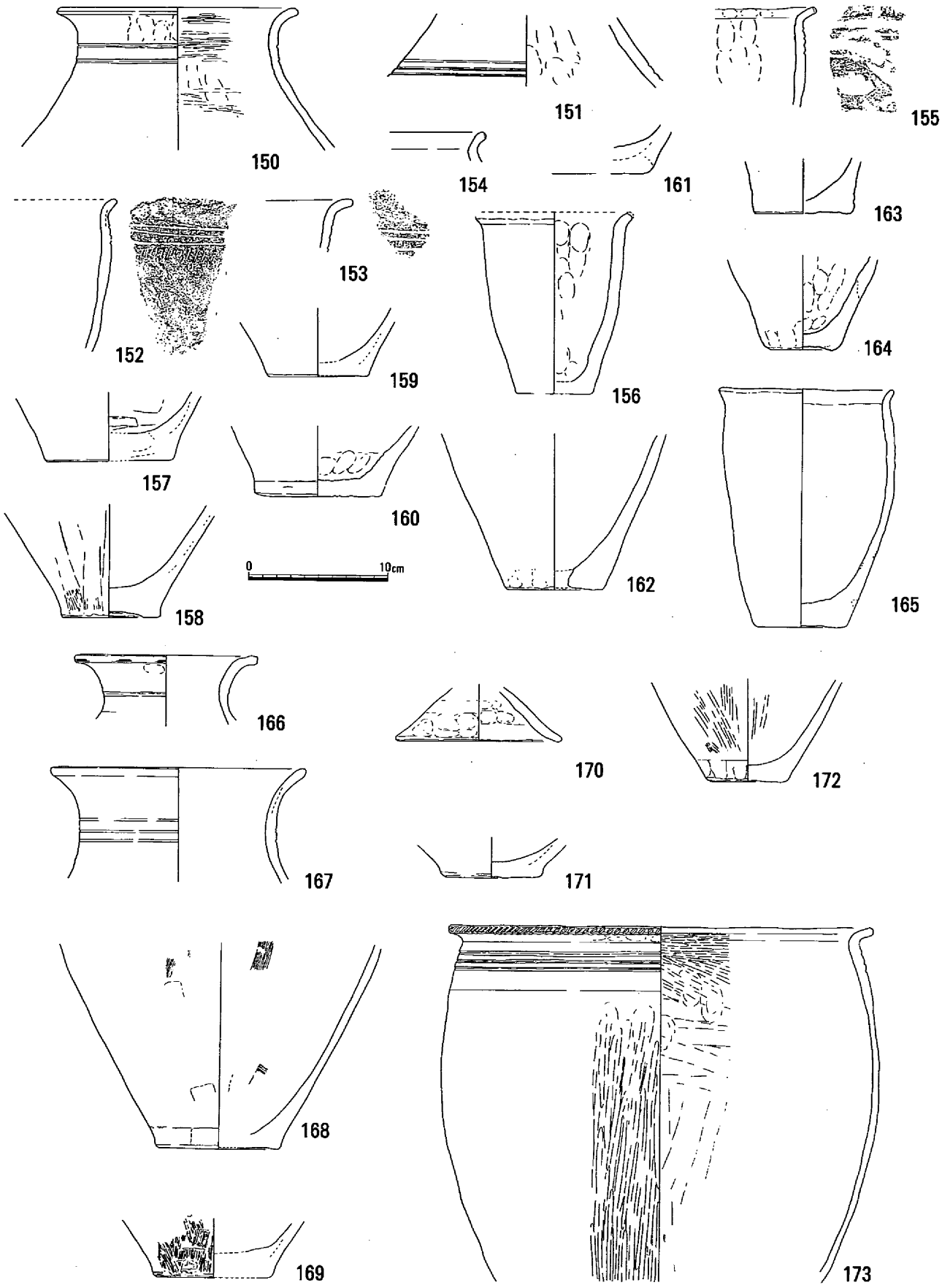
時期は出動遺物が細片のため確定しがたいが土壙１や竪穴住居１が上面に位置することや埋土等から弥生時代前期から後期と想定される。（山磨）



第87図　溝11・11′断面図(1/20)及び溝11出土遺物



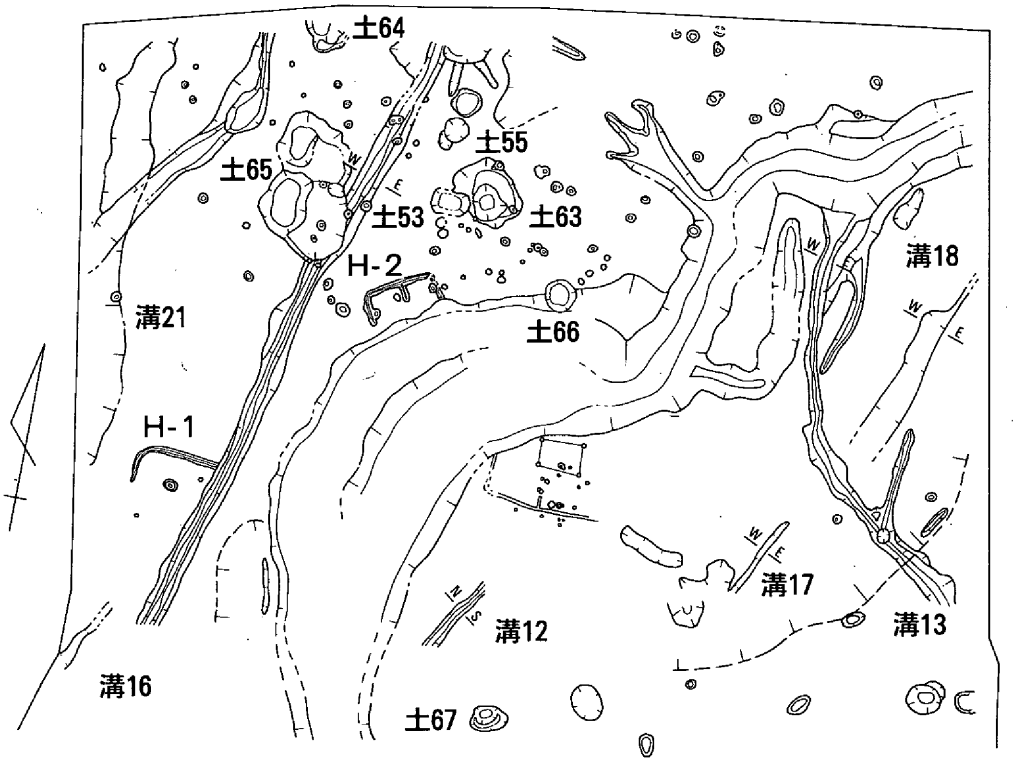
第88図　１・２区ピット内出土遺物



第89図　７・９区ピット内出土遺物

第４節　古墳時代以降の遺構・遺物

古墳時代の遺構は、余り多く見られないが、前半期には竪穴住居、土壙、溝などが主な遺構である。後半期については遺構の数はさらに少なく、溝が主なものである。

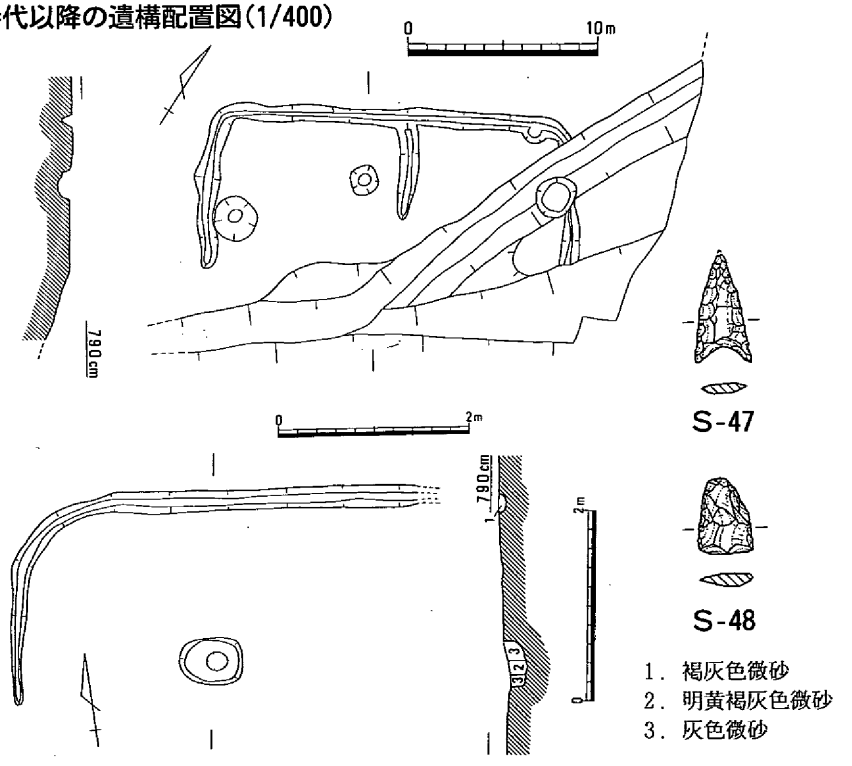


第90図　１・２・３地区古墳時代以降の遺構配置図(1/400)

（１）竪穴住居

竪穴住居１（第91図）

１区中央付近の微高地上に検出した竪穴住居で、南半は古墳時代後半の河道の一部により削平されている。下層には弥生時代前～後期の溝11'が横切る。残存規模は東西400cm、南北180cmである。掘り方周囲には、壁帯溝と中央に南北方向の溝を検出した。いずれも最大幅20cm、深さ10cmほどである。柱穴は床面に直径45cmものを２本と直径30cmのもの１本の計３本確認したが、住居に伴うものか不明で



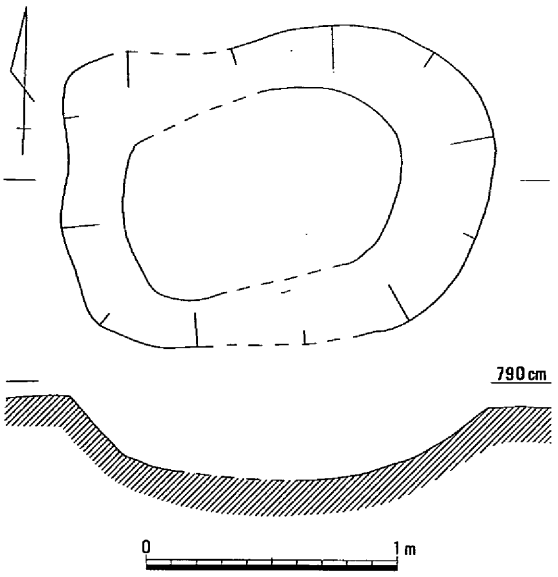
第91図　竪穴住居　１・２平・断面図(1/80)及び出土遺物

ある。出土遺物は埋土や柱穴から土器の細片とサヌカイトの石鏃１点**S-47**が出土している。時期は出土遺物が細片のため確定しがたいが、検出状況等から古墳時代初頭前後であろう。

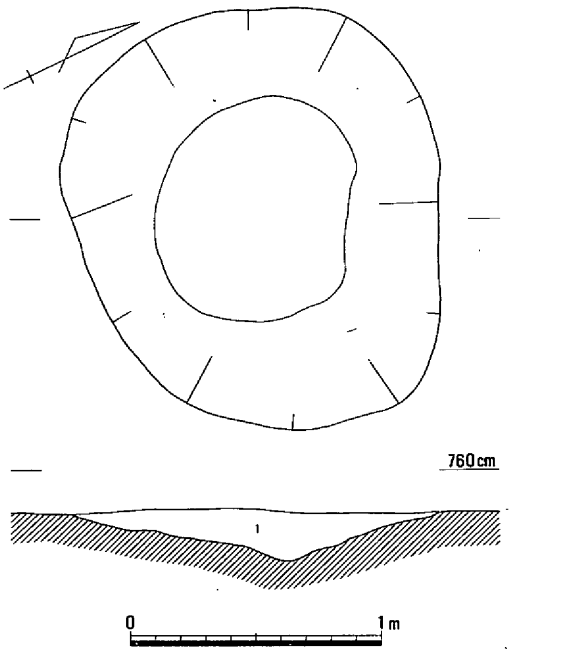
竪穴住居２（第91図）

１区西端の微高地上に検出した。残存状況が悪く北西部の壁帯溝の一部を検出したのみである。検出規模は東西長430㎝、南北長210㎝である。住居の掘り方内に長径65㎝、短径50㎝、深さ20㎝の柱穴を検出した。この住居に伴う主柱穴か断定しがたい。出土遺物は溝や柱穴から土器の細片とサヌカイトの石鏃１点**S-48**が出土している。

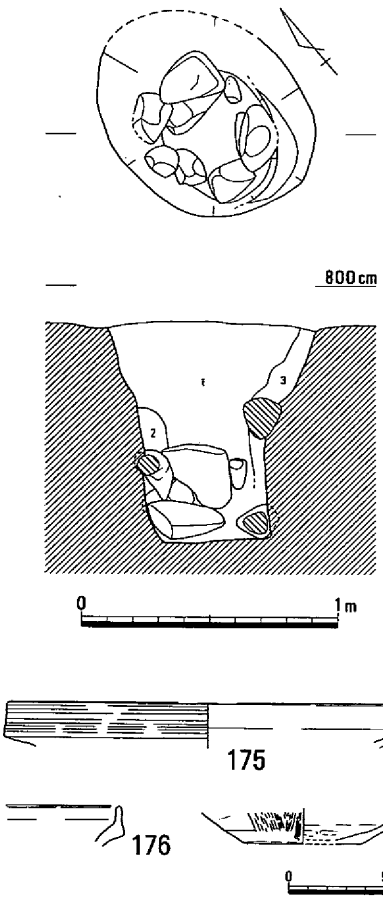
時期は出土遺物が細片のため確定しがたいが、検出状況等から古墳時代初頭前後であろう。



第92図　土壙53平・断面図(1/30)



第93図　土壙54平・断面図(1/30)及び出土遺物



1．オリーブ黒色粘質土
　（上部は明褐色混じりで１～２㎜の小礫混じり）
2．明緑灰色粘質土
3．淡黄色粘質土

第94図　土壙55(井戸)平・断面図(1/30)及び出土遺物

（２）土壙

土壙53（第92図）

１区中央の微高地上に土壙63を一部切り込んで検出した。規模は長径175㎝、短径120㎝、深さ30㎝の楕円形を呈す。

時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが埋土や遺構の切り合いから古墳時代以降であろう。

土壙54（第93図）

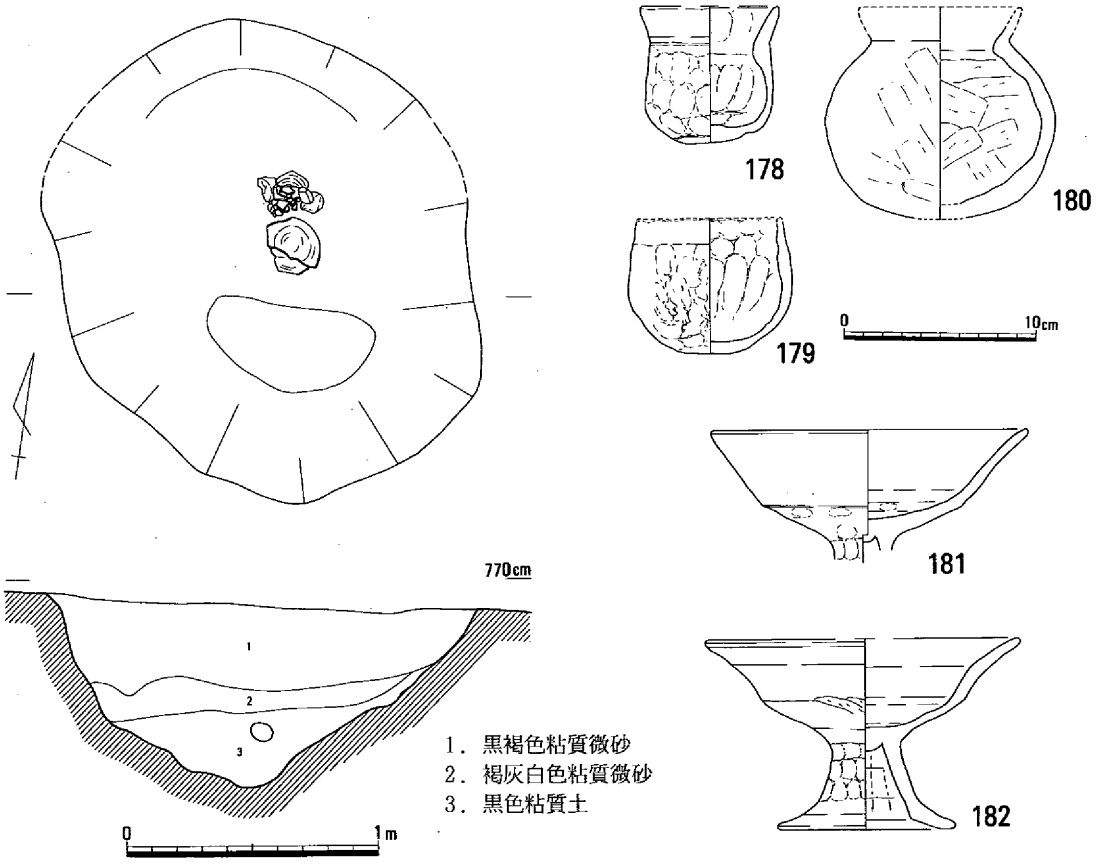
４区中央付近に検出した浅い窪み状の土壙である。規模は長径165㎝、短径150㎝、深さ15㎝の円形に近い形状である。断面は浅い皿状を呈し、褐色細砂の埋土である。

時期は検出面や埋土から古墳時代初頭前後であろう。

土壙55（第94図）

１区中央付近北側の微高地上に検出した井戸状の遺構で、土壙３と同様に下部に石組を施す。形状は上端で長径85㎝、短径73㎝の楕円形をなす。断面下半部は垂直な掘り方をなし深さ85㎝で平らな底面である。底面には径10～25㎝ほどの石材を内径30㎝、高さ40㎝程に積み上げている。

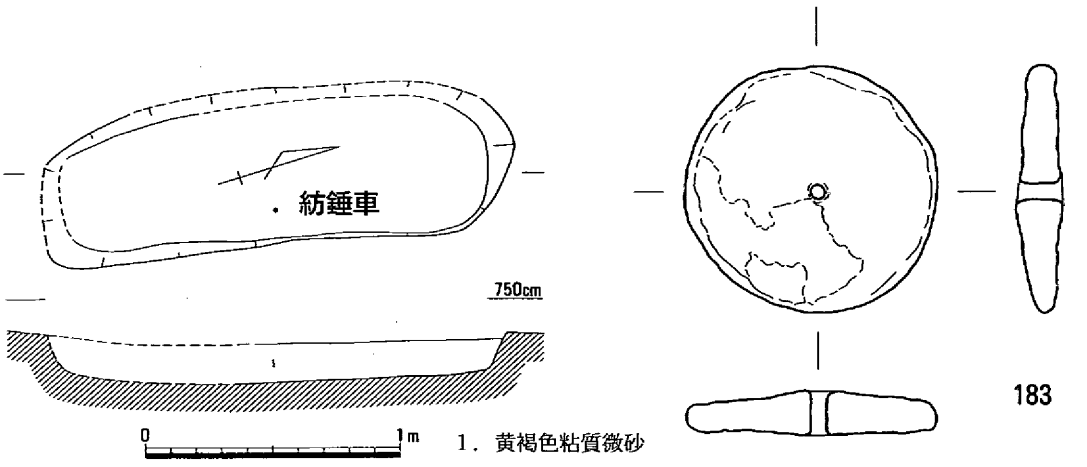
遺物は埋土中から二重口縁の甕片**175・176**と平底の底部片**177**が出土している。時期は埋土や出土遺物から古墳時代初頭前後であろう。



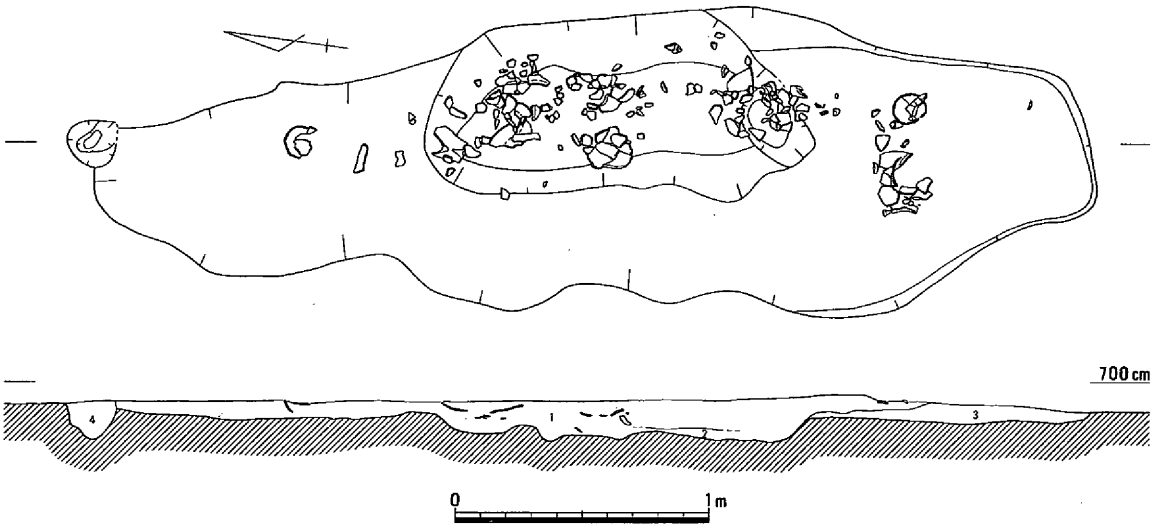
第95図　土壙56平・断面図(1/30)及び出土遺物

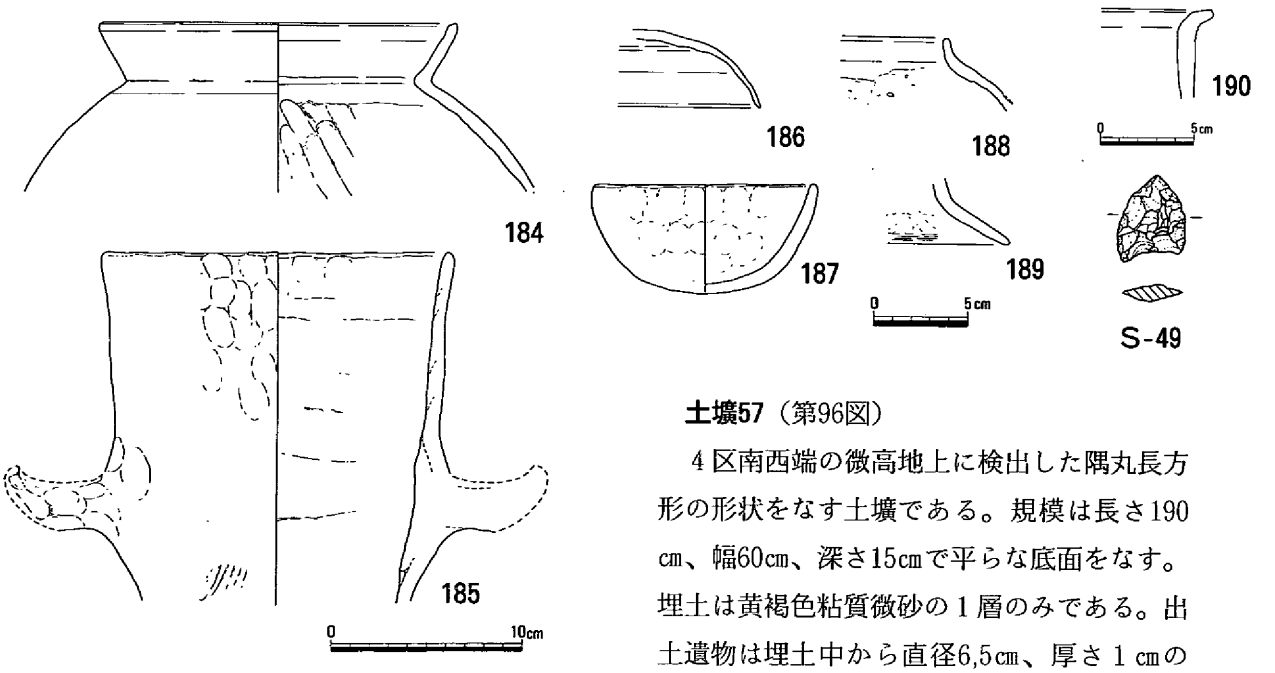
土壙56（第95図）

３区北東部の２区境で検出した土壙で東西160㎝、南北200㎝の楕円形を呈している。深さは70㎝を測る。古墳時代後半期（５世紀後半）のミニチュア小形丸底壺**178**・壺形土器**180**・鉢形土器**179**、土師器高杯２点**181・182**などが出土している。井戸の可能性が強い。



第96図　土壙57平・断面図(1/30)及び出土遺物

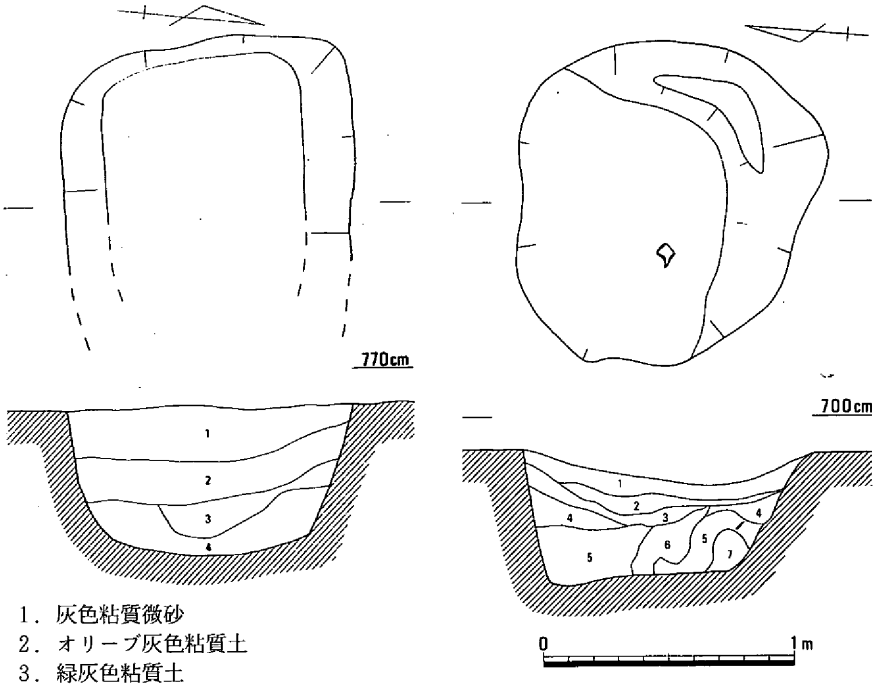




第97図　土壙58平・断面図(1/30)及び出土遺物

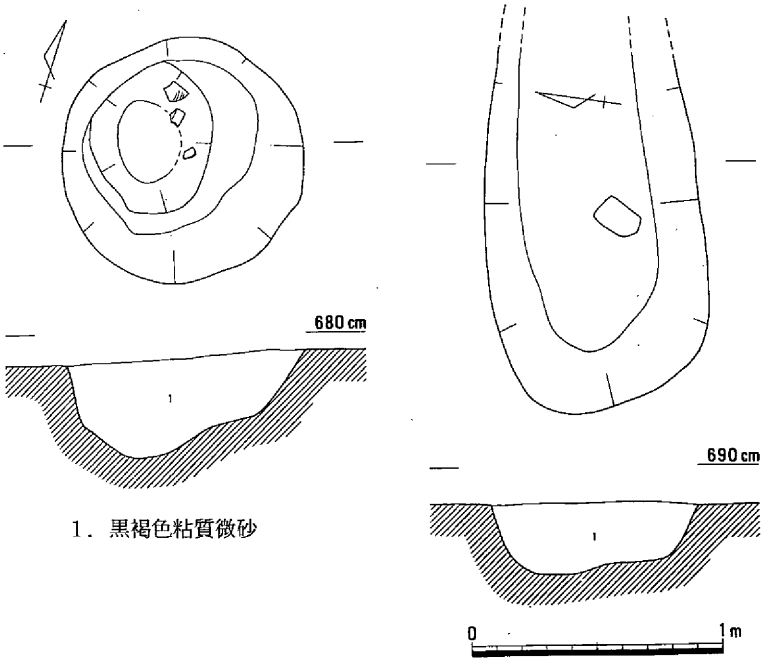
土壙57（第96図）

４区南西端の微高地上に検出した隅丸長方形の形状をなす土壙である。規模は長さ190㎝、幅60㎝、深さ15㎝で平らな底面をなす。埋土は黄褐色粘質微砂の１層のみである。出土遺物は埋土中から直径6,5㎝、厚さ１㎝の土製紡錘車**183**が出土している。



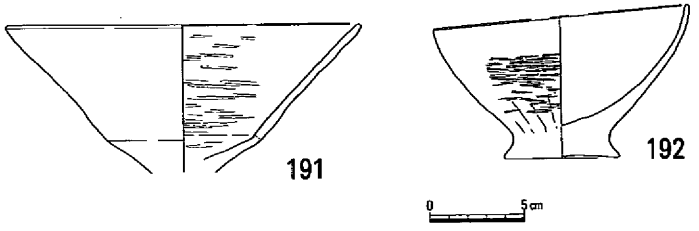
1．灰色粘質微砂
2．オリーブ灰色粘質土
3．緑灰色粘質土
4．緑灰色粘質土（砂，小礫混じり）

第98図　土壙59・60平・断面図(1/30)



1．黒褐色粘質微砂

1．黄灰色粘質微砂



第99図　土壙61・62平・断面図(1/30)及び出土遺物

埋土や形状等から古墳時代初頭前後の土壙墓の可能性がある。（山磨）

土壙58（第97図）

10区南部の弥生河道上で検出された土壙で、主軸を南北方向に向ける。全長４ｍで中央部東側が１段深くなる。幅は北側で60㎝、中央部で110㎝、南側で70㎝を測る。深さは南北が８㎝、中央部14～6㎝である。土壙内から６世紀代の須恵器杯蓋、土師器無頸壺・椀・高杯脚部片、甕、把手を持った甑が出土している。

1．灰茶褐色粘質砂質土
2．黄灰褐色粘質砂質土
3．黄灰褐色粘質土
4．灰黄褐色粘質土
5．灰色粘質土
6．灰白色粗砂
（小量の小石混じり）
7．灰青色細砂

土壙59（第98図）

３区東端に位置し、東側１/２は未掘である。南北110㎝で略方形になるものと思われる。深さは60㎝を測る。土壙内より土師器の小片が出土している。

土壙60（第98図）

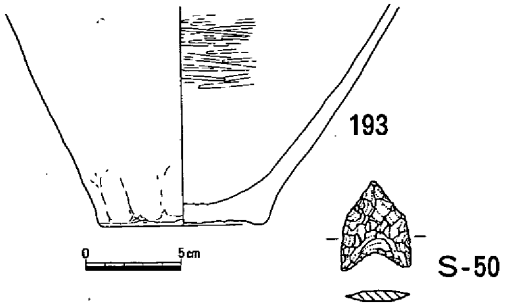
11区中央東より弥生前期河道19（支流１）の北側に位置している。径110～130㎝の不整円形を呈し、深さ50㎝を測る。土壙内からは小片で図示できなっかったが、口縁部に櫛描き沈線を持つ甕などが出土しており古墳時代前半に属する土壙であろう。

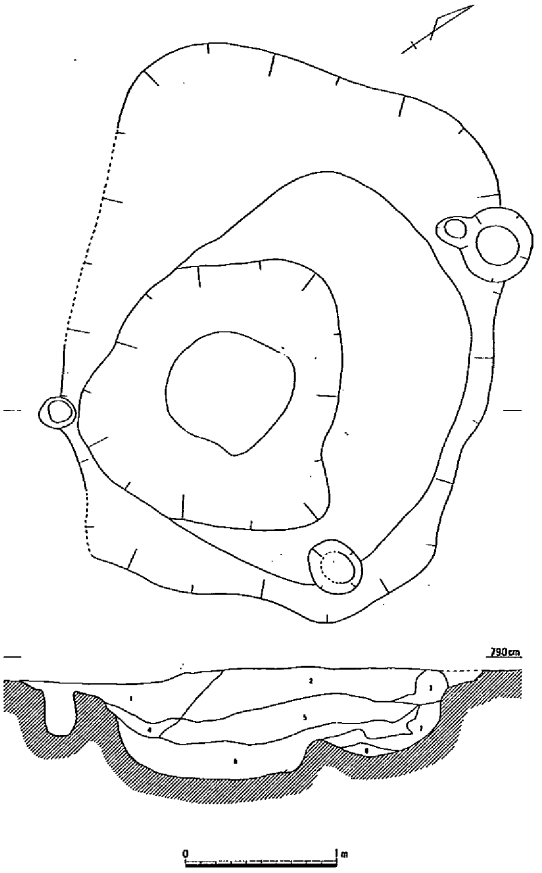
土壙61（第99図）

山陽自動車道直下の橋脚間で、上池と下池を繋ぐ連結管部の東側調査区南西部で検出された土壙である。直径38cm深さ38cmをを測る。土壙内から杯部の長い高杯１点**191**が出土している。

土壙62（第99図）

連結管部西側調査区東南で検出された土壙で約２/３を調査した。残存長130cm、幅は東側で70cm、西側で140cm、深さ26cmを測る。土壙内から底部の水平な土師器の椀形土器１点**192**が出土している。





1．黒褐色細砂（粗砂、小礫混じり）
2．灰白色粘質微砂（黄橙混じり）
3．黒褐色細砂
4．灰色粘質土
5．灰白色粘質微砂（濃い黄橙混じり）
6．オリーブ黒色粘質粗砂（粗砂、小礫混じり）
7．灰白色粘質微砂
8．灰色粘質微砂（黒色混じり）

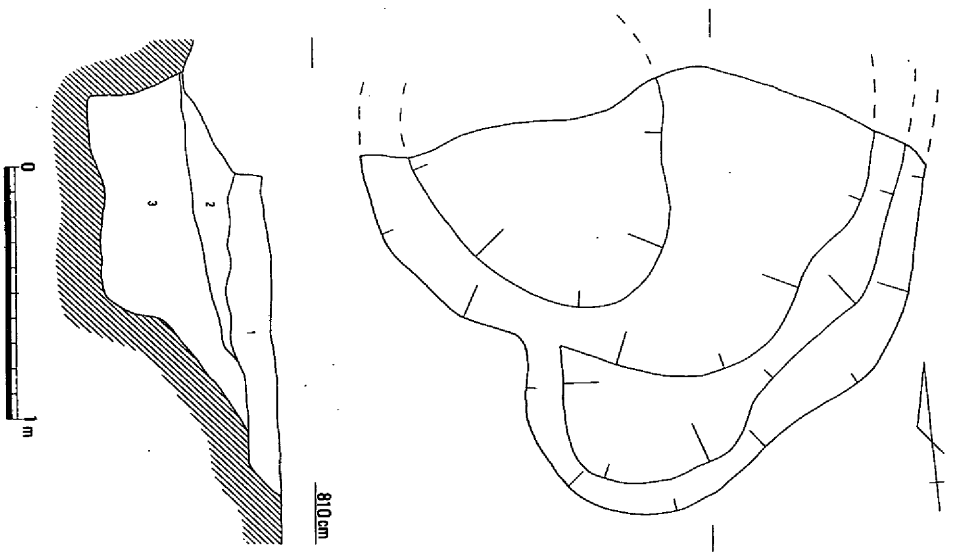
第100図　土壙63平・断面図(1/50)及び出土遺物

時期は古墳時代後半に属するものであろう。

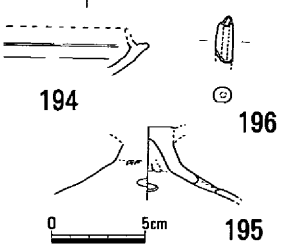
土壙63（第100図）

１区中央の微高地上に検出したやや大形の土壙で南東部で弥生時代の溝11'を切っている。土壙掘り方北東側が深さ20cmほどで一段テラス状をなし南東部が一段深く掘り込まれている。規模は長径380cm、短径280cm、最大深さ80cmである。

出土遺物は埋土中から内面ヘラ磨き調整の弥生時代前期の壺（甕）の底部片



1．褐灰色粘質微砂
2．灰色砂
3．灰色粘質微砂
（黒褐色粘質微砂63礫，灰色粘質土，灰色砂混じり）



第101図　土壙64平・断面図(1/40)及び出土遺物

193、石鏃１点**S-50**が出土しているが、遺構の切り合い等から弥生時代前期以降であろう。

土壙64（第101図）

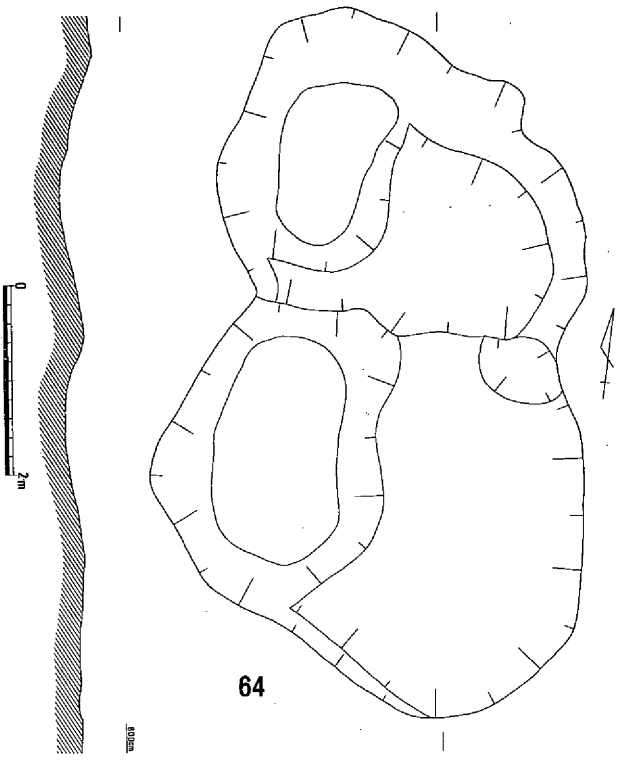
１区の北端に検出した不正形な土壙で、北半は調査区外である。掘り方は南側が20cmほど一段テラス状をなし、北で深くなる。検出規模は東西220cm南北170cm、深さ130cmである。検出面は海抜790cmで、底面は平らである。埋土は３層確認でき最下層は礫混り土層である。

出土遺物は須恵器の杯身、土師器高杯、土錘が出土している。時期は埋土や出土遺物等から古墳時代後期以降であろう。

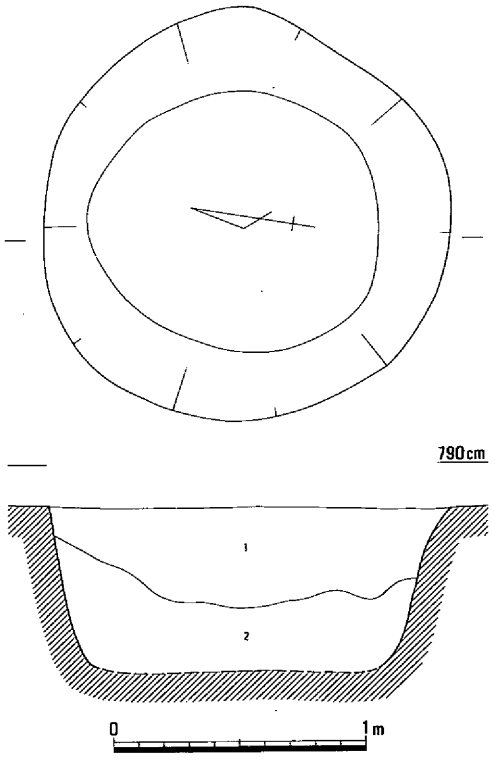
土壙65（第102図）

１区中央の微高地上に検出した不正形な土壙で、南東端で古代の溝２を切っている。規模は南北長380cm、東西最大長230cmである。２基の土壙が重複した形状をなし西側の底面が東側よりいずれも若干深く、北西側で深さ40cm、南西側で深さ20cmである。

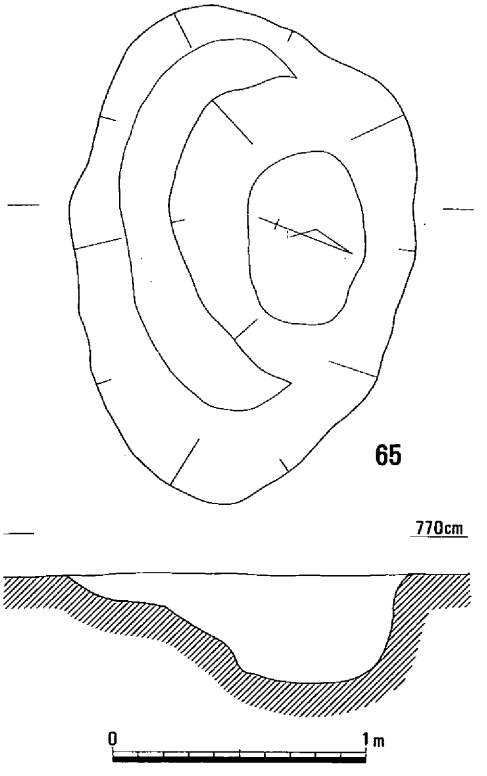
時期は出土遺物が細片で確定しがたいが、検



第102図　土壙65平・断面図(1/80)



１．灰色細砂（粗砂，小礫混じり）
２．オリーブ黄色粘質土



１．オリーブ灰色粘質土

第103図　土壙66・67平・断面図(1/30)

出状況等から中世以降であろう。

土壙66（第103図）

３区の北端の古墳時代後期の河道と微高地境に検出したほぼ円形の土壙である。規模は直径160cm、深さ65cmである。検出面は海抜770cmで、平らな底面である。埋土は２層確認でき、下層に粘質土が堆積している。　時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが、埋土等から中世以降であろう。

土壙67（第103図）

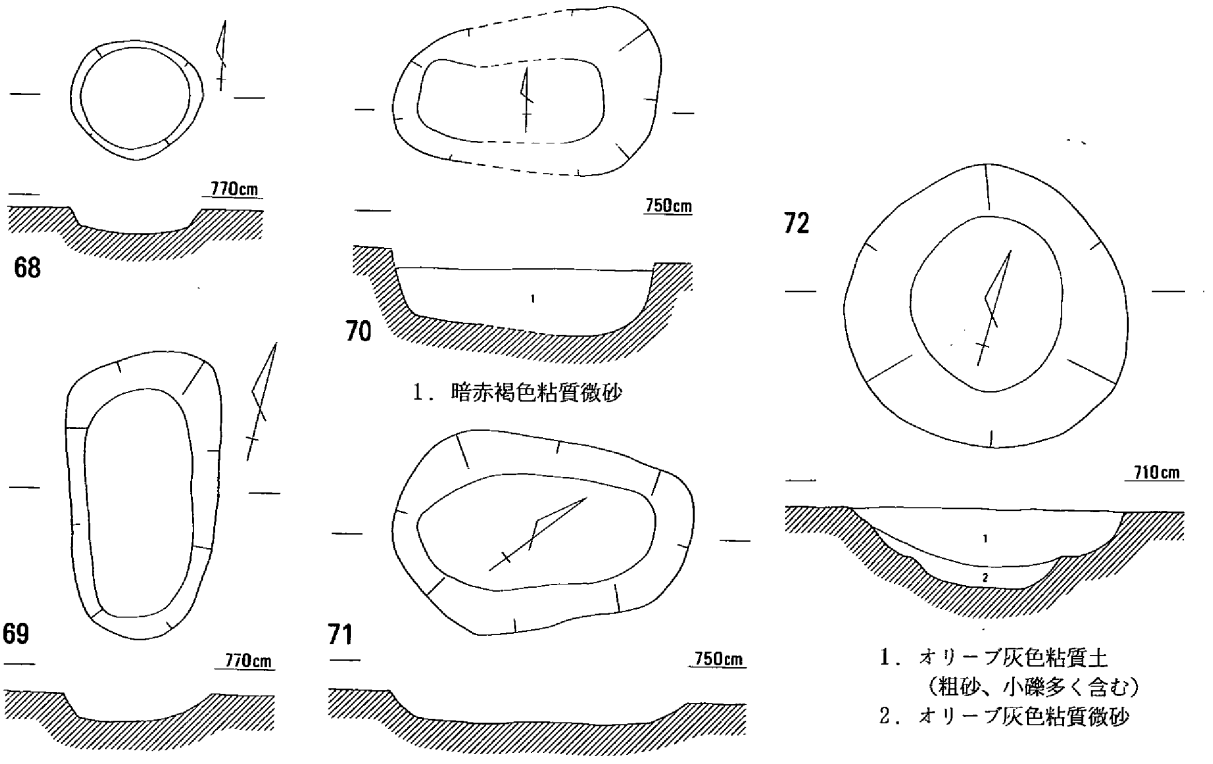
３区中央部の旧河道上に検出した土壙である。平面形は楕円形をなし長径195cm、短径135cm、深さ43cmである。断面は南側が一段テラス状をなし緩い傾斜である。検出面は海抜755cmである。埋土はオリーブ灰色粘質土の１層である。時期は出土遺物が皆無で確定がたいが埋土や検出状況から中世以降であろう。

土壙68・69（第104図）

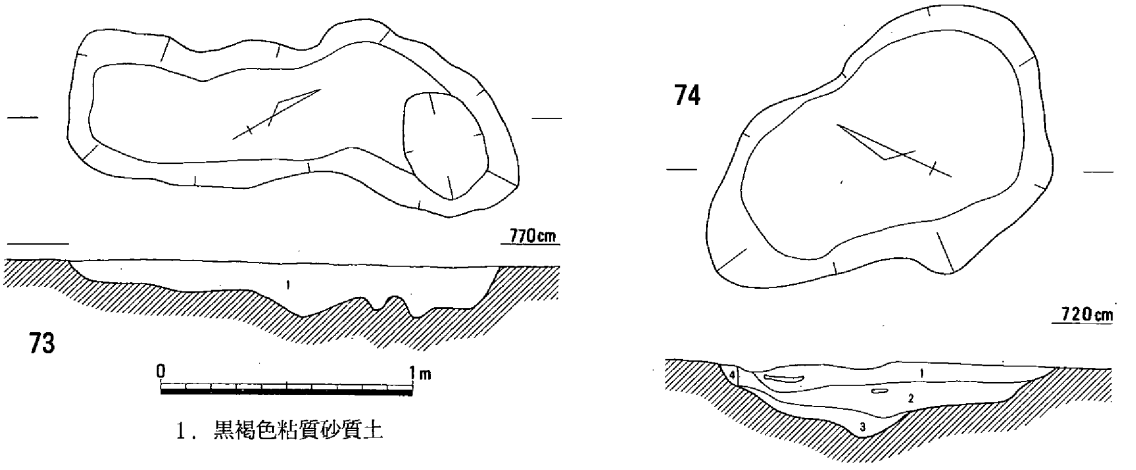
３区において検出した土壙で、68はほぼ円形をなし径52cm、深さ12cmで、69は小判形を呈し長径116cm、短径60cm、深さ10cmを測る。70も小判形を呈し、長径120cm、短径62cm、深さ25cmを測る。いずれも時期は不詳である。

土壙70（第104図）

4区南西端の微高地上に検出した。規模は長さ105cm、幅65cm、深さ25cmの隅丸長方形近い形状をなす。埋土は暗赤褐色の粘質微砂の１層である。埋土や形状等から古墳時代初頭前後の土壙墓の可能性がある。



第104図　土壙62～72平・断面図(1/30)



第105図　土壙73・74平・断面図(1/30)

土壙71（第104図）

４区で検出された土壙で、長径120cm，短径60cm～80cm，深さ８cmを測る。出土遺物が無く時期は不明である。

土壙72（第104図）

４区西側で検出された土壙で、径112cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。出土遺物はないが中世以降の土壙と考えられる

土壙73（第105図）

５区で検出した土壙で２基が切り合っている。南側のは長軸130cm前後、幅60cm、深さ10cm、北側は長軸100cm、短軸50cm前後、深さ16cmを測る。

時期は弥生時代には収まると思われるが、出土遺物はなく不明である。

土壙74（第105図）

６区で検出された土壙である。不定型な形を呈し、長軸150cm、短軸70～90cmである。最も深い所で30cmをはかる。出土遺物が無く時期は不明である。

（３）溝

溝12（第106図）

１区南東端の旧河道上に検出した浅い溝状の遺構である。３区及び４区では未確認である。検出長450cm、幅60cm、深さ10cmほどである。断面は浅い皿状をなし、上下２層の埋土である。溝北東の底面は海抜770cmで南西に向かって若干低下している。

時期は埋土中から出土の須恵器の小破片や検出面等から古墳時代後半であろう。

溝13（第107図）

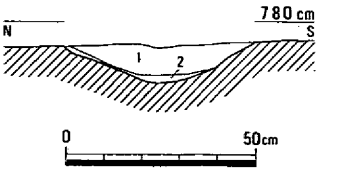
２区東半の旧河道上に検出した溝で、南北方向に緩くＳ字状に蛇行し、途中で北に枝分かれしている。北端は古墳時代後期から前半期の旧河道と接続する。検出長23m、平均幅100cm、深さ10cmほどである。断面は皿状を呈し、灰黄褐色粘質微砂の埋土である。溝南端の底面海抜高は760cmで北端に向かって20cm低下している。

時期は出土遺物が細片のため確定しがたいが、検出状況や出土遺物等から古墳時代前半期であろう。

溝14・15（第108図）

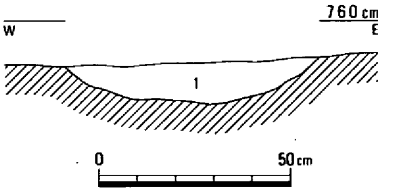
溝14は11区南端に位置し、弥生時代前期河道20（支流２）に沿って微高地上を弧状に西から東に流路取る。幅は80cm前後で、深さは５～10cmを測る。

溝15は14の北側に沿って存在し、東側は河道内に延びているが、確認できていない。西側は南に曲がり溝14と合流する。幅は50～70cm、深さは７～15cmを測る。溝内から古墳時代初頭に属する、二重口縁になると思われる壺口縁部片**200・201**垂直に立ち上がる口縁部に櫛描き沈線を持つ甕**203**、鉢**210**、高杯**209**、製塩土器の脚台部**208**、混入の弥生時代の石鏃５点**S-51**～**S-54・56**、石錐１点**S-55**などが出土している。（伊藤）

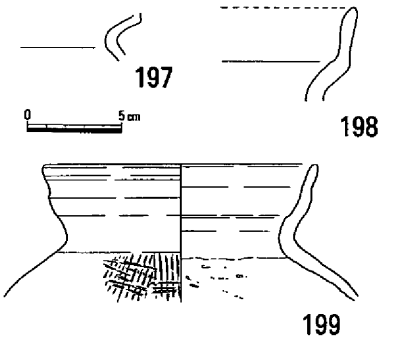


1．明褐灰色粘質微砂
2．明褐色粘質微砂

第106図　溝12断面図(1/30)



1．灰黄褐色粘質微砂

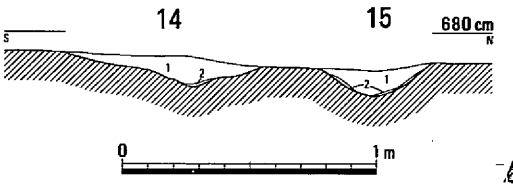


第107図　溝13断面図(1/30)及び出土遺物

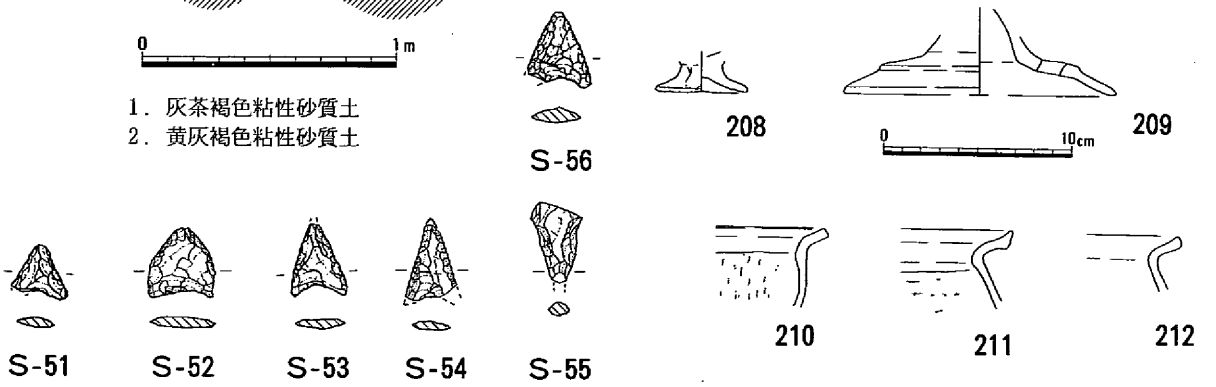
溝16（第109図）

１区中央部の微高地上にほぼ南北に一直線に検出した。北端は調査区外に、南側の４区では未検出である。規模は検出長34m、幅100～150cm、最大深さ15cmである。断面は若干２段掘りの形状を呈す。埋土は基本的には２層に分かれ、下層に砂質土が堆積している。溝北端の底面は海抜780cmで南端で10cm程低下している。

時期は埋土中から出土の須恵器、土師器等から奈良時代後半から平安時代前半であろう。掘削時期や溝の方向から条理制地割りの可能性が考えられる。



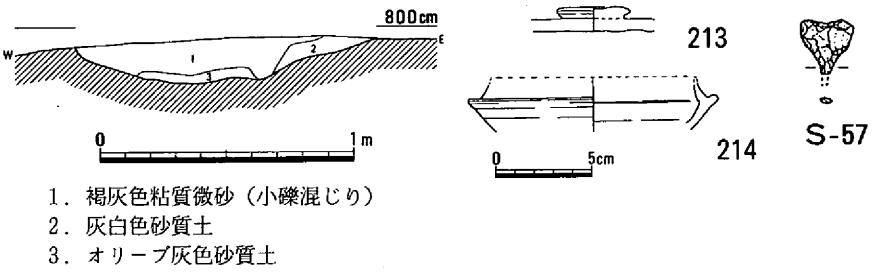
1．灰茶褐色粘性砂質土
2．黄灰褐色粘性砂質土



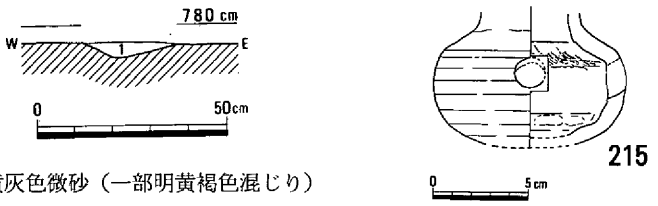
第108図　溝14・15断面図(1/30)及び出土遺物

溝17（第110図）

２区南半の旧河道上に検出した浅い溝状の遺構である。規模は検出長500㎝、幅30㎝、最大深さ５㎝ほどである。断面は浅い皿状を呈し、黄灰色微砂の埋土である。検出底面は海抜770㎝で高低差は認められない。北端に検出の溝18に続く可能性がある。時期は出土遺物の碌215や検出面等から古墳時代後半である。



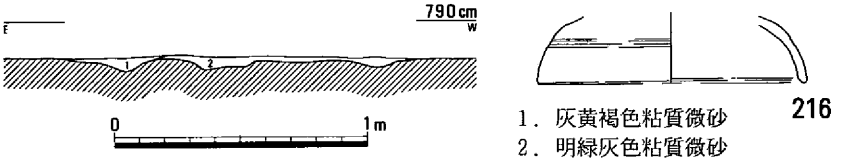
第109図　溝16断面図(1/30)及び出土遺物



第110図　溝17断面図(1/30)及び出土遺物

溝18（第108図）

２区中央の旧河道上に検出した南北方向の浅い溝状遺構で、南半は溝が広がる。規模は検出長11ｍ、北端幅15㎝、最大幅120㎝、最大深さ10㎝で、浅いたわみ状の断面を呈す。埋土は北側から続く細い溝状のところで灰黄褐色粘質微砂が、幅の広いたわみ状部分で明緑灰色微砂が堆積している。溝底面の海抜高は770㎝で高低差は不明瞭である。南端に検出の溝17に続く可能性がある。



第111図　溝18断面図(1/30)及び出土遺物

時期は埋土中から須恵器の蓋杯の破片が出土していることから古墳時代後半であろう。（山磨）

溝19（第112図）

４区南半から６区の東側を通り９区、さらに10区まで110ｍ程続く南北溝である。４区では幅80㎝から200㎝、10区の弥生河道上では４ｍ程になるところもある。深さは30～40㎝を測る。溝内からは８世紀末から９世紀代の須恵器杯身**220～222**、蓋**217～219**、皿**223・226**、壺**224**、高杯**229**などが多く出土している。混入の弥生時代の石鏃７点**S-58～64**、石錐１点**S-65**、古墳時代後半の須恵器杯身**230～232**なども出土している。

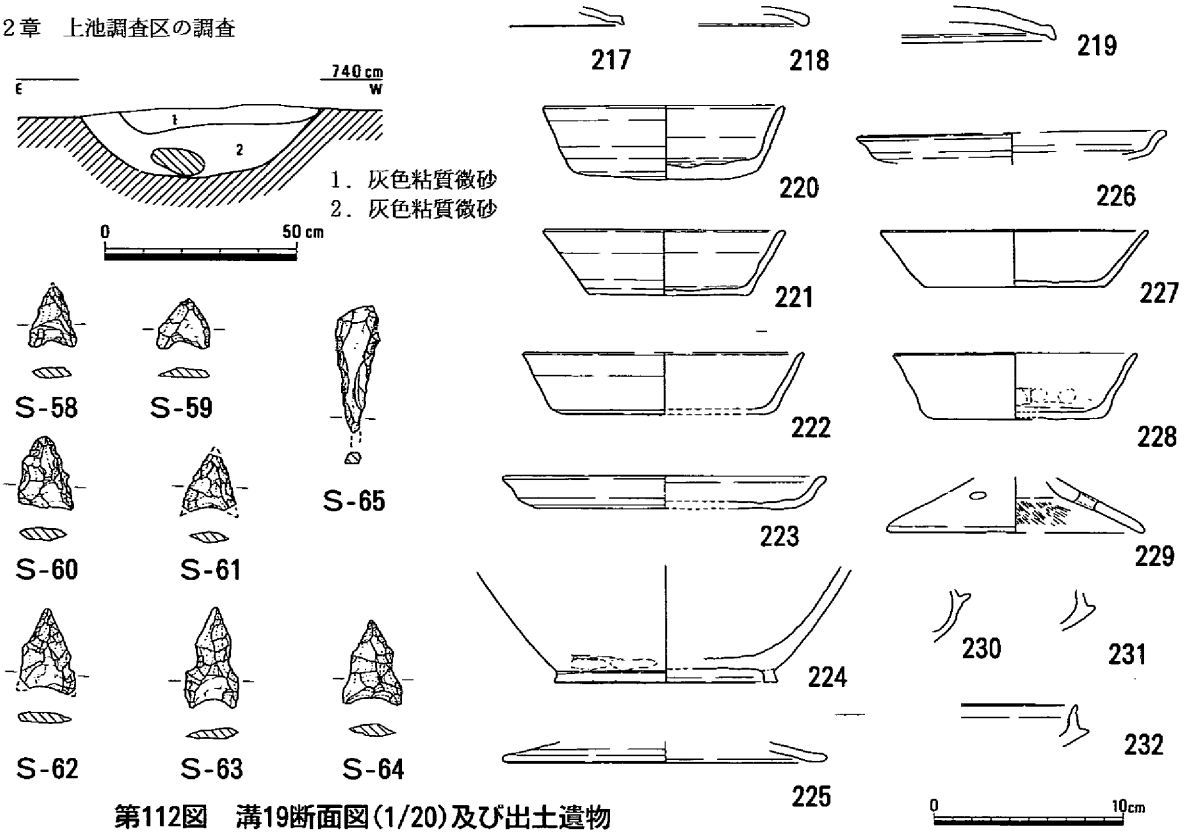
溝20（第113図）

８区南端で検出された溝状の遺構である。北東部は、幅60㎝で５ｍ程続き、南西部で径３ｍの溜まり状になる。遺構内からは近世初頭の備前焼灯明皿**234・235**、水屋甕**237**、大皿**238**、角徳利**242**、鉢**239**、摺り鉢**243～245**、陶器皿**236**、ウサギを型取りしたもの**240**などが出土している。（伊藤）

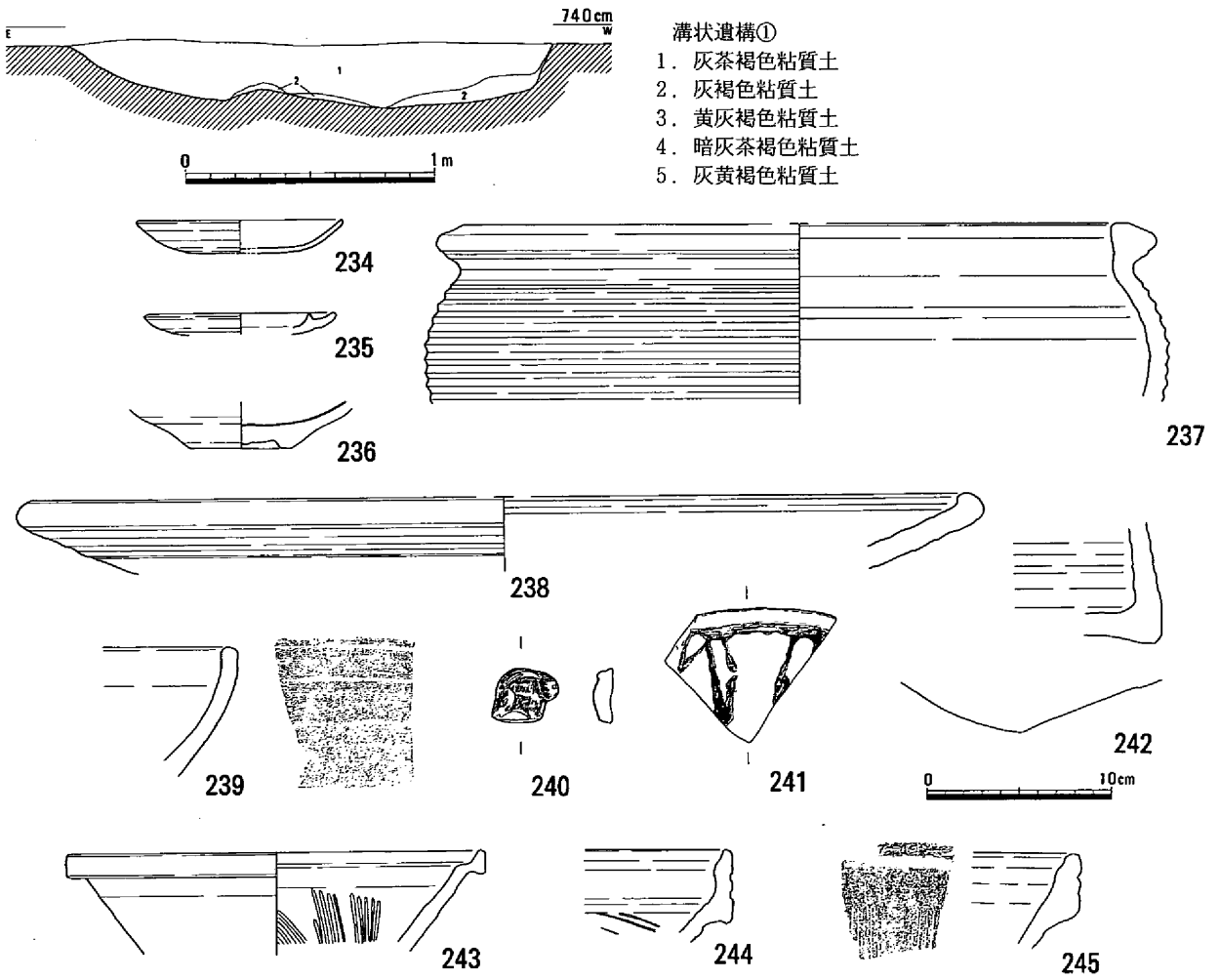
溝21

１区西端の調査区境に接するように検出した南北方向の浅い溝状の遺構である。規模は検出長22ｍ、幅160～230㎝、深さ10～20㎝である。断面は浅い皿状を呈す。溝の底面は海抜780㎝ほどである。

時期は出土遺物が細片で確定しがたいが、検出状況等から古墳時代初頭前後であろう。



第112図　溝19断面図(1/20)及び出土遺物



第113図　溝20断面図(1/30)及び出土遺物

第５節　弥生時代以降の河道とその遺物

（１）弥生時代前期の河道

１・２・３区の前期河道

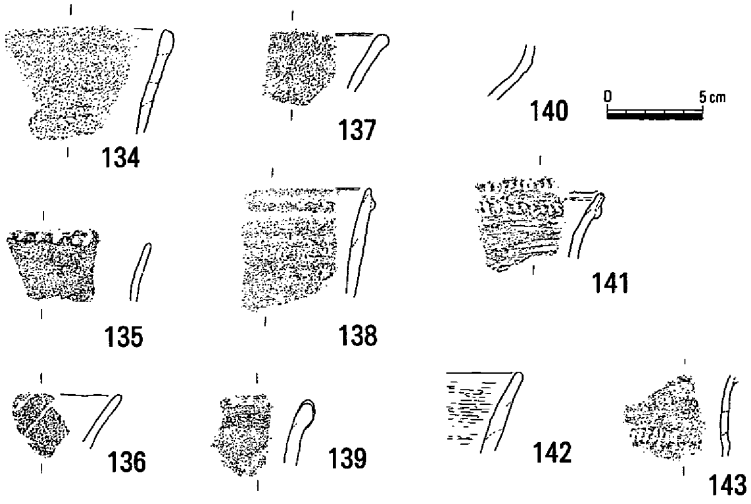
１・２・３区付近は、農道や水路が交叉していたために調査区を細分して実施したことや幅20ｍほどの間に縄文時代後、晩期から古墳時代後期の旧河道が重複していたために弥生時代前期の旧河道は明瞭に検出できていない。ただ、１区では河道の最下層に弥生時代前期の土器を包む層を検出しており、前期の河道の一部が残存していたものと見られる。

弥生時代前期の土器は、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、蓋形土器等の各器種が出土している。壺形土器は口縁部が大きく外反し、頸部や肩部に複数の沈線を施すものが多い。甕形土器は口縁部がク字に外反し、端部にキザミメを施すものと無文のもので、頸部に３条ほどの沈線を施している。蓋形土器は天井部が平らでやや大形のものと頂部や端部に穿孔のあるものが出土している。時期は弥生時代前期の中頃であろう。

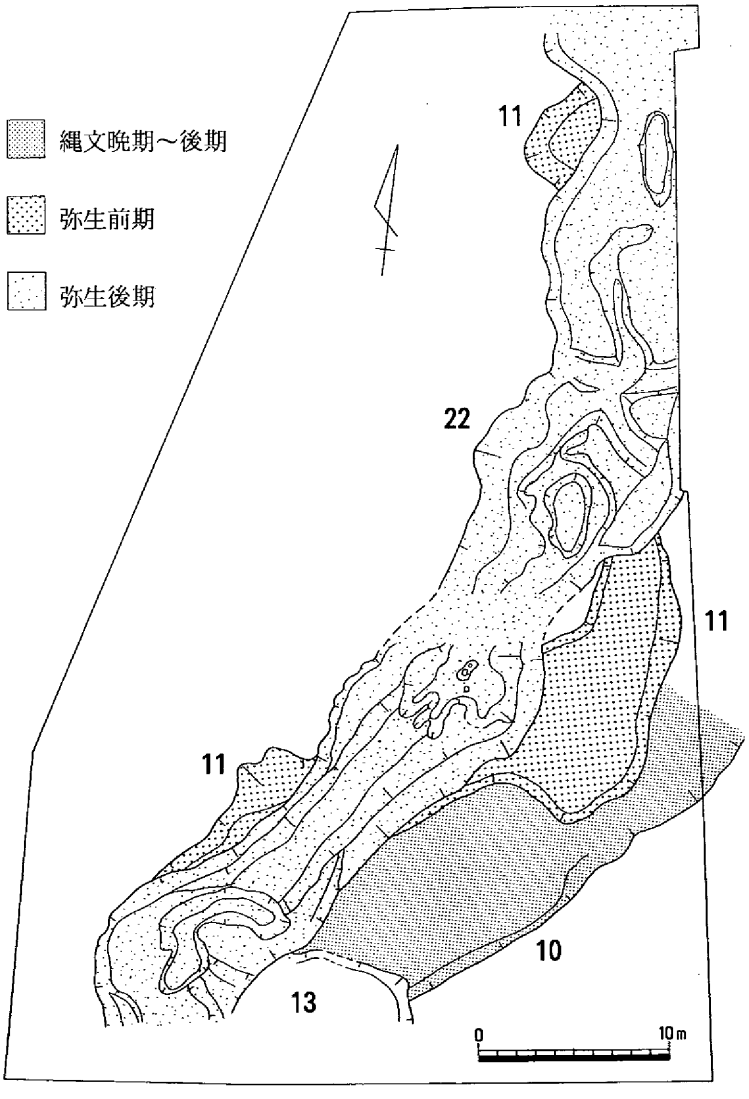
この区域では単独で前期の河道は見られず、河道の最下層に前期の遺物が見られる（第121図）。また最下層からは縄文時代後期の土器片もわずかに見られる（第114図）。

４区の前期河道

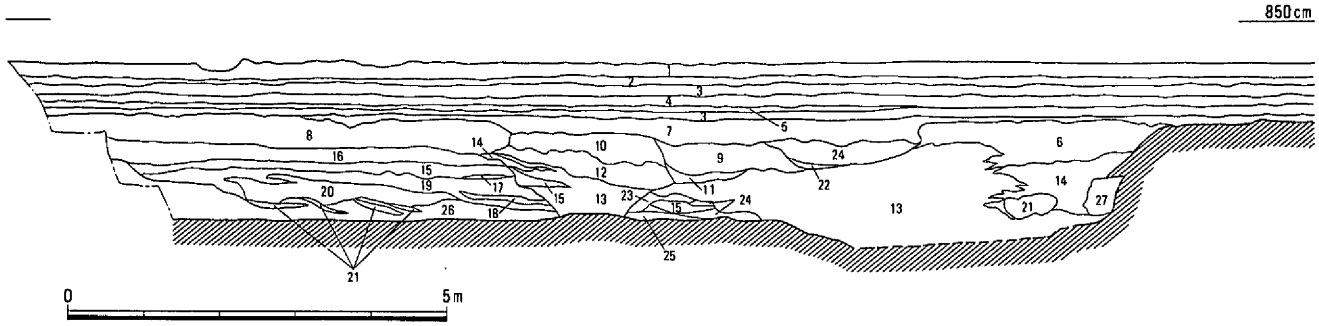
４区付近の弥生時代前期の旧河道は、大半を弥生時代後期の河道に大きく削平されており、点々と部分的に残存している状況であった。



第114図　１区河道最下層出土縄文土器

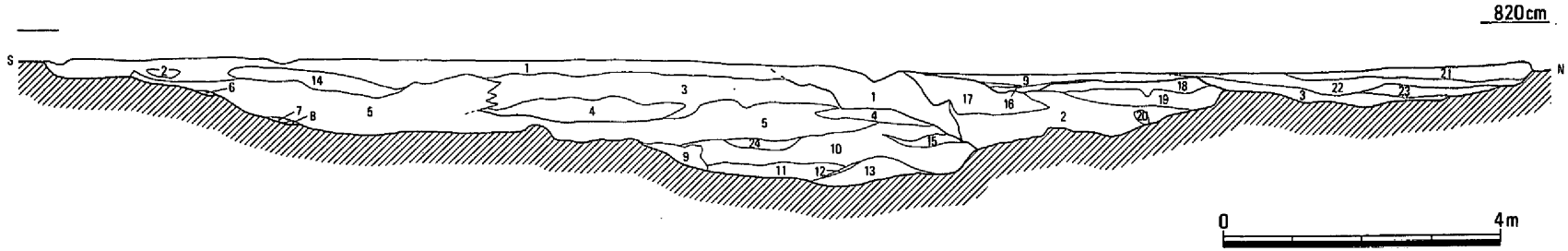


第115図　４区河道平面図(1/400)



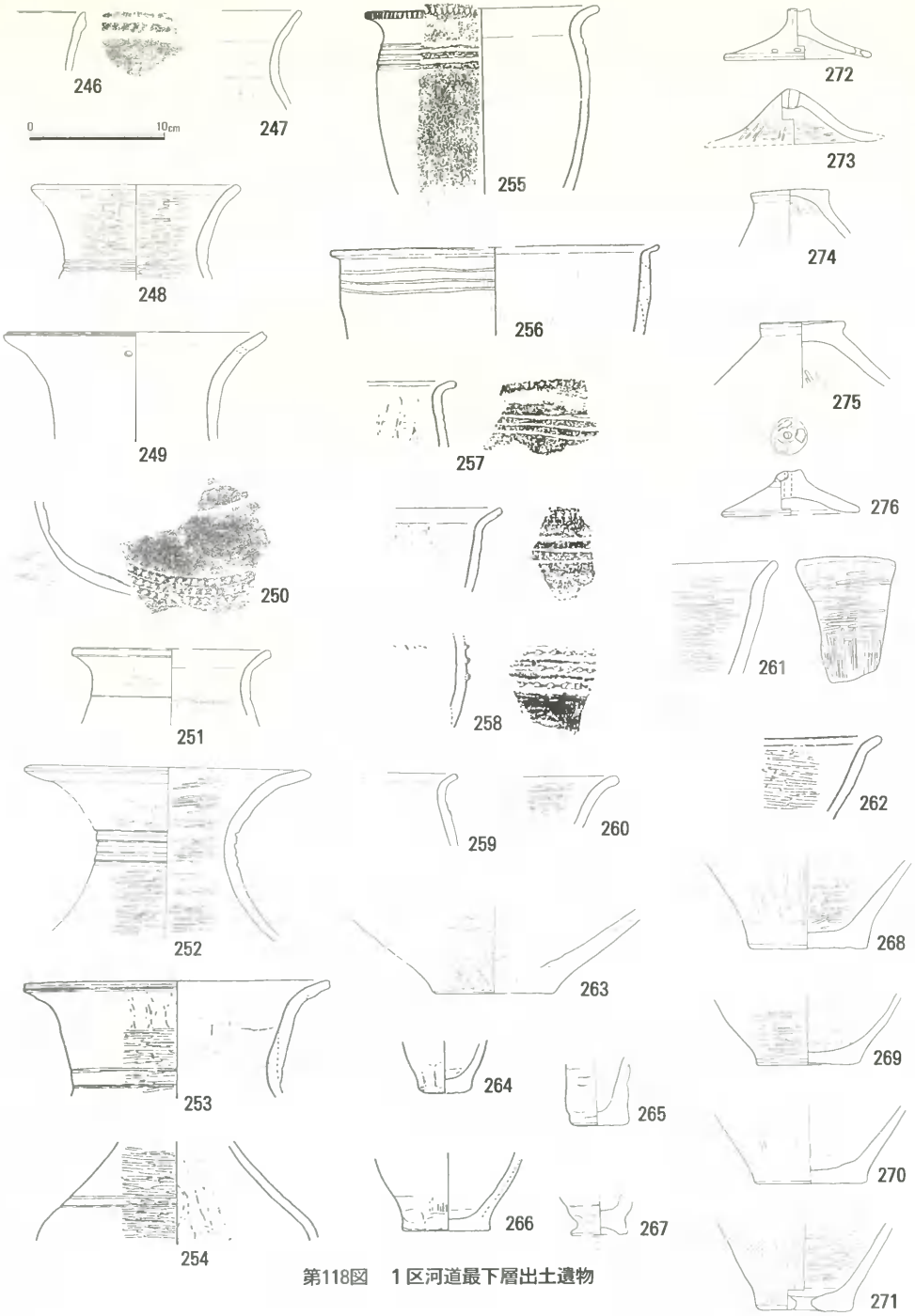
1．表土
2．褐色粗砂（小礫含む）
3．にぶい黄褐色粘質微砂
4．にぶい黄褐色粘質微砂（グライ化）
5．褐色粘質微砂
6．灰白色細砂
7．暗褐色粘質微砂
8．褐色粘質微砂
9．オリーブ灰色粘質微砂
10．黄褐色粘質微砂
11．オリーブ黒色粘質微砂
12．明オリーブ灰色細砂
13．灰白色粗砂（礫混じり）
14．灰色粘質微砂
15．灰白色粗砂
16．にぶい黄橙色粘質微砂
17．灰黄色細砂
18．浅黄色粗砂（小礫含む）
19．緑灰色粘質微砂
20．緑灰色粗砂（一部礫混じり）
21．腐った木
22．オリーブ灰色粘質土（礫混じり）
23．淡黄色粗砂（礫混じり）
24．オリーブ灰色粘質土
25．淡黄色粗砂
26．緑灰色粗砂
27．黒褐色粘質微砂

第116図　1区河道南壁断面図(1/100)

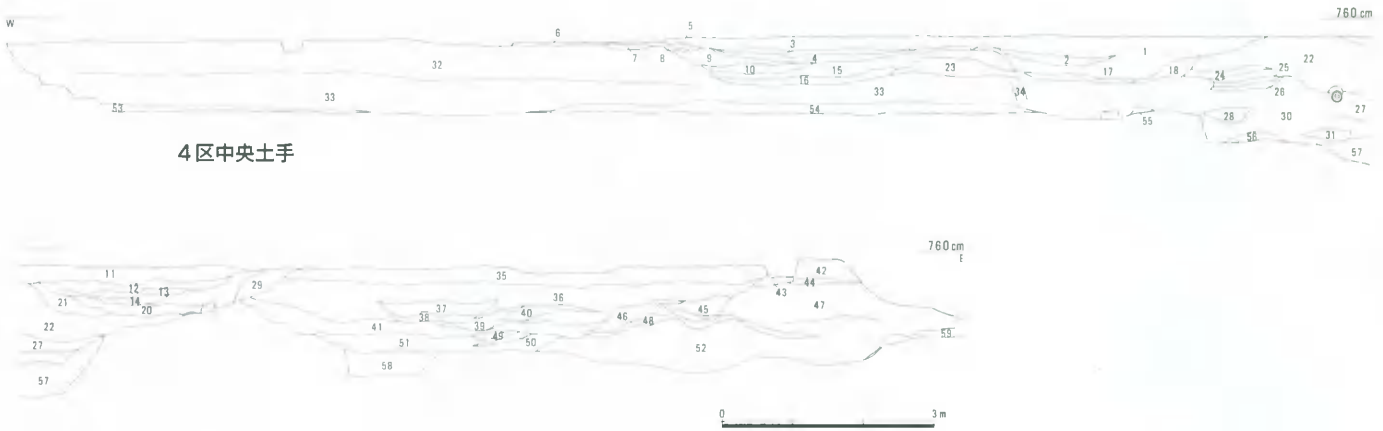


1．灰白色微砂
2．灰白色粗砂
3．オリーブ灰色細砂
4．浅黄色細砂
5．浅黄色粗砂（小石混じり）
6．緑灰色粘質土
7．灰オリーブ色粗砂
8．灰白色粘質土
9．暗オリーブ灰色粘質土
10．灰白色粗砂（小石，礫）
11．青灰色粗砂
12．腐植土
13．浅黄色粗砂（小石，礫混じり）
14．浅黄色粗砂
15．明緑灰色細砂（木を含む）
16．オリーブ灰色粘質土
17．浅黄色粗砂（一部灰白色）
18．灰色細砂（礫，小石，石，土器混じり）
19．灰白色粗砂（礫，小石，土器混じり）
20．黄灰色粘質土
21．灰色粘質土
22．オリーブ黒色粘質土
23．オリーブ黒色粘質微砂
24．灰色粘質土（小石混じり）

第117図　2区河道中央断面図(1/100)



第118図　１区河道最下層出土遺物



1. 黒灰色粘質土
2. 黒褐色粘質土
3. 褐灰色微砂
4. 灰色細砂
5. 暗灰黄色微砂
6. 褐灰色細砂
7. 灰色粘質微砂
8. 黄灰色微砂
9. 灰黄色微砂
10. 暗灰色粘質土
11. 黒褐色粘質土
12. 黒褐色粘質微砂
13. 黒色粘質土
14. 黒色粘質微砂
15. 灰色微砂
16. 灰色粗砂（小礫混じり）
17. 灰色粗砂（小礫混じり）
18. オリーブ黒色微砂
19. オリーブ黒色粘質微砂
20. 礫・灰色微砂
21. オリーブ灰色微砂
22. 灰黄色粗砂（小礫混じり）
23. 灰色粗砂（小礫混じり）
24. 灰色粗砂（小礫混じり）
25. 黒褐色粘質微砂
26. 礫・灰白色粗砂
27. 灰色粘質微砂
28. 灰オリーブ色細砂
29. 灰白色粗砂（小礫混じり）
30. 黒色粘質土
31. 灰白色粘質土
32. 灰白色粘質土
33. 灰白色粗砂（小礫混じり）
34. 灰白色粘質土
35. 灰色粘質微砂
36. 暗オリーブ灰色粘質微砂
37. 黒色粘質微砂
38. 灰色粗砂（小礫混じり）
39. 黒色粘質微砂
40. 暗オリーブ灰色細砂（小礫混じり）
41. 灰色粘質細砂（粗砂混じり）
42. 黄灰色粘質細砂
43. 灰黄色粘質微砂
44. 暗灰黄色粗砂
45. 黄灰色礫
46. 灰オリーブ細砂
47. 礫・淡黄色粗砂
48. 腐植土
49. オリーブ黒色粘質微砂（小礫混じり）
50. 灰色粗砂
51. 灰色粗砂（小礫混じり）
52. 礫・淡黄色粗砂
53. オリーブ灰色粘質土
54. オリーブ灰色粘質土
55. 灰白色粘質土
56. 灰白色粘質土
57. 灰白色粘質土
58. 灰色粗砂
59. 礫・灰色微砂

第119図　4区河道断面図(1/350)

河道11（第115・120・121図）

河道11は、現存検出長約40ｍ、幅400～730㎝、深さ40～100㎝で、全体では緩く蛇行しながら南下している。４区中央付近の断面では、最大幅730㎝、深さ100㎝で２段掘りの形状をなし、底面はほぼ平らである。埋土は砂、礫混じりの粗砂が主体で、腐植土や流木もかなり含む。河道底面の海抜高は調査区中央の土層断面で640㎝ほどである。南端では弥生後期の河道が弧を描くように複雑に蛇行していたために、南側区との河道のつながりが不明瞭である。なお、４区南端に検出の河道13は、やや後出の土器も含むが連続する弥生時代前期の河道の一部の可能性がある。

河道11の４区付近の出土遺物は弥生時代前期中葉の土器が大半を占める。壺形土器は外反する口縁部と頸部や肩部に数本の沈線を施す器形が多い。**278**は頸部に幅広の削り出し凸帯を施し、口縁端部に蓋受けの穿孔を施す。甕形土器はく字形に外反する口縁端部にキザミメを施したものと無文のものがある。頸部には数本の沈線を施すものが多い。蓋は傘状の途中に穿孔のあるもの**296**、頂部に瘤状の突起のあるもの**295**、中央に穿孔のあるもの**294**、中央が窪んだもの**297**等がある。

314は河道南半の右岸肩口が残存する付近から出土した人面絵画土器である。２片が接合するが接合面は完全には密着しない。残存規模は上下幅8.5㎝、横幅6.7㎝、厚さ0.6～1.0㎝をはかり、半径5.6㎝ほどの球面状にカーブをなしている。内面は指頭圧痕を施し、凹凸が顕著である。外面は丁寧に化粧土を施し、下端部では一部が縦にハケメが残る。下半部では丁寧にヘラミガキを施し、タテハケメが一部残る。上半部はヘラミガキが不明瞭である。胎土は１㎜前後の砂粒を含むがきめが細かい。焼成は良好で、下端部が一部黒色に変化している。両眼と口は切り込んで貫通している。鼻は先端を欠損するが、痕跡から幅1.5㎝、長さ３㎝以上、高さ0.7㎝程である。特徴的なことは両眼と口の周囲にヘラ描きの沈線を施し、入れ墨を表現していることである。両目の周囲の文様は円弧状にいずれにも３本施す。目頭上端の外側２本の線刻が左右とも終了しているものが多いことから、円周状ではなく下半部に半円形に施した可能性が強い。口周囲の線刻は湾状に向かって右側に２本と左側に３本が口の両端に取り付いている。口に施した線刻は左右でかなり大きさに差がある。当初上半部のみを確認した時点では土面状の器形を想定したが、その後、遺物整理中に下端部を発見したことにより、むしろ容器形土器の口縁部付近の可能性も考えられる。

河道12（第122図）

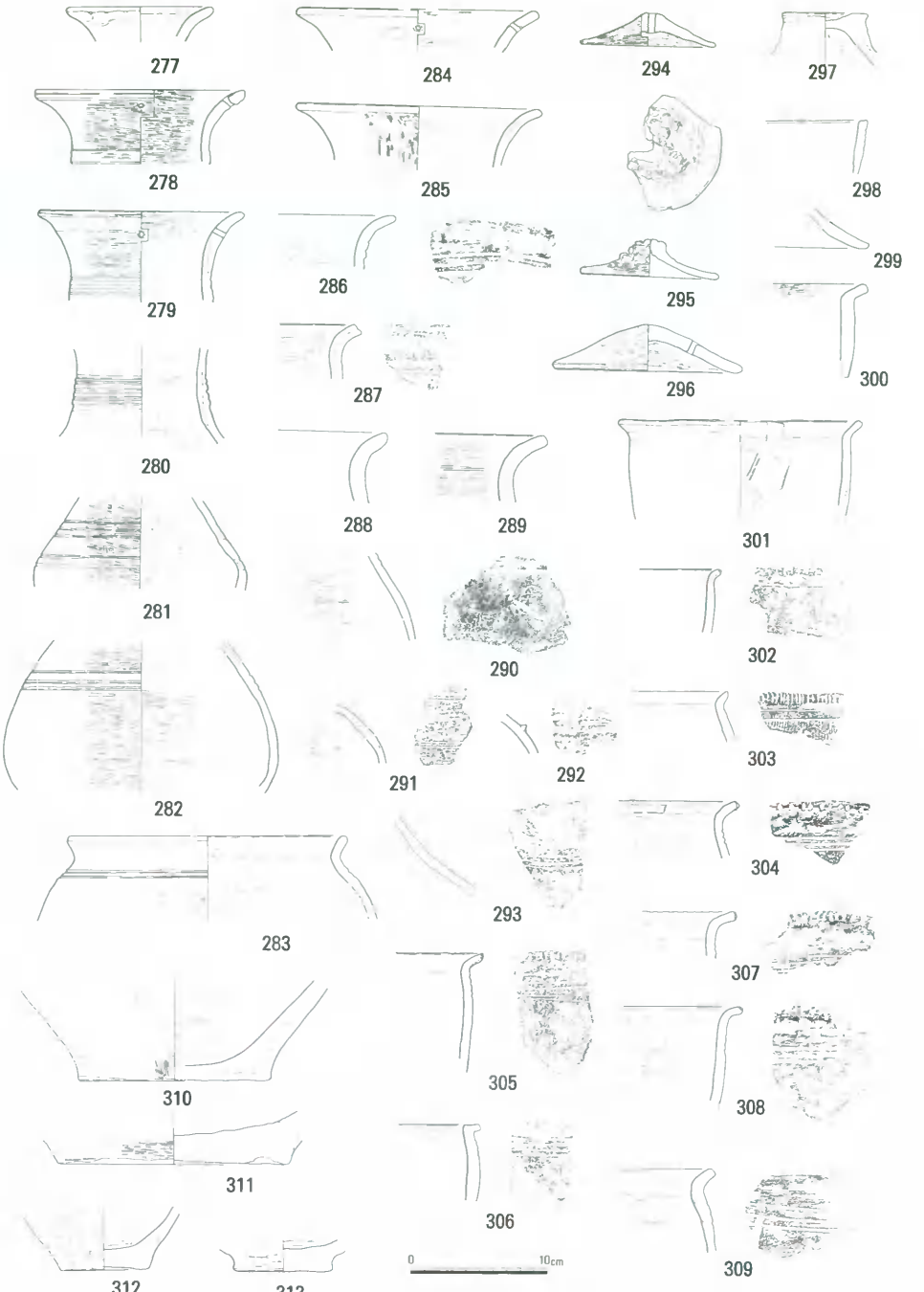
４区北端に検出した河道の西側肩口の一部で、河道幅は不明瞭である。西側肩口の中央付近では長さ350㎝、最大幅100㎝深さ20㎝前後の支流が北西方向からそそぎ込んでいる。南北方向の検出長16ｍ、深さ25～40㎝である。検出方向等から弥生時代後期の河道12と相前後する河道の一部と考えられる。

出土遺物には弥生時代前期と中期の土器片が混在している。**327**は頸部にヘラ描き沈線を２条施した弥生時代前期の壺形土器で、**330**は上下に肥厚する口縁端部に７条の凹線と凹線上に二重竹管文を施す弥生時代中期後半の口縁部である。

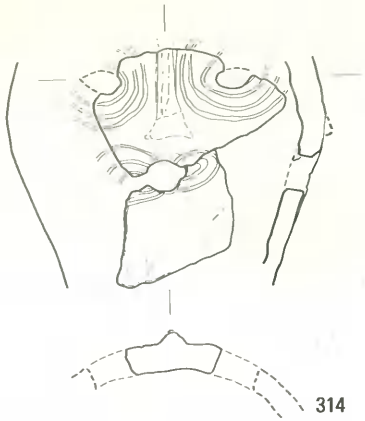
河道13（第115・123図）

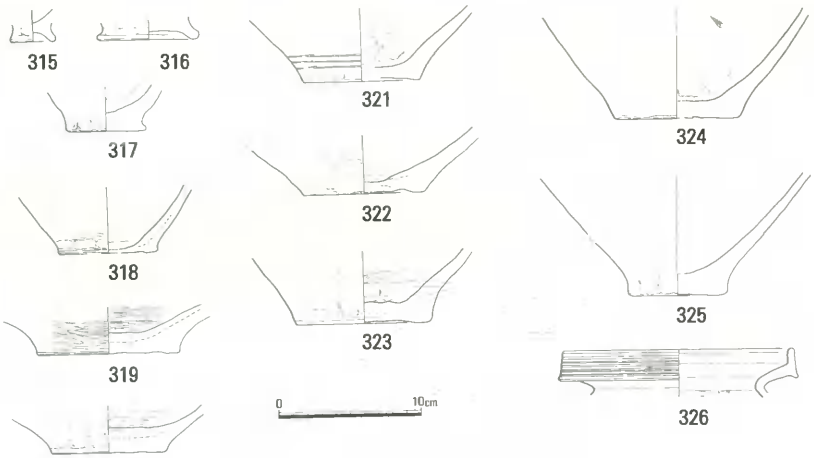
４区南端の調査区境に検出した河道の一部で南側７区との接続は不明瞭である。縄文時代晩期の河道11を切り込み、西側を弥生後期の河道12に削平されている。規模は半円形に東西10.5ｍ、南北４ｍ、深さ50㎝程である。埋土は灰白色の粗砂が主体で流木や腐植土も含んでいる。

出土遺物に弥生時代前期の甕形土器と体部に波状文を施す中期の壺形土器の頸部片が出土している。上流より続く弥生時代前期中頃の河道の一部の可能性もある。（山磨）

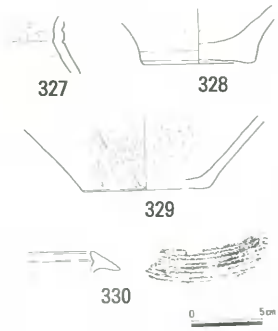


第120図　４区河道11出土遺物(1)

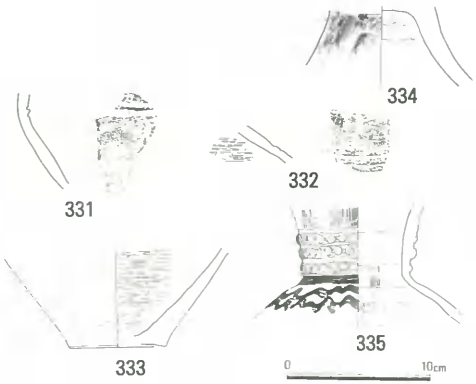




第121図　４区河道11出土遺物(2)



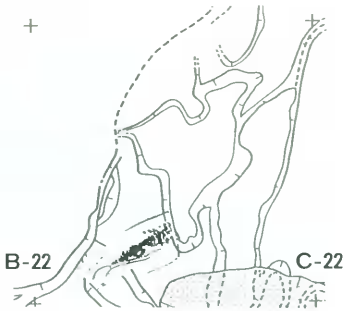
第122図　４区河道12出土遺物



第123図　４区河道13出土遺物

５・６・８・９区の前期河道と５区河道内の井堰

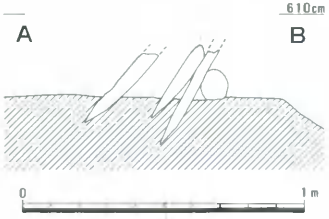
４区で部分的に認められた前期の河道は、５区においては古墳時代後半の河道24以外、そのほとんどが前期に含まれ、これらは４区の河道11に続くものと思われる。そしてこの区の南側において（ＢＣ22，５付近）は、西側の谷（刈又池）から流れ込む流路と合流する。ここで、さらにこの流路は二手に分かれる。東側を流れるものが、10区の河道16に連続するものである。この分岐する手前において、長さ７ｍ、幅は広い所で150cmにわたって、直径10cm前後の杭を数百本打ち込み、あるいは柵状にして堰を造っている。この井堰の手前の溜まりにおいて多く

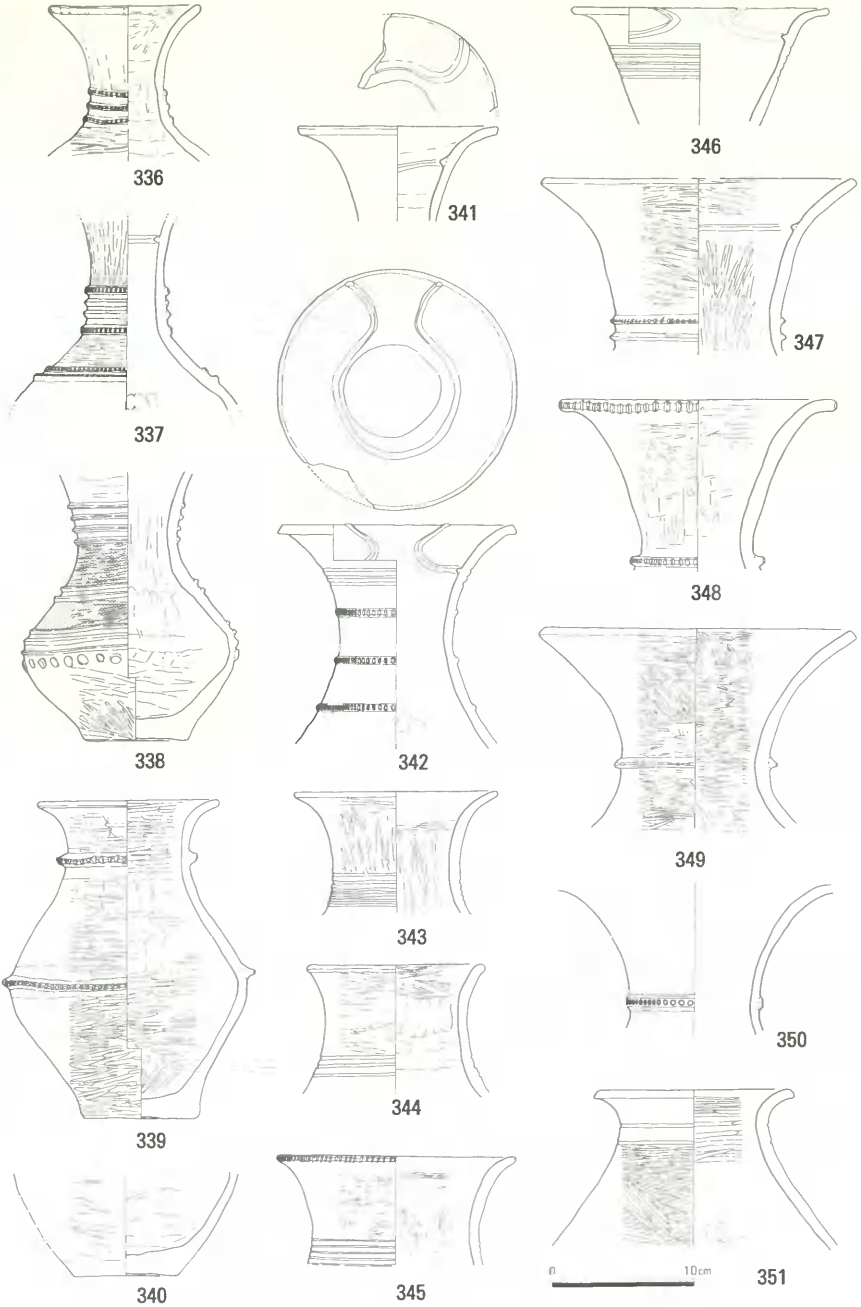


第124図　６区河道内井堰状杭列群平(1/50)　断面図(1/20)

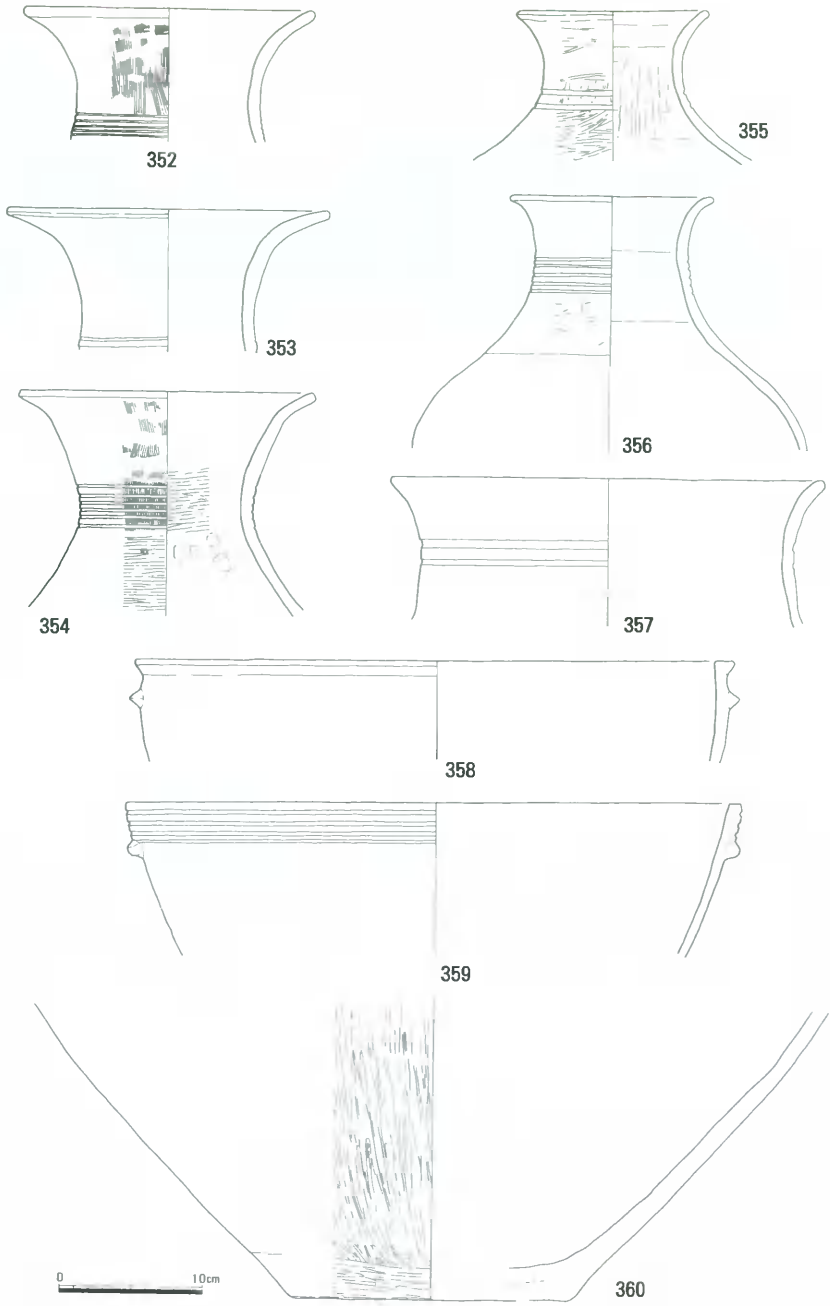
の弥生前期中頃の土器（第125～127図）、鍬**W-1**・鋤**W-2**（第156図）などの木製品が出土している。

６・７区河道内出土の弥生前期土器は、壺（第125・126図）口縁部はラッパ状に開き、頸部が細くなり、**336**～**338**は、数条の貼り付け凸帯を巡らしその上に刻み目を施しているもの、口縁部は逆ハの字状に大きく開き、頸部に貼り付け凸帯を１本巡らしその上に刻み目を施すもの**339**・**348**・**349**、口縁部が外反し、頸部にヘラ描き沈線を数条施すもの**343**～**345**・**351**など多種が見られる。口縁内側に凸帯を貼り付け注ぎ口状にするもの**341**・**342**・**346**が何点か見られる。**338**は頸部から体部上半の凸帯間に黒い漆状のものを塗り、さらに赤い朱状のものを塗り、胴部凸帯の下には円形付文を貼り付けるなど、装飾れた土器である。甕は口縁が逆Ｌ字状になるもの、くの字状になるものなど、口縁端部に刻み目を施すもの、無文のもの、口縁直下にヘラ描き沈線を施すもの、施さないものなどがある。そのほかには、大きな鉢状になる**358**・**359**などがある。また６区内の河道からは、ミニチュア土器の各種、鳥形土器の尻部と思われる壺形土器**398**なども出土している。（伊藤）

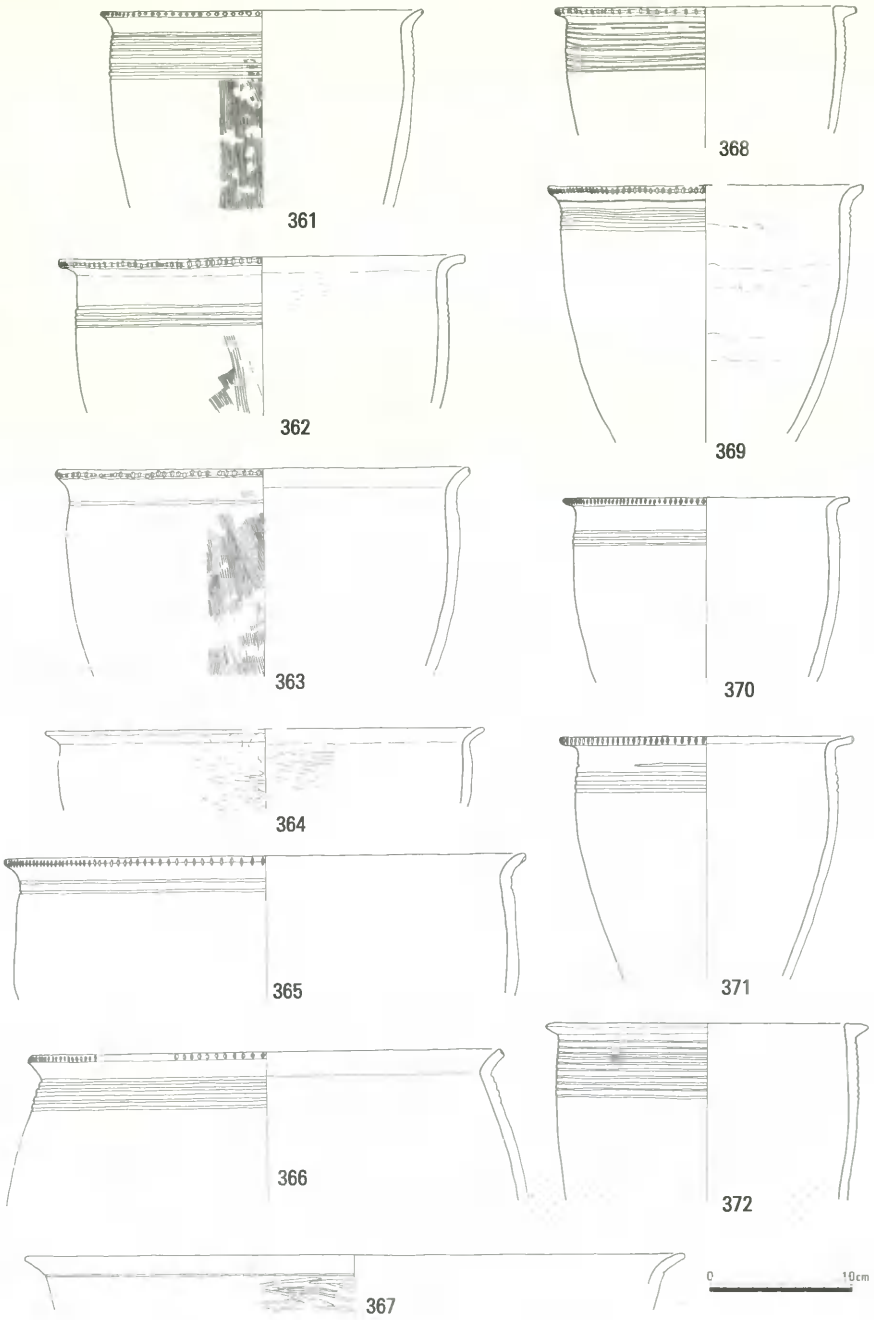




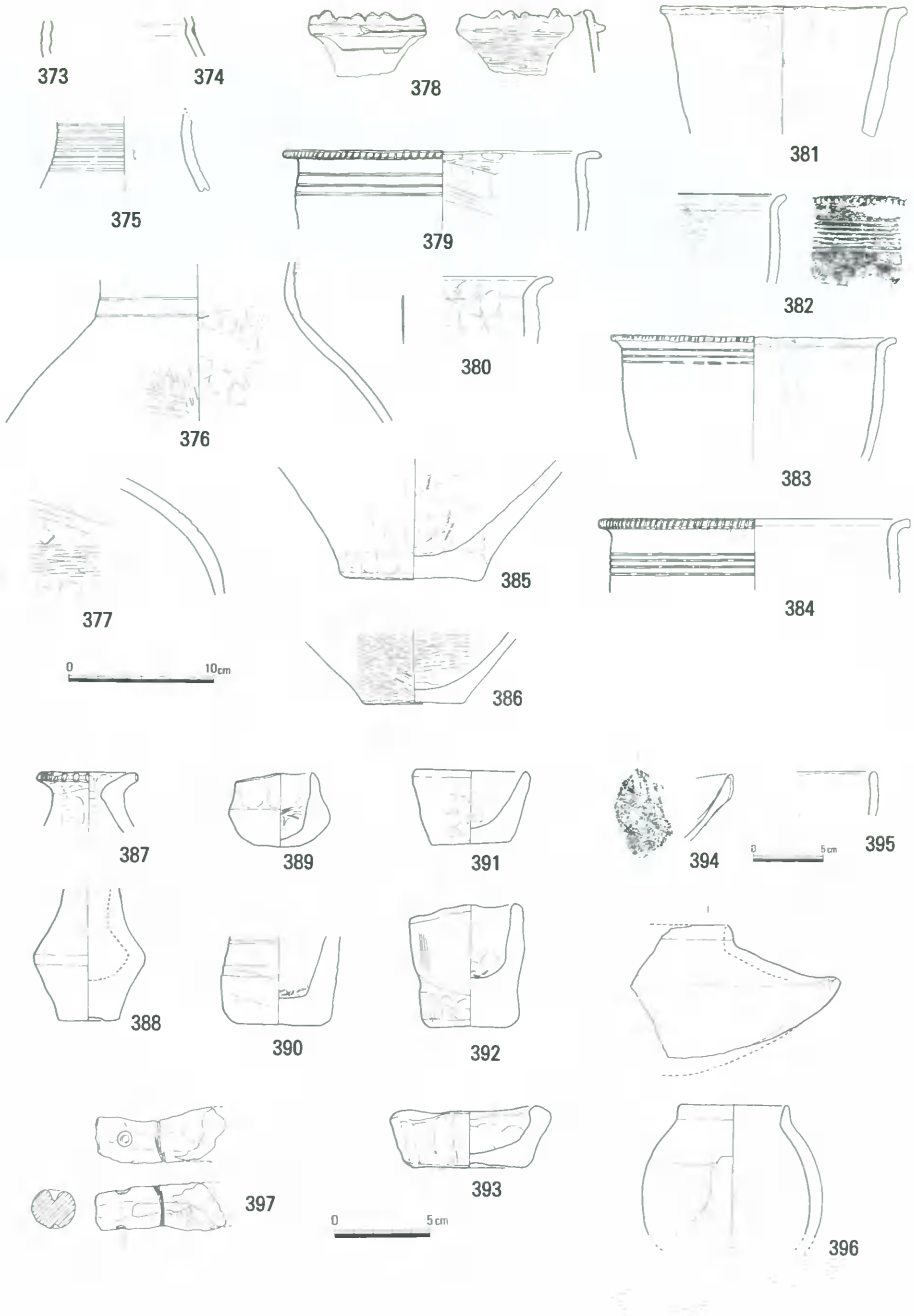
第125図　６区河道出土遺物(1)



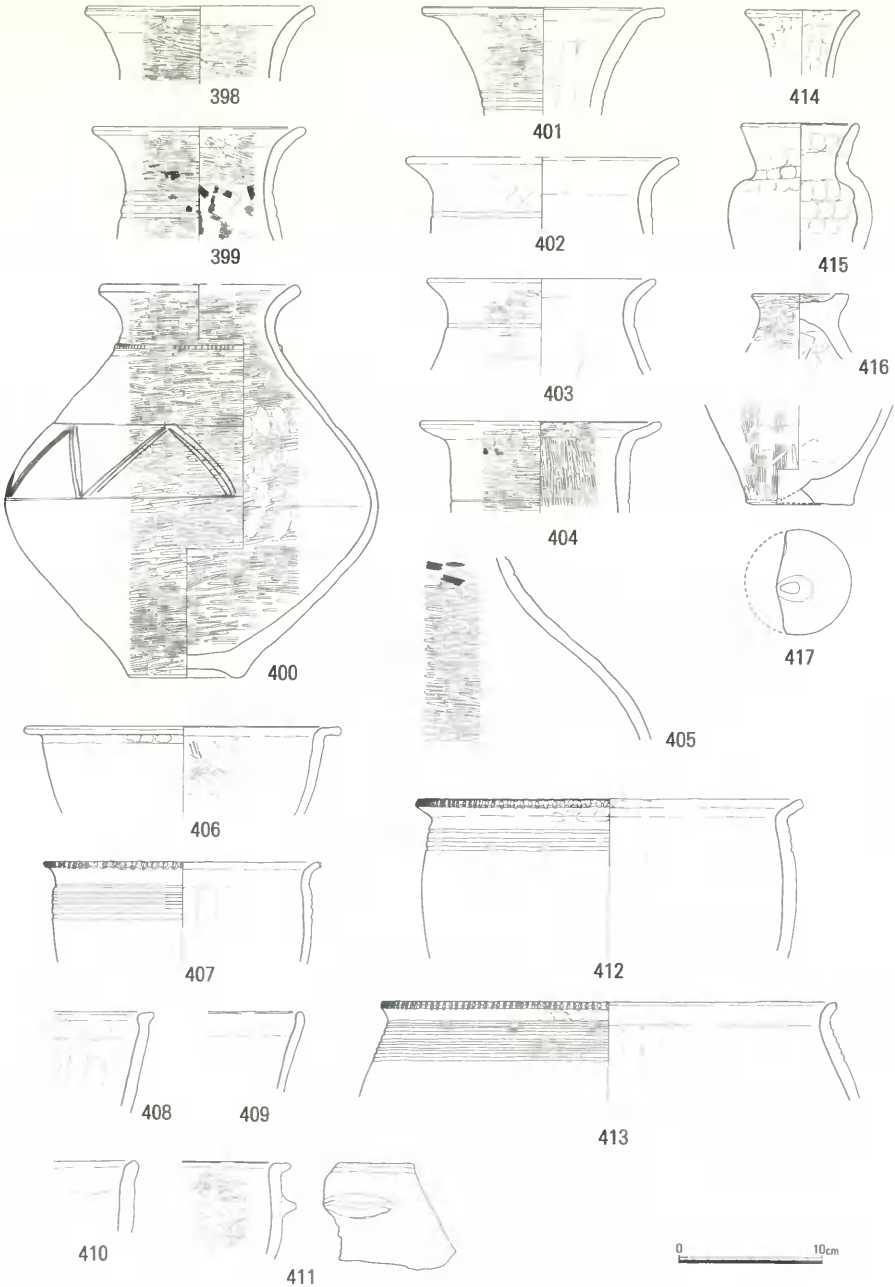
第126図　６区河道出土遺物(2)



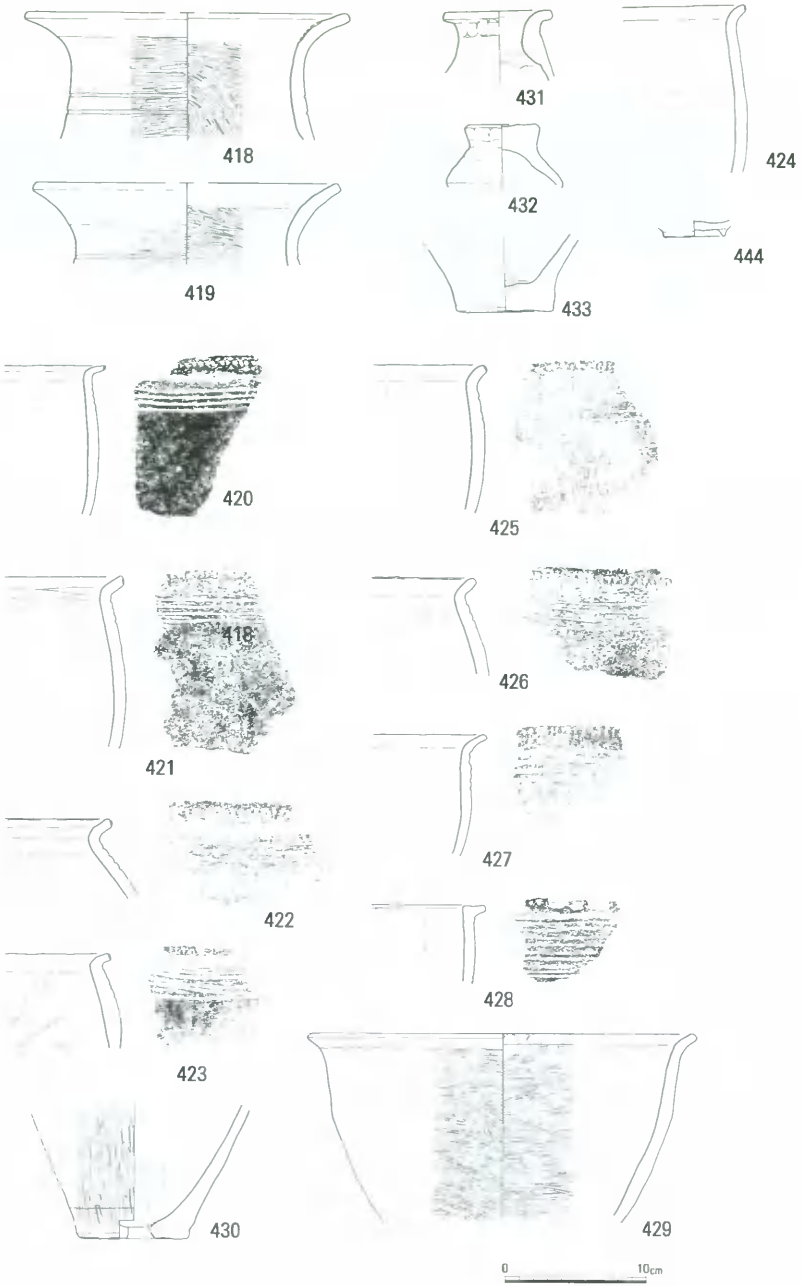
第127図　６区河道出土遺物(3)



第128図　７区河道出土遺物



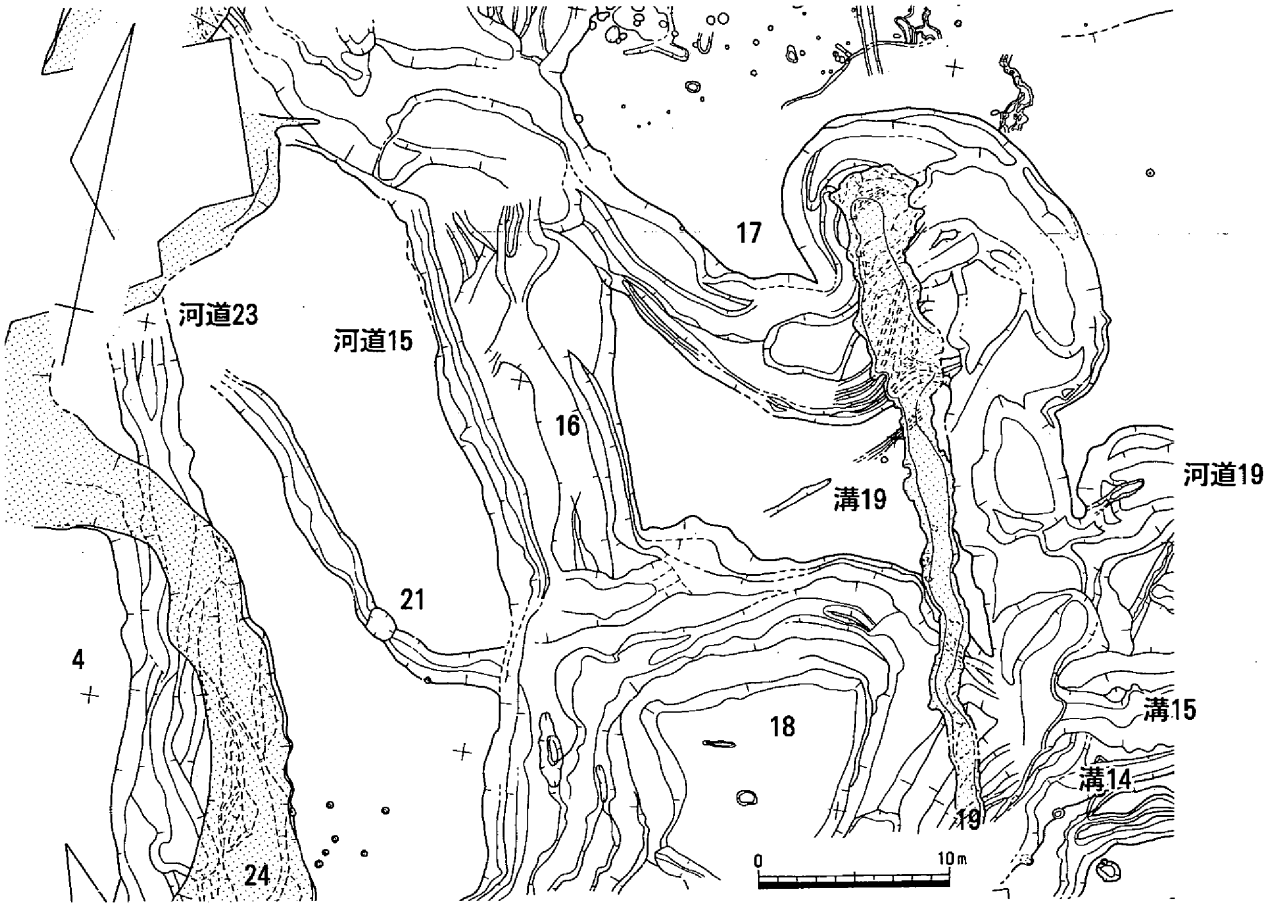
第129図　９区弥生河道出土遺物(1)



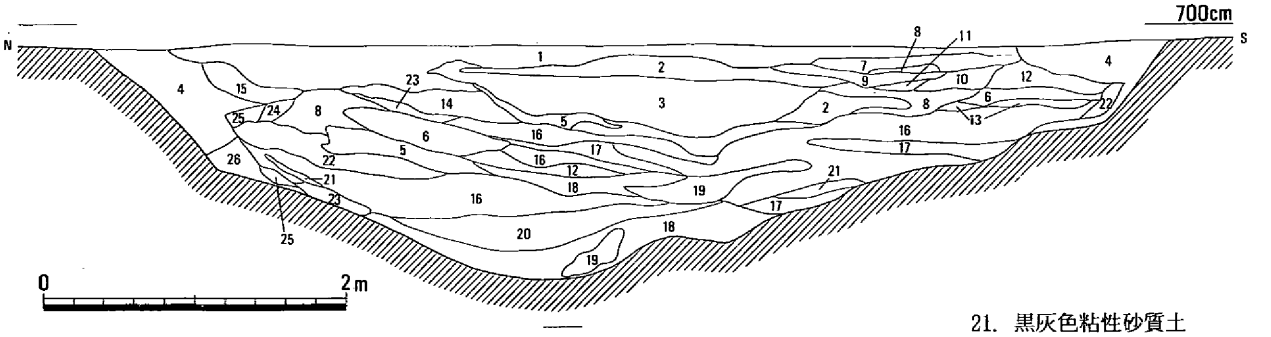
第130図　９区弥生河道出土遺物(2)

10・11・12区の弥生河道

10区の弥生前期河道は、４・５・６区において見られた河道の軌跡よりはっきりとその流路を見て取ることが出来る。５区で見られた東側の流路は、そのまま南に延びる河道16と、東の11区に延びる17に分岐する。河道16はさらにその南側で河道18に分岐し、南流するものと、東に流れるものに分かれ、これは先に分岐した11区と12区境で河道17と合流する。

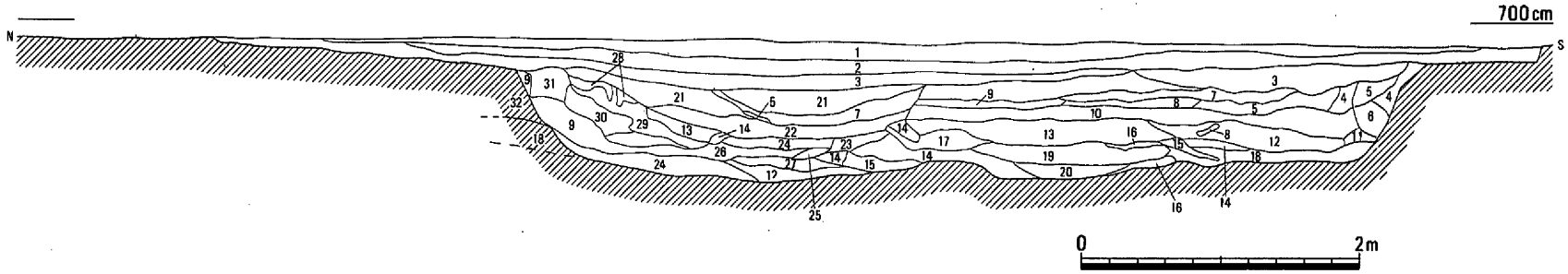


第131図　10・11区河道平面図(1/400)

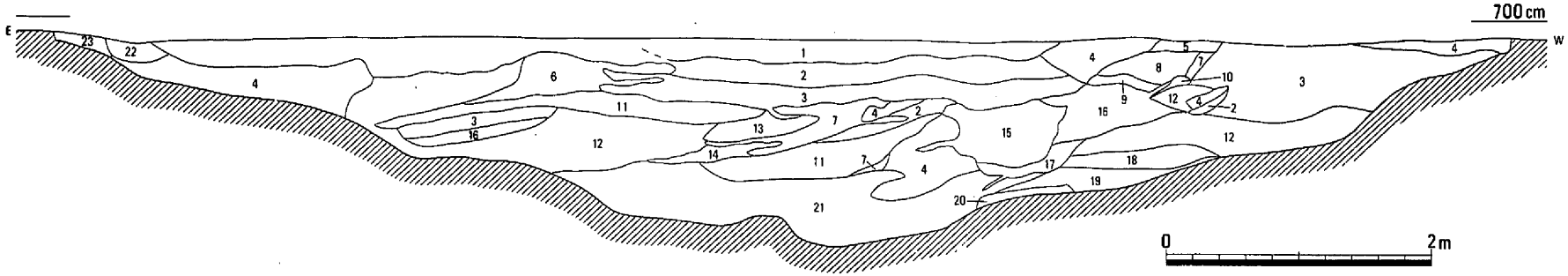


1．灰褐色粘性砂質土　6．灰色粗砂　11．暗灰褐色微砂　16．灰色砂礫層　21．黒灰色粘性砂質土
2．淡灰褐色粗砂　7．淡灰褐色粘性砂質土　12．灰色微砂　17．暗灰色粗砂　22．灰色粘性砂質土
3．淡褐色粗砂　8．淡灰褐色微砂　13．淡灰色粗砂　18．暗灰色砂礫層　23．淡灰色微砂
4．黄褐色粘質土　9．暗灰褐色粗砂　14．灰褐色砂礫層　19．黒灰色粘質土　24．暗灰色粘質土
5．暗灰色粘性砂質土　10．灰褐色微砂　15．暗褐色粘性砂質土　20．淡灰色砂礫層　25．灰色粘質土　26．淡灰色粘質土

第132図　10区河道18断面図(1/50)

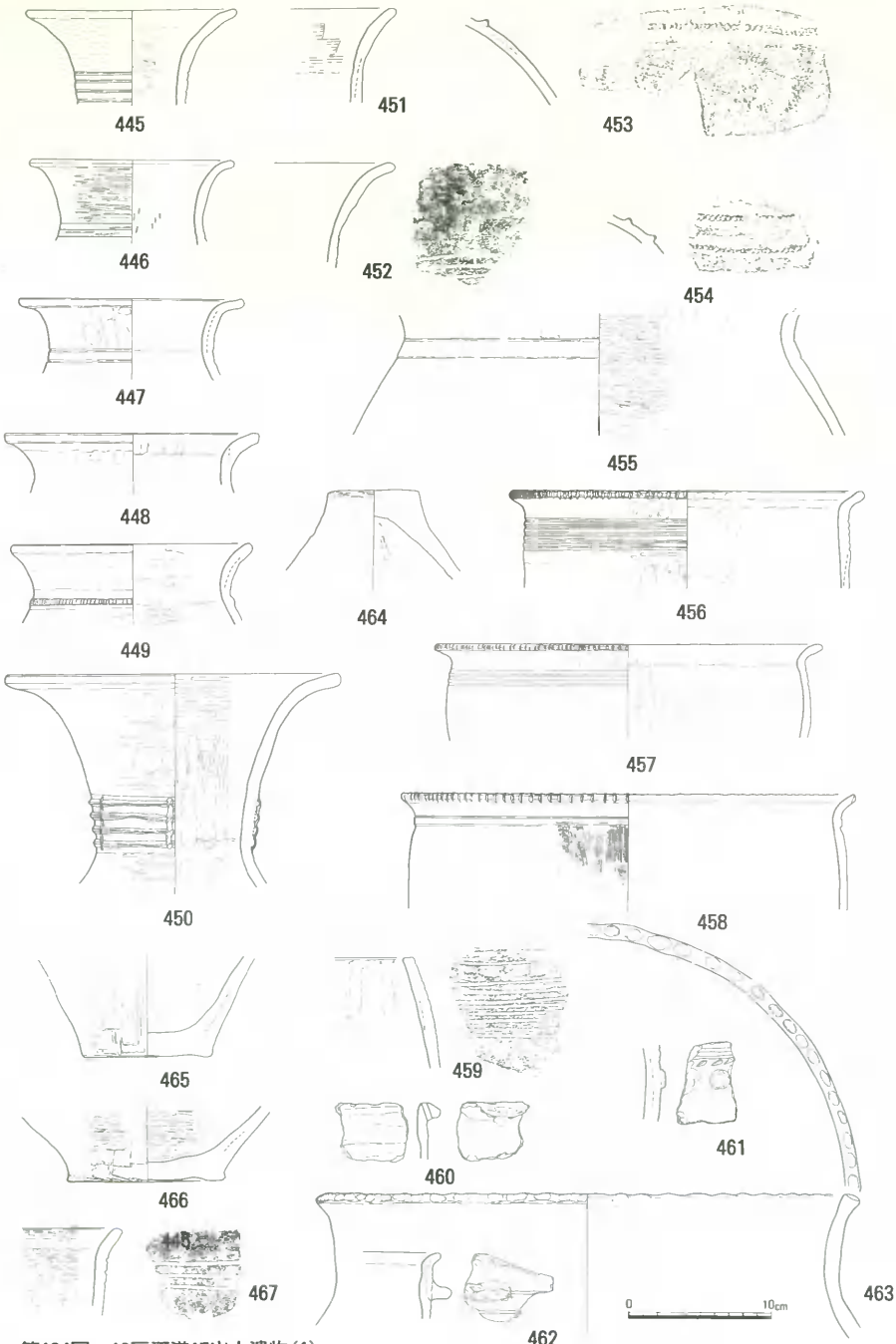


1．淡褐色粘性砂質土
2．褐色粘性砂質土
3．暗褐色粘性砂質土
4．暗黄灰色粘質土
5．灰褐色粘質土
6．黄褐色粘質土
7．暗灰褐色粘質土
8．淡灰褐色粘性砂質土
9．灰褐色微砂
10．灰褐色粘性砂質土
11．黒灰色粘質土
12．黒褐色粘質土
13．暗灰褐色粘性砂質土
14．淡灰色微砂
15．暗灰色粘性砂質土
16．淡黄褐色粘質土
17．暗灰色微砂
18．灰色粗砂
19．灰褐色砂礫層
20．淡灰褐色砂礫層
21．褐色粘質土
22．黒灰褐色粘質土
23．灰色微砂
24．淡灰色粗砂
25．灰色粘性砂質土
26．淡灰褐色粗砂
27．黄褐色粗砂
28．褐色粘性砂質土
29．淡灰褐色微砂
30．明灰褐色微砂
31．褐色微砂
32．黄褐色粘質土

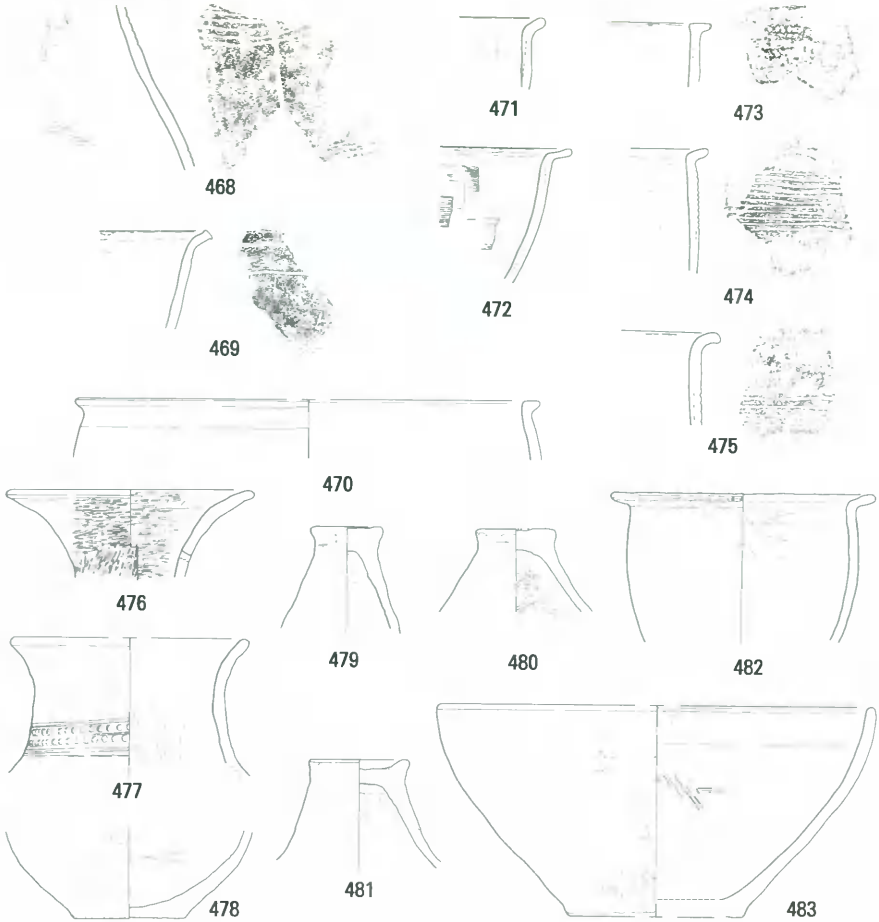


1．黄褐色粘性砂質土
2．淡灰色微砂
3．淡灰褐色微砂
4．淡褐色微砂
5．褐色粘性砂質土
6．暗褐色微砂
7．暗灰色微砂
8．暗褐色粘性砂質土
9．明褐色粘性砂質土
10．暗灰褐色微砂
11．灰褐色砂礫層
12．灰色粗砂
13．灰色微砂
14．灰色粗砂
（礫小量含む）
15．灰色粘性砂質土
16．黒灰色粘性砂質土
17．暗灰色粘性砂質土
18．灰色砂礫層
19．淡灰色砂礫層
20．淡灰色粘質土
21．淡灰褐色砂礫層
22．褐色微砂
23．黄褐色粘質土

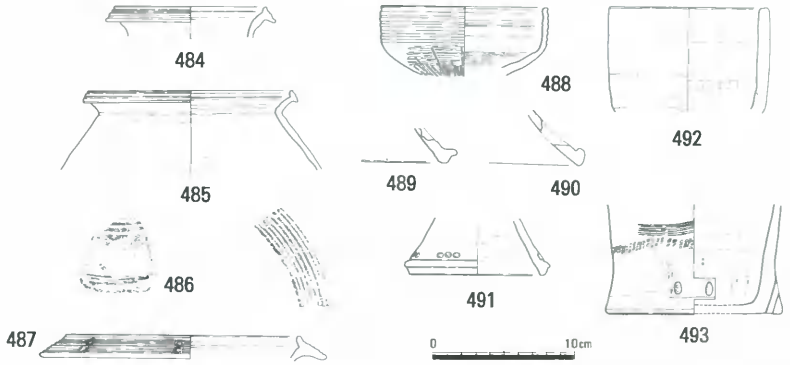
第133図　10区河道17・18断面図(1/50)



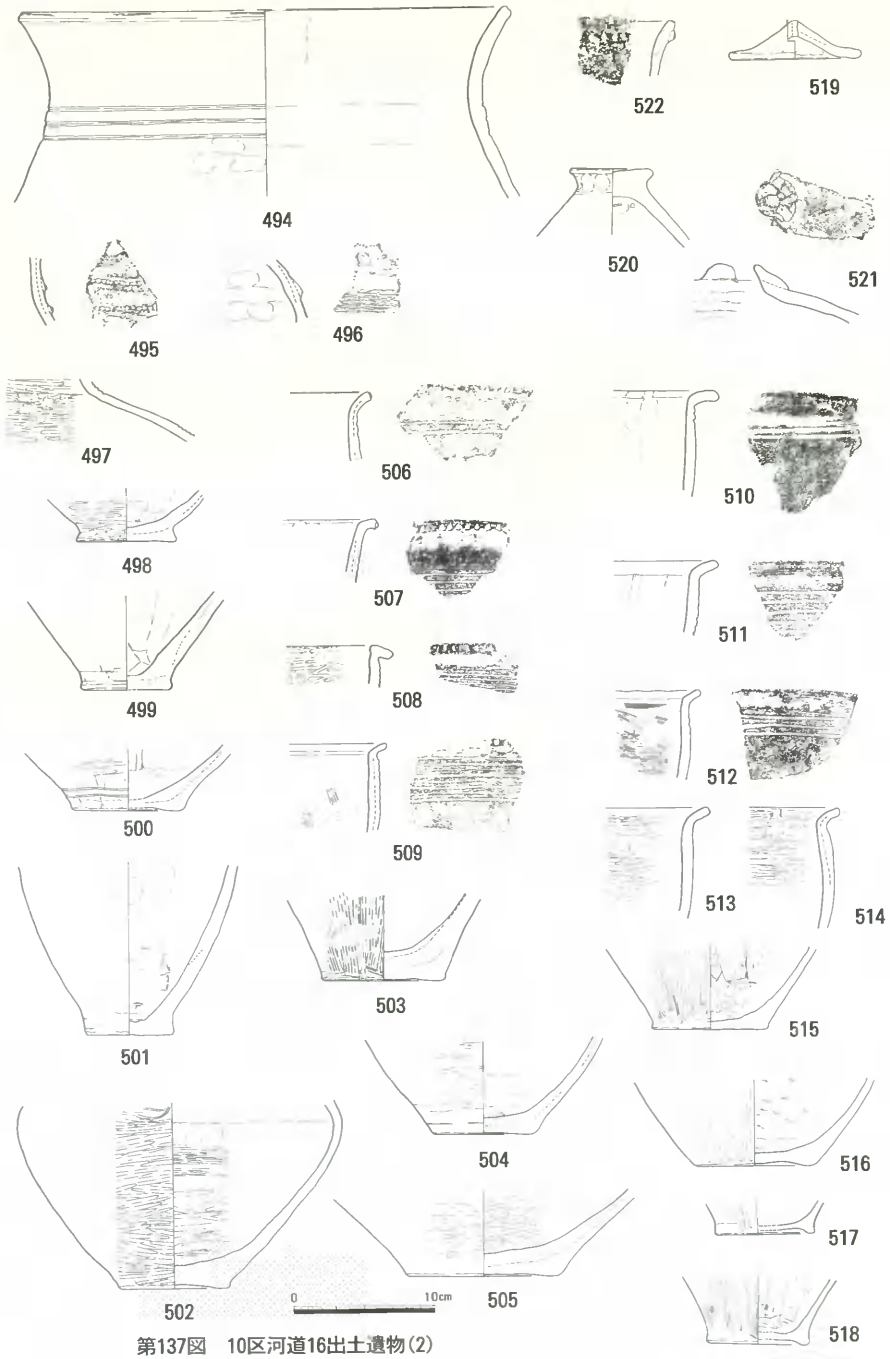
第134図　10区河道17出土遺物(1)



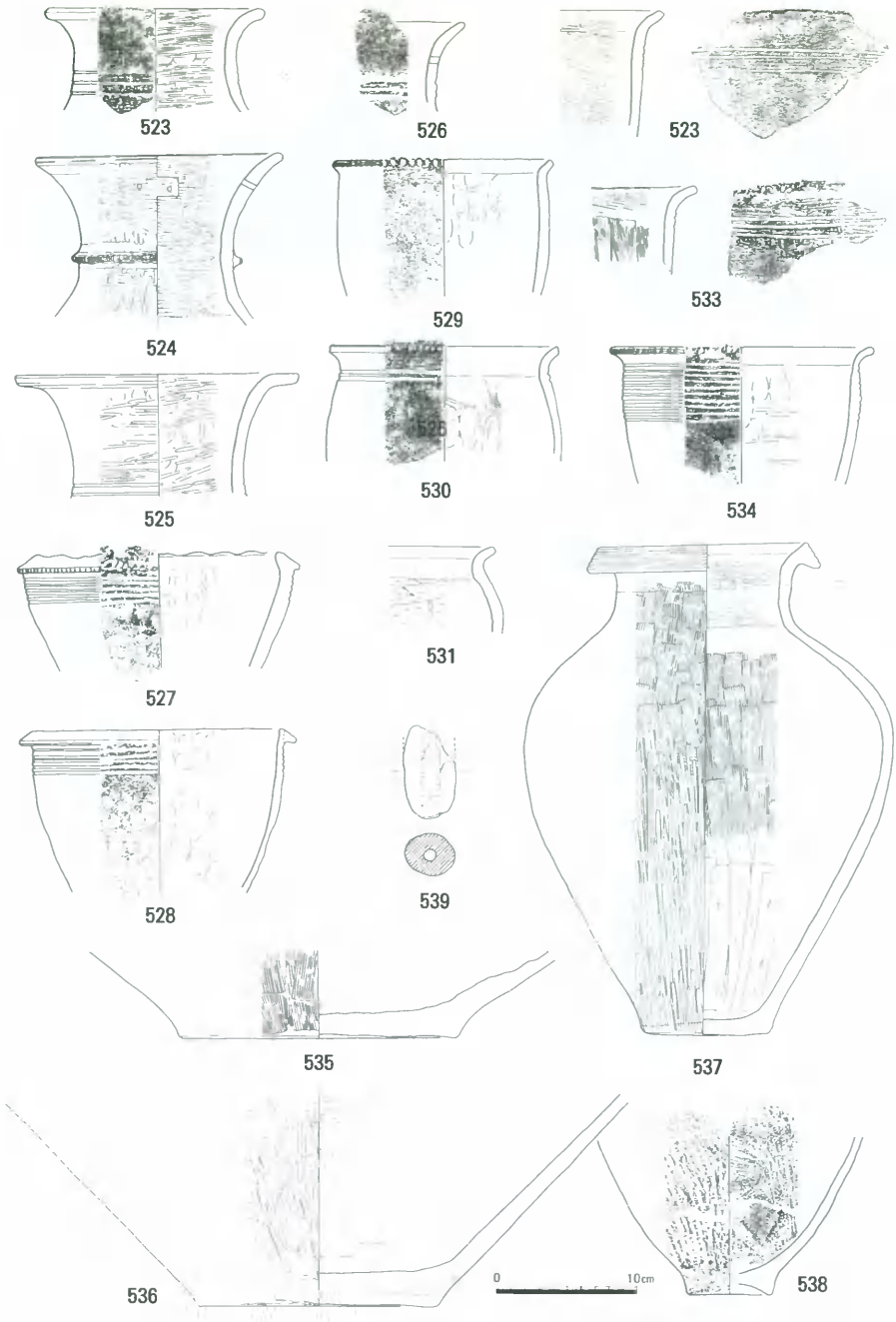
第135図　10区河道17出土遺物(2)



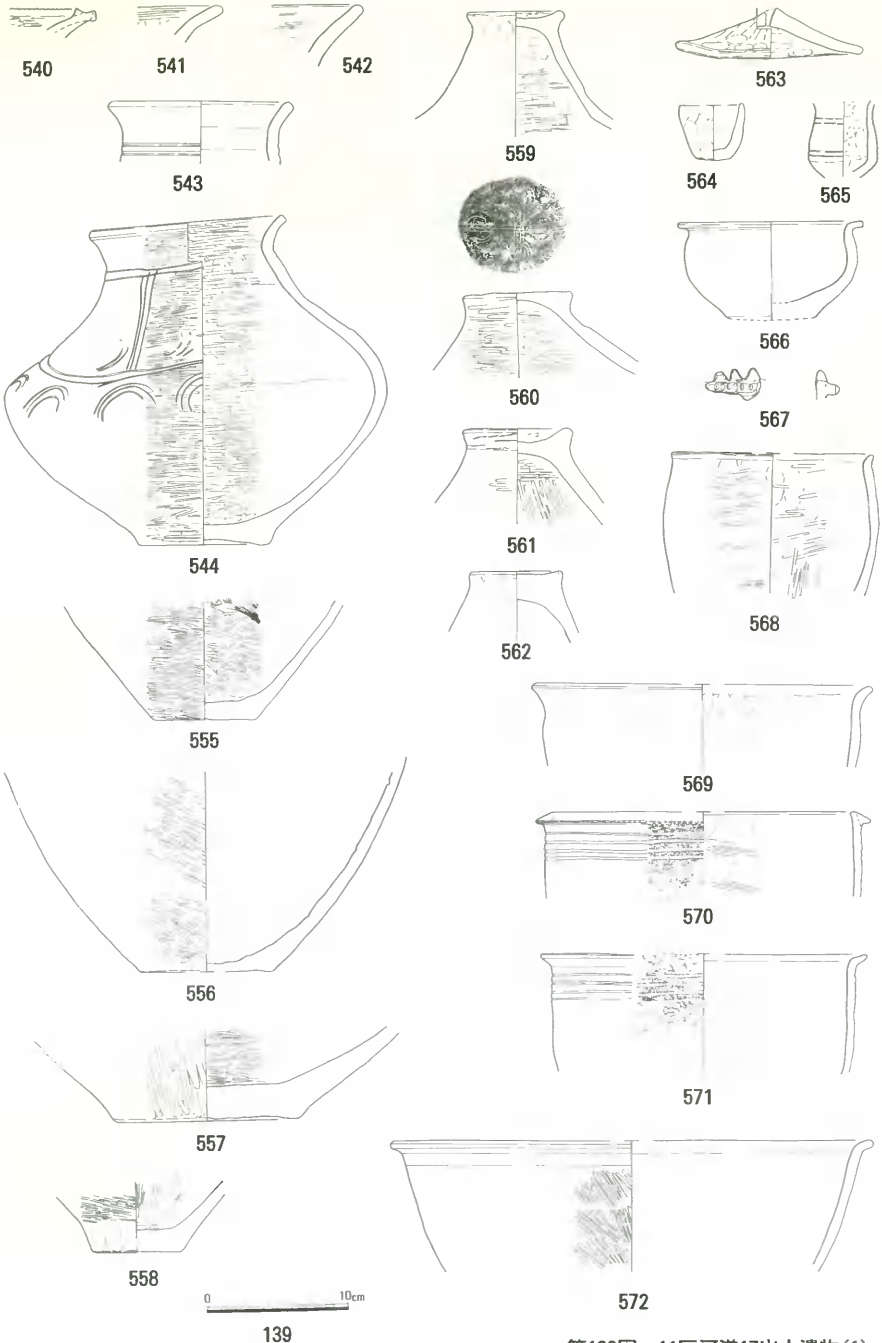
第136図　10区河道16出土遺物(1)



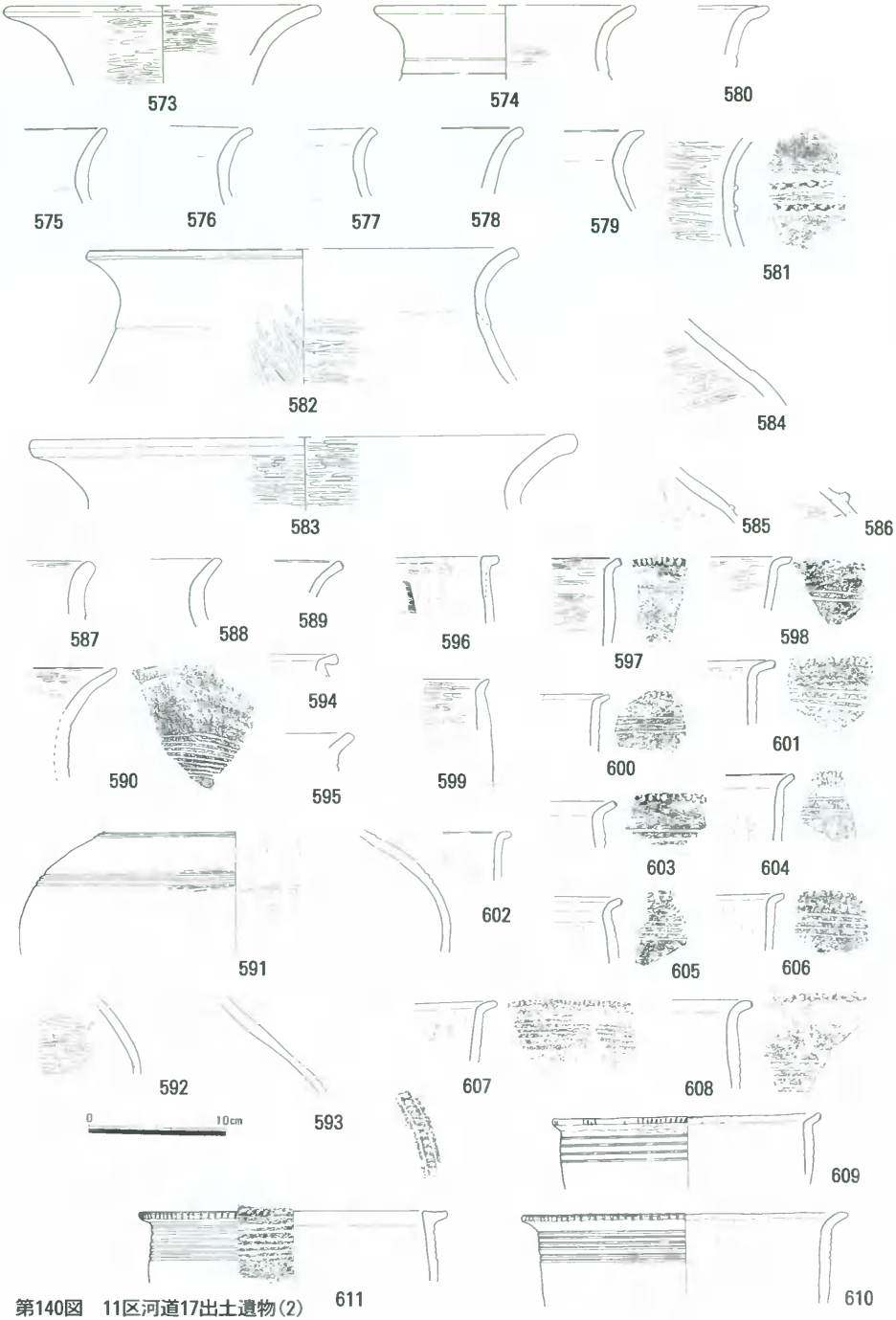
第137図　10区河道16出土遺物(2)



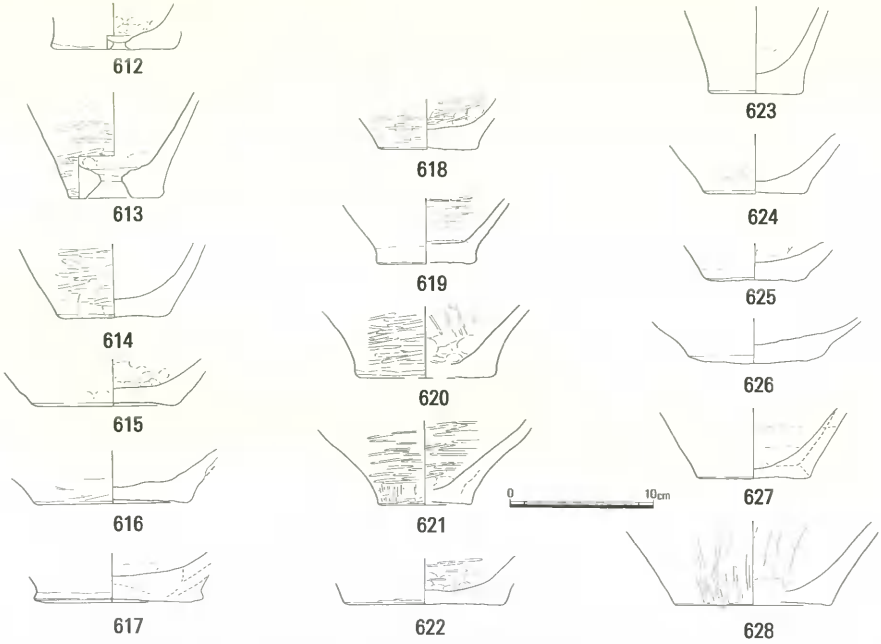
第138図　10区河道18出土遺物



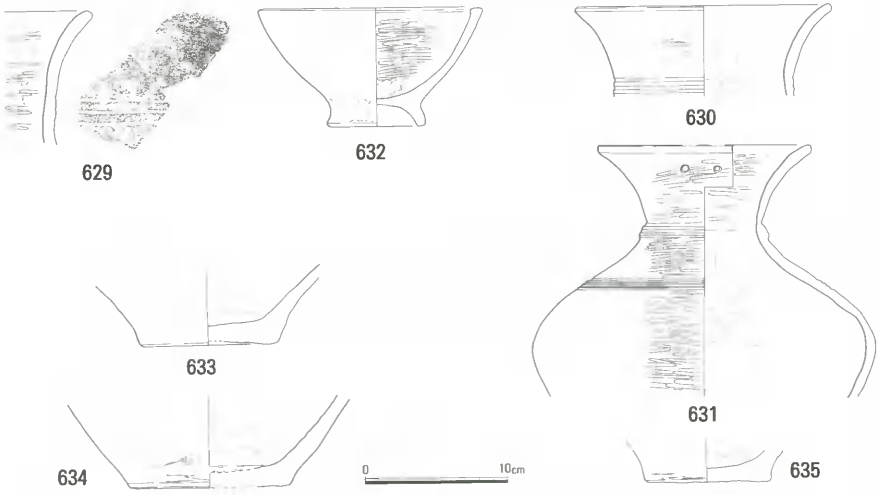
第139図　11区河道17出土遺物(1)



第140図　11区河道17出土遺物(2)



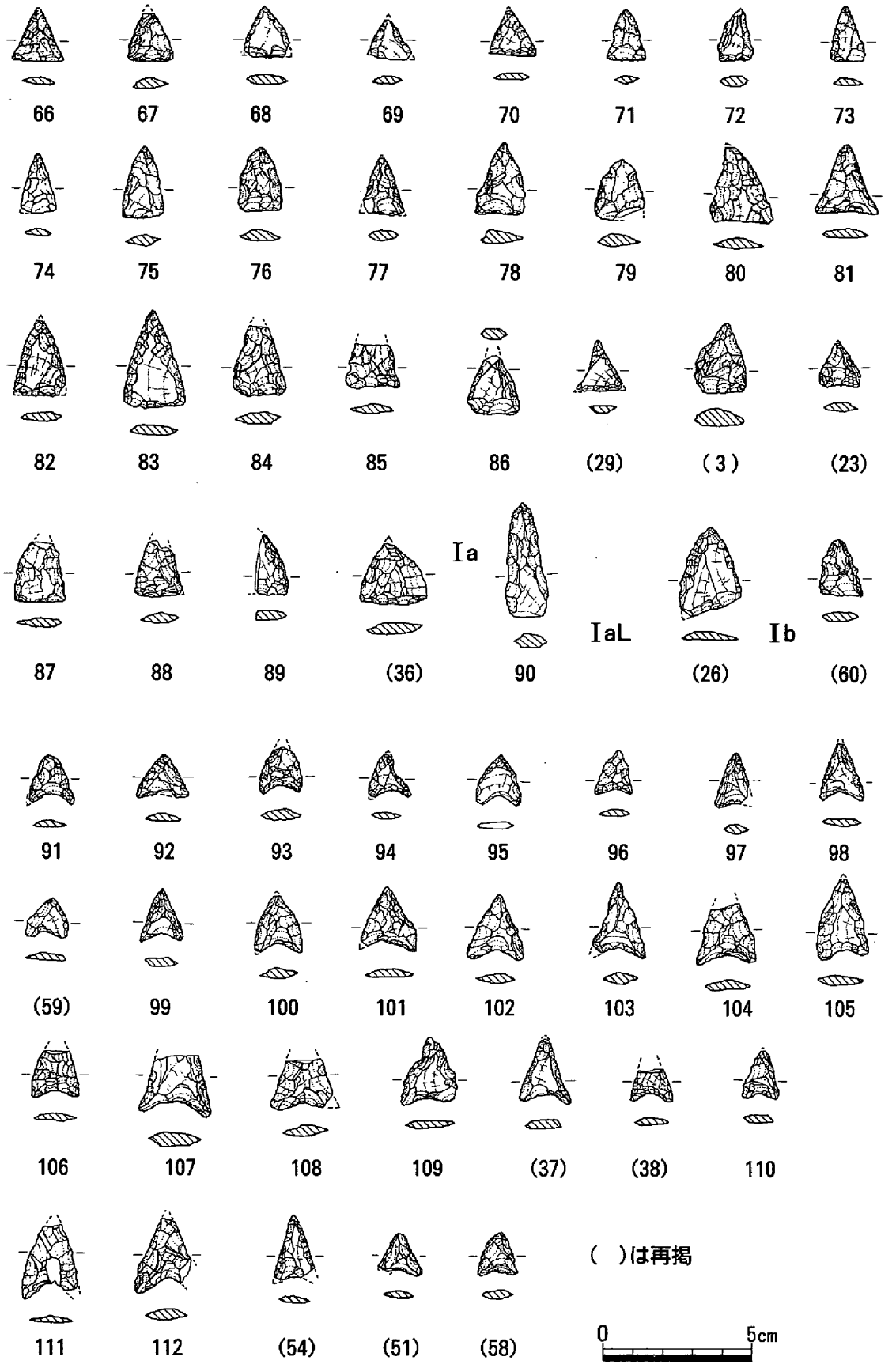
第141図　11区河道17出土遺物(3)



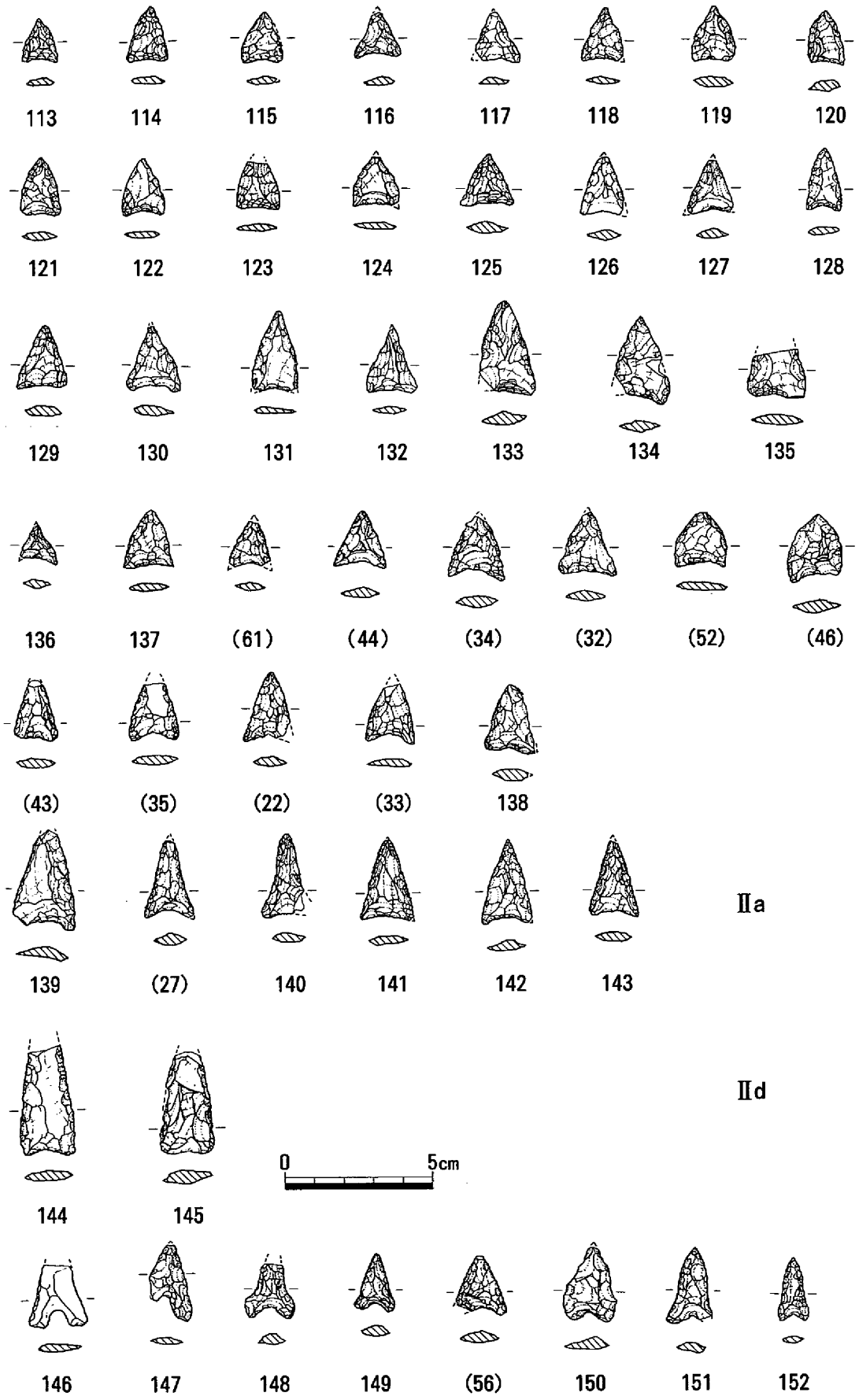
第142図　11区河道19・20合流部出土遺物

河道16の幅は10ｍ前後で深さは140ｍを測る。河道17は狭いところで６ｍ、蛇行する部分では12ｍちかくある。河道18の幅は６～10ｍ前後で、深さは160㎝前後を測る。

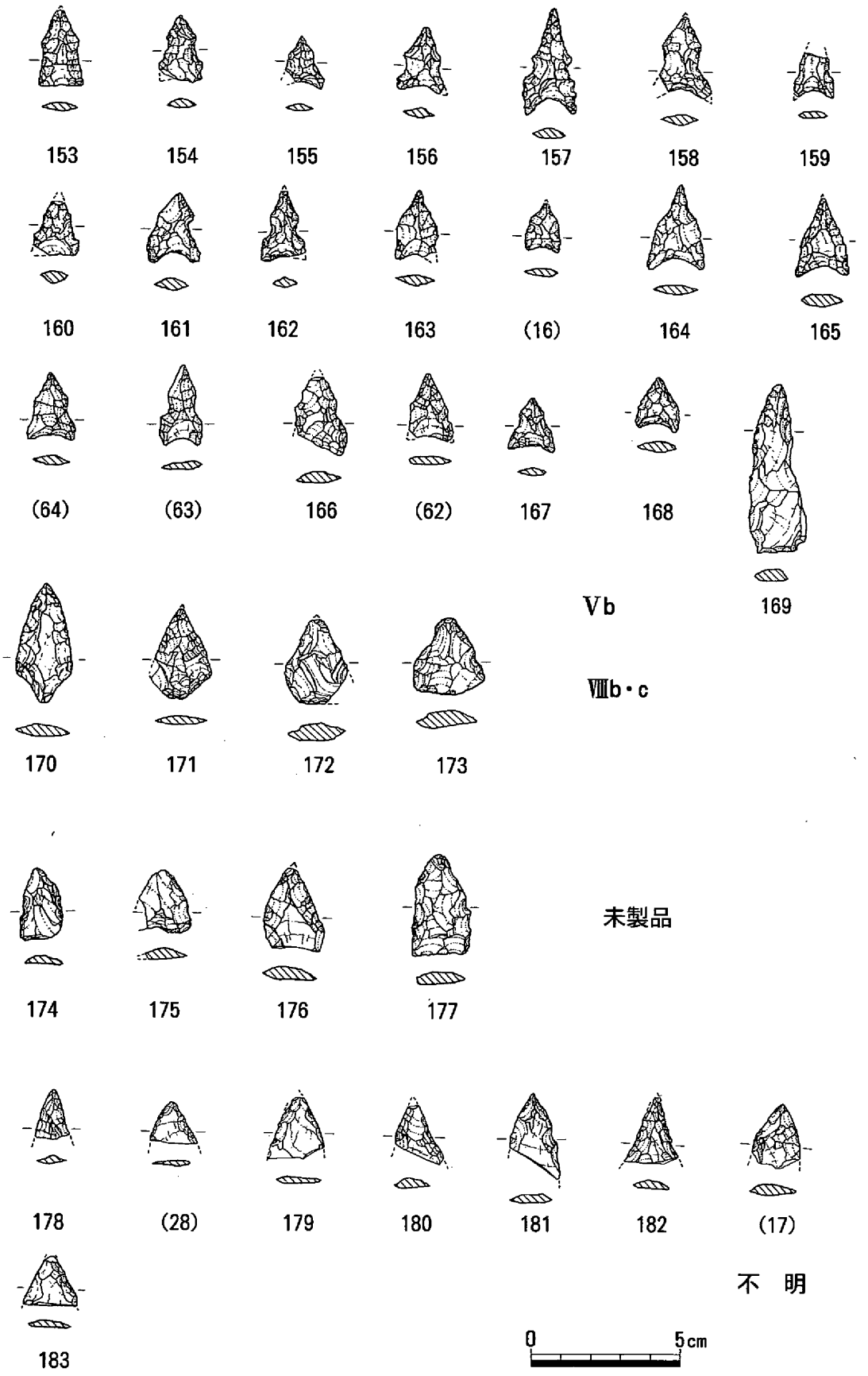
河道内からは、河道16の上層から弥生時代中期、河道18の上層から少数の後期の土器が見られる以外のほとんどは弥生時代前期の土器である。



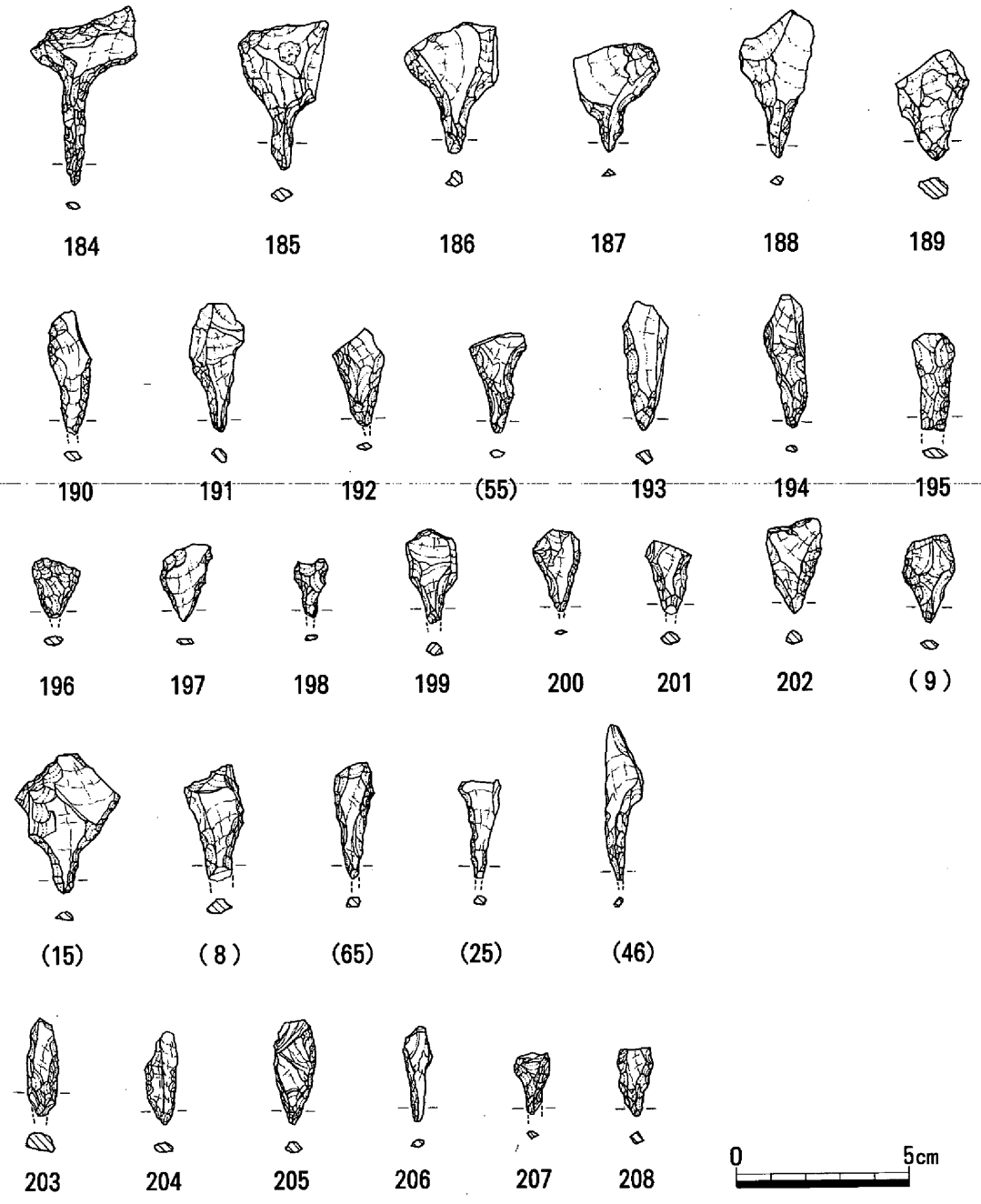
第143図　河道及び周辺出土石器（１－石鏃１）



第144図　河道及び周辺出土石器（２－石鏃２）



第145図　河道及び周辺出土石器（３－石鏃３）

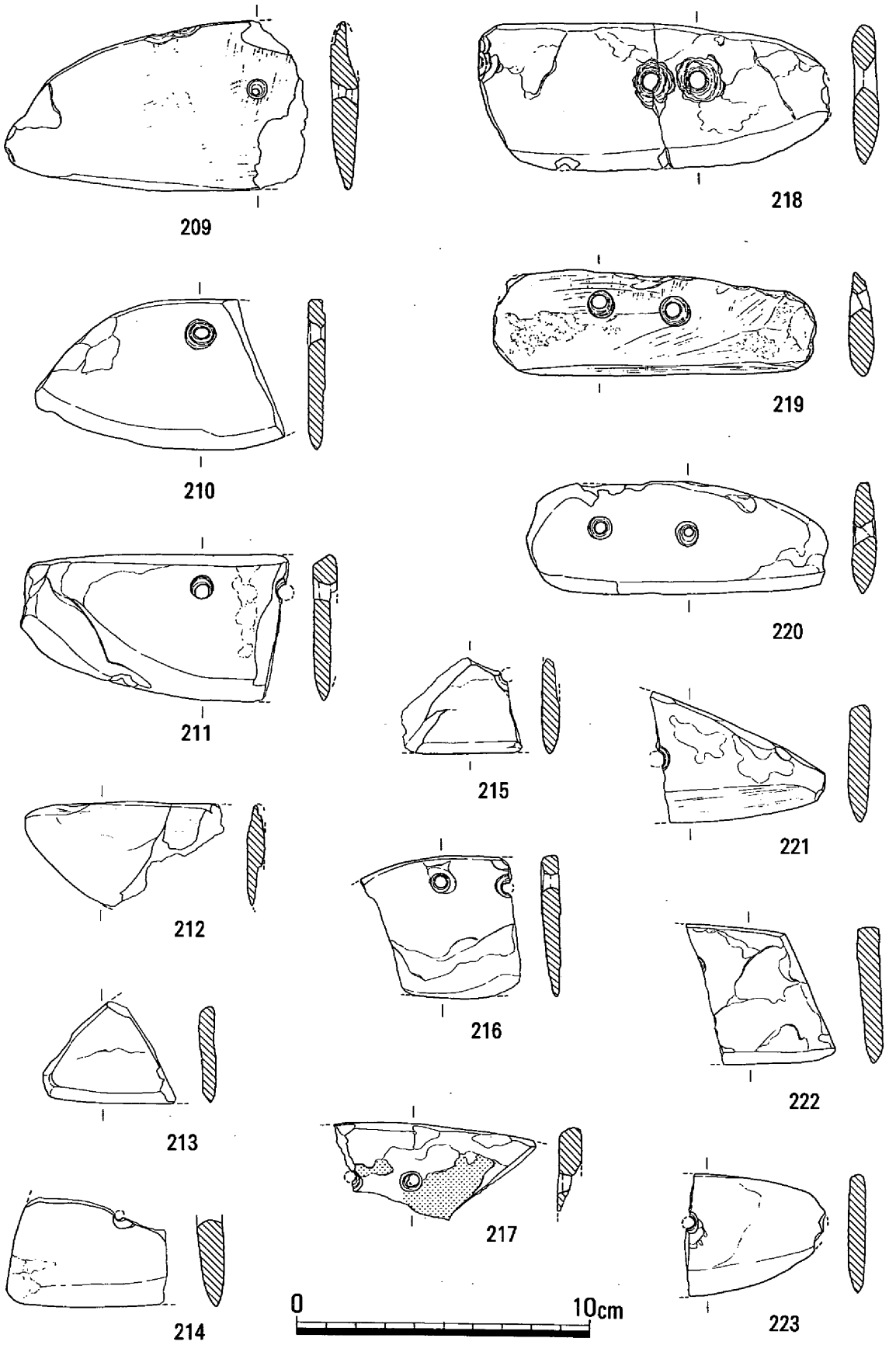


第146図　河道及び周辺遺構出土石器（４－錐）

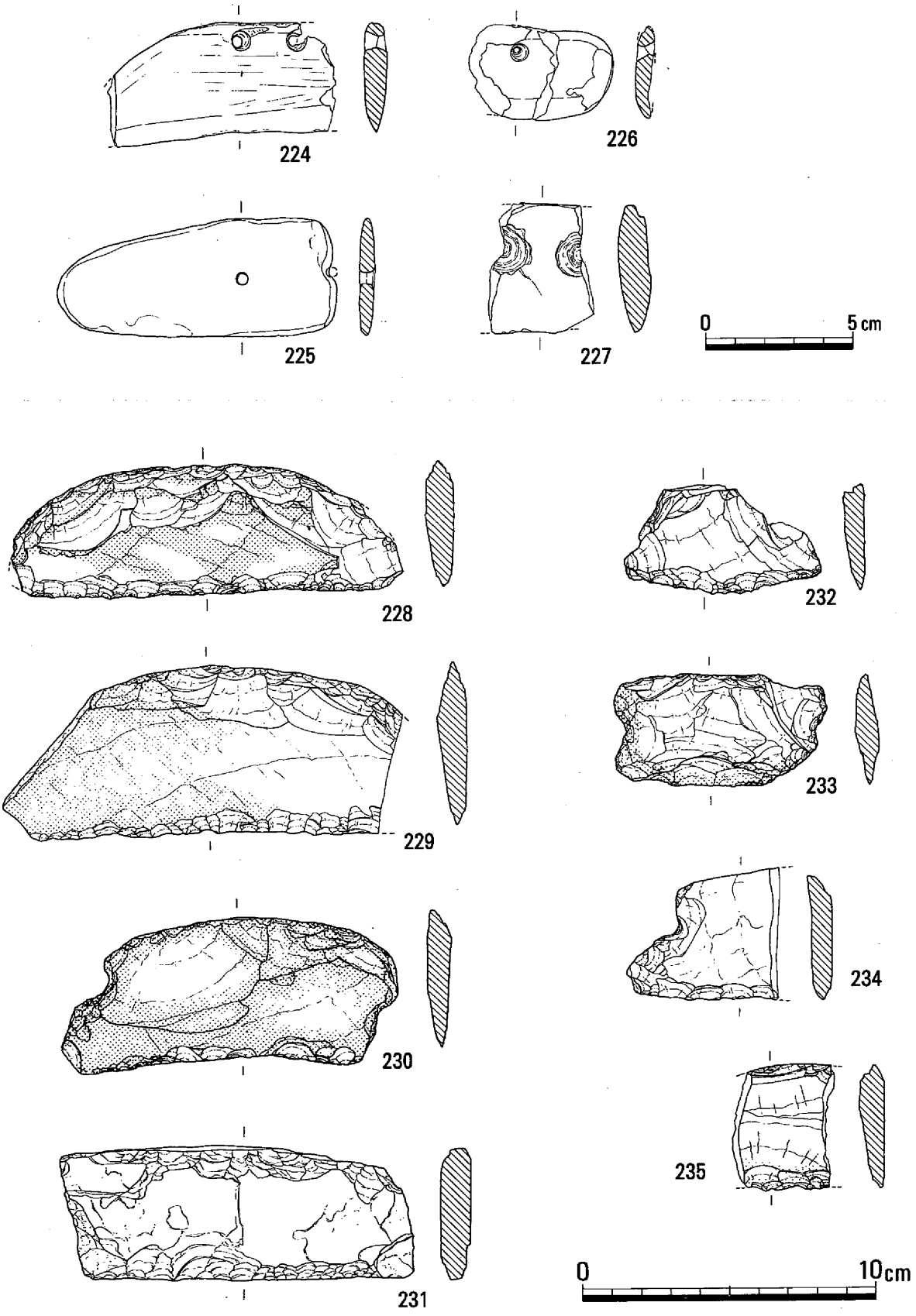
河道出土の石器（第143～155図）

弥生河道内からは弥生時代前期に属すると思われる石鏃、石錐、楔形石器、スクレイパー、磨耗有剥片、磨製石包丁、打製石包丁、石鎌、石匙、蛤刃石斧、抉り入り柱状片石斧、扁平片刃石斧、鑿状石斧、打製石鍬、礫錐、叩き石、凹石、磨石、石皿、砥石などの多くの石器が出土している。

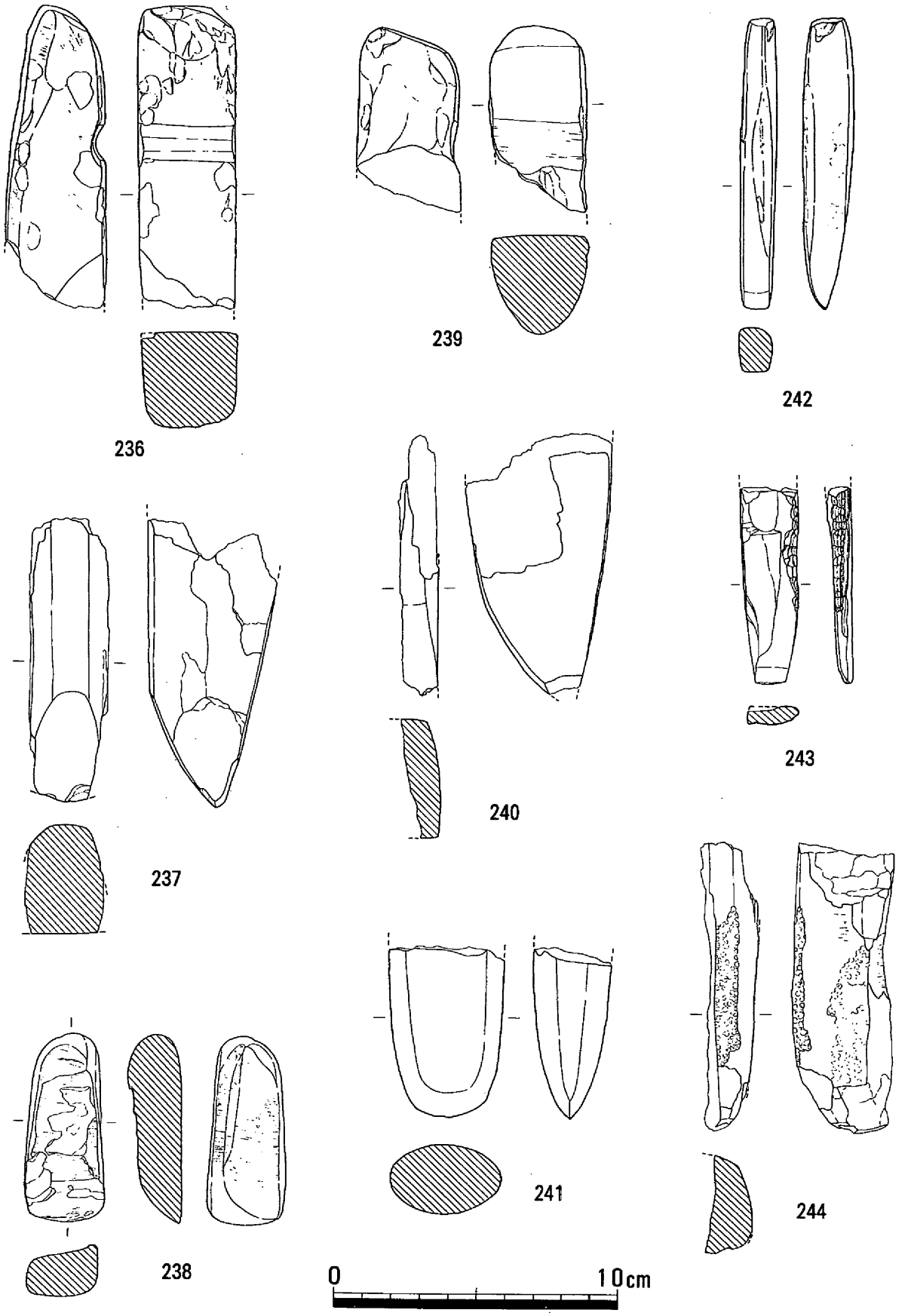
石鏃は、平井典子分類による平基式のⅠa25点（内１点ⅠaL）、Ⅰb２点、凹基式のⅡa35点（内ⅡaL２点）Ⅱb22点、Ⅱd７点、Ⅴb15点、Ⅷb１点、Ⅷc１点、未製品４点、不明８である。**146**のように縄文時代早期に含まれる物も含まれている。



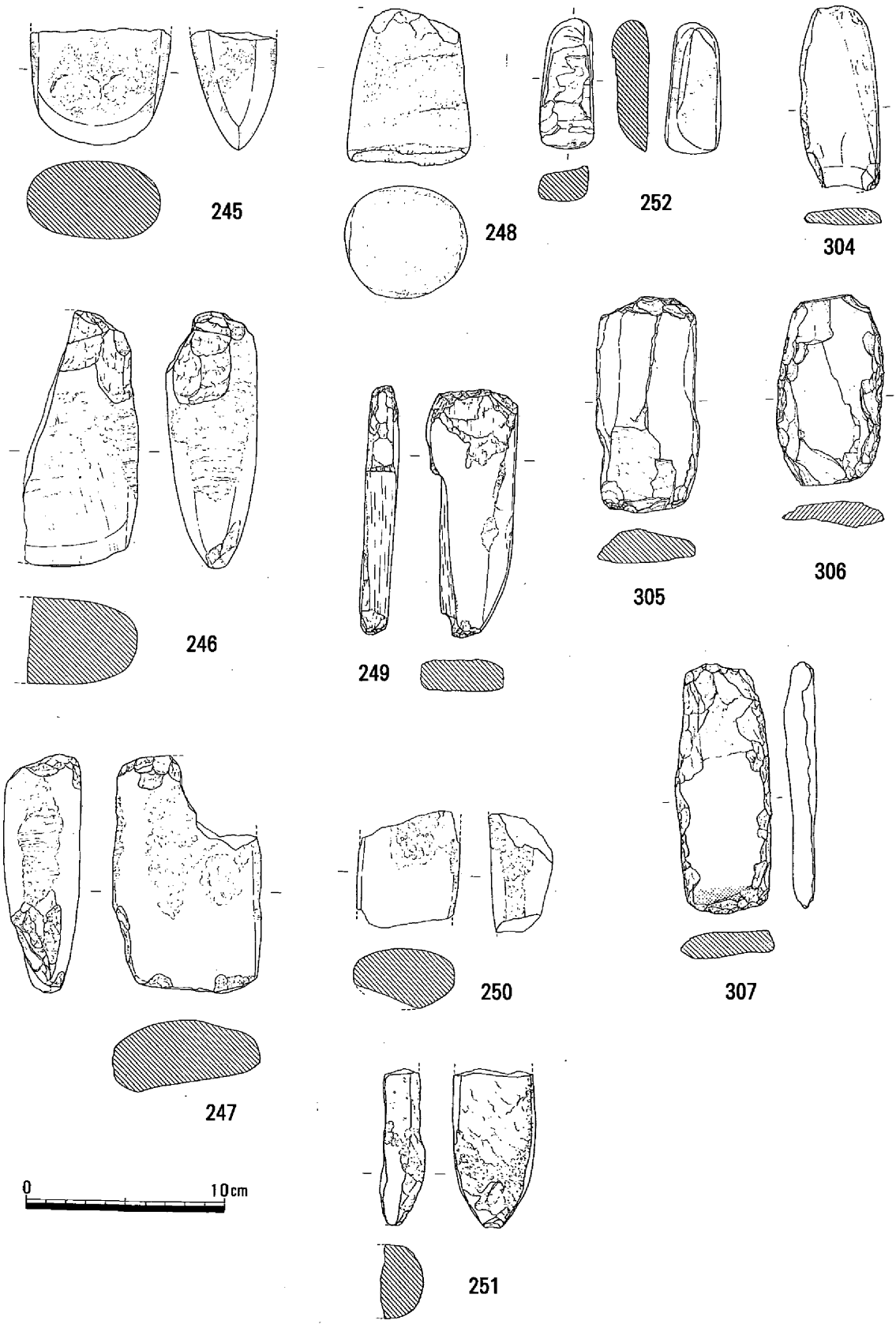
第147図　河道及び周辺出土石器（５－磨製石包丁）



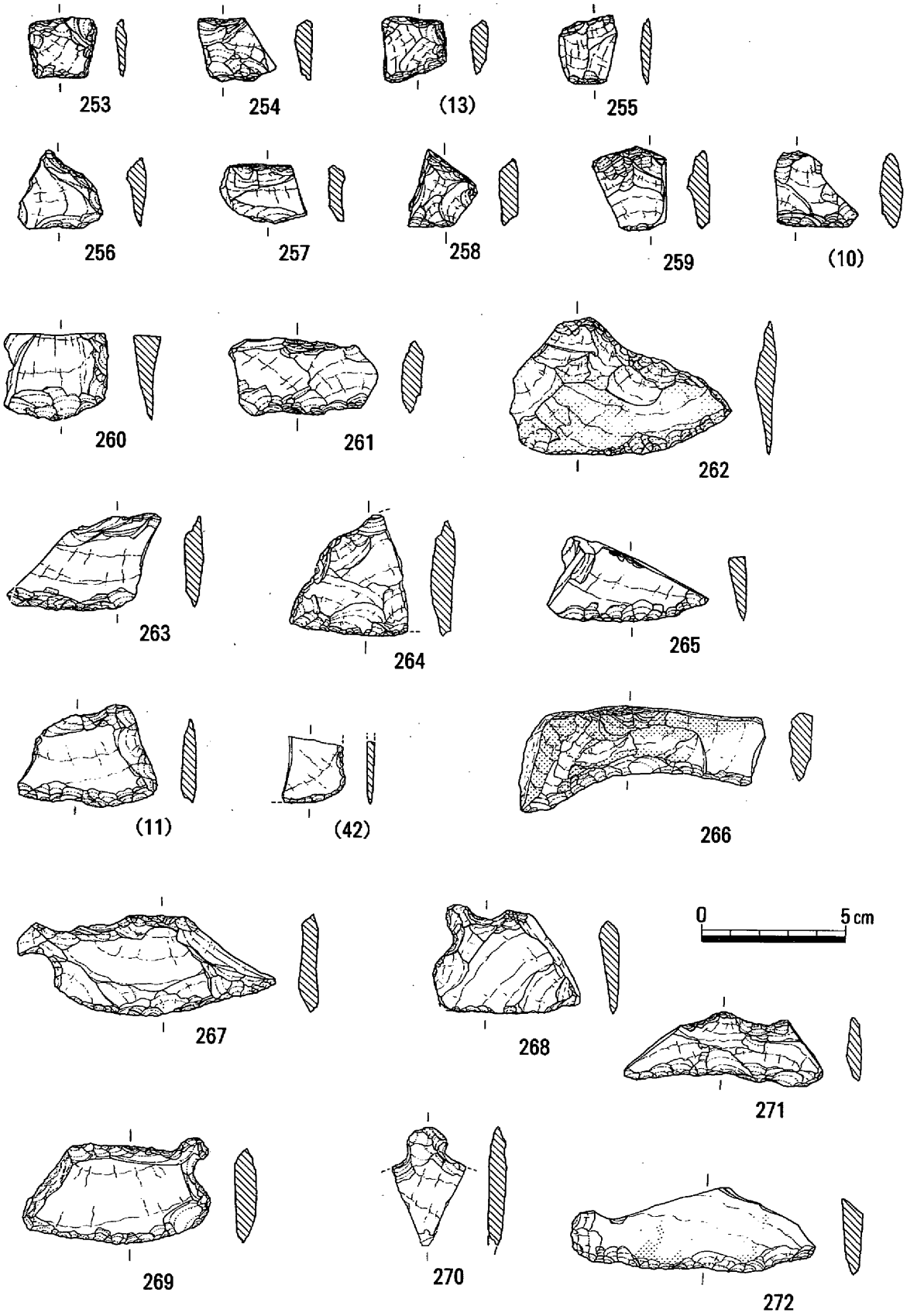
第148図　河道及び周辺出土石器（６－磨製石包丁・打製石包丁）



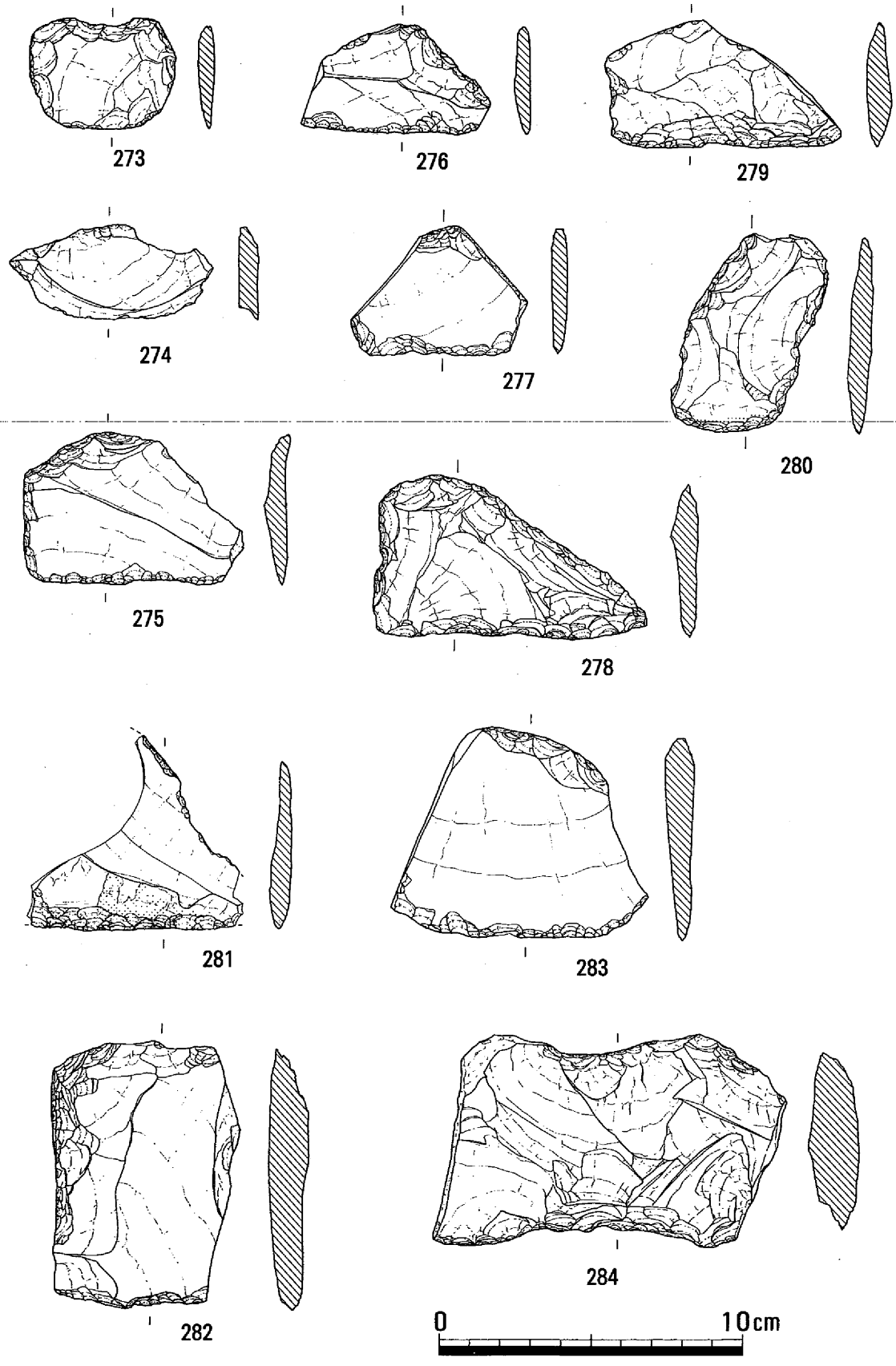
第149図　河道及び周辺石器（７－抉り入り石斧・鑿状石斧他）



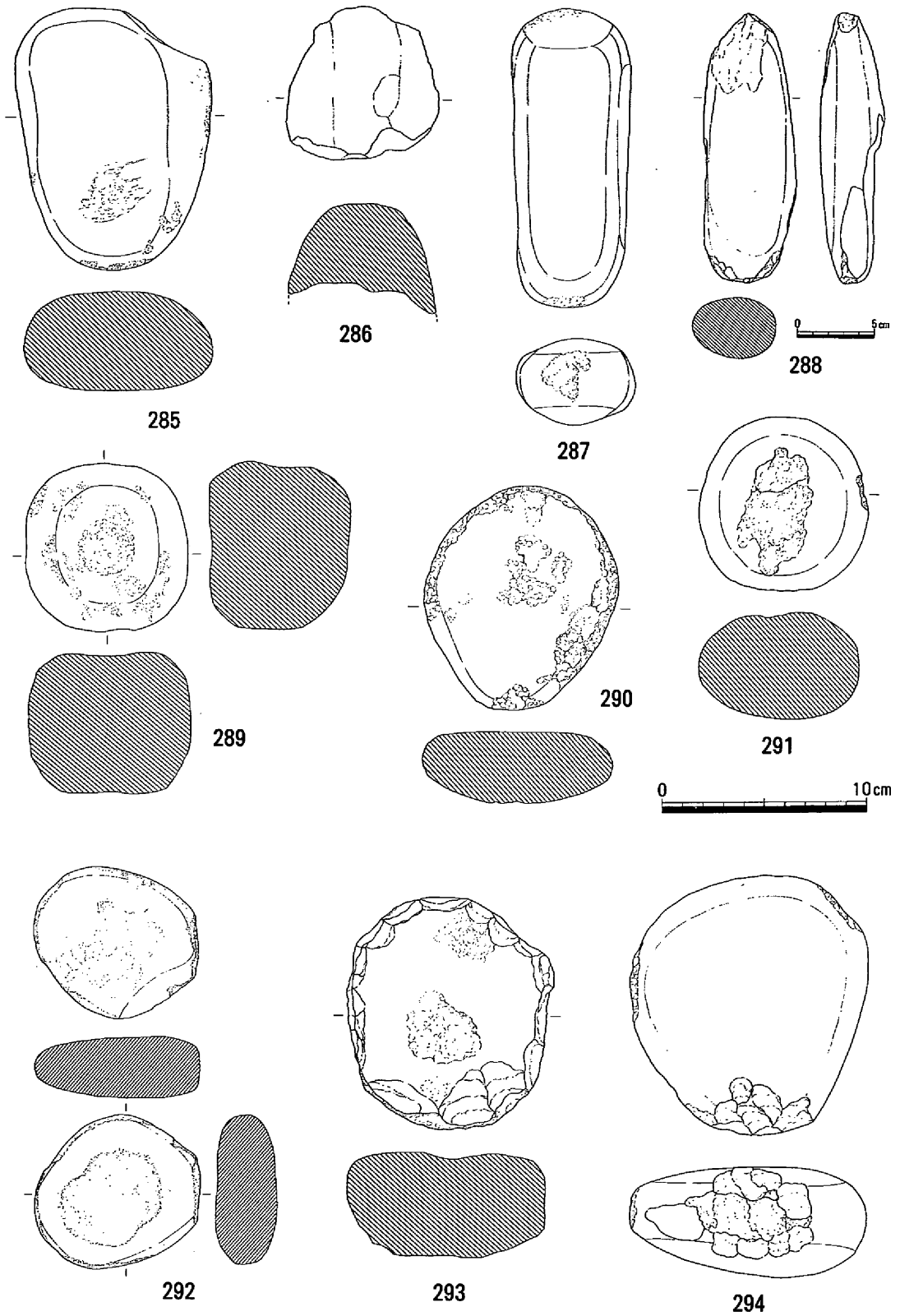
第150図　河道及び周辺出土石器（８－蛤刃石斧・打製石鍬？）



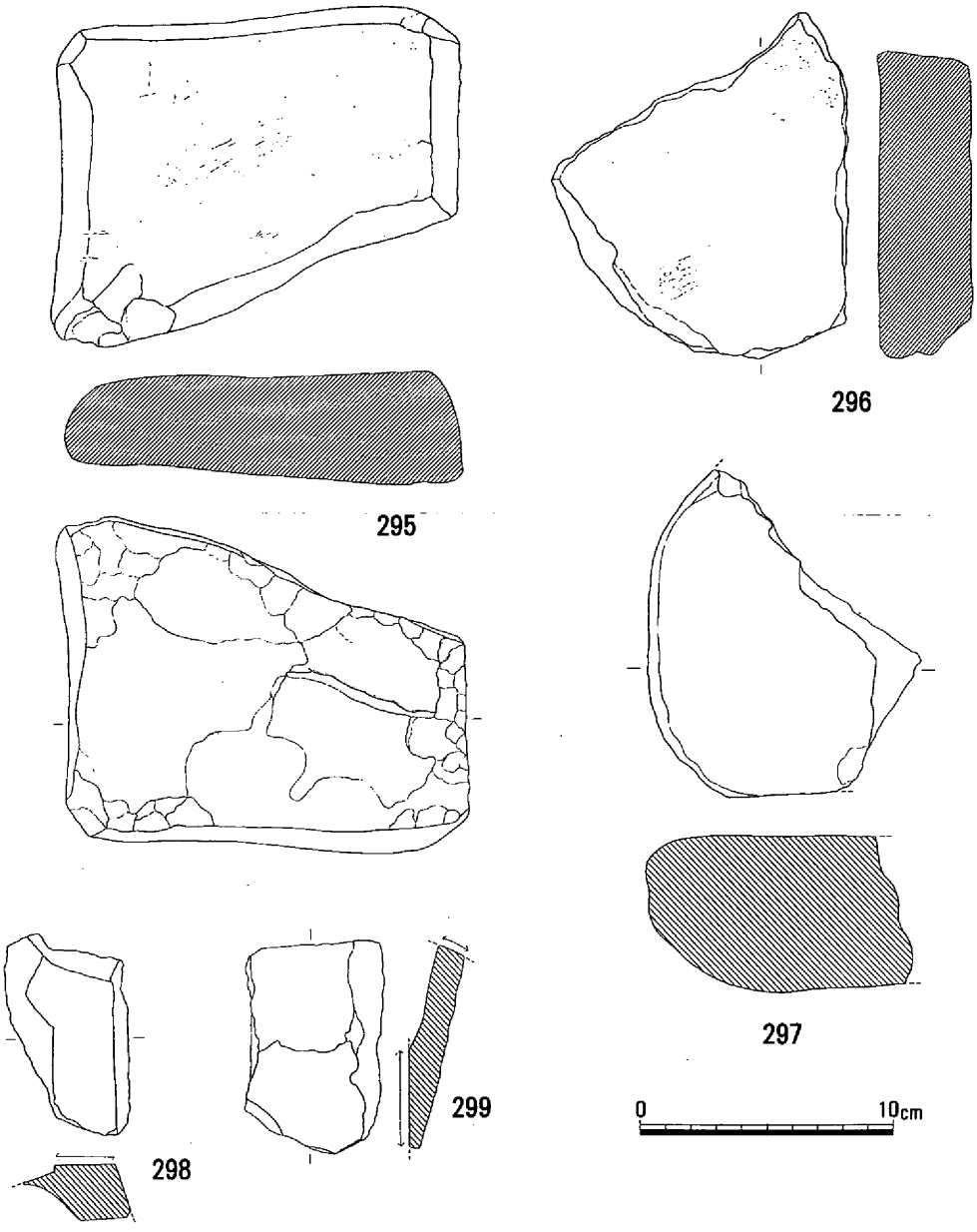
第151図　河道及び周辺出土石器（９－楔状石器・スクレイパー・石鎌・石匙）



第152図　河道及び周辺出土石器（10－スクレイパー）



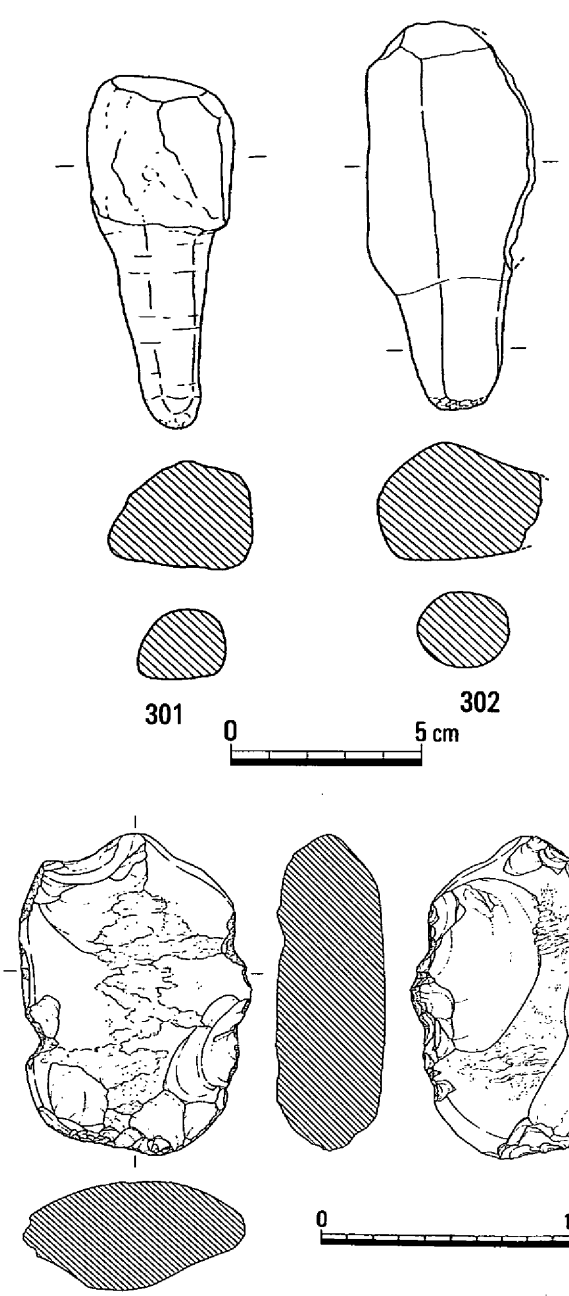
第153図　河道及び周辺出土石器（11－叩き石状・皿状石器）



第154図　河道及び周辺出土石器(12－石皿・砥石)

石錐は20本近くが出土している。Ⅰ類10点、Ⅱ類8点、Ⅲ類2点である。ほかには、楔形石器9点、スクレイパー18点（含磨耗有剥片)、石匙5点、磨製石包丁19点、打製石包丁8点（内抉り入り3点)、太形蛤刃石斧3点、抉り入り柱状片刃石斧4点、柱状鑿形石斧2点扁平片刃石斧1点、石鏃状石器4点、鎌状石器1点、凹石6点、叩き石4点、石皿1点、砥石3点、不明石器1点、さらに特異な物として礫錐2点あり、この**301**は5区河道内からの出土で全長10.3cm、握り部分は6～7cmあり、幅3～4cm、錐部の直径2～2.2cmである。11区河道内から出土した**302**は、全長9.8cm、握り部は不等辺の五角形状を呈し2.4～3cmある。錐部は6cmほどあり、先端部での直径1.2cm、基部で2.8cmを測る。このような礫錐は、大阪府池上遺跡、福岡県板付遺跡、曲り田遺跡などで出土している[1]。

註1　－平井　勝「弥生時代の石器」－考古学ライブラリー64　ニュー・サイエンス社　1991

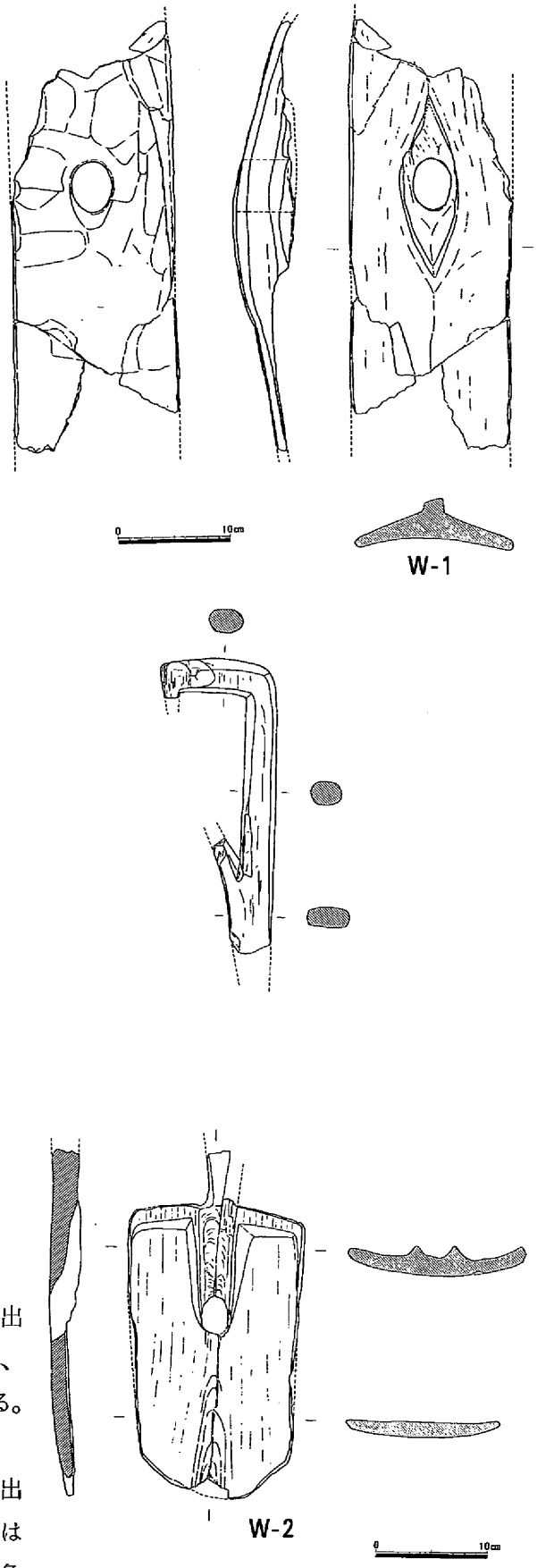


第155図　河道及び周辺出土石器(13－礫錐・不明石器)

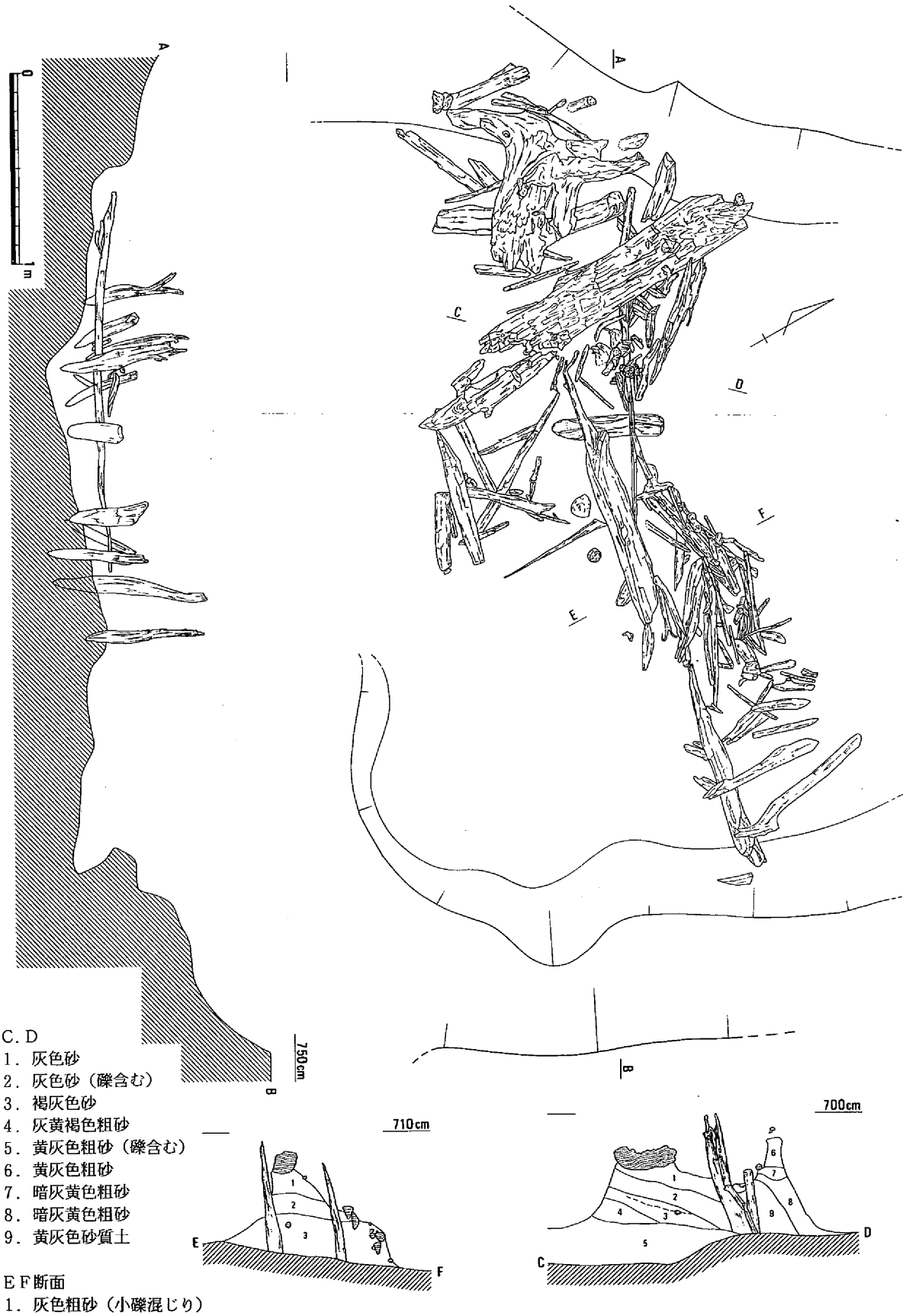
河道出土の木製品（第156図）

鍬**W-1**は、５区河道の井堰上手のたまり部分から出土したもので、両端部を欠いている。全長40cm前後で、幅14cm、厚さは風呂部分で12cm、両端部は２cm程である。柄穴は下側部でわずかに鈍角になるが、直角に近い。

組合せ式の鋤**W-2**は、鍬と同じ５区井堰周辺から出土している。鋤先部の長さ25cm、幅14～16cmで接合部は10cm程突出する。柄棒は１木から削り出され先端が三角形を呈する。柄棒の直径は７cm程である。



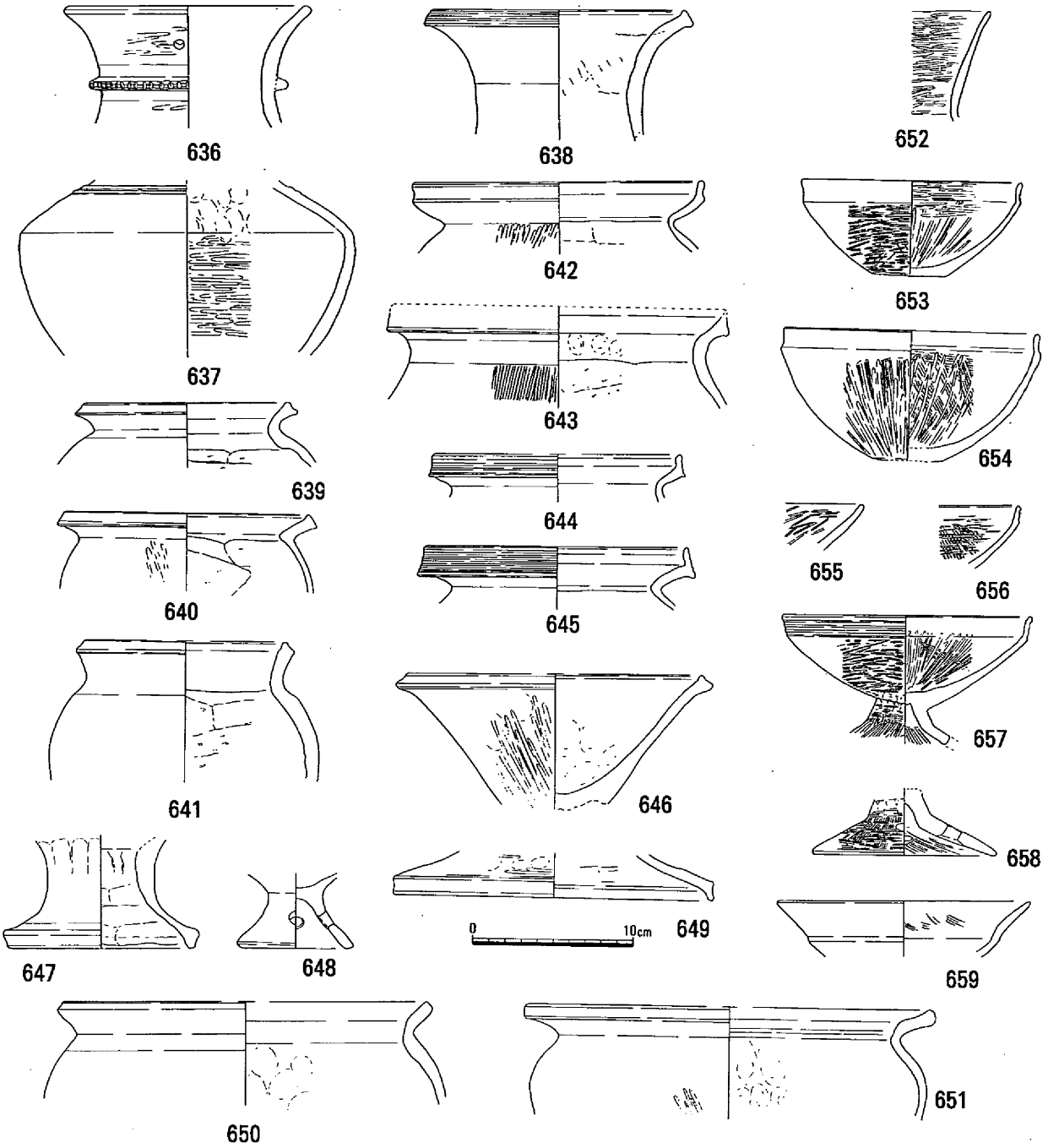
第156図　６区弥生河道出土木器(1/6)



C．D
1．灰色砂
2．灰色砂（礫含む）
3．褐灰色砂
4．灰黄褐色粗砂
5．黄灰色粗砂（礫含む）
6．黄灰色粗砂
7．暗灰黄色粗砂
8．暗灰黄色粗砂
9．黄灰色砂質土

ＥＦ断面
1．灰色粗砂（小礫混じり）
2．灰色砂
3．礫

第157図　１・２区弥生後期河道１内井堰平・断面図(1/30)



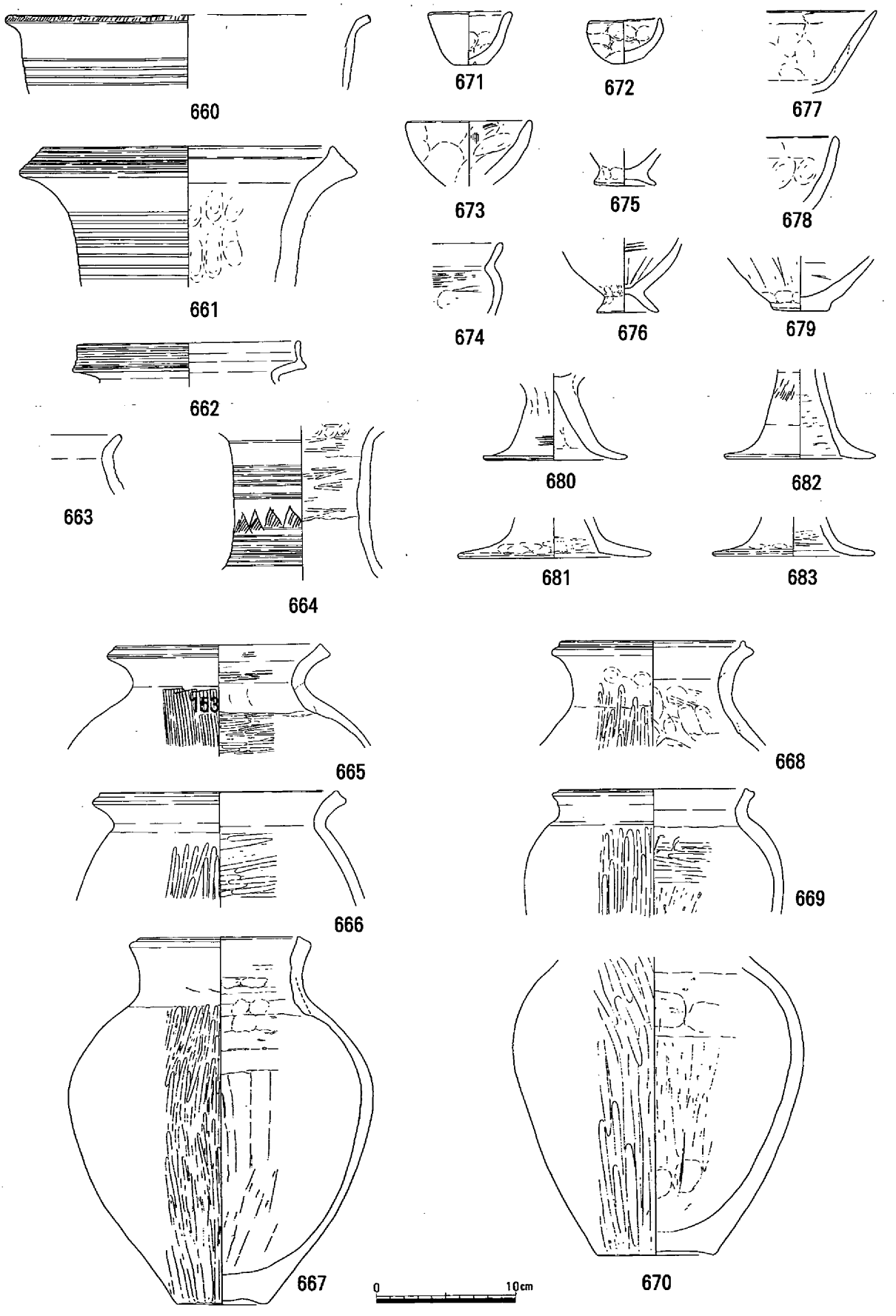
第158図　１区河道１第４層出土遺物(1)

（２）弥生時代後期の河道

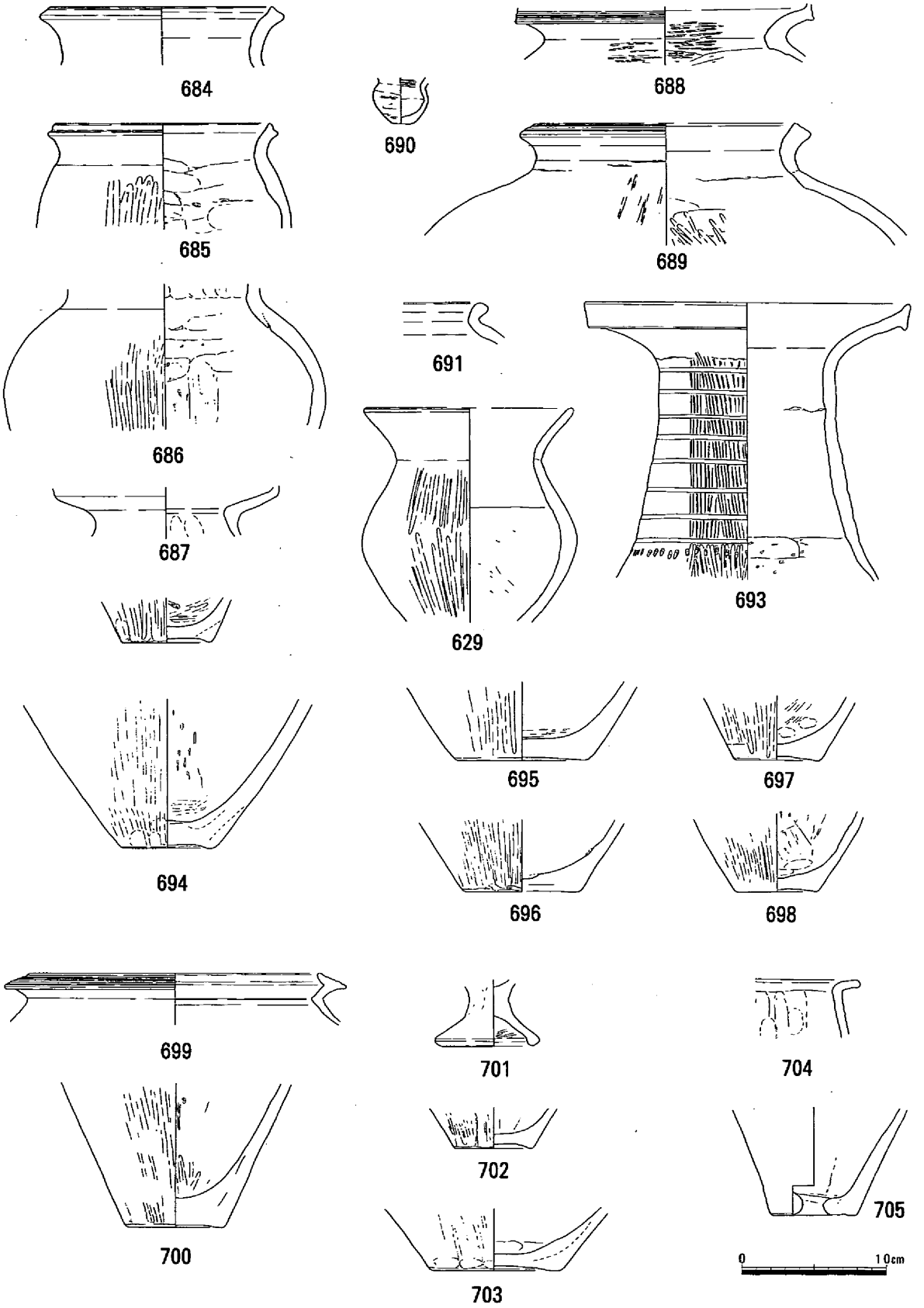
調査区北端の１，２区から４区付近の弥生時代後期の旧河道は、大きくS字状に緩く蛇行しながらほぼ南北に縦断している。２区付近では重複により判然としないが、総検出長80ｍ、幅５～７ｍ、深さ100～120㎝ほどである。断面は逆台形状で、埋土は粗砂流木や、腐植土をかなり含んでいる。１区北端では井堰を検出した。

井堰は１区の旧河道中央付近で検出した。この付近は河道が大きく南に曲折する付近に当たっており上面には弥生時代終末前後から古墳時代後期の河道が井堰埋没以降に流走している。

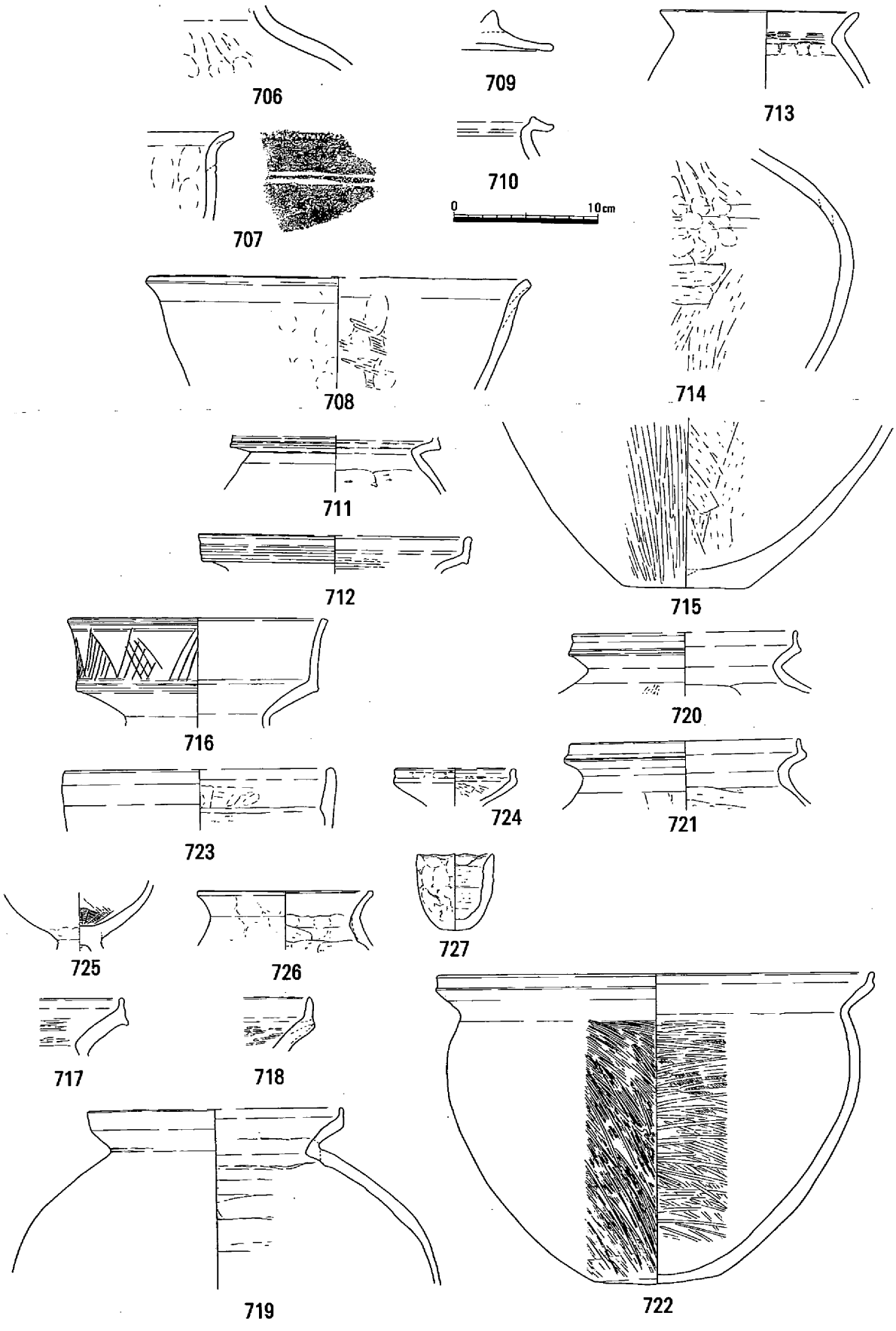
井堰は幅500㎝の河道に直径５～10㎝前後の杭を10数本打ち込み河道を若干く字状に堰き止めるよ



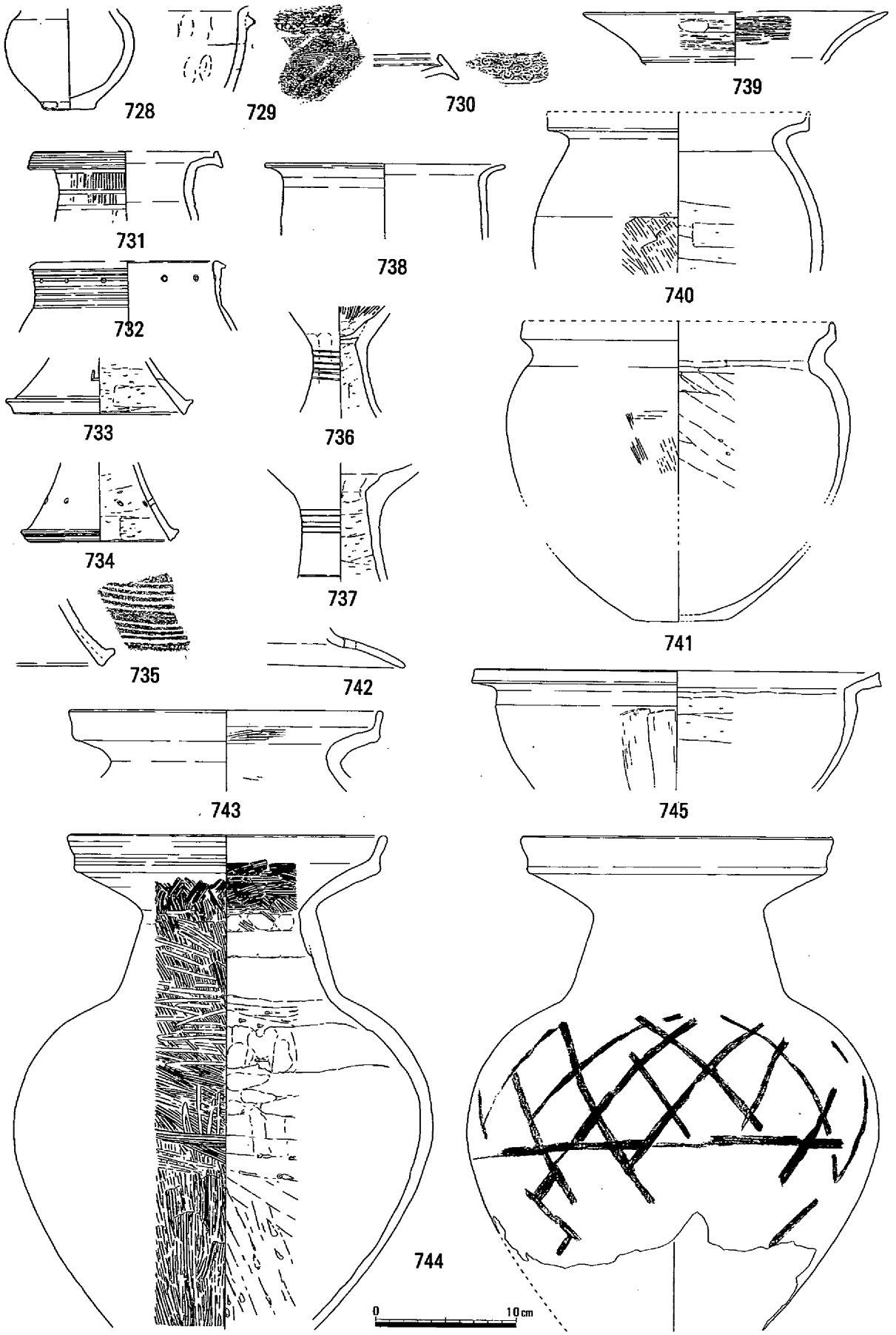
第159図　１区河道１第４層出土遺物(2)



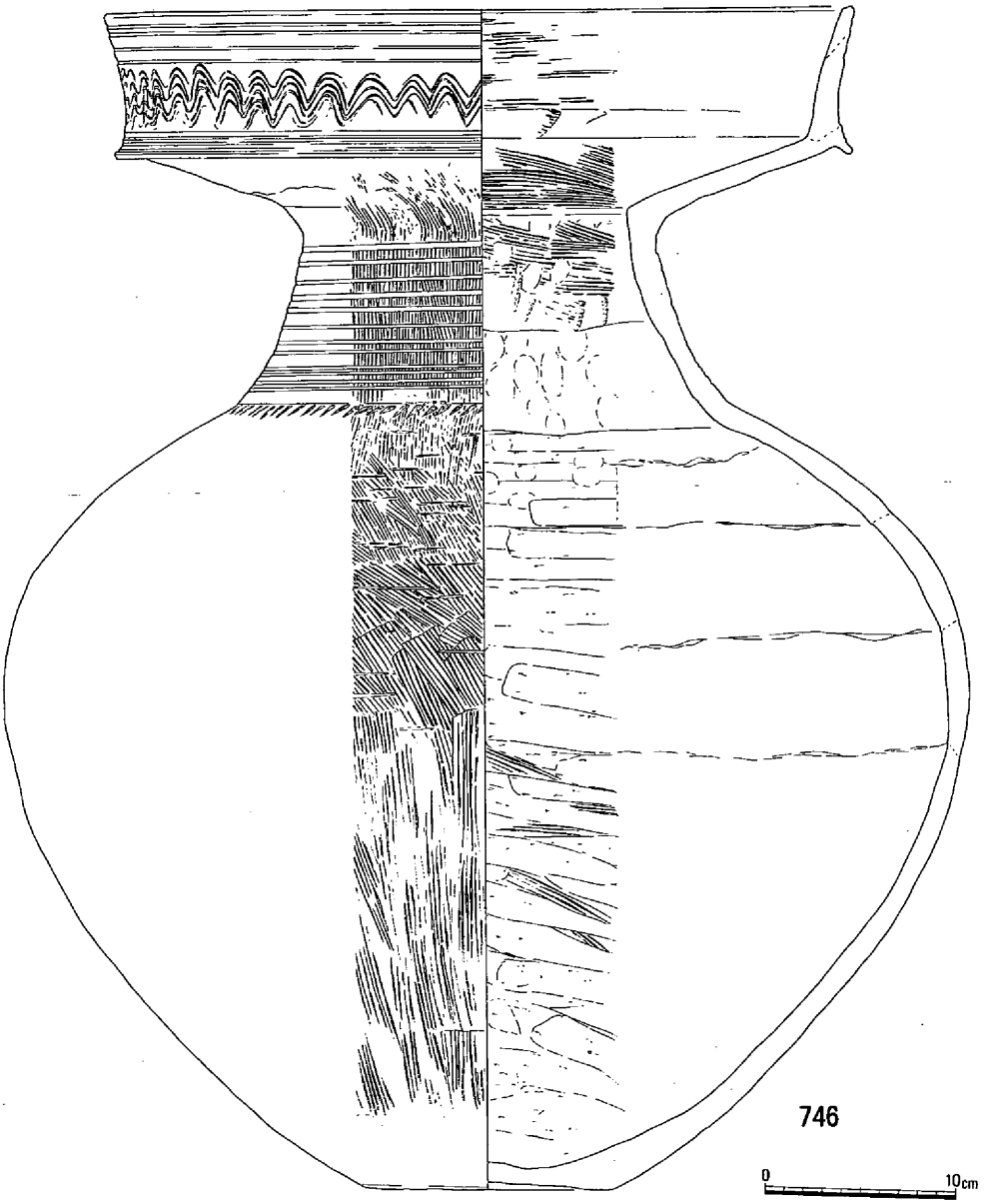
第160図　１区河道１第４（５・６）層出土遺物(3)



第161図　３区河道１第４層出土遺物(1)

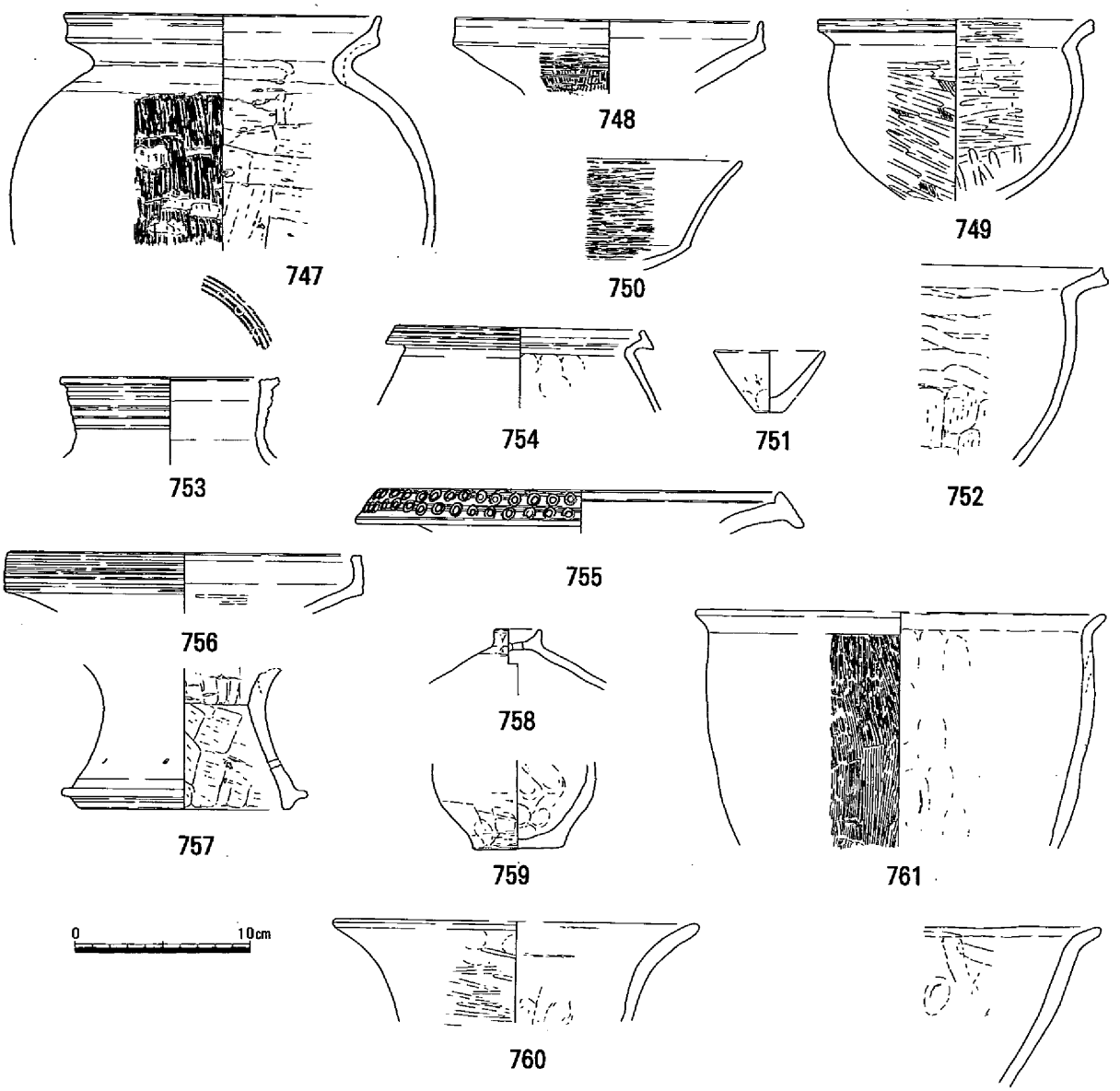


第162図　２区河道１第（３）４（５）層出土遺物(1)



第163図　２区河道１第（３）４（５）層出土遺物(2)

うに横木を縫うように渡している。さらに上流側には横木に丸太材を立て掛けるように等間隔に並べている。杭の先端が最下層面まで達していないものが多く、設置が河道の若干埋没後か、もしくは盛り土等の構造があったか判然としない。河道検出面は海抜740cm付近、杭列の残存先端は海抜700ｍである。なお、上流５ｍ付近の倒木の下層にも木材の堆積があり別の井堰を想定したが、杭の打ち込みが皆無であること等から倒木に流木がひっかかったものと判断した。１区の井堰設置時期の河道出土遺物は、第160図第５、６層が中心である。細片が多いが器種に壺形土器、甕形土器が出土している。長頸壺等の口縁端部の形状や上層河道である第１，２層の出土遺物の特徴等から弥生時代後期後半の時期であろう。この他、２区の河道から出土の壺形土器744の体部外面には籠の痕跡が格子に残っている。（山磨）

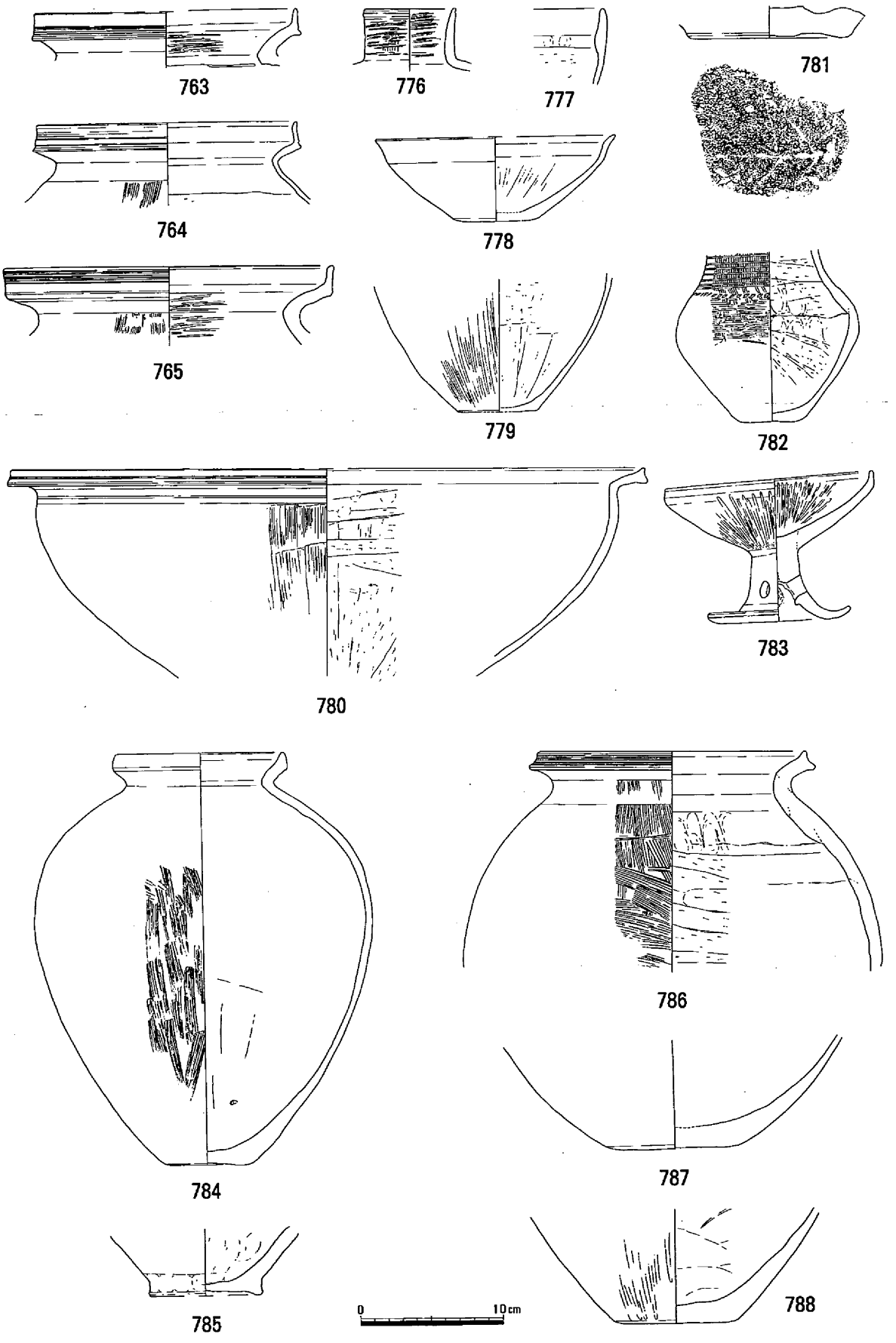


第164図　２区河道１第５・６層出土遺物(3)

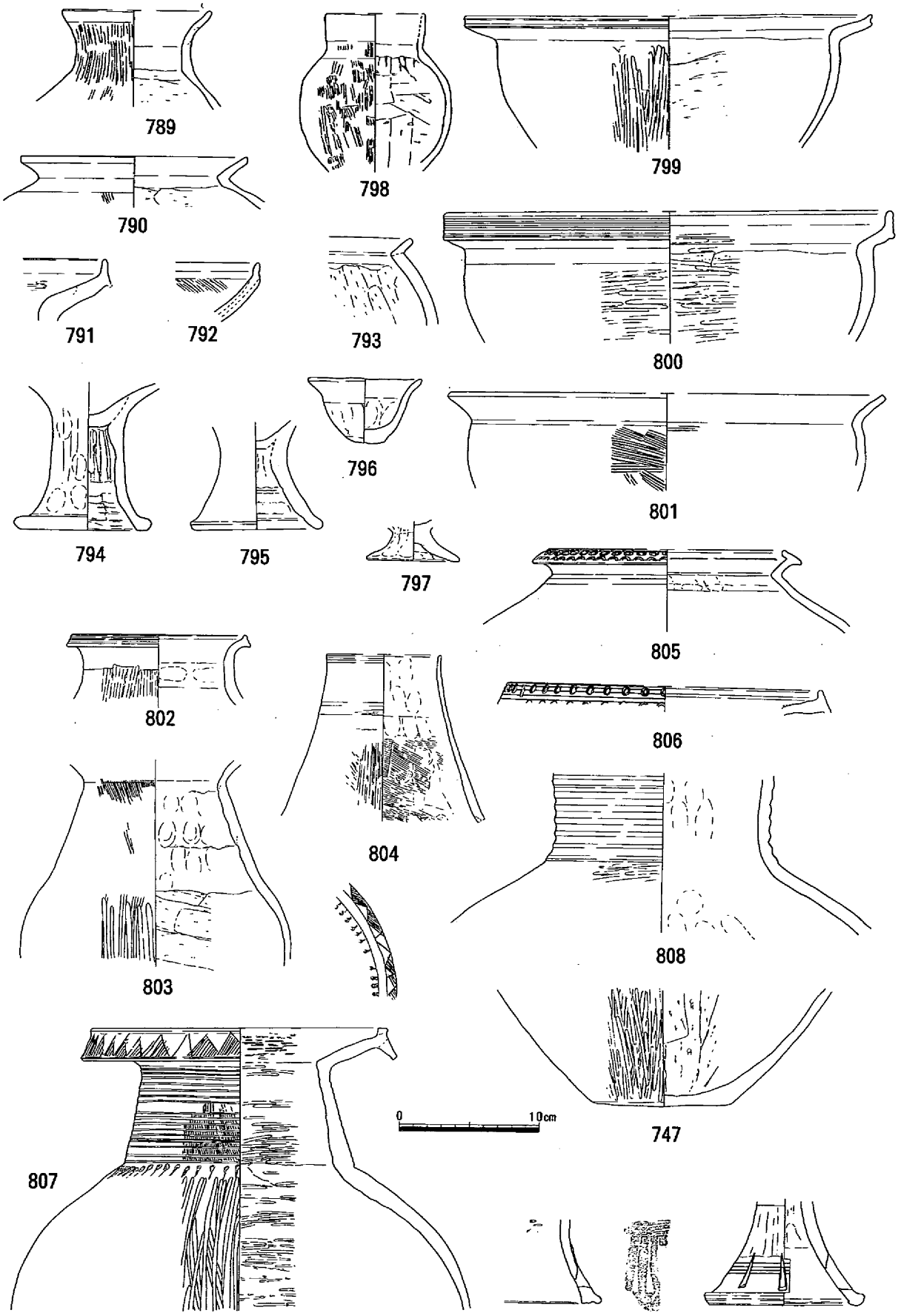
（３）古墳時代の河道

河道24

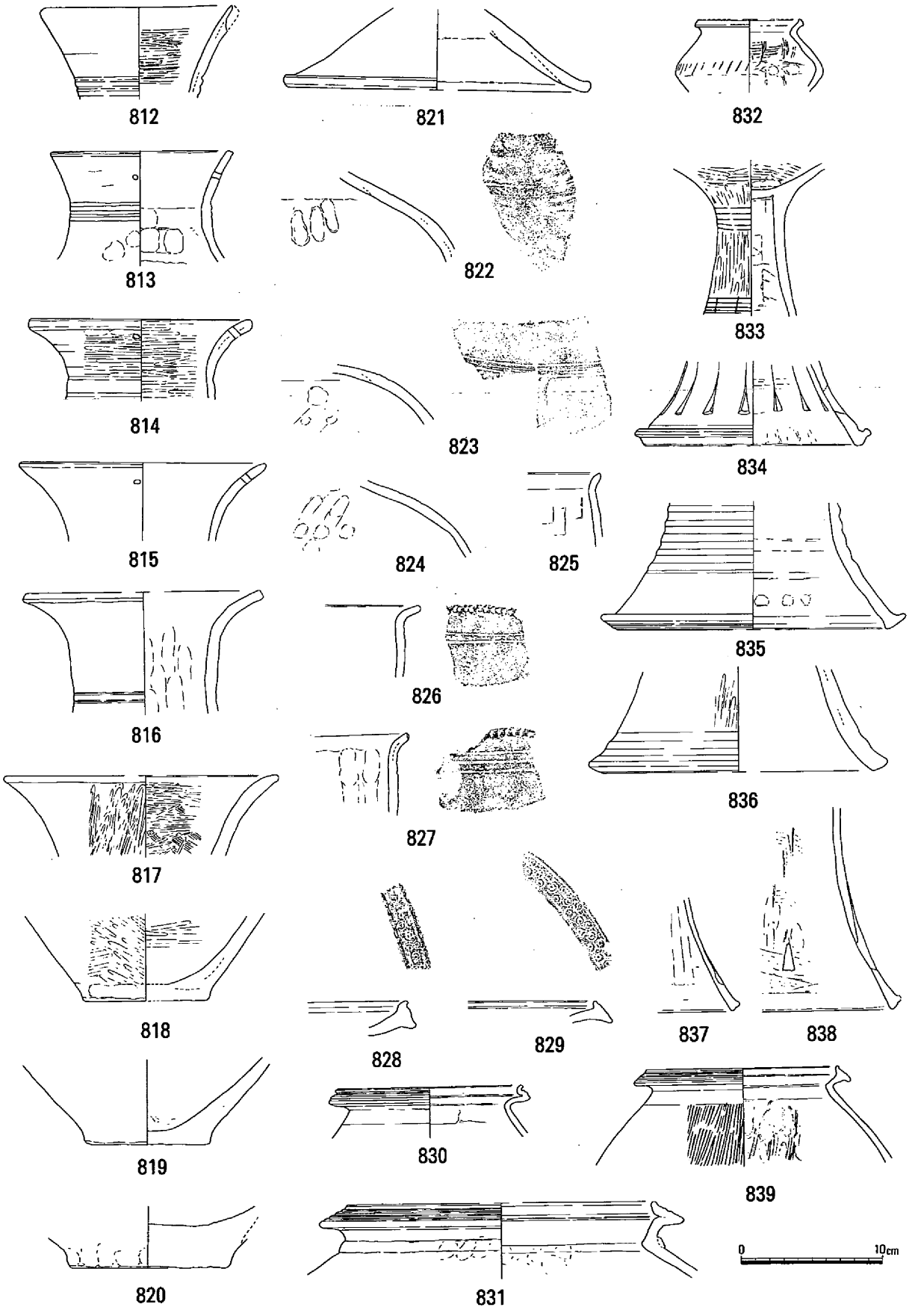
この河道は、２区北東角から始まり１・４・６・７・９・10区の南西角まで、全調査域を延々220ｍの区間を大きく蛇行を繰り返しながら南に流れる。幅は４ｍ前後であるが、最も広い所で７～８ｍ、狭い所で２ｍ程である。深さも一定しないが、深い所で60～80㎝、浅い所では40㎝前後である。弥生河道が砂層を基本とするのに対してこの河道は、灰黄褐色粘質土から黒褐色粘質土層から成っている。この河道内からの出土遺物は、１・２区は河道上層（１～４層）として取り上げた物（第176・177・178・179図）がこれに当たる。すべての流路が弥生河道とほとんど同じ流路を取り下層の物が混在している場合いが多い。特に４区（第180・182～186図）、５区、７区（第133図）からは多量の遺物が出土している。主な出土遺物は、土師器壺、甕、甑、高杯、ミニチュア土器、須恵器杯蓋・身・甕・樽形瑞・高杯・短頸壺など５世紀後半から６世紀前半のものである。（伊藤）



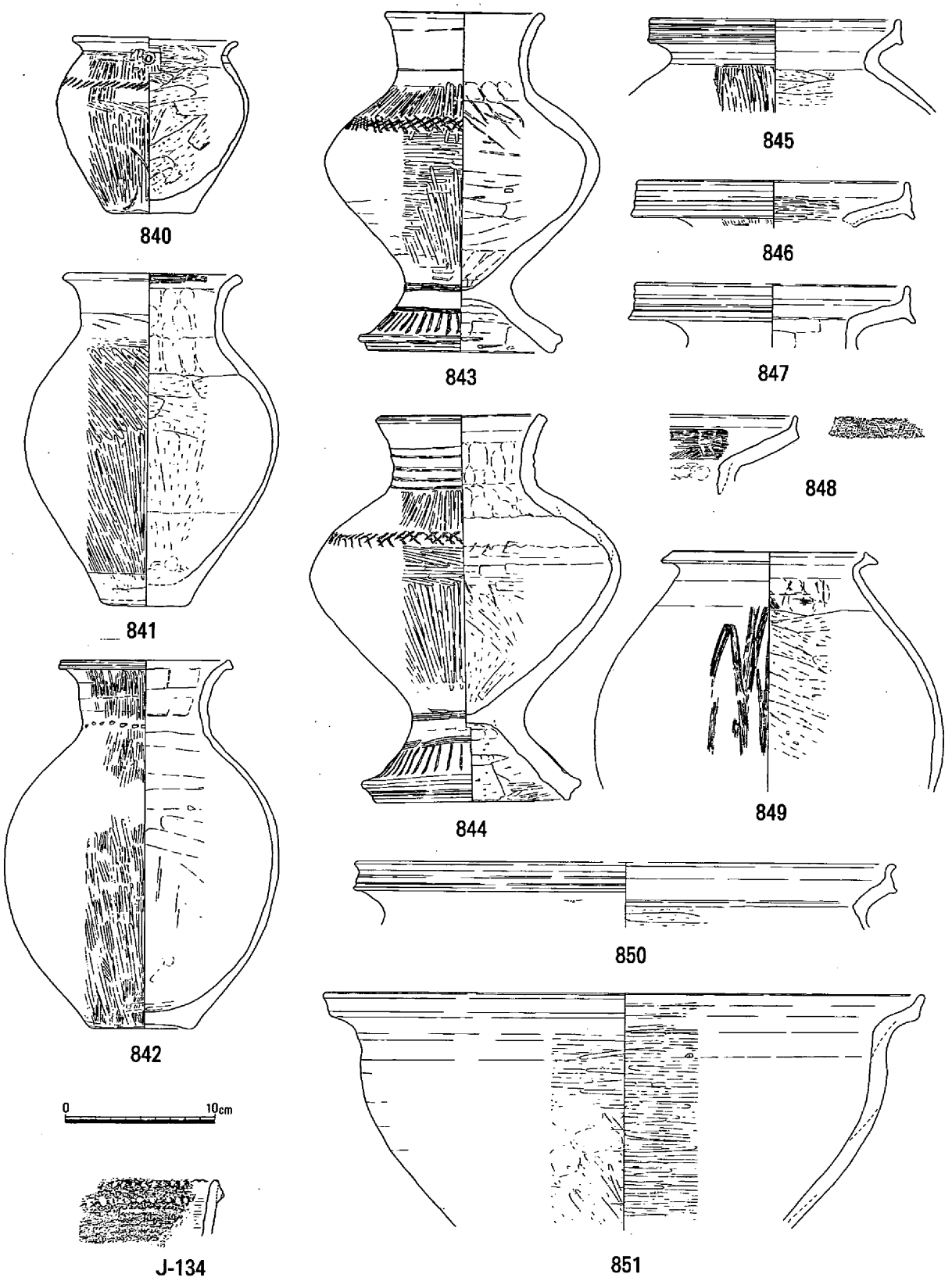
第165図　２区河道１第５・６層出土遺物(4)



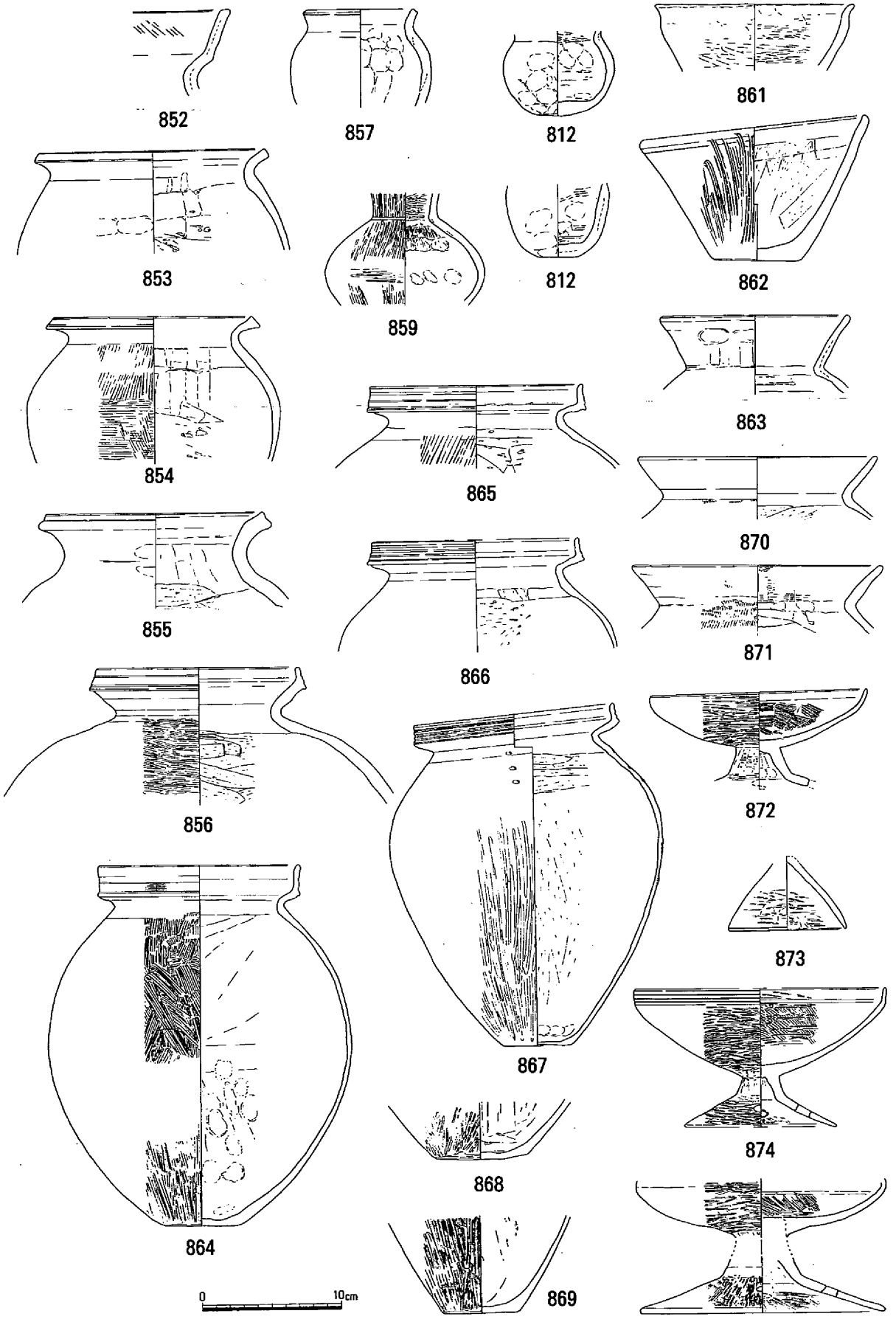
第166図　２区河道１第３・４層出土遺物



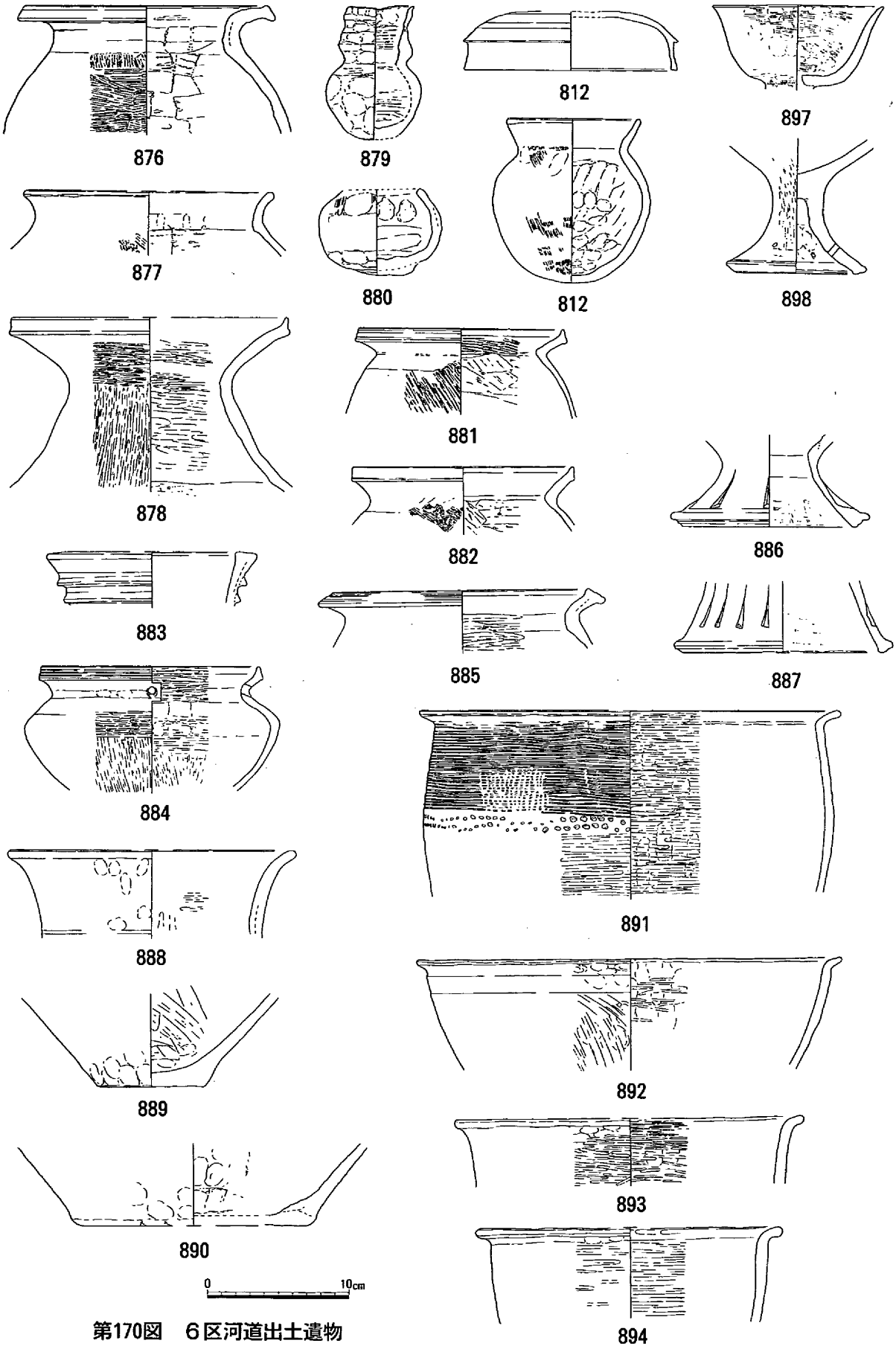
第167図　４区河道22出土遺物(1)



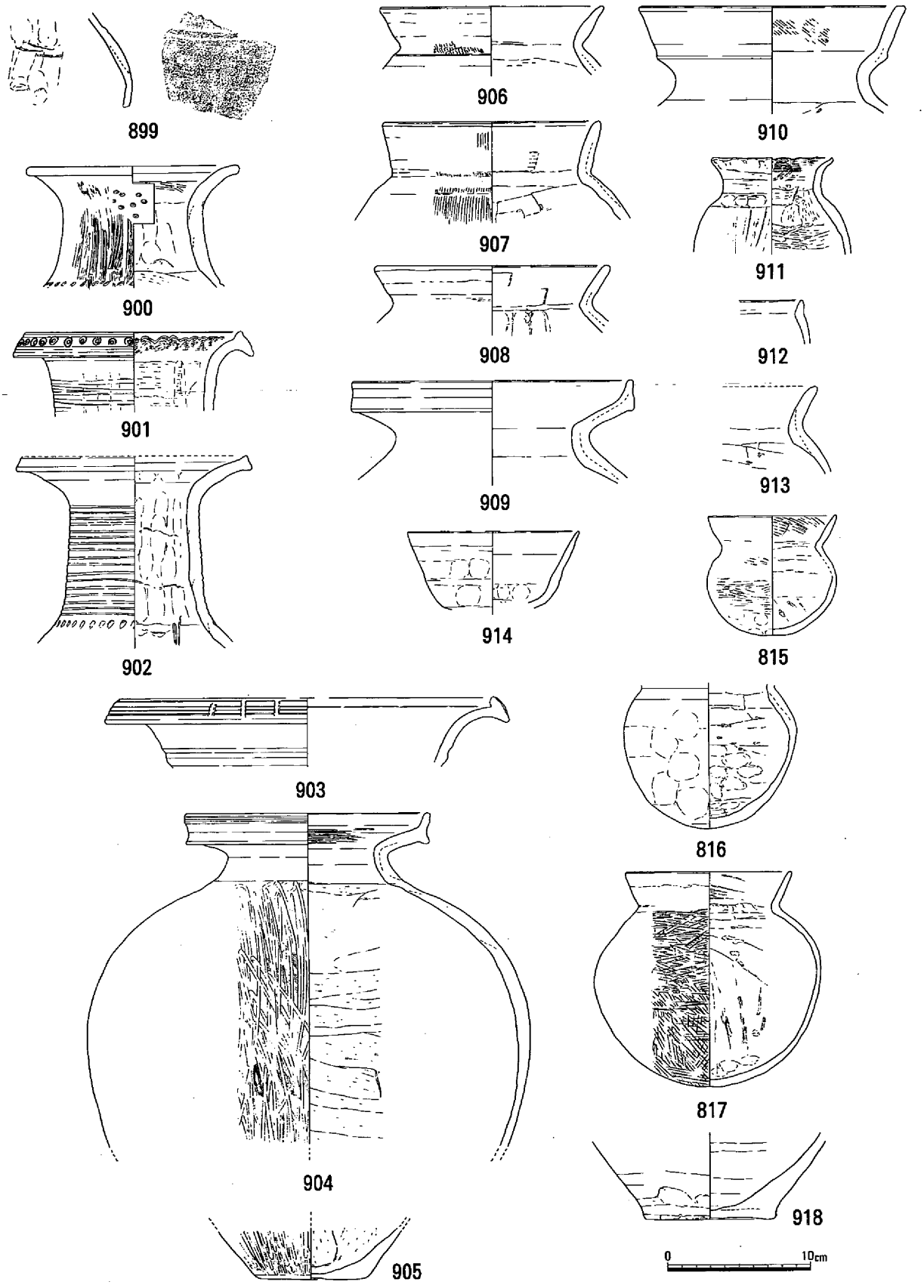
第168図　４区河道22出土遺物(2)



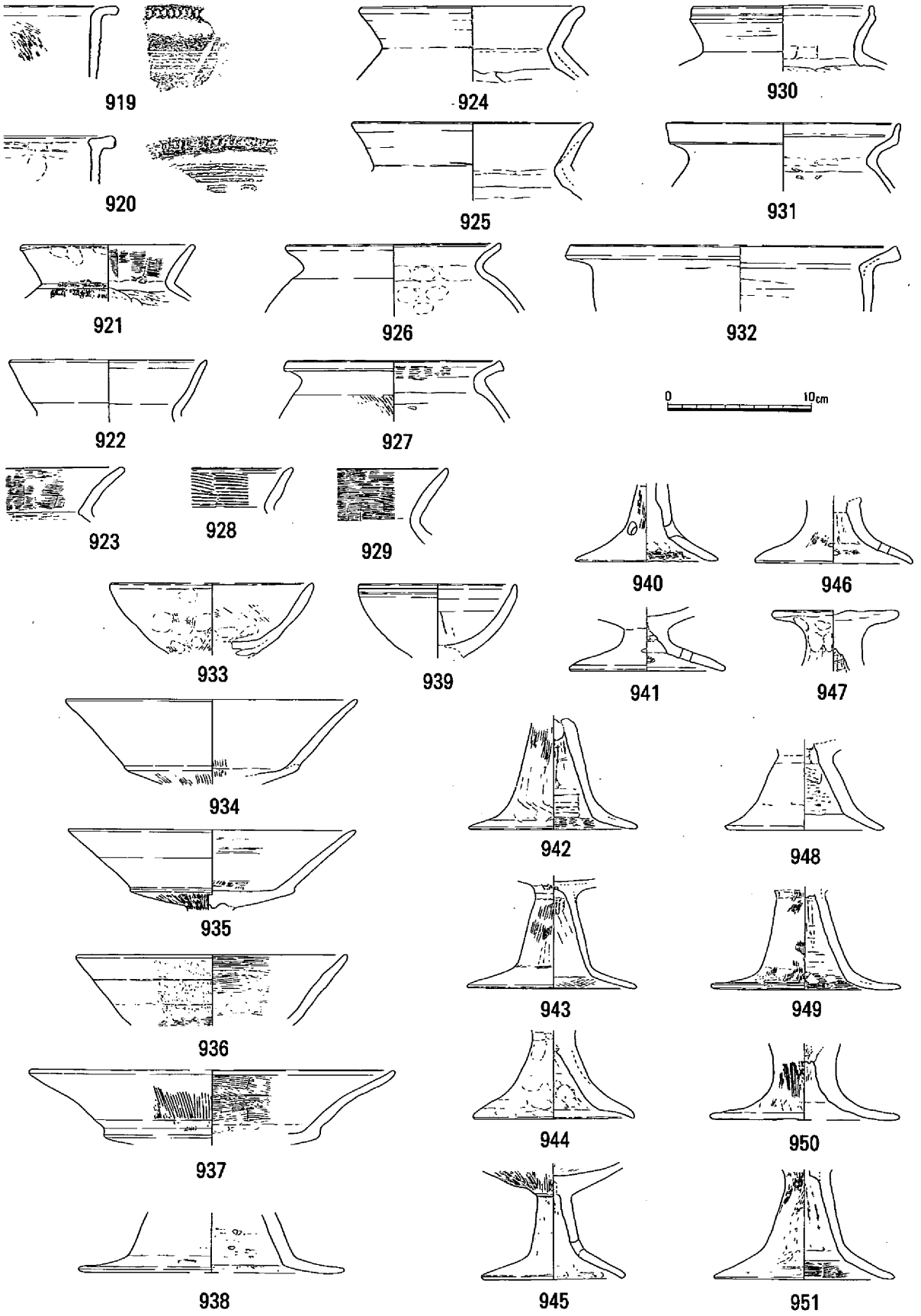
第169図　４区河道22出土遺物(3)



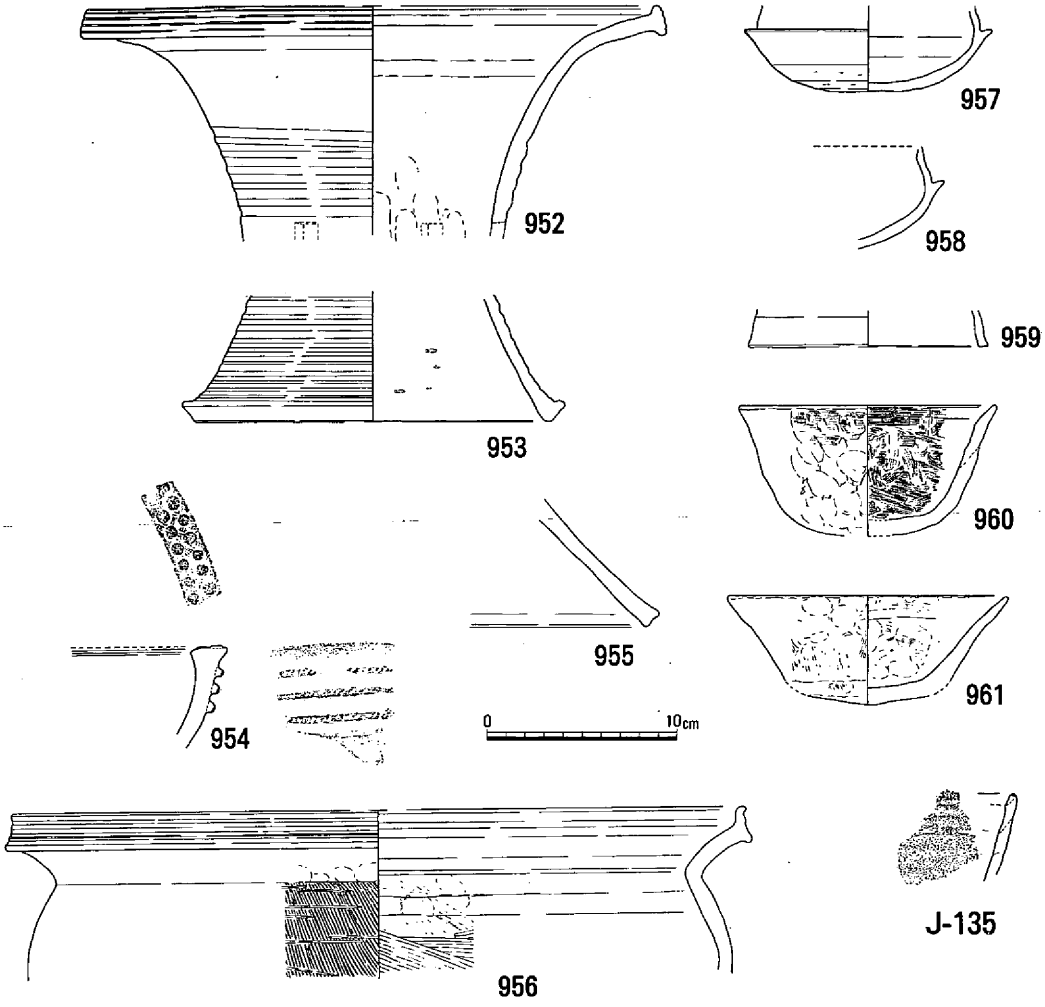
第170図　６区河道出土遺物



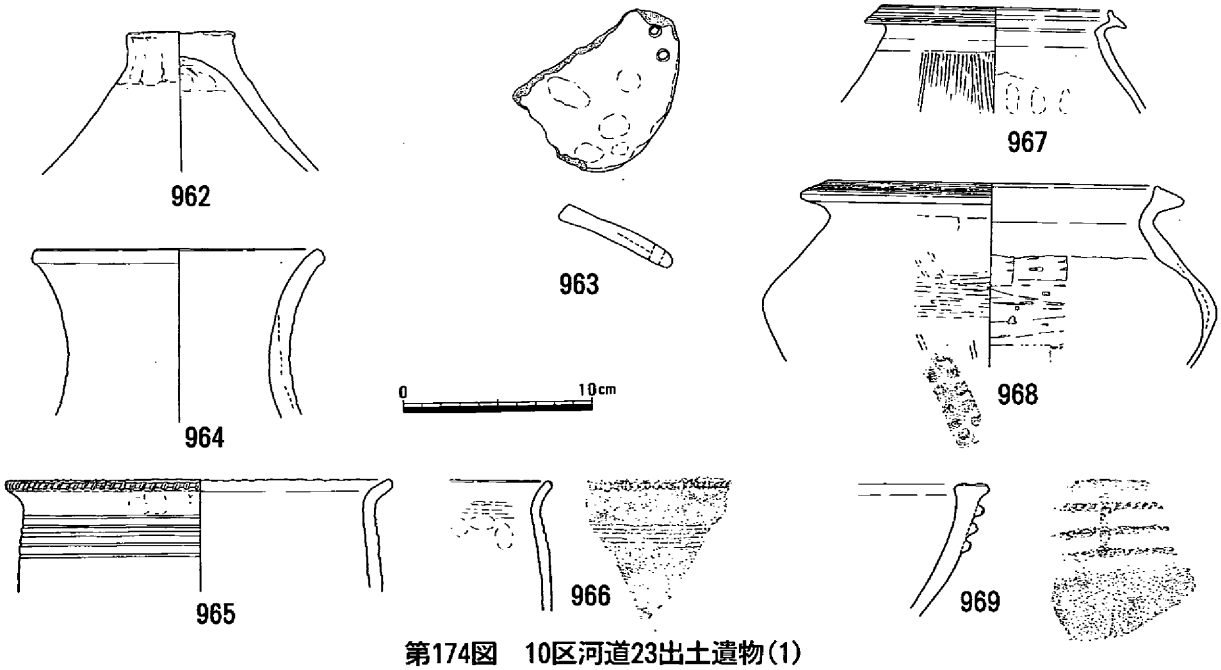
第171図　４区河道24の下層(22)出土遺物(1)



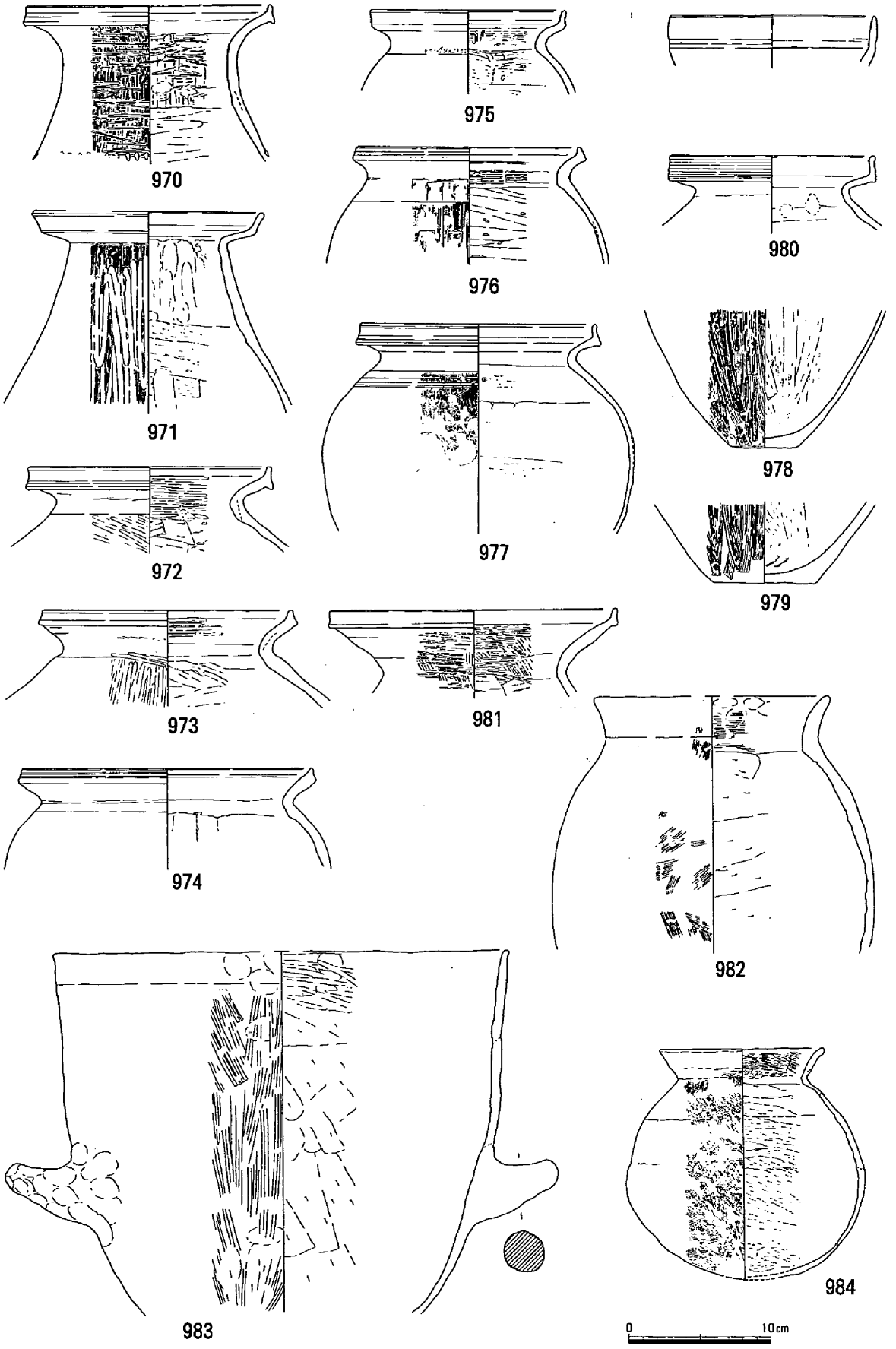
第172図　４区河道24の下層(22)出土遺物(2)



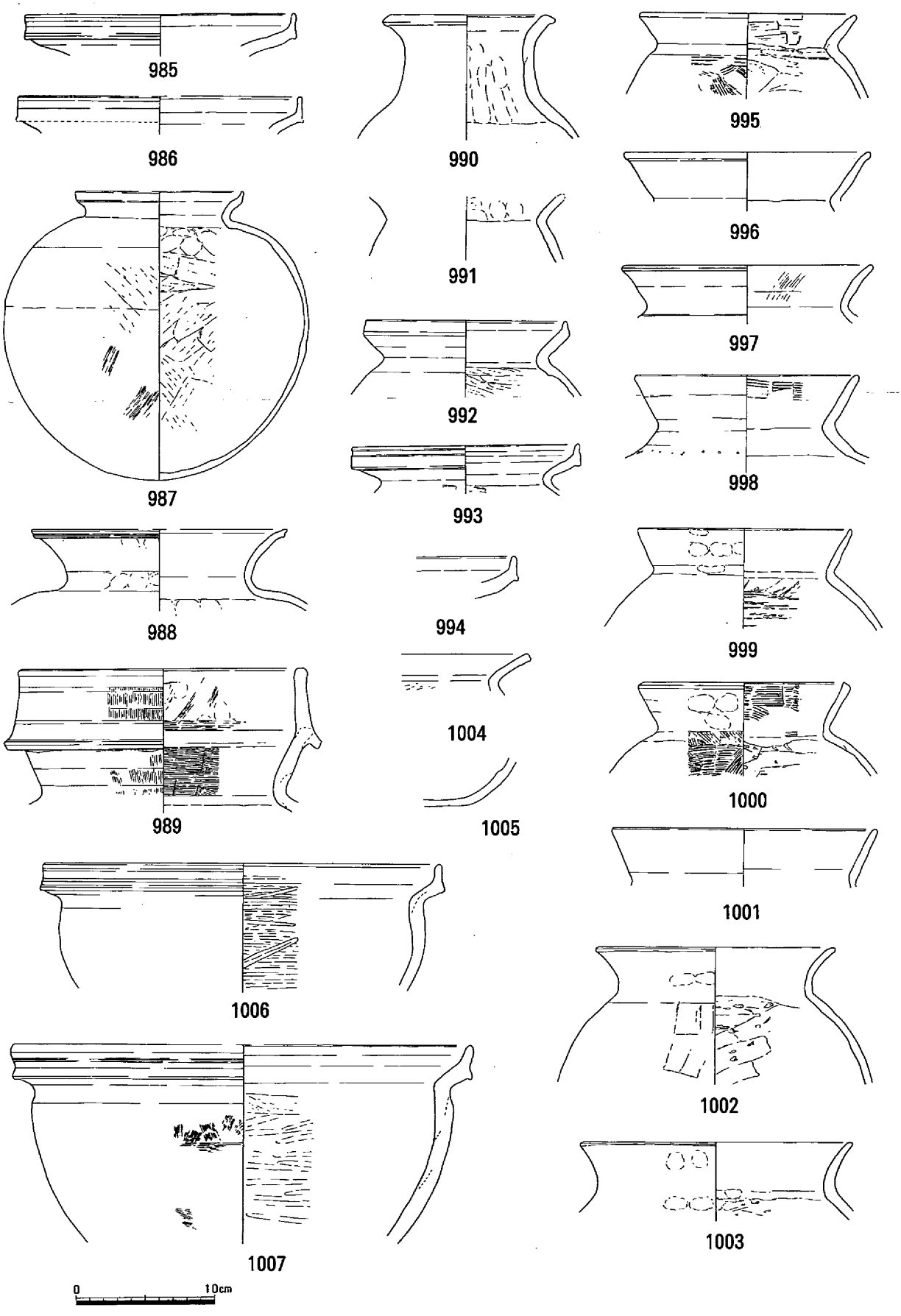
第173図　４区河道24の下層(22)出土遺物(3)



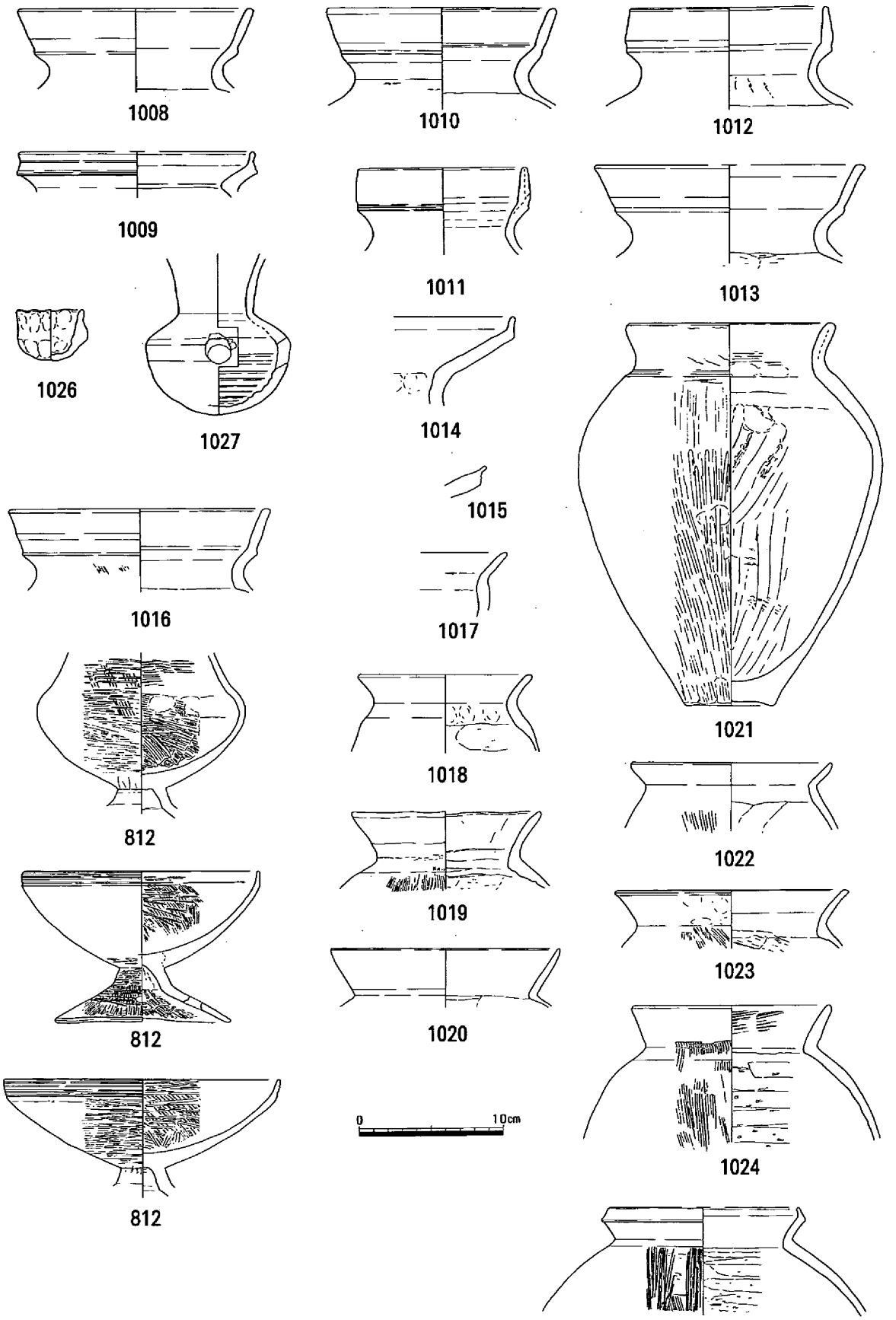
第174図　10区河道23出土遺物(1)



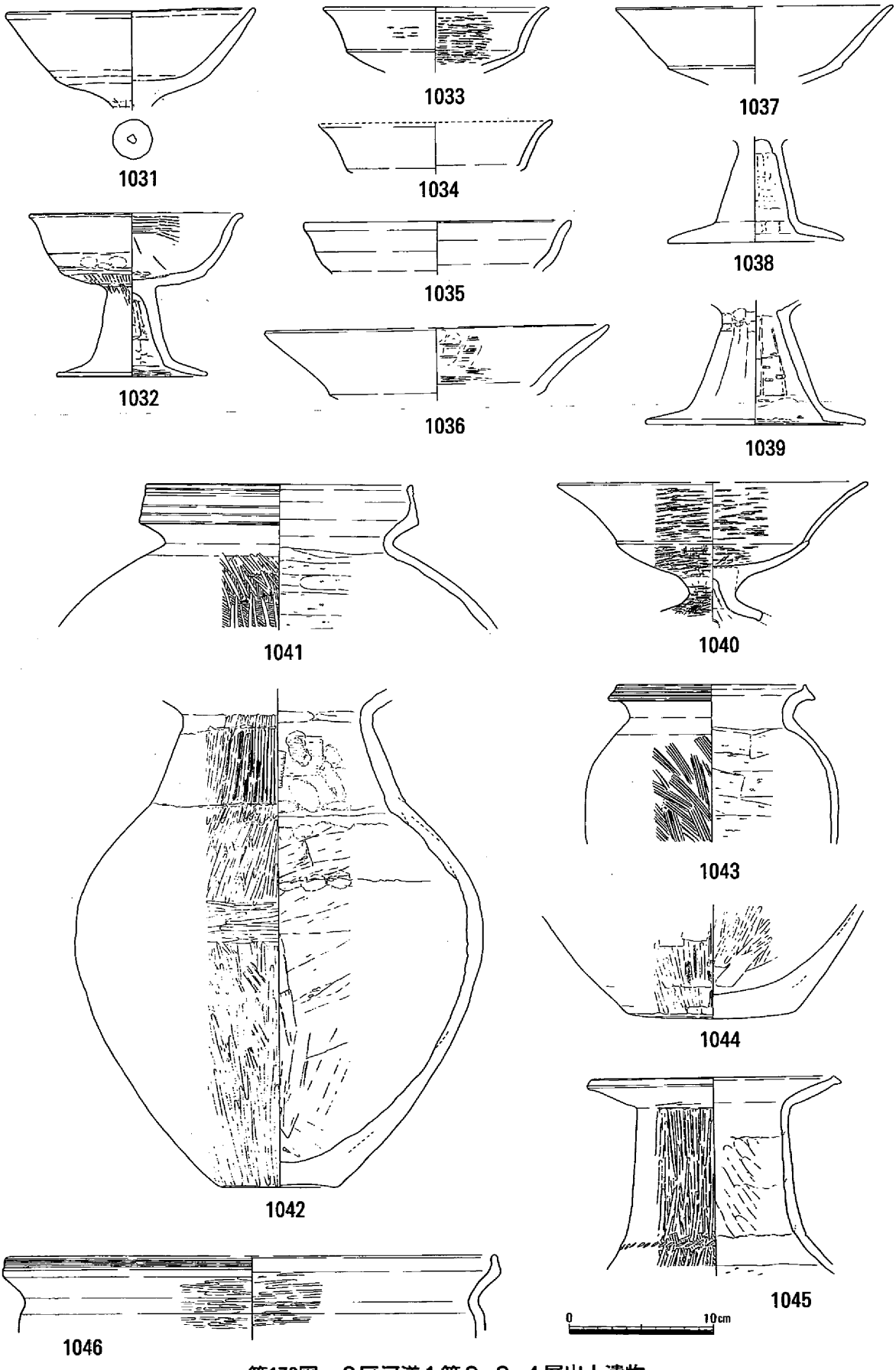
第175図　10区河道23出土遺物(2)



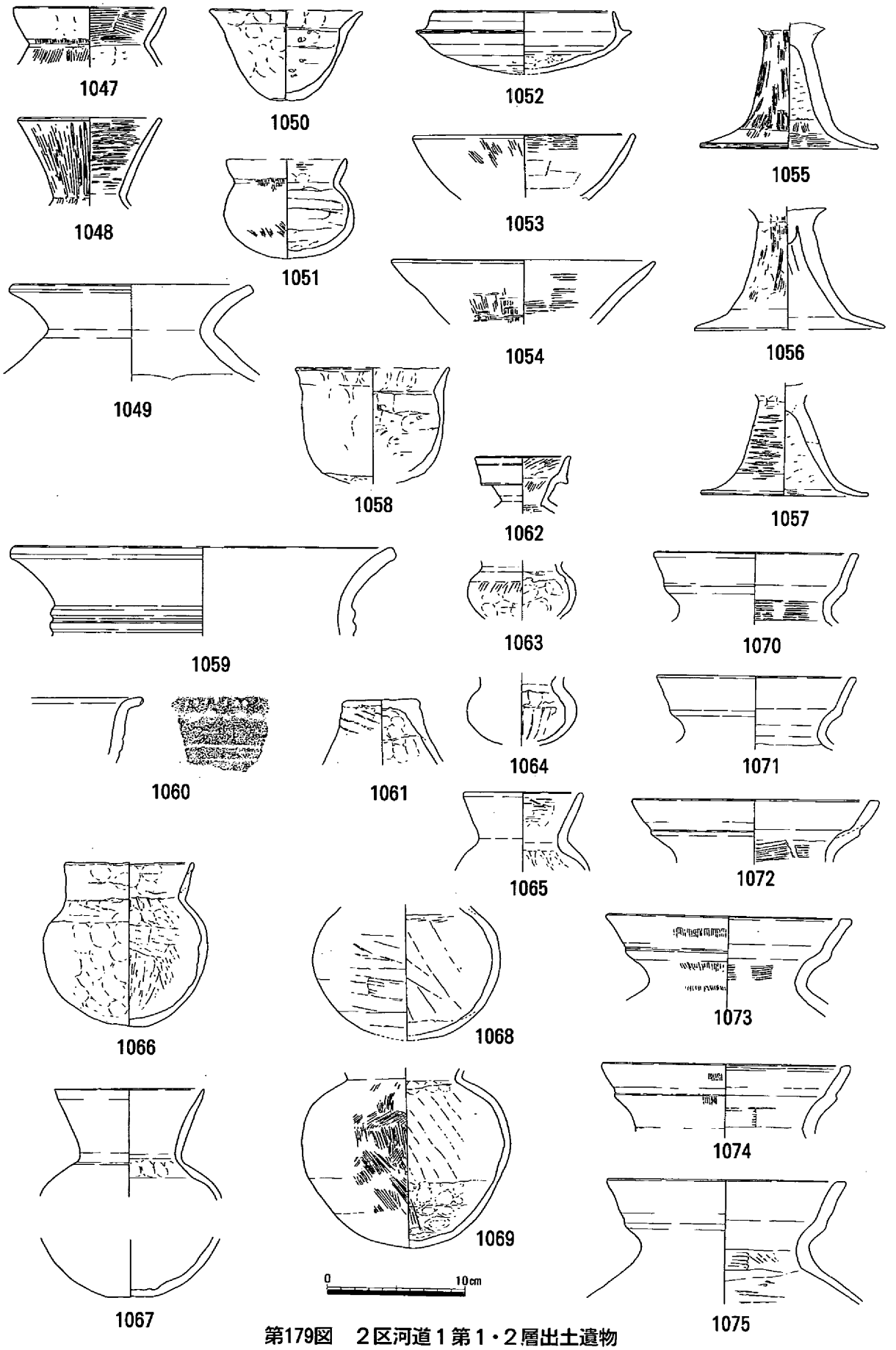
第176図　１区河道１第２層出土遺物(1)



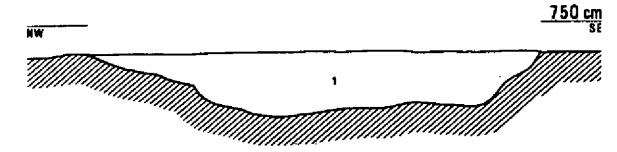
第177図　１区河道１第２層出土遺物(2)



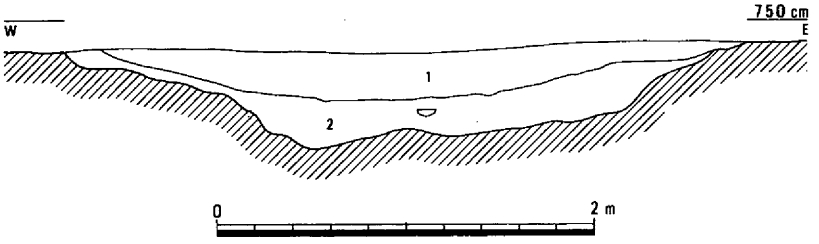
第178図　２区河道１第２・３・４層出土遺物



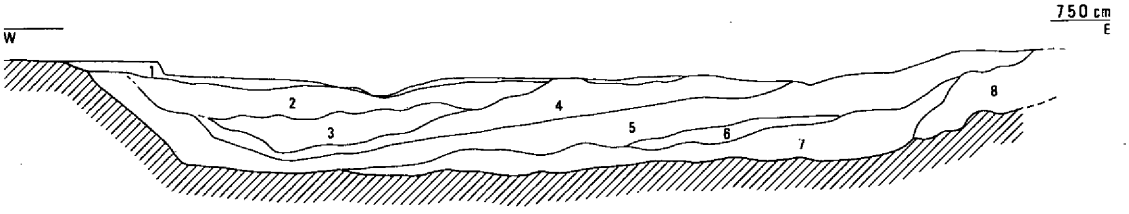
第179図　２区河道１第１・２層出土遺物



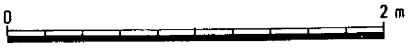
1．褐色砂質土



1．灰黄褐色粘質微砂
2．黒色粘質微砂

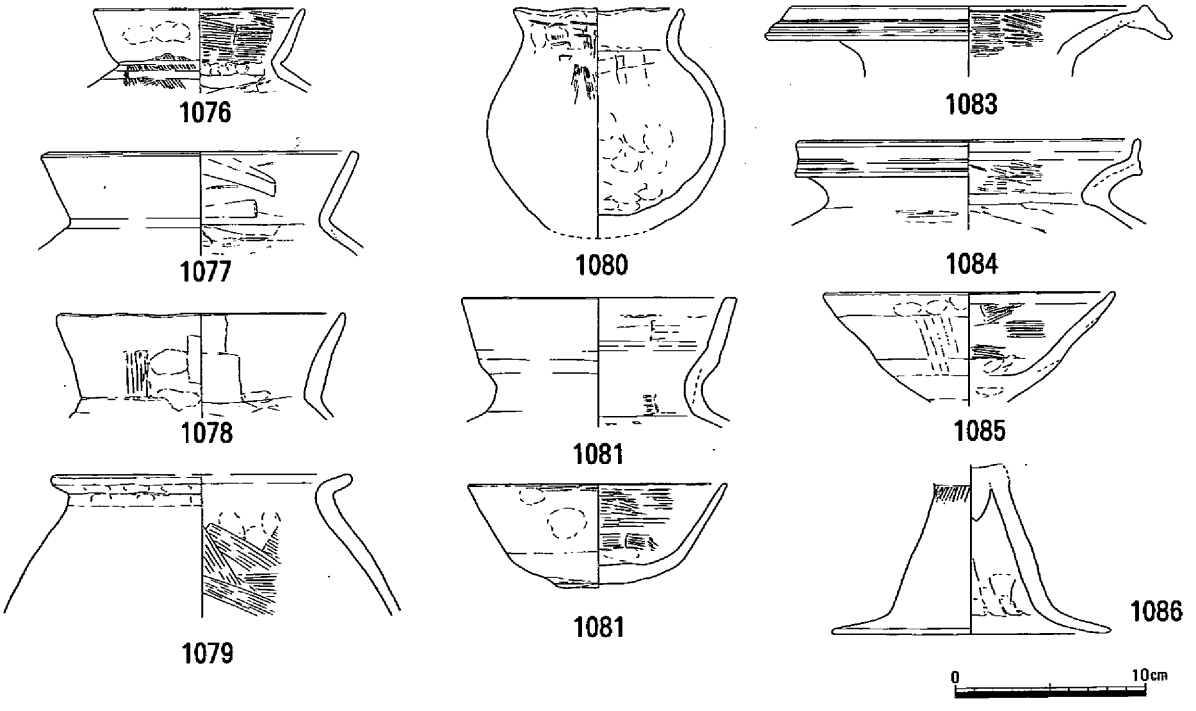


1．にぶい黄橙色微砂
2．灰黄褐色微砂
3．黄灰色微砂
4．黒褐色粘質微砂

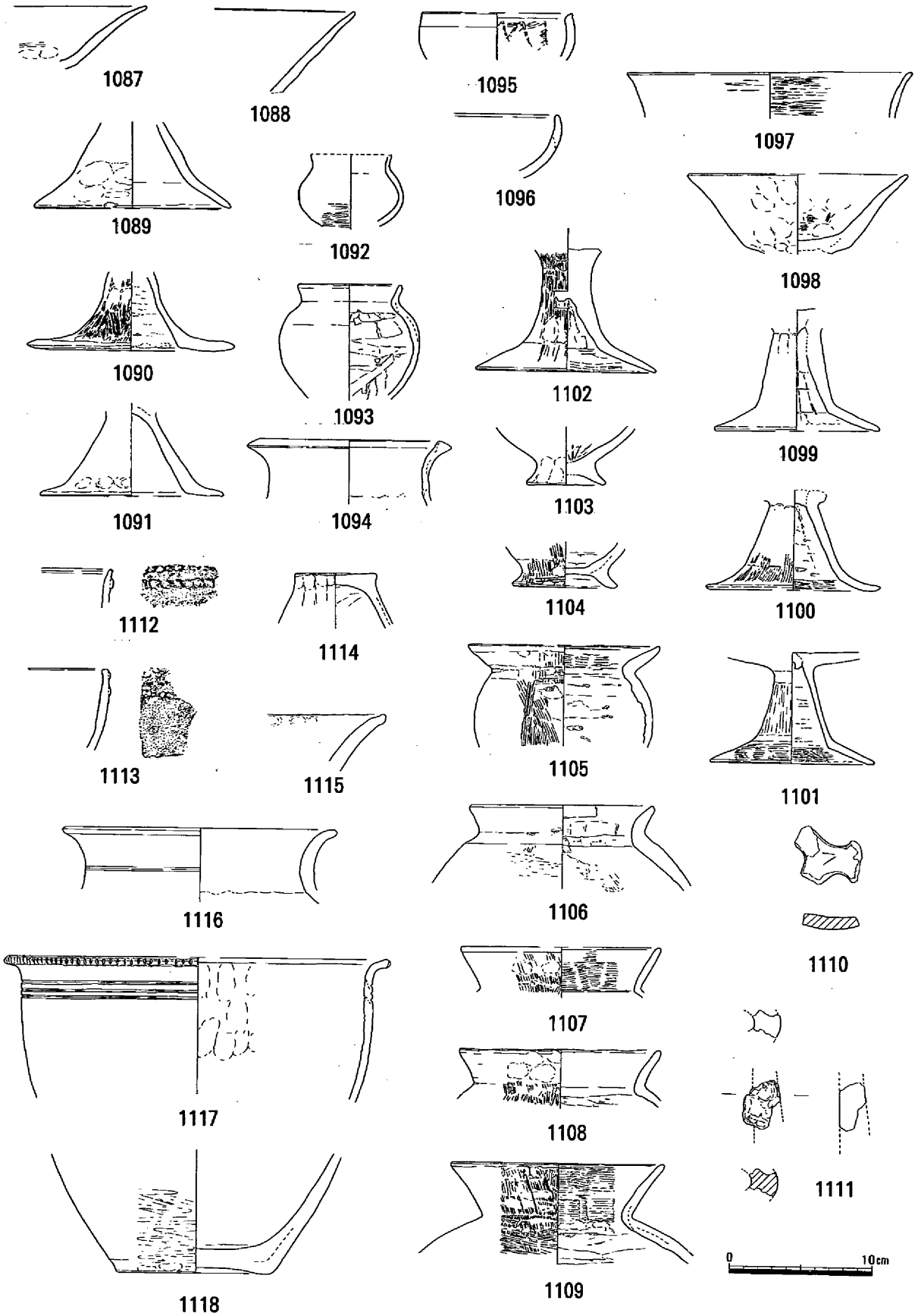


5．黒色粘質微砂
6．黒色粘質細砂
7．黒褐色細砂
8．褐色細砂

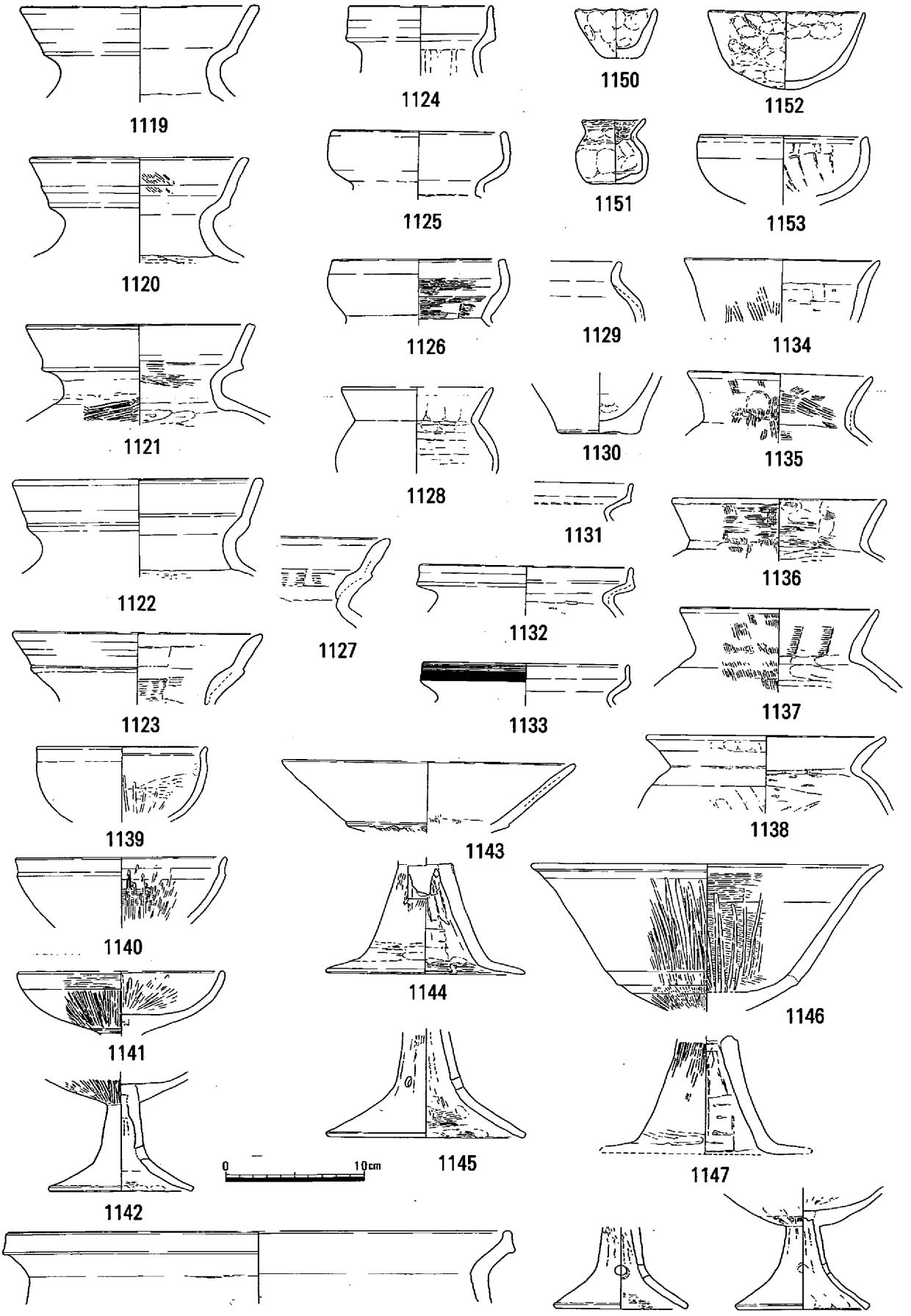
第180図　４区河道24断面図(1/40)



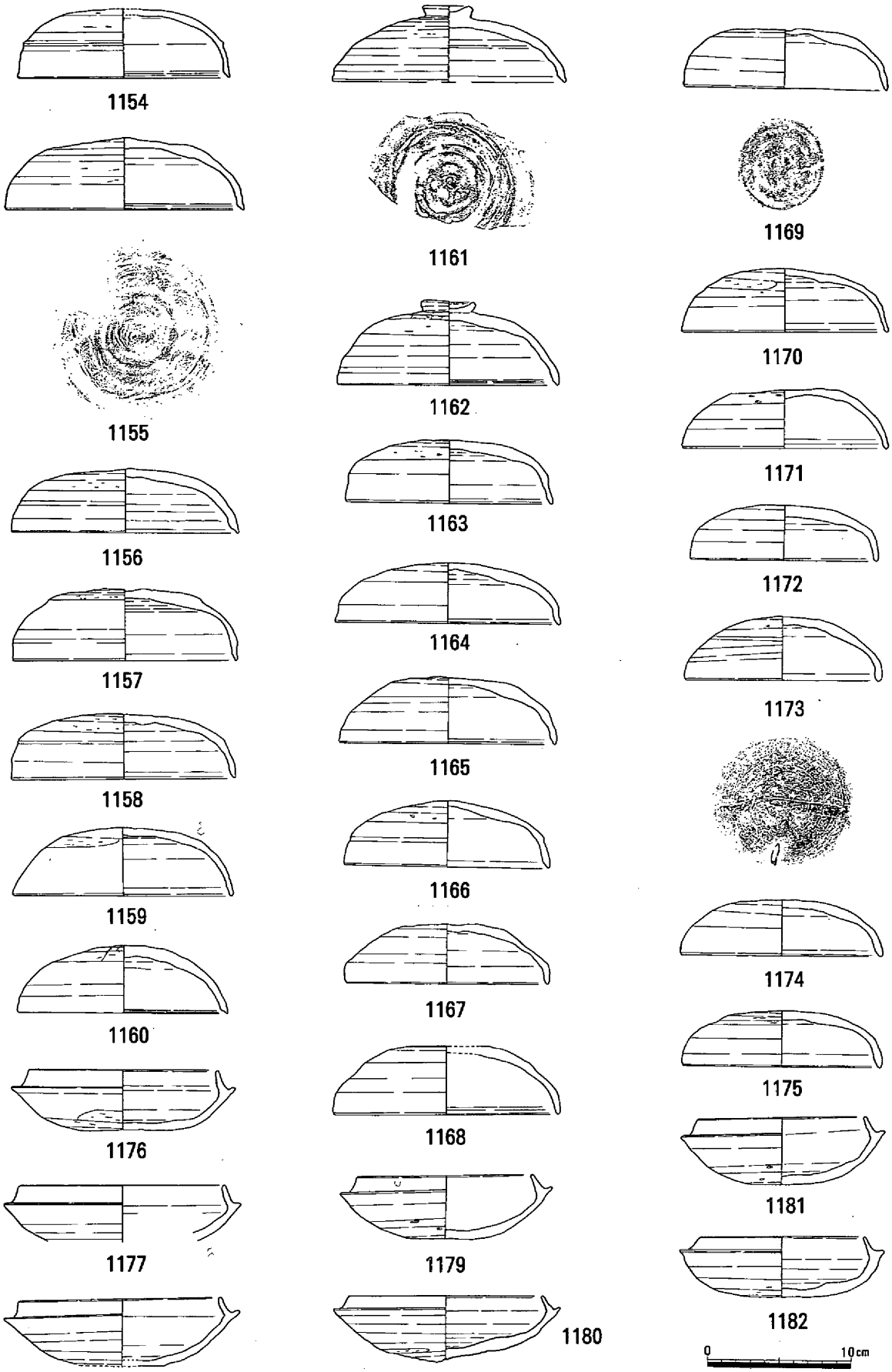
第181図　１区河道24出土遺物



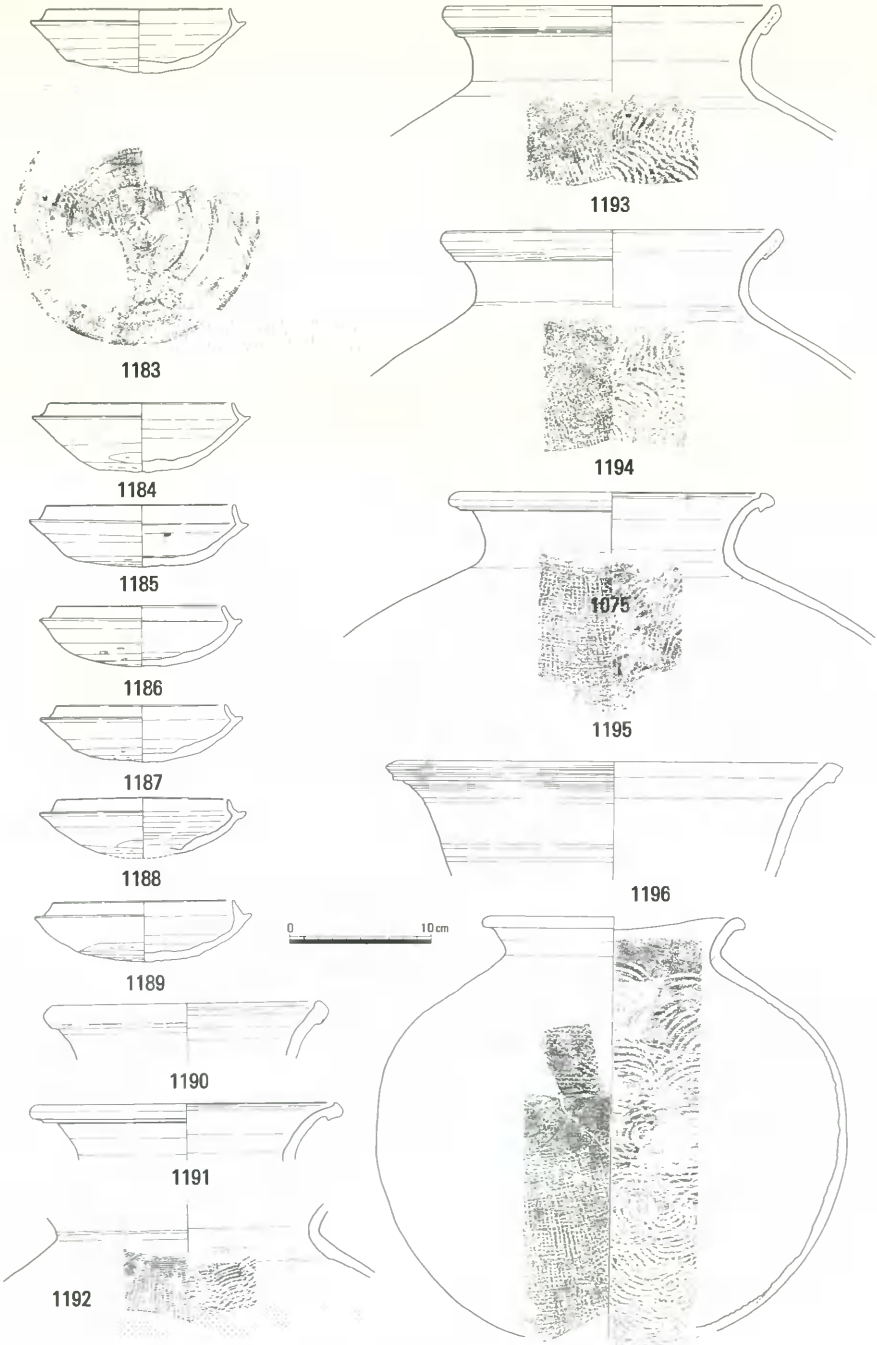
第182図　４区河道(22)24出土遺物(1)



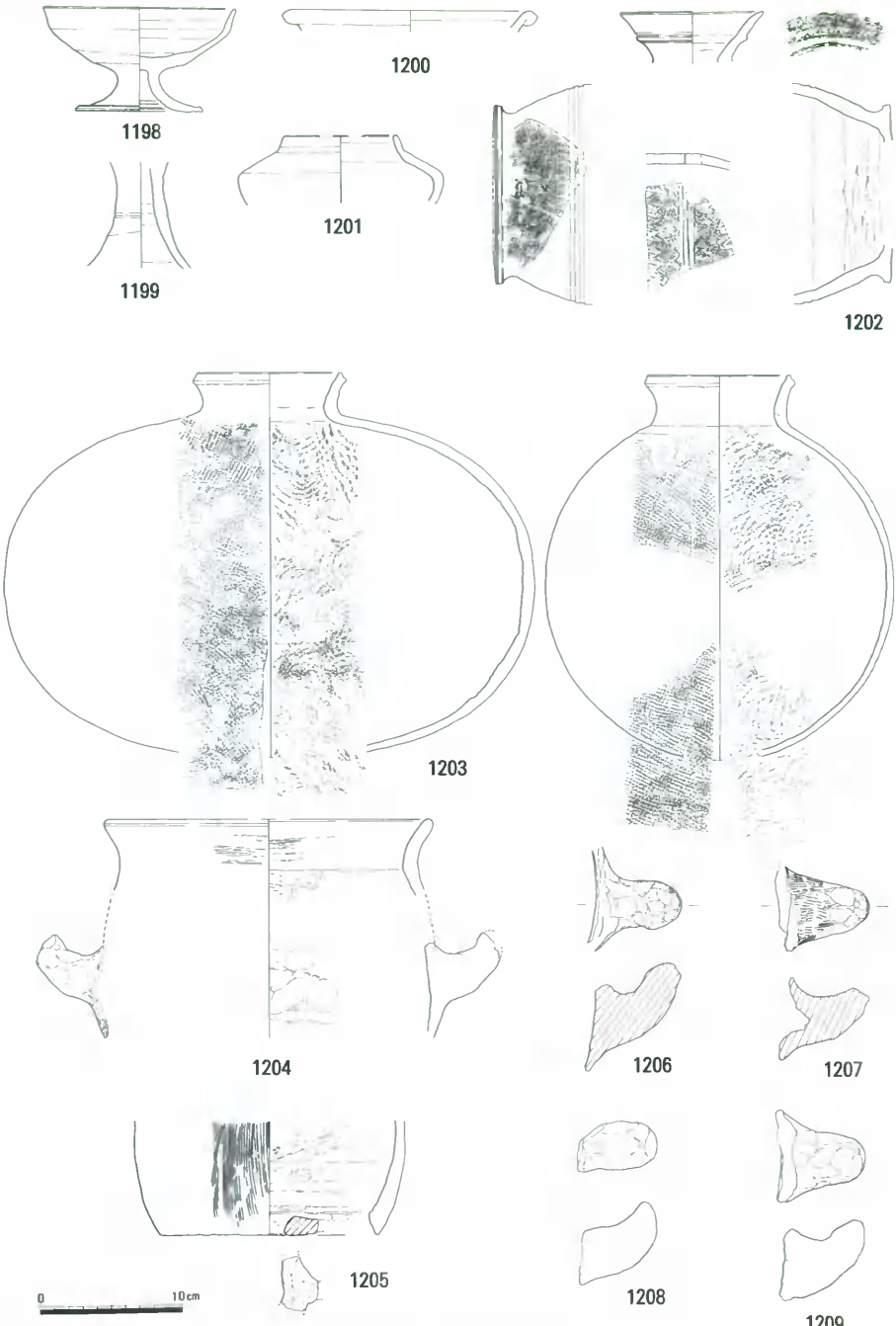
第183図　４区河道24出土遺物(2)



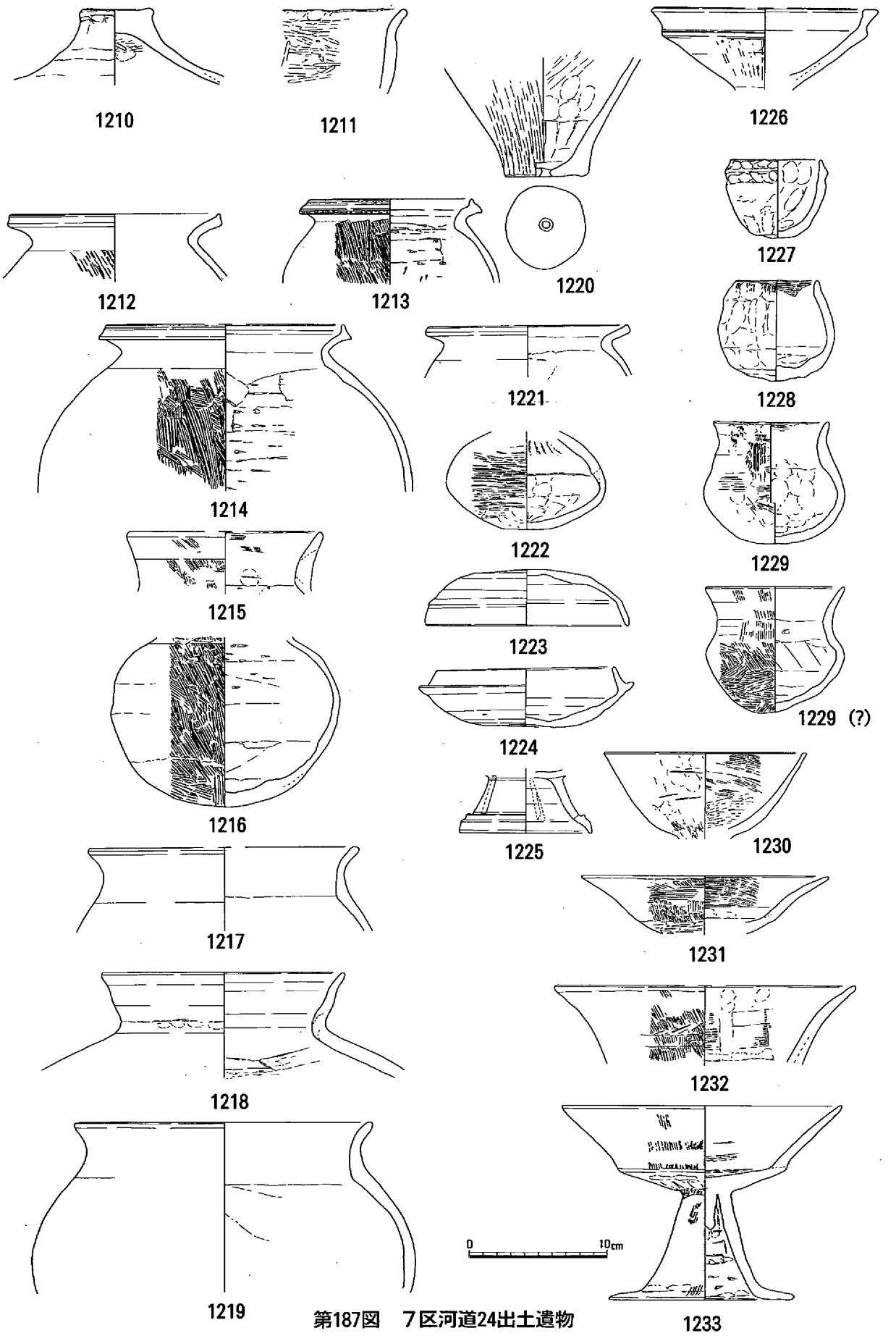
第184図　４区河道24出土遺物(3)



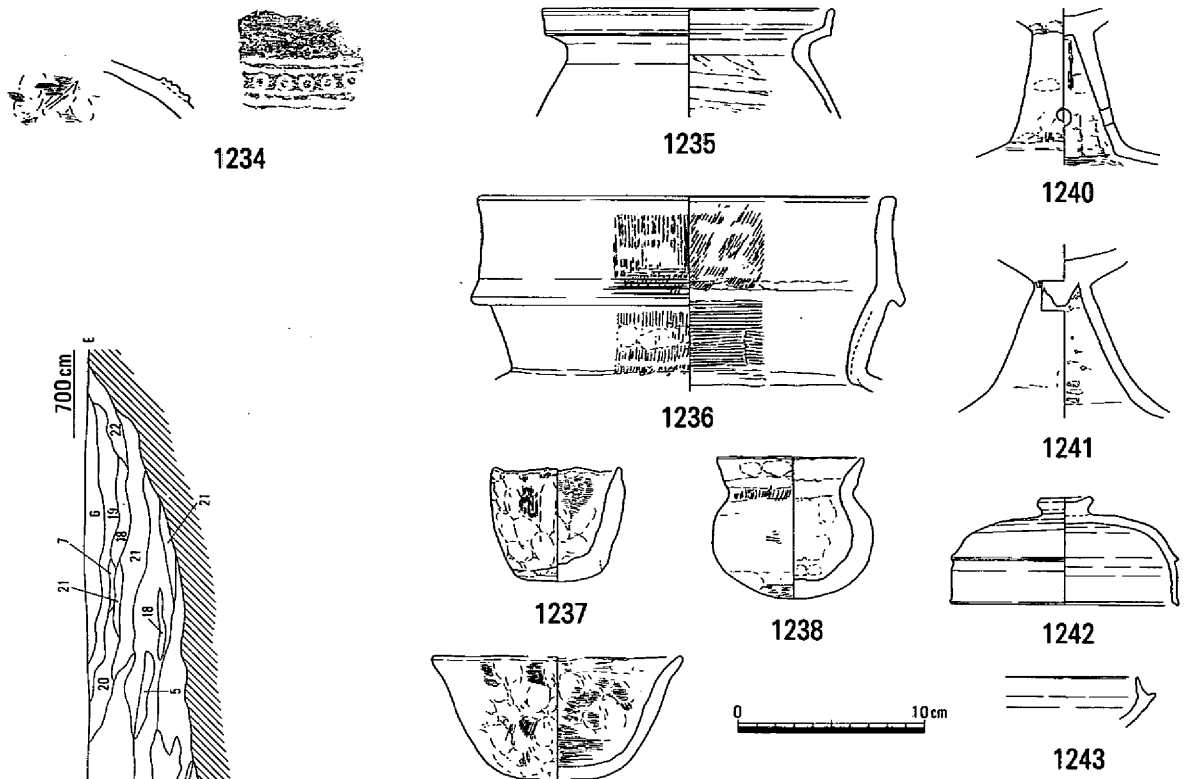
第185図　４区河道24出土遺物(4)



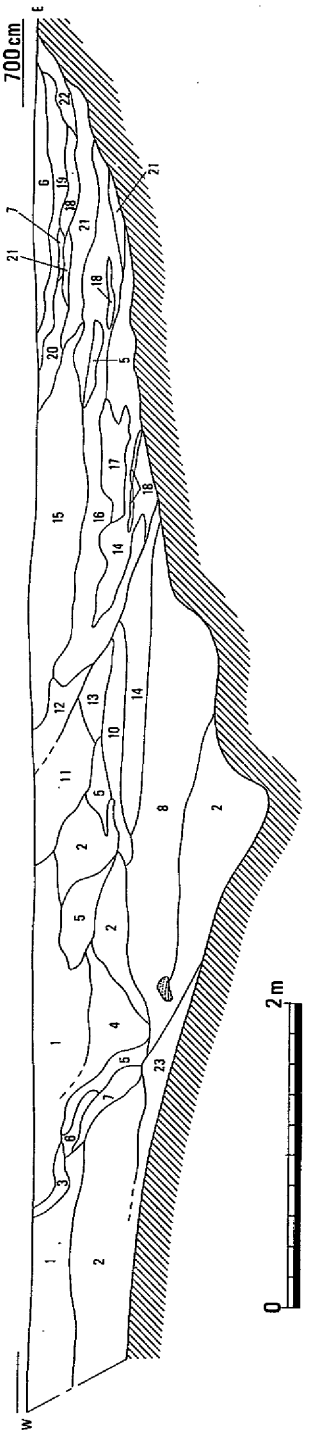
第186図　４区河道24出土遺物(5)



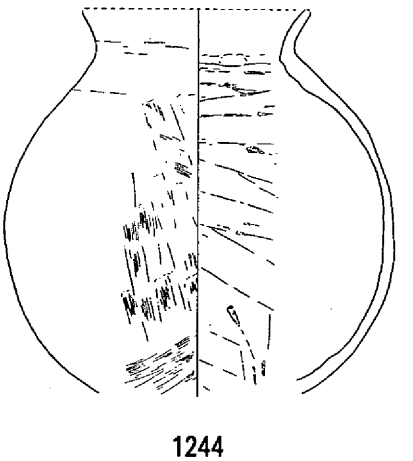
第187図　７区河道24出土遺物



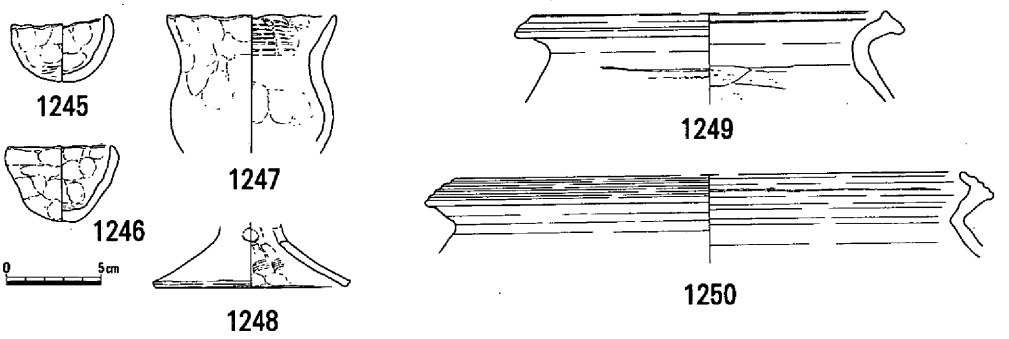
第188図　５区河道24出土遺物



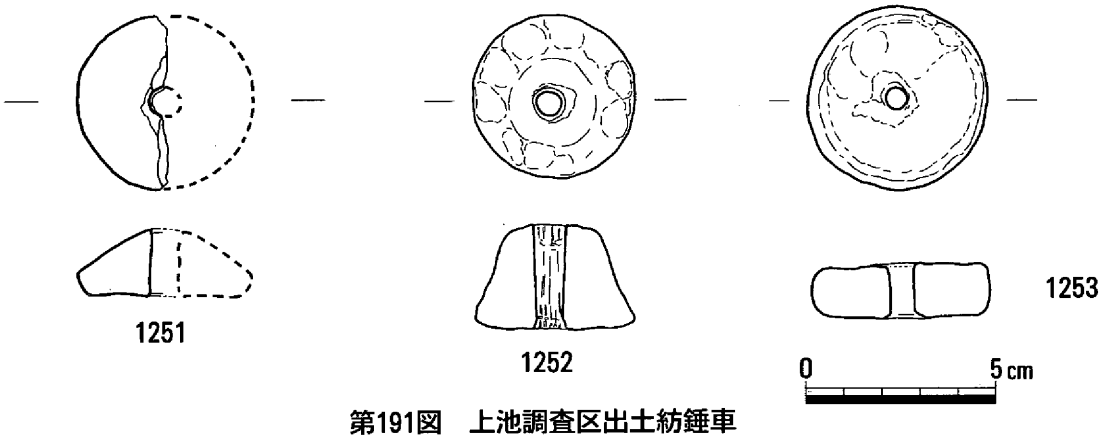
1. 黄褐色粘質土
2. 灰色粗砂
3. 暗黄褐色微砂
4. 灰褐色粘性砂質土
5. 灰褐色微砂
6. 暗黄褐色粘性砂質土
7. 黒灰色粘質土
8. 淡灰色粗砂
9. 灰褐色粘性砂質土
10. 灰色微砂
11. 褐色微砂
12. 暗褐色微砂
13. 淡褐色微砂
14. 淡灰色微砂
15. 暗黄灰色微砂
16. 暗灰色粘性砂質土
17. 暗灰色微砂
18. 暗灰色粘質土
19. 暗黄灰色粘質土
20. 暗黄灰色粘性砂質土
21. 暗灰褐色粘性砂質土
22. 暗灰褐色粘質土
23. 暗黄褐色粘質土



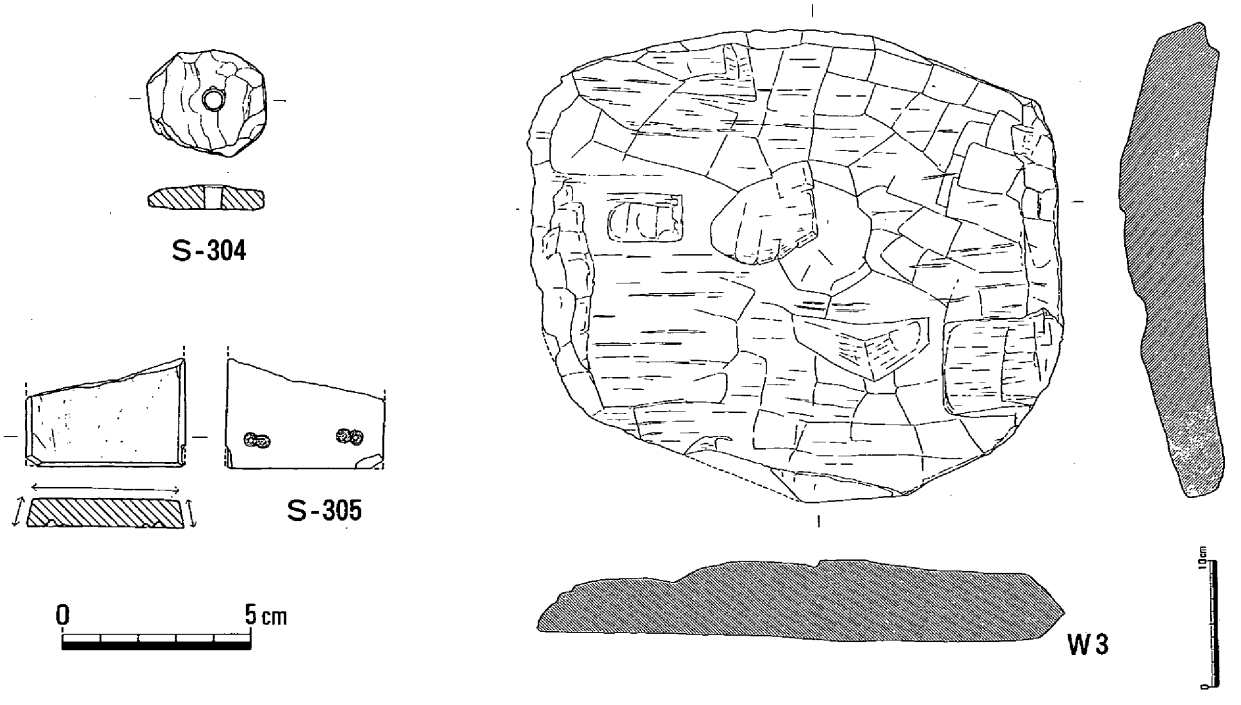
第189図　10区河道24断面図(1/50)



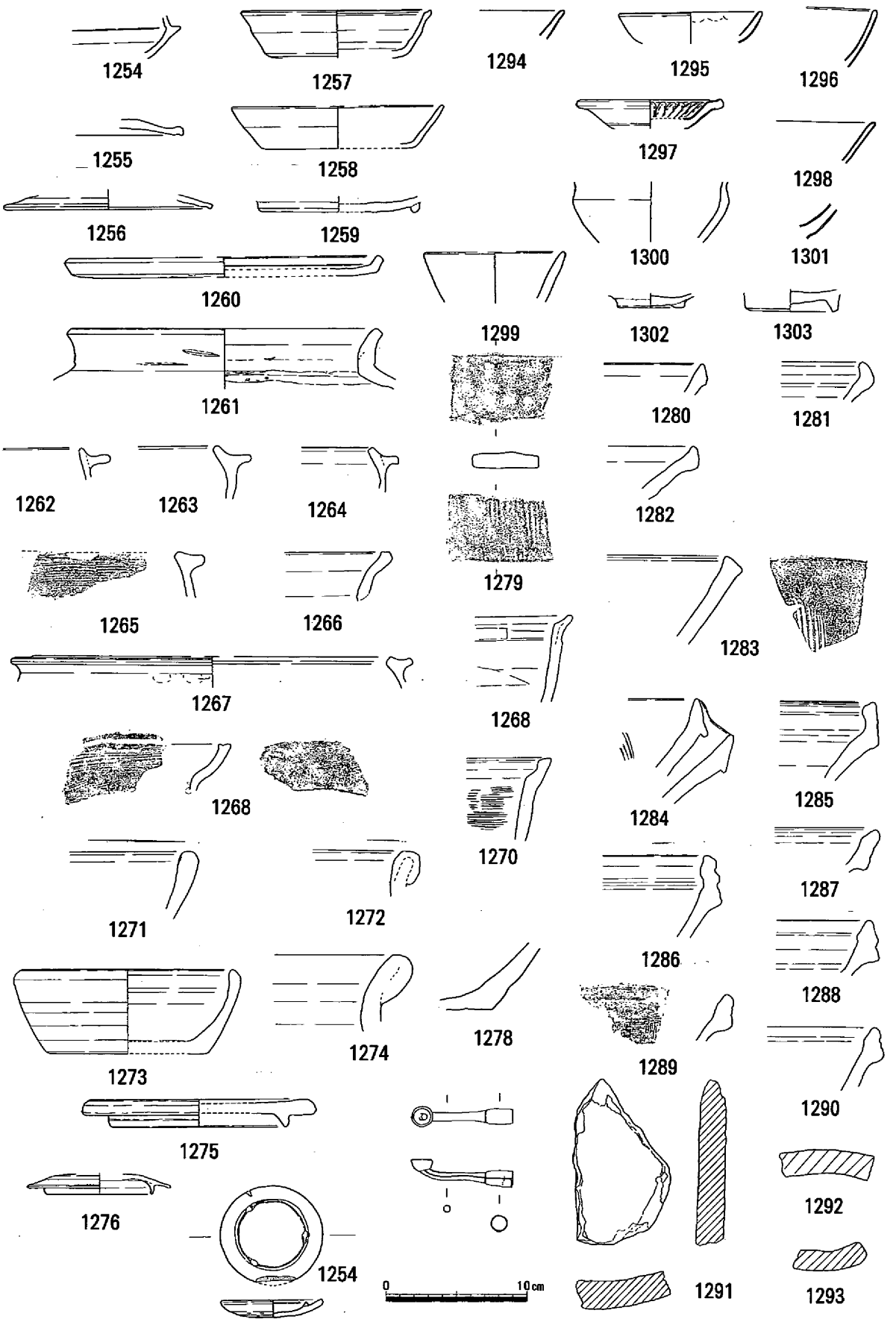
第190図　10区河道24出土遺物



第191図　上池調査区出土紡錘車



第192図　６区河道24出土木製品・上池調査区出土・石製紡錘車・石帯



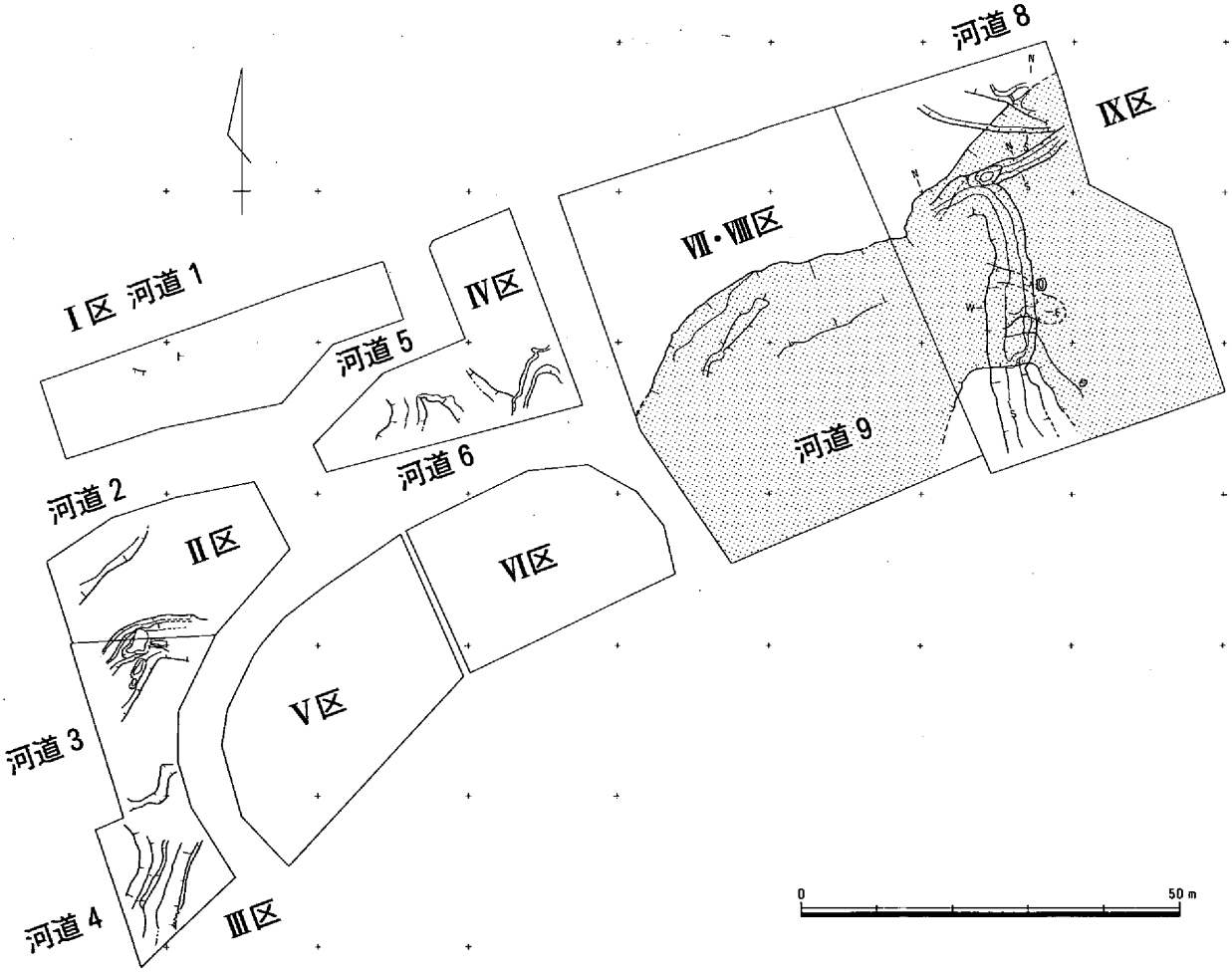
第193図　上池地区包含層出土遺物

第３章　下池地区の調査

第１節　調査の概要

山陽自動車道の南側から笹ヶ瀬川堤防下までの区域で約1.2万㎡ある。用水、農道で調査範囲をⅠ～Ⅹまで区画しⅠ～Ⅶ・Ⅷ区までを１班が、Ⅸ区を２班が調査を進めた。耕作土直下には江戸時代の溝状遺構、方形区画の遺構などを検出したが、Ⅶ・Ⅸ区以外は弥生・古墳時代の遺構は検出されていない。Ⅰ～Ⅵ区の下層には、縄文時代晩期から後期の河道が何本か検出されているが、上池調査区病院調査区、山陽自動車道の調査区との関係は追求できていない。

Ⅰ区は、山陽自動車道の南、内田川の東側に位置し、南側・東側を用水・農道に挟まれた細長い調査区である。上面では近世・近代と思われる溝状の遺構が３ヶ所見られたのみである。下層は、西側に河道の肩部が見られたが、調査範囲が狭く、壁面の崩れ、湧水のため底部にまで達していない。この河道は上池調査区の河道14につながる河道と考えられる。



第194図　下池調査区縄文時代遺構配置図(1/1000)

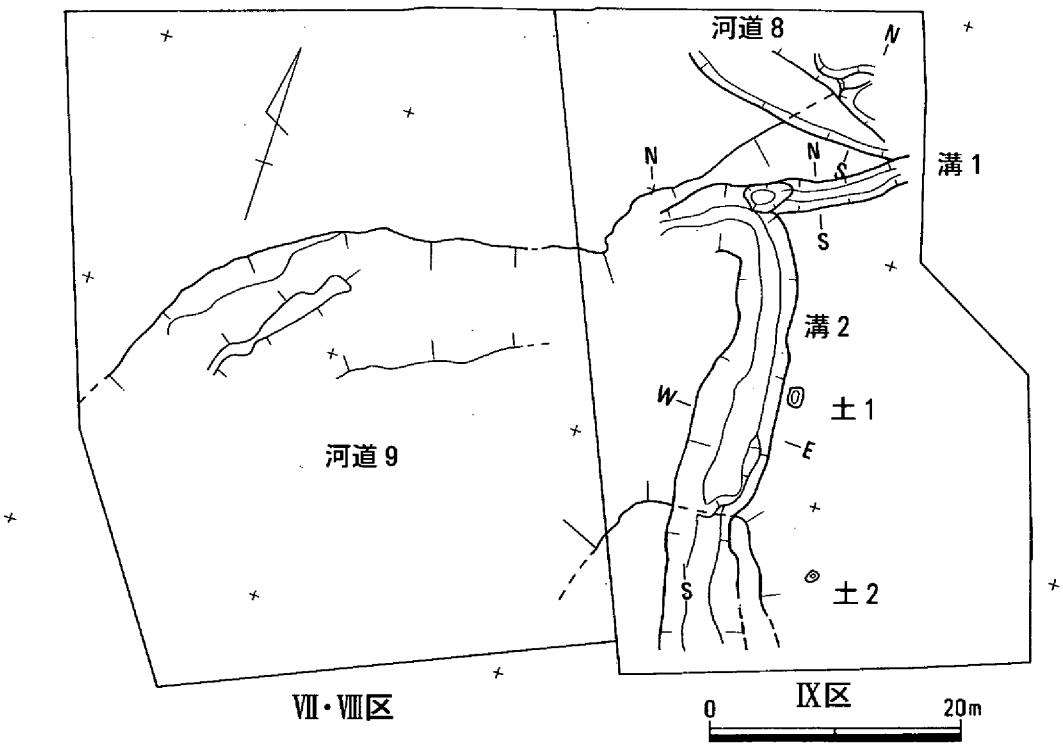
Ⅱ・Ⅲ区は、Ⅰ区の南側に位置し、西は内田川、南は笹ヶ瀬川の堤防直下までの範囲である。上面では、近・現代の方形の堀込み跡が見られた。下層では河道が２本あり、１本はⅡ区で見られた河道の東側の肩部と思われる。もう１本は南北に流路を取る。

Ⅳ区は、用水を挟んでⅠ区の東側にあたり、逆Ｌ字状になる調査区である。上面での遺構は見られない。下層は河道が99本見られた。

Ⅴ・Ⅵ区は、Ⅳ区の南側で笹ヶ瀬川の堤防下までの範囲である。耕作土直下はすでに砂層になり、近現代の方形の堀込みが見られる。これはゴミ穴と考えられる。壁面の崩壊・湧水が激しく２ｍ以上は調査できていない。

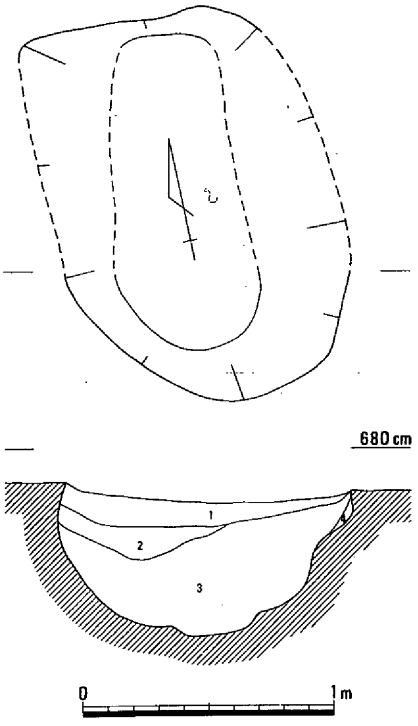
Ⅶ・Ⅷ区は、Ⅳ区の東側にあたり北半は弥生時代以降の微高地になる。この微高地上には柱穴群、溝などが見られる。河道の肩部には、中世末から近世初頭の溝が東西に走っている。南半の下層はⅨ区に続く縄文時代の河道になる。

Ⅸ区は、調査区の東端にあたり、上面は北半が黄色の基盤層であるが、南半は、砂の硬く締まった層が縄文晩期以降の基盤層になっている。（伊藤）



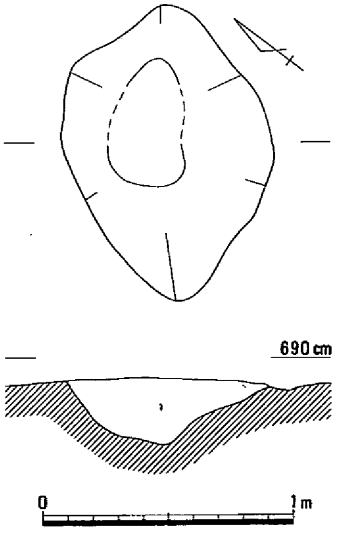
第195図　Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区縄文時代の遺構と河道（1/600）

第２節　縄文時代の遺構と遺物



1．明オリーブ灰色微砂
2．灰色粘質微砂
3．灰色粘質土
（一部緑灰色粘質土）
4．明緑灰色微砂

第196図　Ⅸ区土壙１平・断面図(1/30)



1．灰色粘質微砂

第197図　Ⅸ区土壙２平・断面図(1/30)

（1）土壙

土壙１（第196図）

Ⅸ区中央付近に検出した楕円形に近い形状の土壙である。規模は長径155cm、短径110cm、深さ60cmである。断面は深椀状を呈し、埋土は４層に分層可能で下層に灰色粘質土が堆積している。検出面は弥生時代の遺構面を20cm下げた海抜670cm付近で溝１・２と同一面で検出した。

時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが、検出面等から縄文時代晩期ごろと想定される。

土壙２（第197図）

Ⅸ区の南端に検出したやや不定形な土壙である。規模は長径116cm、短径84cm、深さ25cmをはかる。断面は椀状を呈し、北よりがやや深く掘り込まれている。埋土は灰色粘質微砂の１層のみである。検出面は弥生時代から古墳時代の基盤層を20cm下げた海抜680cmで溝１・２と同一面である。

時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが、検出面等から土壙１と同様の縄文時代晩期ごろと想定される。

ピット81下層出土一括土器（第198図）

Ⅸ区北端の弥生時代以降の遺構検出中にピットNo.81の下部に偶然に縄文土器片を検出した。遺構等の可能性から拡張し精査したが掘り方等は確認できず、おそらく弥生時代の基盤層中に包含されたものと想定される。

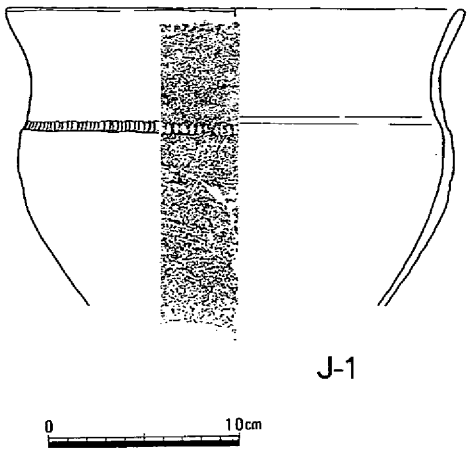
出土土器は、口縁部から体部にかけて1／2程度残存する深鉢形土器である。口径23,7cm、現存高15,8cmをはかる。口縁部は緩く外反し、頸部から体部への屈曲部分に連続刺突文を施す。体部外面は貝殻条痕文の調整が認められる。時期は器形特徴から縄文時代晩期と考えられる。

（山磨）

（2）溝

溝１（第199図）

Ⅸ区の北半に東西方向に検出した溝で西端は溝２と重複する。東端は調査区外である。合流点までの規模は全長10.5m、最大幅250cm、深さ35cmである。断面は皿状をなし、図示付近で４層の埋土が確認できた。いずれも



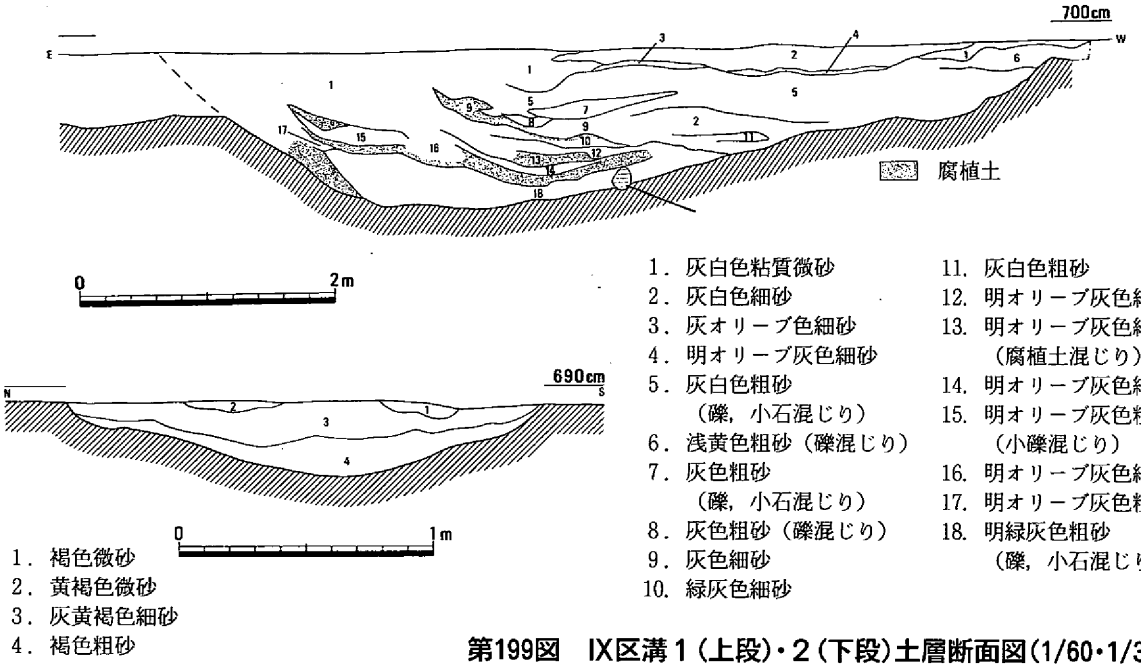
第198図　Ⅸ区ピット81(下層)出土の土器

細砂、微砂、粗砂の堆積である。溝底面の海抜高は、西端の合流付近で655cmほど東端で５cm低下している。

遺物は縄文時代晩期とみられる細片が出土している。時期は出土遺物や検出面等から縄文時代晩期ごろと想定される。

溝２（第199図）

Ⅸ区中央から南端にL字状に検出した大形の溝で北端で溝１と重複し西に向っている。北西端は中世の溝18, 19に削平されて不明瞭である。検出長40ｍ、幅450～650cm、最大深さ120cmである。断面は逆台形もしくは深椀状をていすが、図示した断面付近では掘り方の西側が１



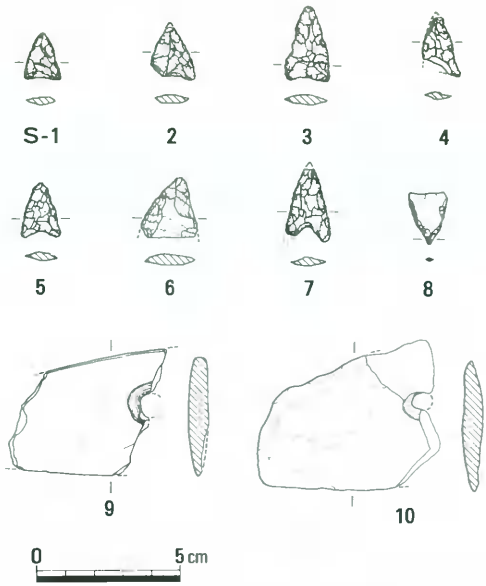
第199図　Ⅸ区溝１(上段)・２(下段)土層断面図(1/60・1/30)

段テラス状をなす。埋土は18層に分層可能で、中、下層に腐植土を含み、最下層には流木も認められた。溝底面の海抜高は560～630cmで中央付近が深く高低差は不明瞭である。

出土遺物は縄文時代晩期の土器と石器が認められた。縄文土器は細片が多いが、鉢形土器と深鉢形土器が主に認められる。深鉢形土器には口縁端部外面に突帯を施すものと口縁端部にキザミメを施したものがある。**16**は外面に突帯紋、内面に沈線を、**35**は内面に沈線を施している。**9**、**22**、**32**等は波状口縁である。**17**、**38**は頸部に縦方向の沈線を、**35**は斜交の沈線を施し、**32**、**33**は縦方向の連続爪形紋を施している。**40**、**44**等は頸部との屈曲部に爪形紋を施している。**9**、**39**は条痕を文様風に施したものとみられる。**30**、**29**、**47**等は浅鉢形土器で口縁部が緩く内湾し立ち上がる。**31**の内面は２条の沈線を施す。**27**は壺形土器の口縁の可能性がある。**28**は底部片である。**51**、**48**は縄文時代後期の土器であろうか。

石器は混入と考えられるサヌカイト製の石鏃と石錐・磨製の石包丁出土している。(山磨)

第200図　IX区溝１出土土器



第201図　Ⅸ区溝１出土石器

（３）河道

河道１

Ⅰ区で検出された河道で、トレンチで肩西側部分が見られたが、東肩部は検出できていない。出土遺物は見られないが、上池調査区の後期の河道14に連続するものと思われる。

河道２

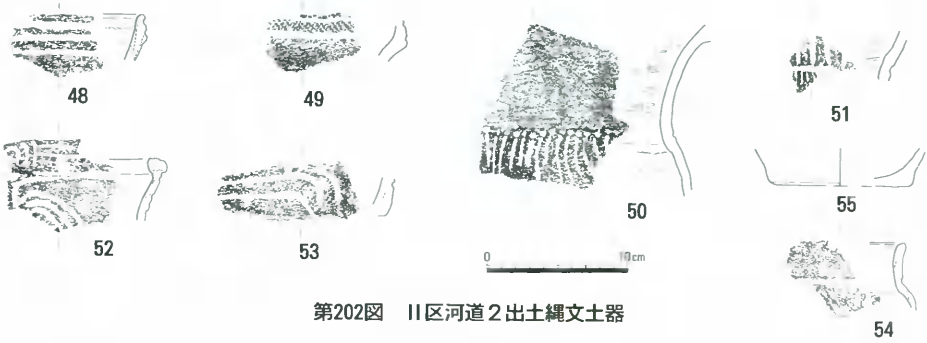
Ⅱ区の北西角で東肩の一部が検出された河道で、北東から南東に向けて流れるものと思われる。河道内からは、縁帯文が出土しているが、**48**は３本対の沈線を文様とするものでこれらよりも古くなり後期前葉のものである。縄文晩期の深鉢形土器**50**などが出土している。

河道３

Ⅱ区の南側からⅢ区に位置し、東から南西に向けて流れるようである。最大幅８ｍ、深さ120㎝を測る。出土遺物は見られない。

河道４

Ⅲ区南側で北東から南西に流れる。河道３が蛇行している可能性もある。河道内からは、胴部屈曲部に爪形刺突文を施す縄文時代晩期の深鉢形土器**56**～**59**、サヌカイトの石鏃**S-12**、石鏃１点**S-11**が出土している。



第202図　Ⅱ区河道２出土縄文土器

河道５・６・７

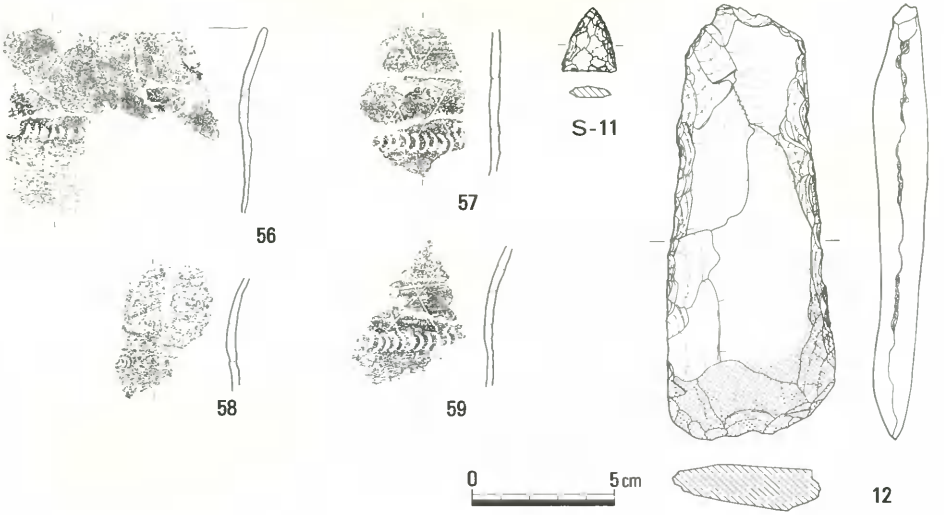
Ⅳ区においてみられた河道で、南北方向に流路取る。河道内は細かい締まった砂層で、遺物を含まない。

河道８（第207図）

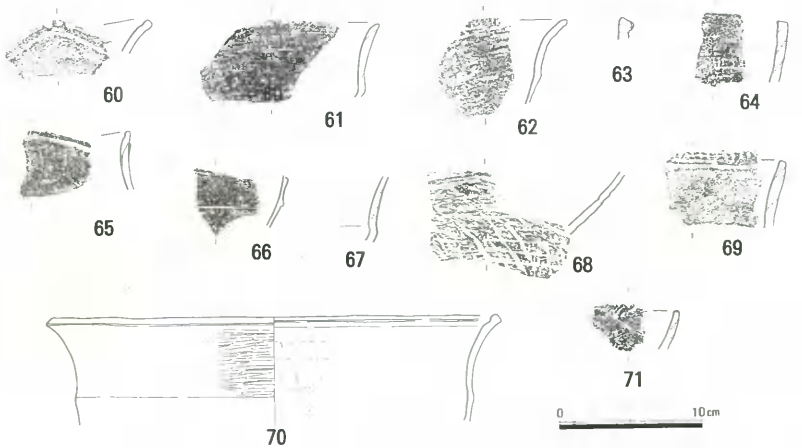
Ⅸ区北東端に北西から南東方向の河道の肩の一部を検出した。検出長20㎝、検出幅12ｍ、深さ190㎝である。推定全幅断面は逆台形に近い形状と推測される。埋土は土層断面の第６層下部を底面とす

る海抜635cm付近で明瞭に分層可能で幅490cm、深さ45cmほどが最終時期の河道と想定される。下層埋土は流木を含みながら基本的には腐植土層と砂層の互層で、肩には粘質土が堆積している。新旧関係は河道９の北端部の埋没後に河道８が切り込んでいる。河道検出面は海抜680cm、底面は海抜500cm付近で凹凸が著るしい。

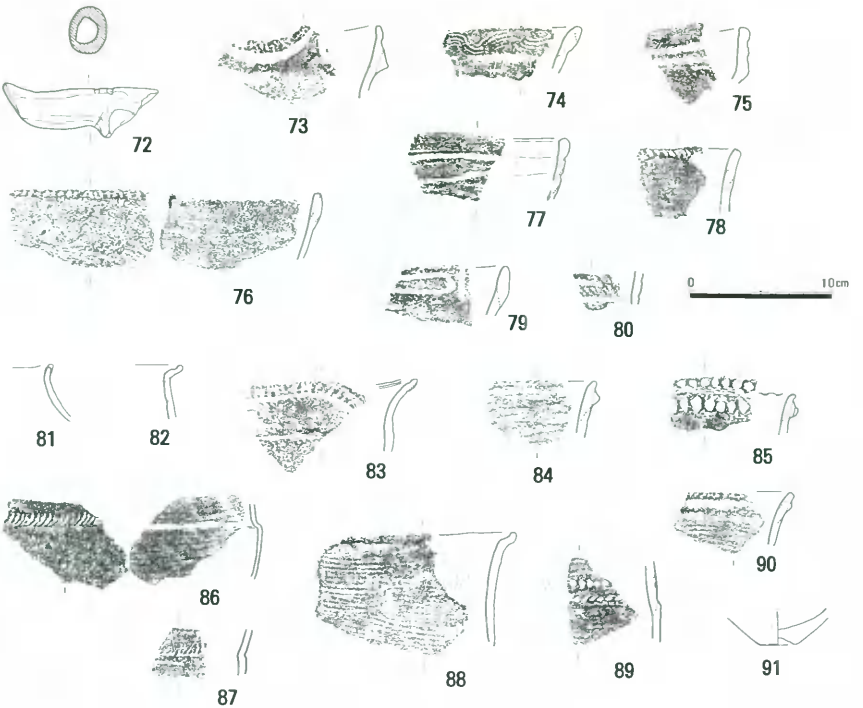
遺物は、下層の埋土中から縄文時代晩期の土器片が出土している。（山磨）



第203図　Ⅲ区河道４出土縄文土器及び石器



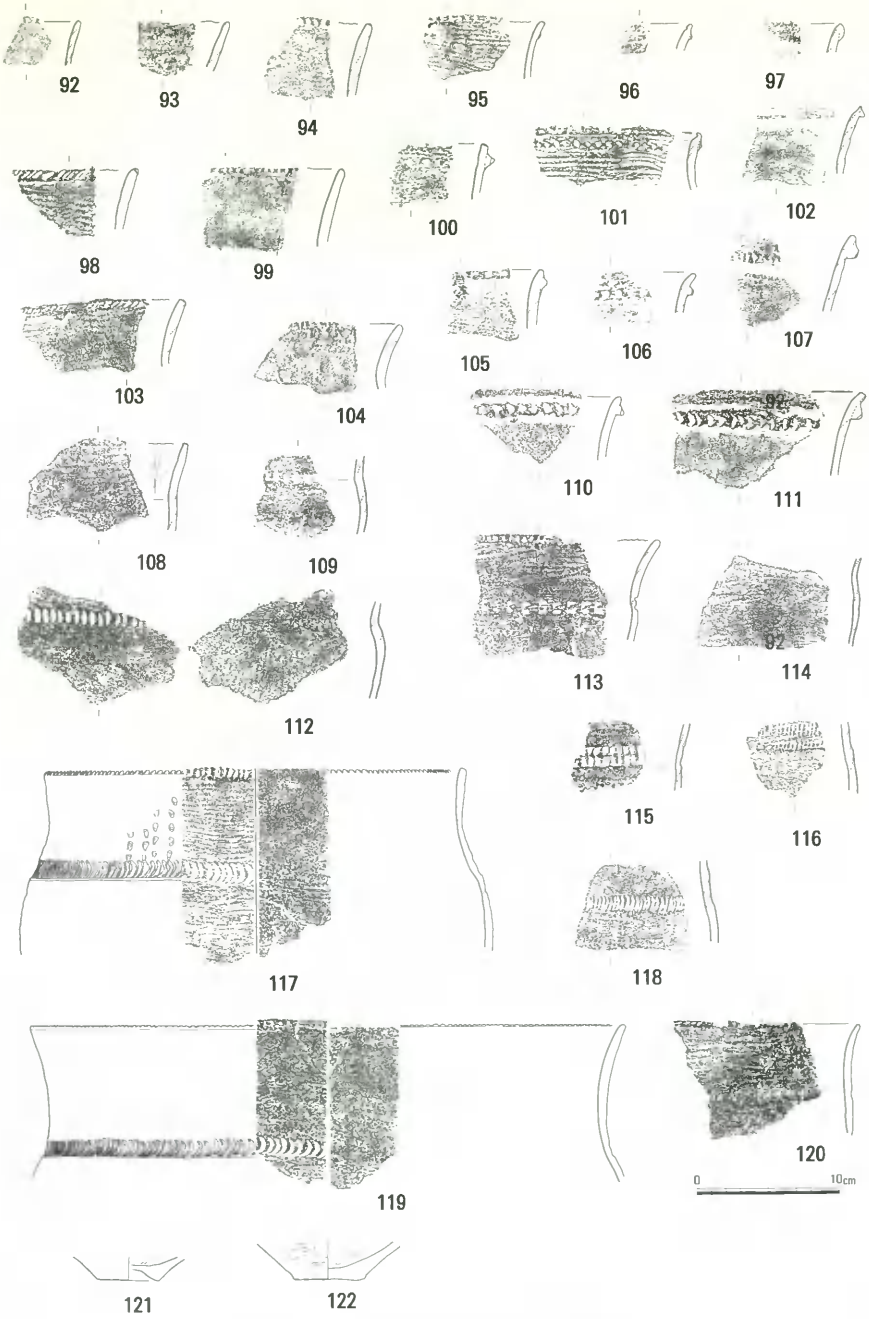
第204図　Ⅶ・Ⅷ区河道９出土縄文土器



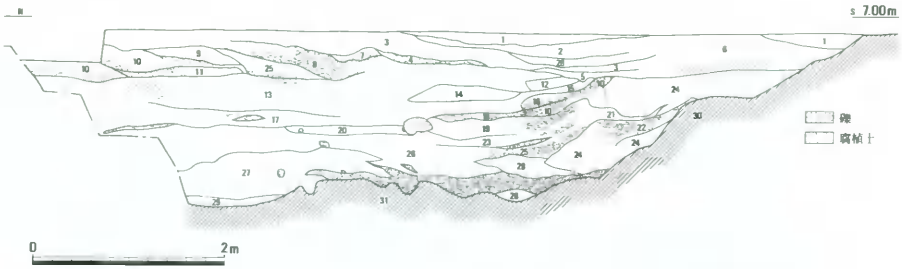
第205図　Ⅶ・Ⅷ区北半河道９出土縄文土器(1)

河道９（第205・206・209・210図）

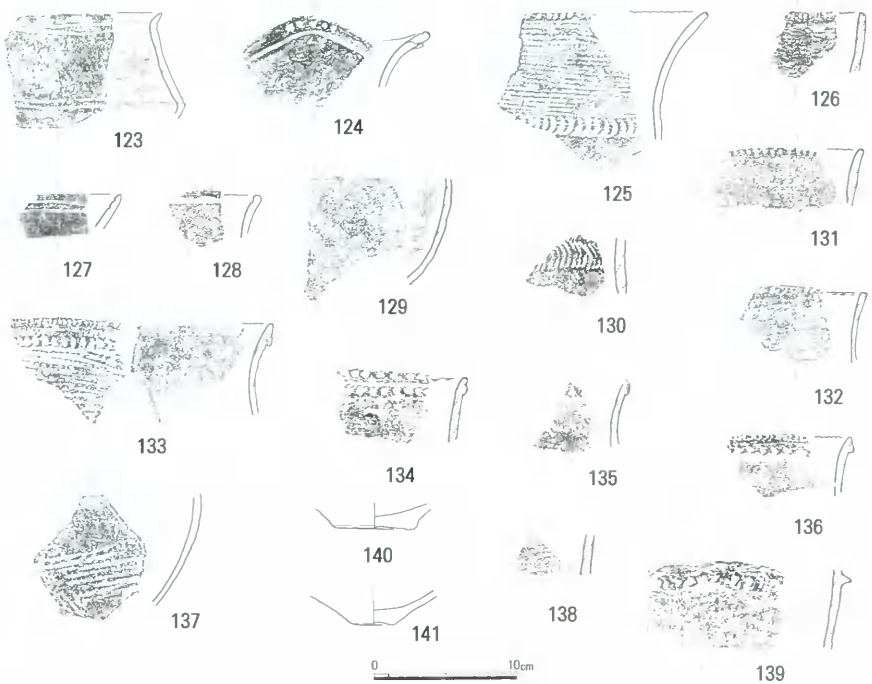
Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区の南半に存在し、東北側の肩部は河道８を切っている。南側の肩は、Ⅸ区の西南部において一部が検出され、この部分での幅は24ｍほどである。深さは３ｍあり、底面の海抜は300㎝前後である。底面は凹凸が激しい。出土遺物は、Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区から後期に含まれる縁帯文**73～79**、**191～198**・**200**と晩期の土器**81～91**、（第209・210図〈上段〉）が出土している。晩期の突帯文は、突帯部に刻み目を付すものとそうでないものが認められる。また垂下する刺突文を施文するもの**117**・**161～163**・**169**も存在する。（伊藤）



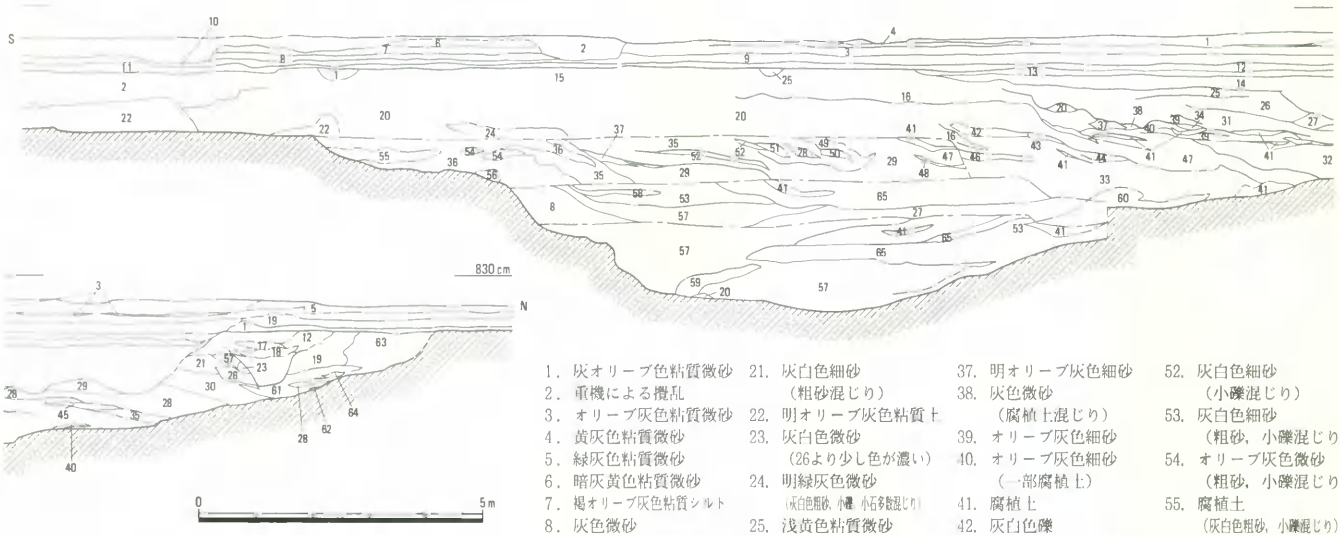
第206図　Ⅶ・Ⅷ区南半河道９出土縄文土器(2)



1．明オリーブ灰色粘質土
2．灰黄色粗砂（礫混じり）
3．明緑灰色粘質土
4．明オリーブ灰色細砂（腐植土混じり）
5．明青灰色粗砂（礫混じり）
6．浅黄色礫（小石混じり）
7．浅黄色細砂（腐植土混じり）
8．明緑灰色粘質微砂（腐植土混じり）
9．灰白色細砂
10．灰白色細砂（腐植土混じり）
11．灰白色細砂・礫（腐植土混じり）
12．オリーブ灰色粘質微砂
13．灰白色粗砂（腐植土・礫混じり）
14．灰白色粗砂（礫・小石含む）
15．明オリーブ灰色粗砂（礫混じり）
16．緑灰色粘質微砂（腐植土混じり）
17．灰白色粗砂礫混じり（腐植土混じり）
18．腐植土
19．明緑灰色粗砂
20．明オリーブ灰色粗砂（礫混じり）
21．暗緑灰色粘質土
22．緑灰色粘質土（腐植土混しり）
23．灰色粗砂・礫
24．緑灰色粘質土
25．灰白色粗砂（腐植土混じり）
26．灰色粗砂（礫混じり）
27．灰白色粗砂（礫混じり）
28．灰白色粗砂
29．礫・砂利
30．緑灰色細砂
31．青灰色粘質土（礫混じり）

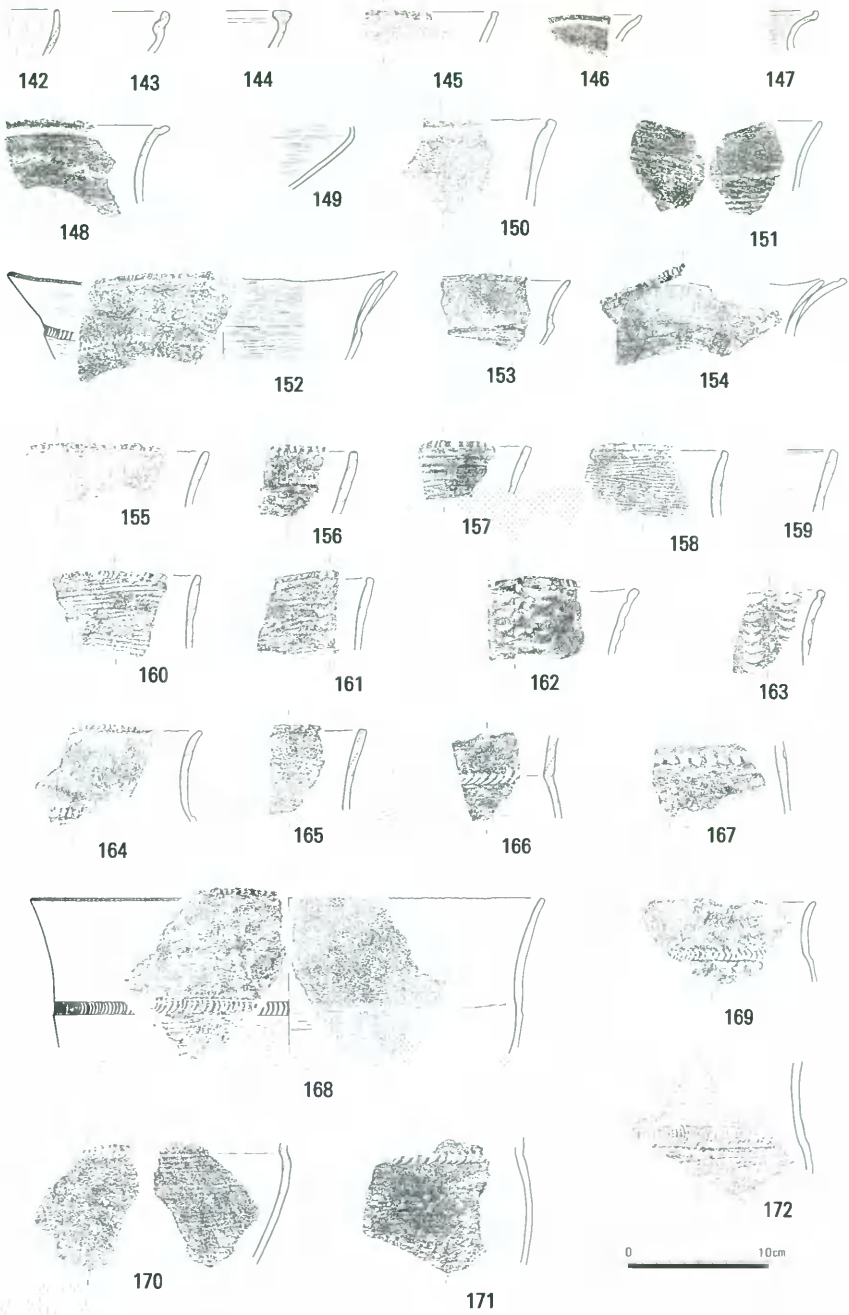


第207図　Ⅸ区河道８断面図(1/60)及び出土縄文土器

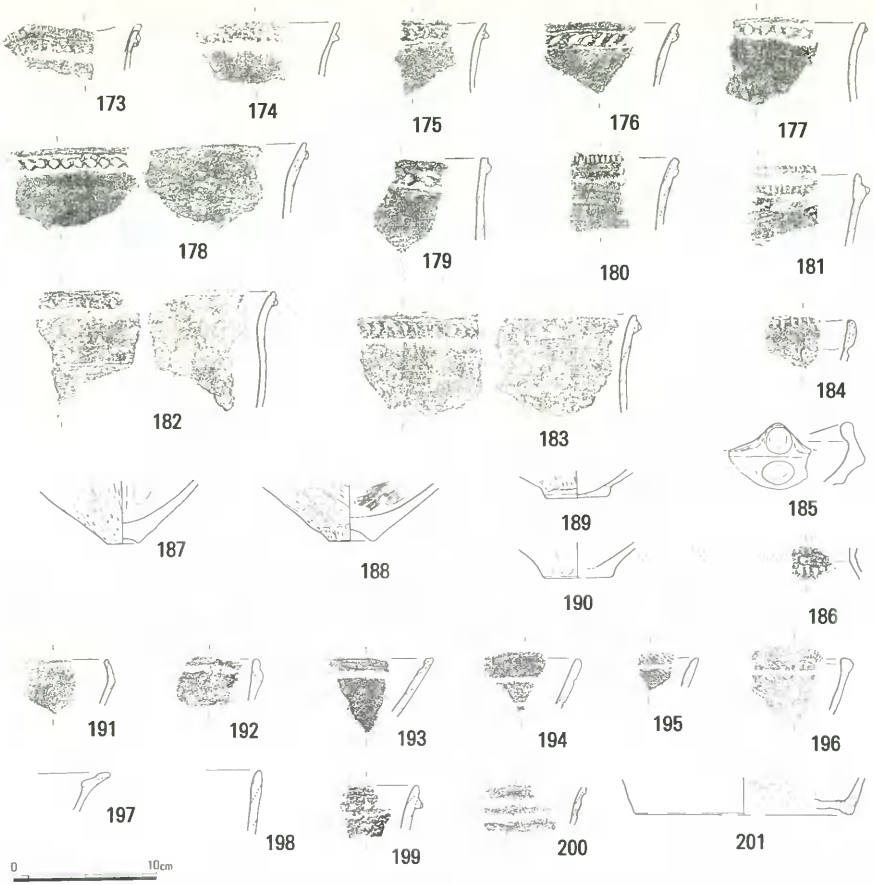


1．灰オリーブ色粘質微砂
2．重機による攪乱
3．オリーブ灰色粘質微砂
4．黄灰色粘質微砂
5．緑灰色粘質微砂
6．暗灰黄色粘質微砂
7．褐オリーブ灰色粘質シルト
8．灰色微砂
9．オリーブ灰色粘質微砂
（3より少し濃い）
10．黄灰色細砂
11．灰黄色粘質微砂
12．明黄褐色粘質微砂
13．暗灰黄色粘質土
14．暗灰黄色粘質土
（褐色混じり）
15．黄灰色粘質土
（炭混じり）
16．緑灰色微砂
17．灰白粗砂
18．灰白粗砂
（小礫混じり）
19．灰白粘質微砂
20．明緑灰色微砂
21．灰白色細砂
（粗砂混じり）
22．明オリーブ灰色粘質土
23．灰白色微砂
（26より少し色が濃い）
24．明緑灰色微砂
（灰白色粗砂，小礫，小石多数混じり）
25．浅黄色粘質微砂
26．灰白色微砂
27．灰白色細砂
28．灰白色粗砂
29．灰白色粗砂
（小礫混じり）
30．淡黄色細砂
31．緑灰色細砂
32．オリーブ灰色粗砂
（小礫，腐植土混じり）
33．灰白色細砂
（粗砂，小礫，小石，腐植土混じり）
34．オリーブ灰色粗砂
（小礫混じり）
35．灰白色細砂
（腐植土混じり）
36．灰白色細砂
（粗砂，小礫，小石多数混じり）
37．明オリーブ灰色細砂
38．灰色微砂
（腐植土混じり）
39．オリーブ灰色細砂
40．オリーブ灰色細砂
（一部腐植土）
41．腐植土
42．灰白色礫
（粗砂混じり）
43．腐植土
（灰色細砂混じり）
44．明オリーブ灰色細砂
（粗砂混じり）
45．灰白色粗砂
（腐植土混じり）
46．灰白色細砂
（粗砂，腐植土，木混じり）
47．灰白色細砂
（粗砂，小礫，腐植土混じり）
48．青灰色細砂
49．灰色細砂
（腐植土混じり）
50．灰白色礫
51．灰白色細砂
（小礫，腐植土混じり）
52．灰白色細砂
（小礫混じり）
53．灰白色細砂
（粗砂，小礫混じり）
54．オリーブ灰色微砂
（粗砂，小礫混じり）
55．腐植土
（灰白色粗砂，小礫混じり）
56．オリーブ灰色粘質土
57．灰白色粗砂，礫多数
58．灰白色粗砂，礫
59．暗オリーブ灰色粘質土
60．緑灰色微砂
（腐植土，木混じり）
61．灰白色粗砂
（小礫多く混じる）
62．灰白色粘土
63．灰オリーブ色粘質微砂
（明黄褐色混じり）
64．灰色粘土
65．灰白色粗砂
（礫混じり）

第208図　IX区河道9断面図(1/100)



第209図　Ⅸ区河道９出土縄文土器(1)

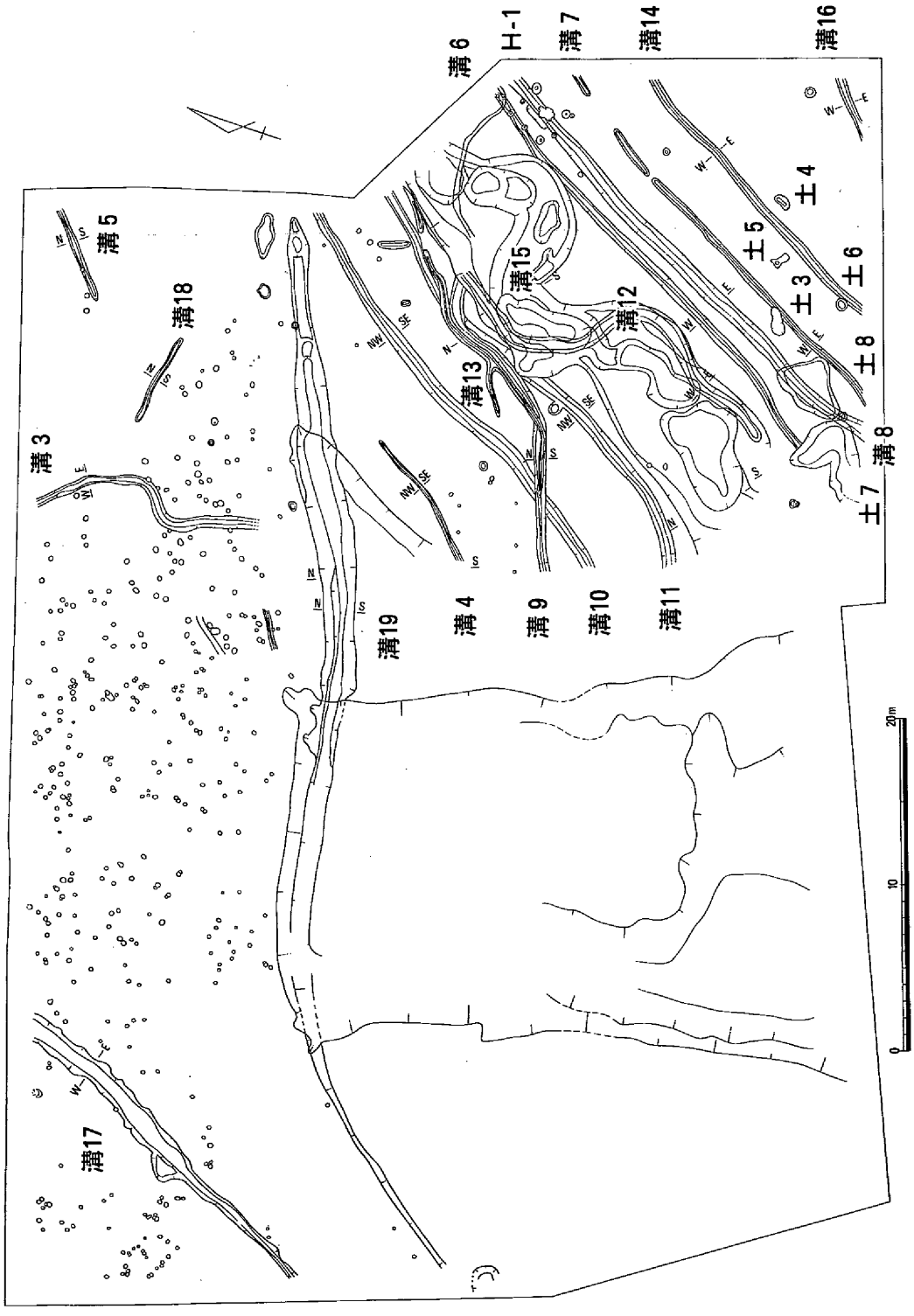


第210図　Ⅸ区河道９出土縄文土器(2)

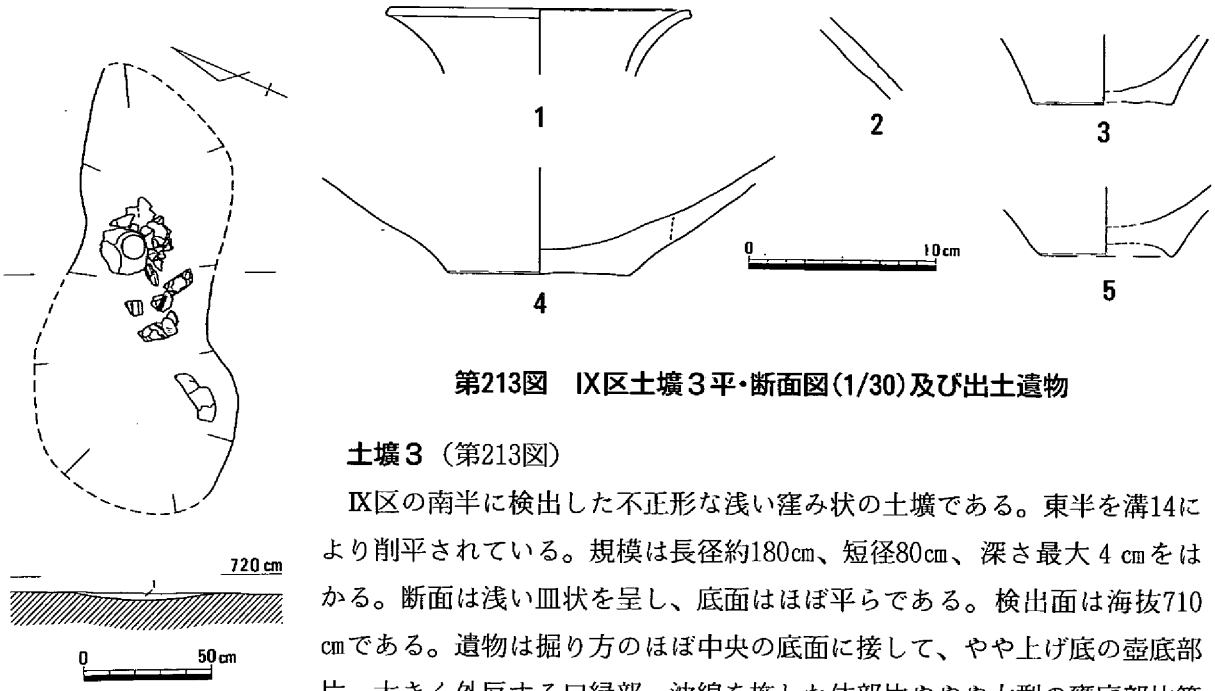
第３節　弥生時代の遺構・遺物

第211図　下池地区弥生時代以降の遺構配置図(1/800)

（１）土壙



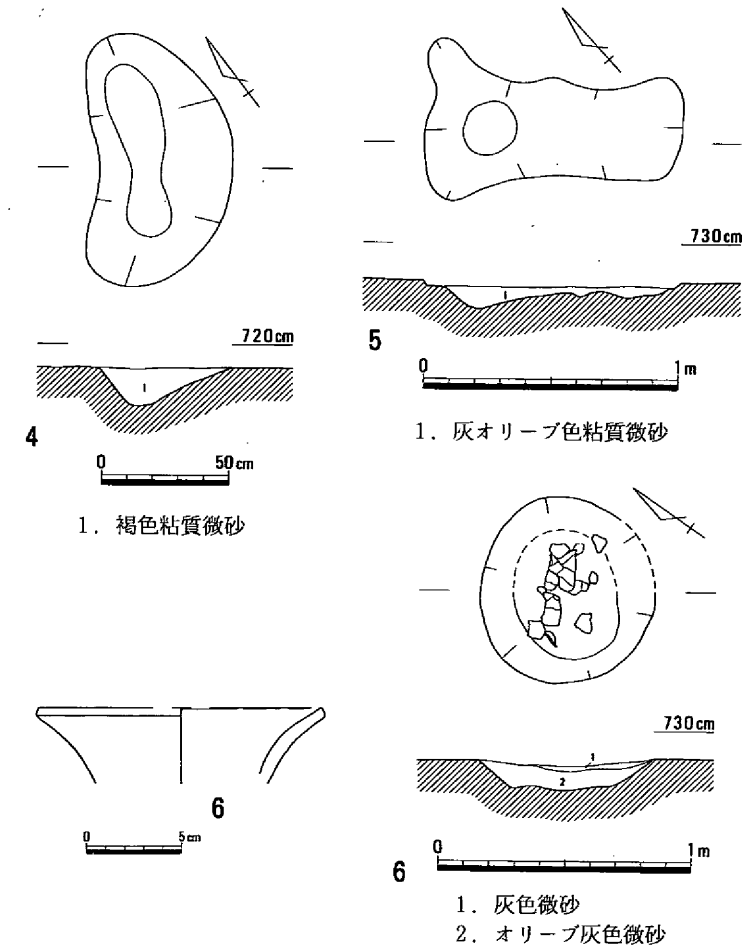
第212図　Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区弥生時代以降の遺構配置図(1/400)



第213図　Ⅸ区土壙３平・断面図(1/30)及び出土遺物

土壙３（第213図）

Ⅸ区の南半に検出した不正形な浅い窪み状の土壙である。東半を溝14により削平されている。規模は長径約180㎝、短径80㎝、深さ最大４㎝をはかる。断面は浅い皿状を呈し、底面はほぼ平らである。検出面は海抜710㎝である。遺物は掘り方のほぼ中央の底面に接して、やや上げ底の壺底部片、大きく外反する口縁部、沈線を施した体部片ややや大型の甕底部片等の弥生時代前期の土器が出土している。



第214図　Ⅸ区土壙４・５・６平・断面図(1/30)及び出土遺物

土壙４（第214図）

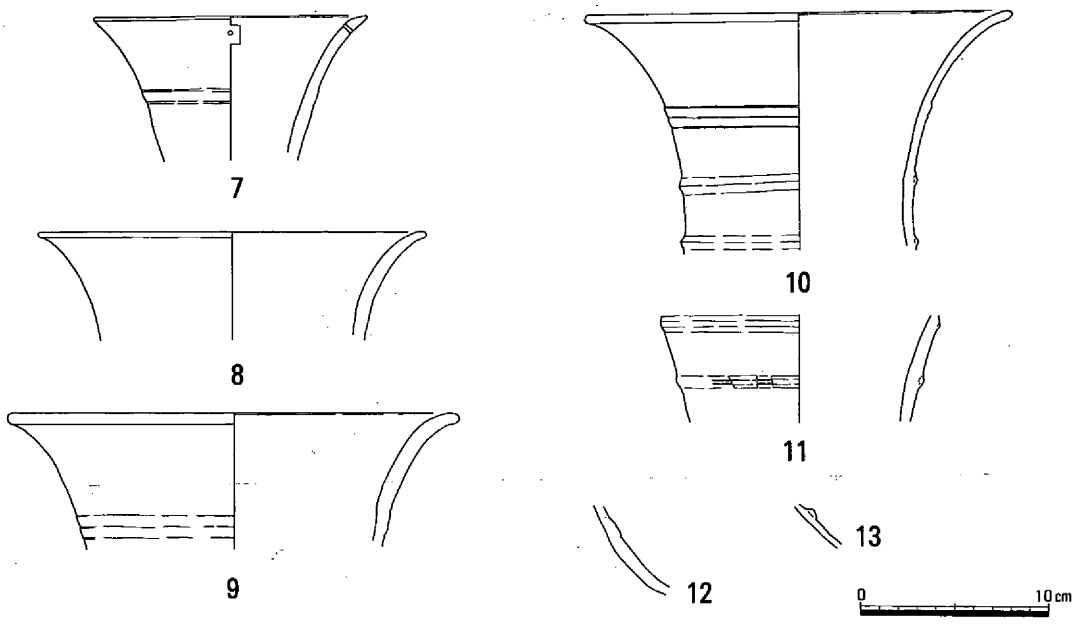
Ⅸ区の南端に検出したやや楕円形を呈す土壙である。規模は、長径100㎝、短径50㎝、深さ15㎝をはかる。断面はややV字の形状に西よりがやや深く掘り込まれている。埋土は一層のみ褐色の粘質微砂土である。検出面は土壙５と同様に海抜710㎝である。

遺物は大きく外反する壺の口縁部片**6**が出土している。時期が出土遺物や埋土から弥生時代前期と考えられる。

土壙５（第214図）

Ⅸ区の南端に検出した不定形な土壙で土壙５，６，７と一連のものである。規模は長径100㎝、短径65㎝、深さ10㎝である。断面は南側がやや浅く、北西部に向かい徐々に深くなる。埋土は一層のみで灰オリーブの粘質微砂土である。検出面は海抜715㎝である。

時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが検出面や埋土から弥生時代前期であろう。



第215図　Ⅸ区土壙６出土遺物

土壙６（第215図）

Ⅸ区の南端に検出したほぼ円形な土壙で、土壙５，６，９と一連のものである。規模は長径75cm、短径70cm、深さ10cmをはかる。断面は皿状を呈し、底面はやや凹凸がある。埋土は２層確認でき、第１層に灰色微砂土、第２層にオリーブ灰色微砂土が堆積している。検出面は海抜720cmである。

遺物は底面より壺形土器の口縁部**７～11**などが出土している。時期は出土遺物や埋土から弥生時代前期と考えられる。（山磨）

（２）溝

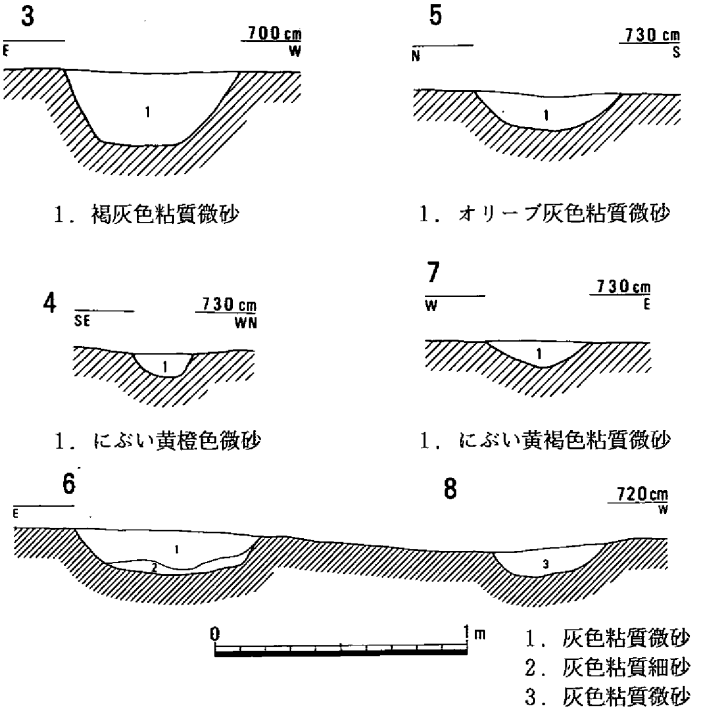
溝３（第216図）

Ⅸ区北端に検出の逆S字状の形状をなす溝で北端は調査区外である。検出長14ｍ、幅70cm深さ20cmである。断面は台形状を呈し、褐灰色粘質微砂の埋土である。検出底面は海抜680～690cmほどで、高低差不明瞭である。

時期は出土遺物が細片で確定しがたいが埋土や検出面等から弥生時代後期前後であろう。

溝４（第216図）

Ⅸ区中央付近で検出の小形の溝で西端を溝18により削平されている。北東から南西方向に向



第216図　Ⅸ区溝３～８断面図(1/20・1/30)

く溝群の１本で、検出長９ｍ、幅30㎝、深さ15㎝である。断面は椀状をなし、にぶい黄橙色の微砂土の埋土である。検出底面東端は海抜715㎝で西端で６㎝ほど低下している。

時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが埋土等から弥生時代後期後半前後と想定される。

溝５（第216図）

Ⅸ区北東端に検出した北東から南西に向く溝群の１本と考えられる。検出長600㎝、幅40㎝深さ20㎝である。断面は椀状をなし、オリーブ灰色粘質微砂の埋土である。溝底面は海抜710㎝で高低差は明瞭でない。

時期は出土遺物が皆無で確定しがたいが、埋土や方向等から弥生時代後期後半前後と想定される。

溝６（第216図）

Ⅸ区の南半に検出した一連の溝群の１本である。北東端は上面に竪穴住居１が位置し、南西端は土壙７により削平されている。検出長24ｍ、幅70㎝、深さ15㎝である。断面は椀状をなし、埋土は２層に分層でき灰色粘質の微砂、細砂である。溝底面は北東端で海抜695㎝をはかり、南西端で５㎝ほど低下している。

時期は遺構の切り合いや出土遺物の特徴から弥生時代後期後半前後であろう。

溝７（第216図）

Ⅸ区の南半に検出した一連の溝群の１本で、途中途切れるがほぼ直線に掘削されている。検出長23ｍ、幅40㎝、最大深さ10㎝である。断面は椀状をなし、にぶい黄褐色の粘質微砂の埋土である。溝底面は海抜710㎝で溝両端の高低差は認められない。

時期は出土遺物が細片のため確定しがたいが弥生時代後期後半前後であろう。

溝８

Ⅸ区の南半に溝６と100㎝ほどの間隔を置きほぼ平行に検出した一連の溝群の１本である。北東端は竪穴住居１が上面に位置し、南西端は土壙８により削平されている。検出長28ｍ、幅45㎝、深さ10㎝である。断面は椀状をなし、灰色粘質微砂の埋土である。溝底面は海抜695㎝で、高低差は若干南西に向かって低下している。

時期は出土遺物や切り合い関係から弥生時代後期後半前後であろう。（山磨）

第４節　古墳時代の遺構・遺物

（１）竪穴住居

竪穴住居１（第217図）

Ⅸ区中間部の東端に検出した竪穴住居である。床面、壁体溝共に削平されて掘り方、規模ともに不明確である。柱穴は合計９本検出した。このうち等間隔に位置する４本（Ａ～Ｄ）が主柱穴と想定され、ＡＢ、ＣＤ間250㎝、ＡＣ、ＢＤ間220㎝と等しく、ほぼ方形の配置である。主柱穴は直径45～65㎝、深さはＡ、Ｂ、Ｃが64～72㎝、Ｄがやや浅く37㎝である。方形の主柱穴配置の中央やや南よりに長軸120㎝、短軸50㎝、深さ７㎝の長円形の掘り方を検出した。この掘り方に接し北側に長さ110㎝、幅50㎝ほどの灰の広がりを検出した。灰は深さ４㎝ほどの浅い窪みを呈す。

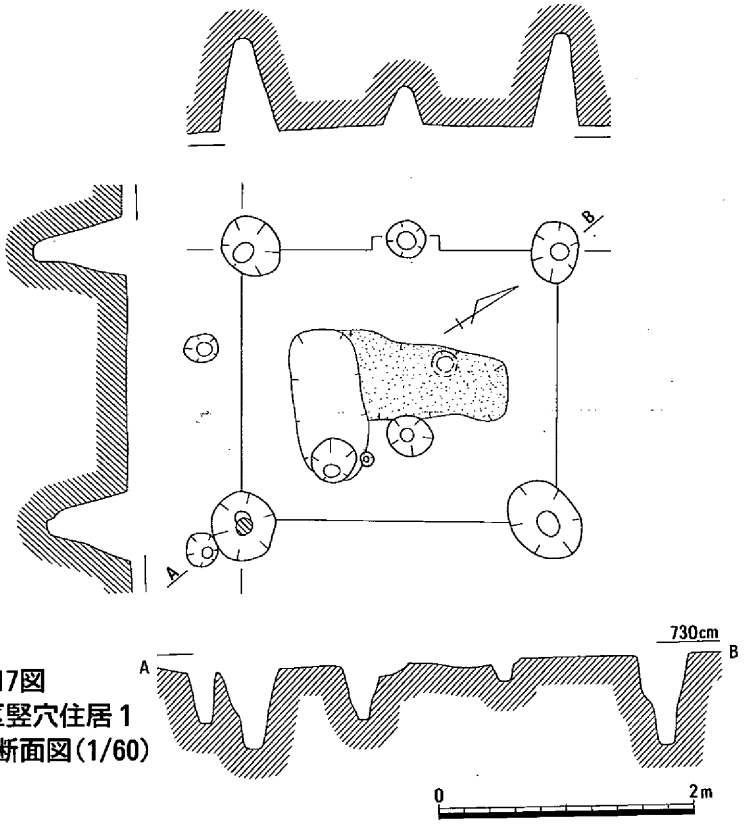
出土遺物が細片で時期の確定がしがたいが溝６、８埋没後に住居が掘削されている状況や検出面等から古墳時代前半と想定される。（山磨）

（２）土壙

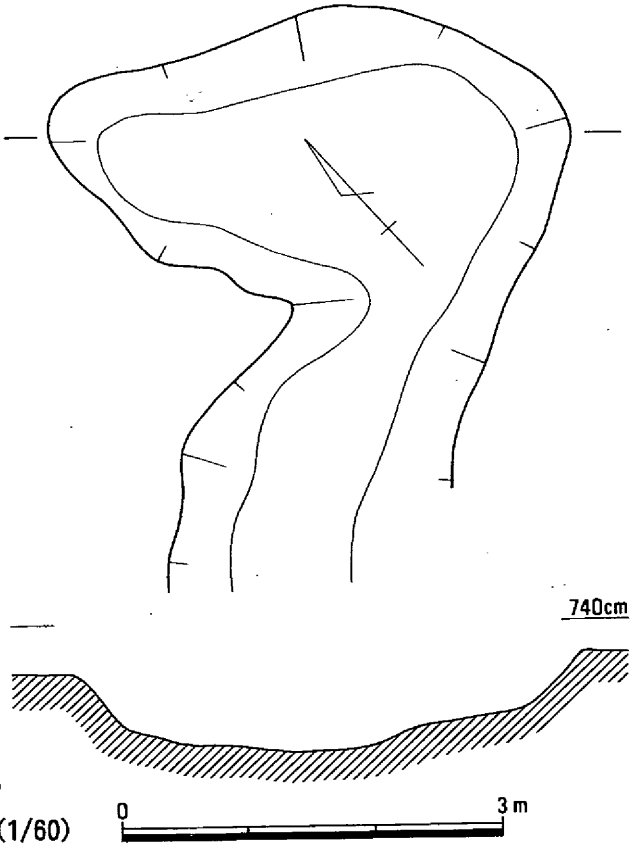
土壙７（第218図）

Ⅸ区南西端に検出した不正形な大形土壙で溝６、８を切っている。南端の土層断面の観察では南側の調査区外に続きそうである。規模は現存東西長550㎝、南北長400㎝をはかる。深さは平均して70㎝で、明瞭な掘り方を示す。検出面は海抜720㎝である。

時期は出土遺物が細片で確定しがたいが埋土や出土遺物から古墳時代前半以降であろう。（山磨）



第217図
Ⅸ区竪穴住居１
平・断面図(1/60)



第218図
Ⅸ区土壙７
平・断面図(1/60)

土壙８（第219図）

Ⅸ区南端に検出した不定形な土壙である。溝８の上面を掘削している。規模は長径450㎝、短径300㎝、深さ25㎝をはかる。断面は皿状を呈し、底面はほぼ水平である。埋土は２層確認でき第１層に灰色微砂土、第２層に灰オリーブ粘質細砂土が堆積している。検出面は海抜710㎝である。

時期は出土遺物にやや古相の土器片も混じるが切り合いや検出面等から古墳時代前半と想定される。

（３）溝

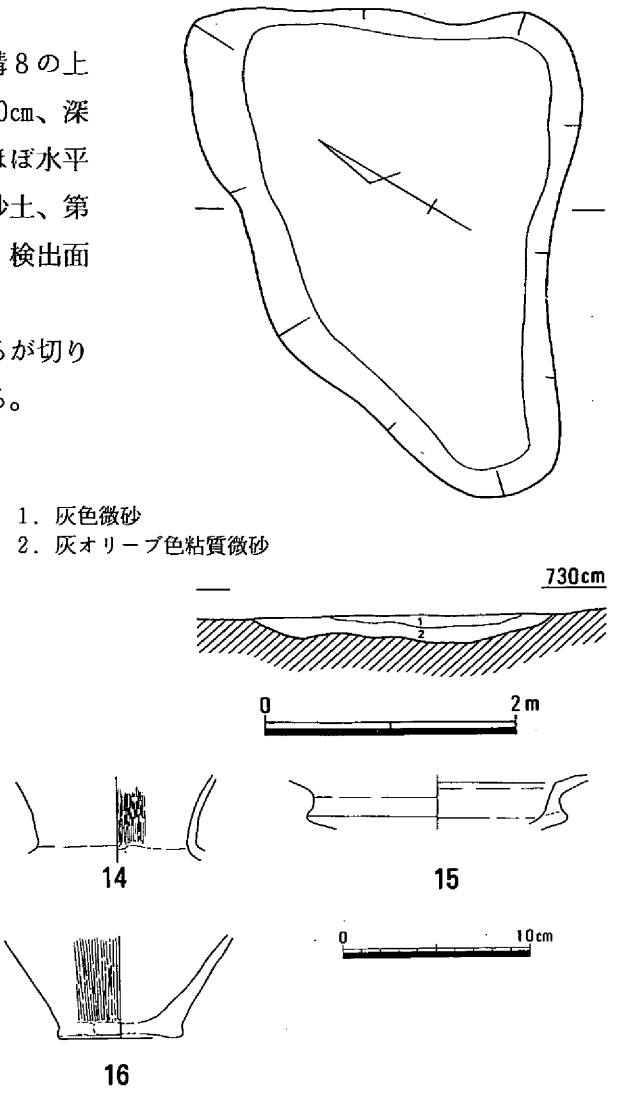
溝９（第220図）

Ⅸ区中央付近に検出の一連の溝群の１本である。東北端は溝群の重複のため明瞭に確認できていない。検出長19ｍ、幅70㎝、最大深さ10㎝でS字状に若干蛇行している。断面は皿状をなし、緑灰色粘質粗砂の埋土である。新旧関係は溝11を横切り、溝13が重複し上面に位置する。溝底面は海抜710ｍで、溝両端の高低差は明瞭でない。

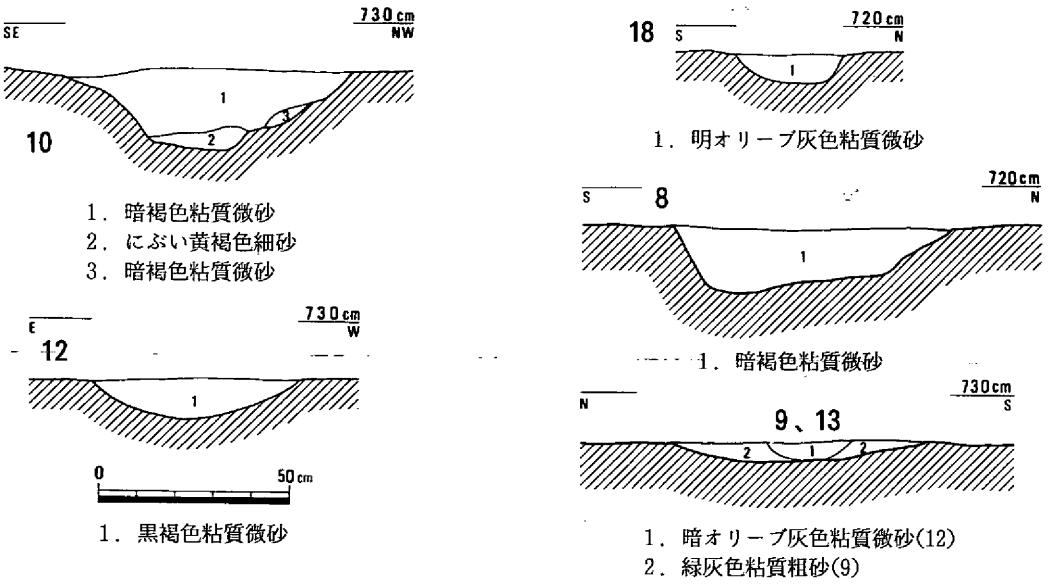
時期は図示できなかったが高杯等の細片の特色から古墳時代前半と考えられる。

溝10（第220図）

Ⅸ区中央に検出の北東から南西に向く溝群の１本で溝９、13が斜めに切っている。



第219図　Ⅸ区土壙　８平・断面図(1/60)及び出土遺物



第220図　Ⅸ区溝７～11断面図(1/20)

南西端は調査用畦で未検出であるがⅧ区では中世近世遺構で削平されている。検出長27m、最大幅100㎝、最大深さ30㎝である。断面は深椀もしくは逆台形の形状で、図示付近では３層の埋土が確認できた。溝底面は海抜700㎝ほどで高低差はほとんど認められない。

時期は出土遺物が細片のため確定しがたいが、切り合いや埋土等から古墳時代前半前後と想定される。

溝11（第220図）

Ⅸ区中央付近に検出した一連の溝群の１本で溝10と４ｍの間隔を置きほぼ平行している。新旧関係は溝10・13が上面に、溝15を切り込んでいる。西端は近世の落ち込みで削平されている。検出長28m、幅70㎝、深さ10～15㎝で緩く蛇行している。断面は椀状をなし、暗褐色粘質微砂の埋土である。北東端の溝底面は海抜710㎝をはかり、南西端で10㎝低下している。

時期は図示できなかったが甕、高杯の細片の特色から古墳時代前半と考えられる。

溝12（第220図）

Ⅸ区中央付近の溝15の上面に検出したややS字状に蛇行する溝である。北東端は同一の溝か不確定ながら徐々に広がり最大幅８ｍ、深さ10㎝ほどの浅い落ち込みに続く。南西端は後世の削平で土壙４付近で消滅する。北東端の落ち込みを含めると全長30ｍ、平均幅90㎝、最大深さ15㎝である。断面は皿状を呈し、黒褐色粘質微砂土の埋土である。北東端の溝底面は海抜710㎝で、南西に向かって若干低下している。

時期は図示できなかったが甕、高杯の細片の特徴から古墳時代前半である。

溝13（第220図）

Ⅸ区中央付近に検出した一連の溝群で溝９、10の上面に位置する。北東端で途切れ、中央付近で二股に分かれ途中で終わっている。検出長20ｍ、幅30㎝、深さ10㎝である。断面は皿状をなし、暗オリーブ灰色粘質粗砂の埋土である。溝底面は海抜710㎝をはかり、両端の高低差は明瞭でない。

時期は図示できなかったが出土遺物の特徴から古墳時代前半であろう。

溝14（第224図）

Ⅸ区の南端に検出した一連の溝群の１本である。規模は、検出長19ｍ、幅50㎝、深さ45㎝である。断面はU字状の明瞭な掘り方をなし、埋土は、第１層が灰黄色粘質細砂、第２層が灰褐色粘質微砂、第３層が灰色粘質土と分層できる。溝底面は北東端で海抜680㎝で南西端で若干低下している。

時期は二重口縁の沈線を施した甕の特徴等から古墳時代前半と考えられる。その他に縄文晩期の土器と石器が認められた。

溝15（第221・222・223図）

Ⅸ区中央より南半に検出した大きくS字状に蛇行する大形の溝である。流走方向は一連の溝群と同様に北東～南西を向いている。南西端はⅧ区境の土層断面の南端では確認できたものの、平面では後世の削平により明瞭に掘り方が確認できなかった。検出規模は、全長28ｍ、幅４～７ｍである。溝底面は下層に位置する縄文時代河道の砂層に達していたために点々と深く抉られて凹凸がある。深さは本来の底面で約60㎝、最大深さ110㎝である。埋土は基本的には礫混じり砂層である。検出底面は海抜660㎝で、溝両端の高低差は認められない。新旧の関係は溝15の埋没後に溝12が掘削され、溝11が旧く溝15により一部を削平されている。

出土遺物は下池調査区で最も多く、一部では土器溜まりに近い状態をなしていた。器種は、壺、甕、

高杯、鉢のほか小形の手捏ね土器が認められた。甕の特徴は二重口縁に櫛描き沈線を施し、丸底に近い。高杯は短脚から長脚を含み、杯部の端部が大きく外傾発達した器形が多い。下層に縄文時代の時代の河道９が存在するために、縄文時代晩期の土器片が混在している。

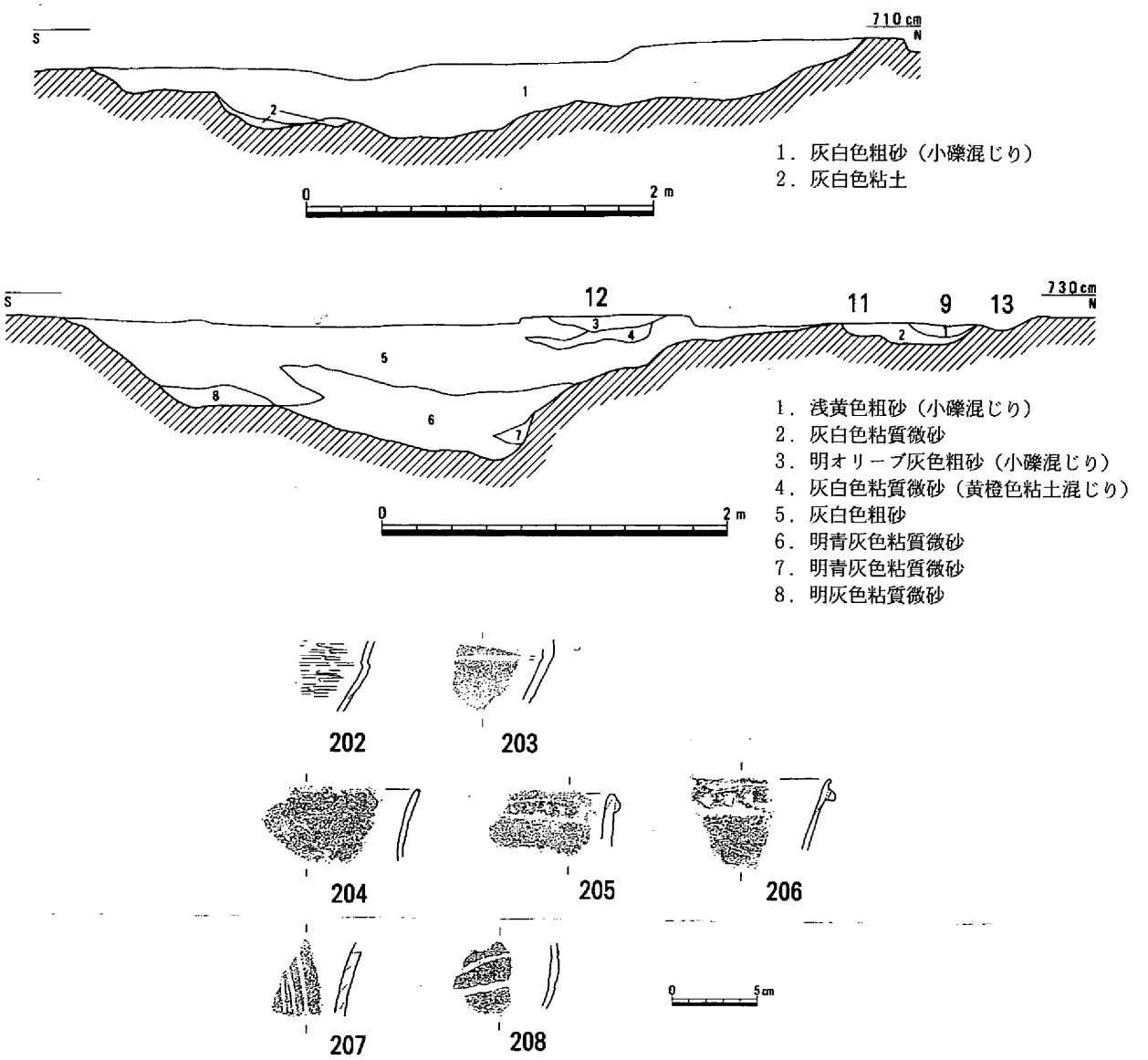
これらの特徴からこの溝の時期は、古墳時代前半期に機能していたと考えられる。

溝16

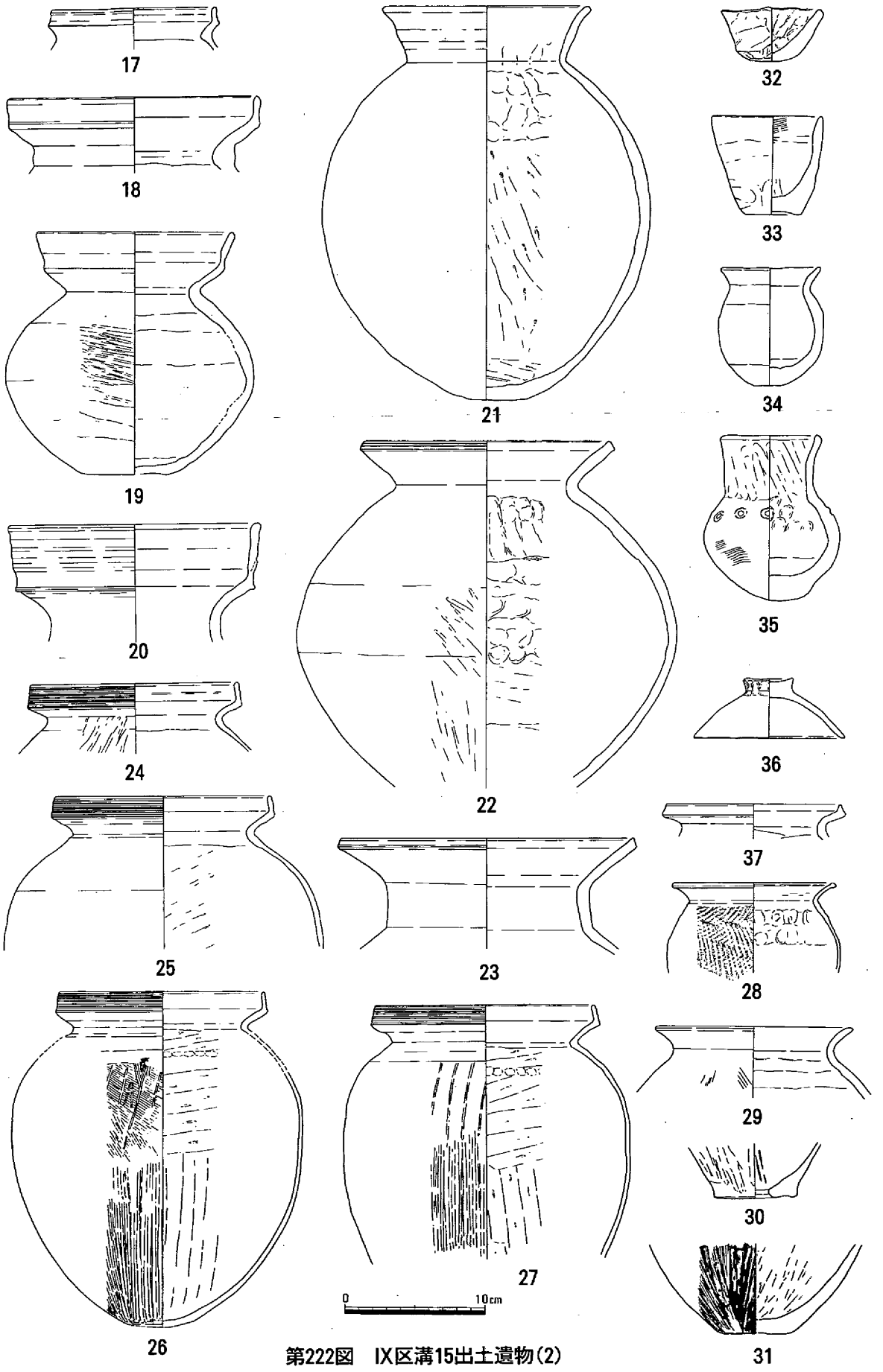
Ⅸ区南東隅に検出した一連の溝群の１本で大半は調査区外である。規模は検出長4,1ｍ、幅50㎝、最大深さ５㎝である。断面は皿状をなし、灰色微砂土の埋土である。検出底面は海抜715㎝で、一部の確認のため高低差は認められない。

時期は出土遺物が細片のため確定しがたいが検出面や埋土等から古墳時代初頭前後と想定される。

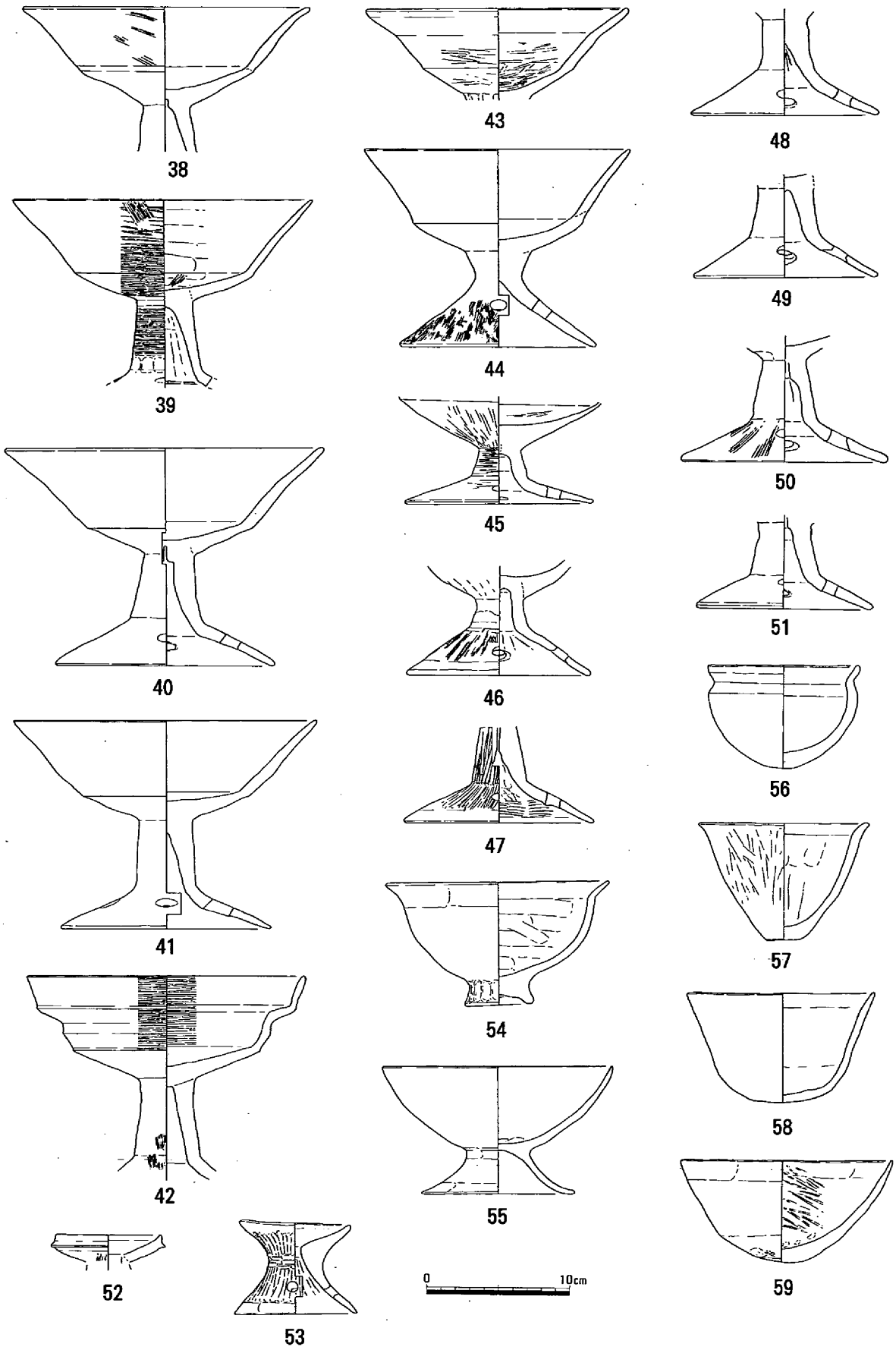
（山磨）



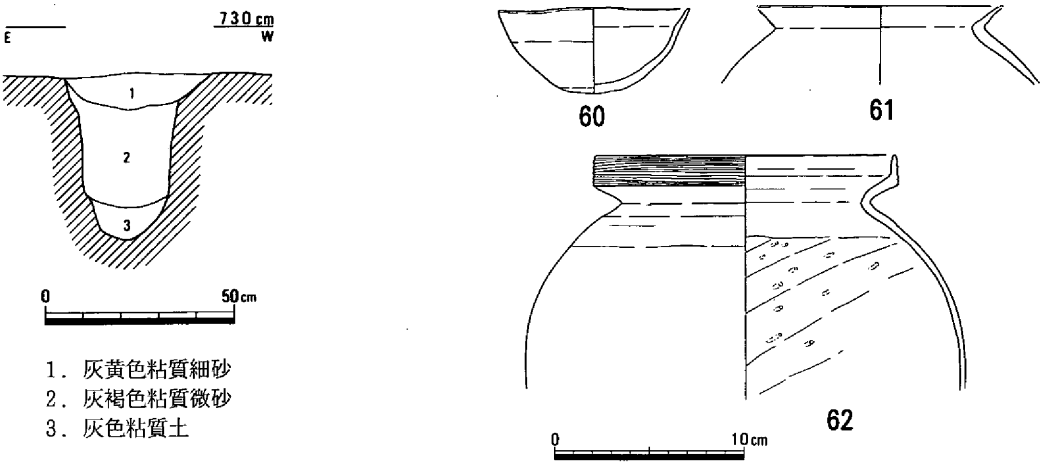
第221図　Ⅸ区溝15断面図(1/50)及び出土遺物(1)



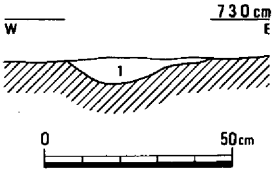
第222図　IX区溝15出土遺物(2)



第223図　IX区溝15出土遺物(3)



第224図　Ⅸ区溝14断面図(1/20)及び出土遺物



第225図　Ⅸ区溝17断面図(1/20)

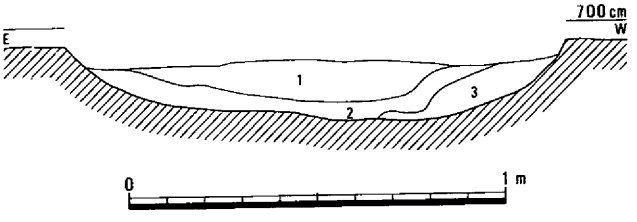
溝17（第225図）

Ⅶ・Ⅷ区北半の微高地上で検出された溝で、東北から西南に走る。東北部が広く、160cmを測るが西南部では50cmほどになる。深さは８～20cmで,底面の海抜674cmである。出土遺物は見られない。

溝18（第225図）

Ⅸ区北半に検出した細い溝状の遺構である。検出長570cm、幅30cm、深さ15cmである。断面は椀状をなし、明オリーブ灰色粘質微砂の埋土である。溝底面は海抜700cmで高低差は明瞭でない。

時期は出土遺物が皆無で、方向も一連の溝群と異なり確定しがたい。

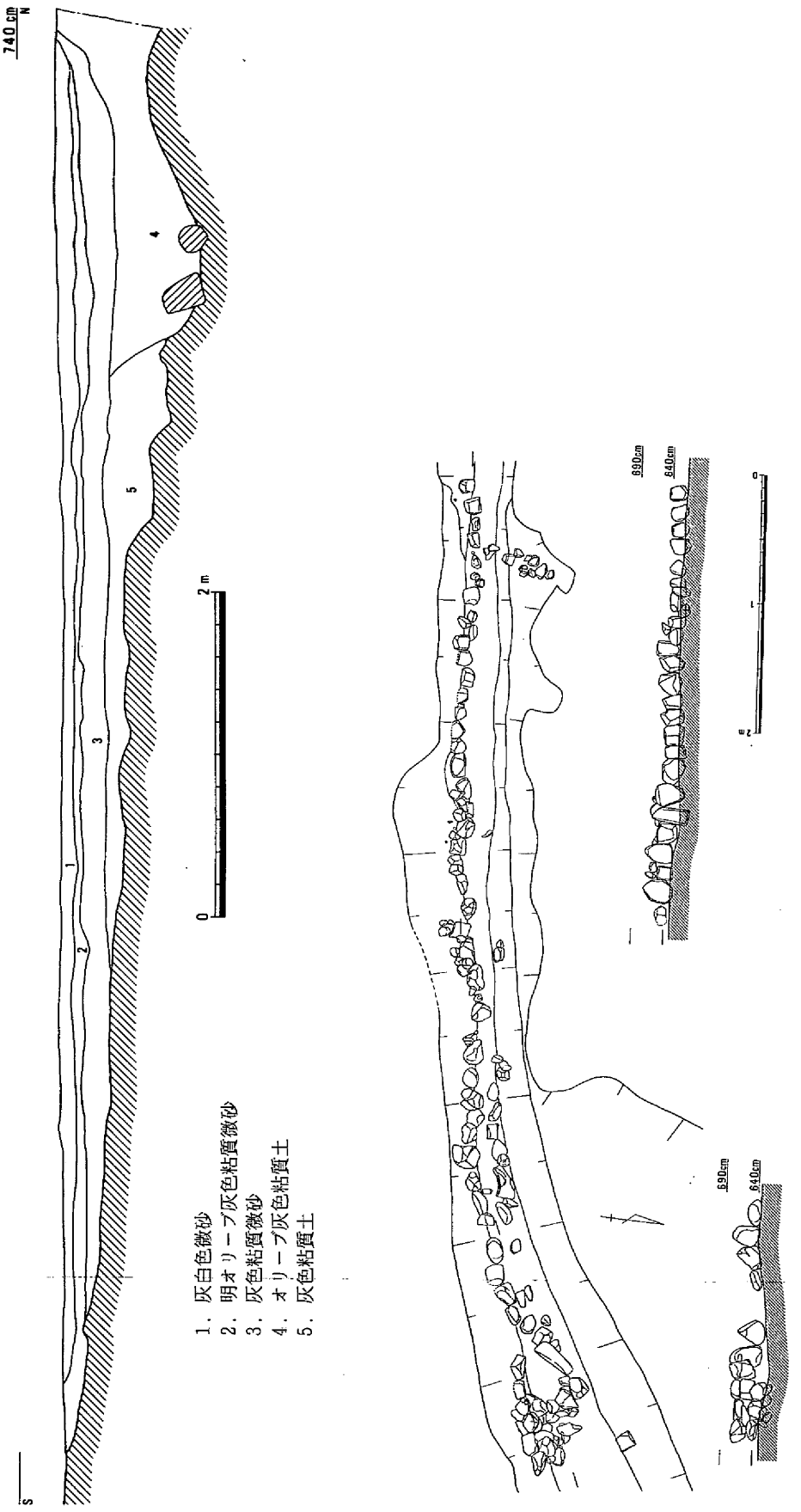


第226図　Ⅶ・Ⅷ区北半溝18断面図(1/20)

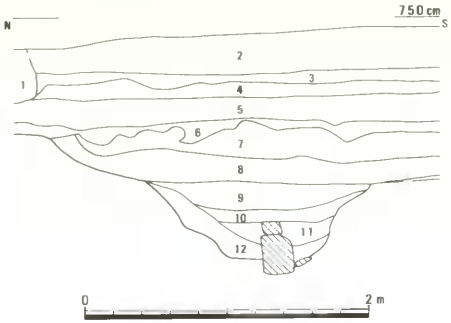
溝19（第221・222・223図）

Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区の微高地と河道８の境部に検出された溝でほぼ東西に走る。50m程検出したが、東側は調査区外に伸び、西側は河道8の中に大きく拡がている。検出面での幅は50cmから1,5mと一定しない。深さは60cmを測るが、微高地の肩部からでは１m前後になる。

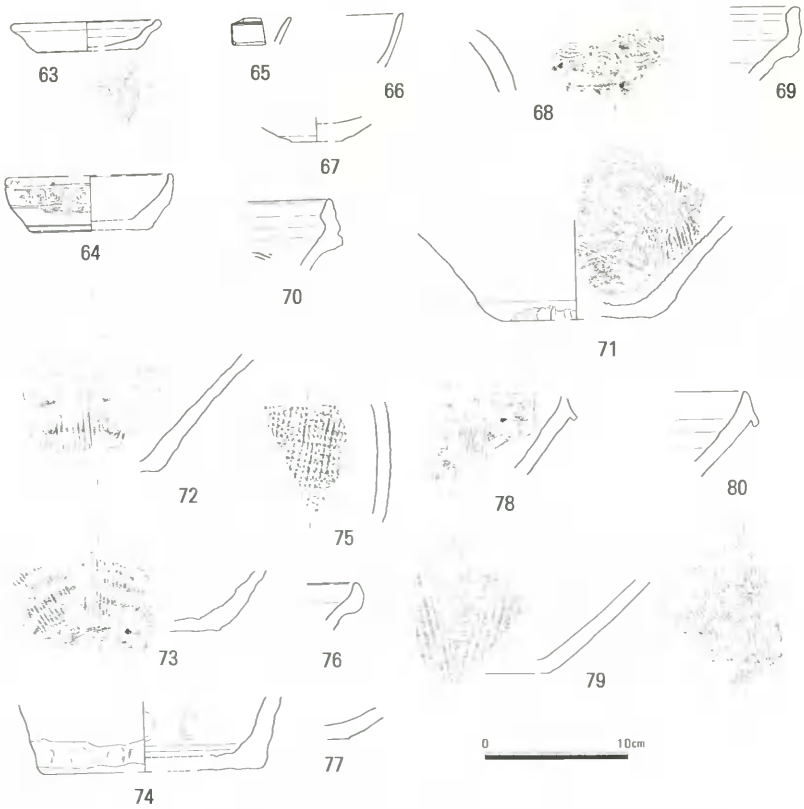
Ⅸ区東側から、Ⅶ・Ⅷ区にかけての底部には、石列を組んでいる。Ⅶ・Ⅷ区東側では北側に１列であるが、西半は両側に見られる。石列の幅は20cmほどである。溝底面の海抜は590cmである。溝内からは、土師器小皿**63**、雷文を持つ小鉢**64**、備前壺肩部**68**、壺底部**74**、摺鉢**69**～**73**、亀山摺鉢**78**～**80**、青磁小皿**65**・**67**、椀**66**魚住鉢**76**・**77**などが出土している。これらの遺物からこの溝は、中世末から近世初頭にかけて機能していたものと考えられる。



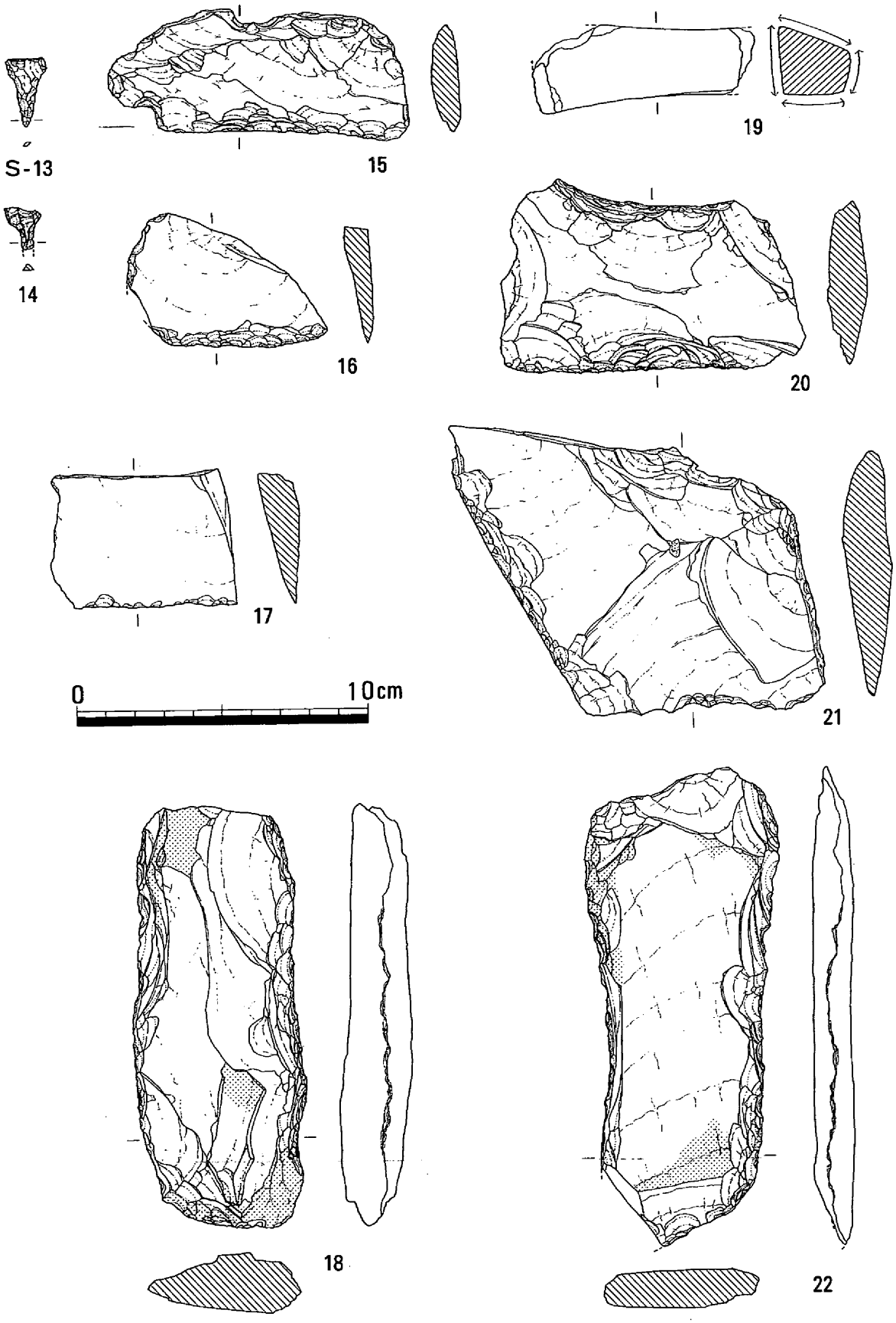
第227図　Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ区溝19平（1/50）・断面図（1/40）



1．黄褐色粘性砂質土
2．褐色粘性砂質土
3．黄褐色粘質土
4．黄褐色粘性砂質土
5．茶灰色粘性砂質土
6．黄褐色粘性砂質土
7．灰色微砂
8．褐色粘性砂質土
9．灰褐色微砂
10．淡灰色粘質土
11．灰色粘質土
12．緑灰色粘質土



第228図　Ⅶ・Ⅷ～Ⅸ区溝19断面図(1/40)及び出土遺物



第229図　下池地区包含層出土石器

第4章　ま　と　め

第１節　河道出土を中心とする弥生土器について

早期

突帯文土器の後半を、早期と呼ぶ。百間川沢田遺跡、岡山大学構内津島遺跡などにおいて見られるものであるが、田益田中遺跡では河道内から数点確認できたのみである。**394**は、７区河道出土の浅鉢で、**522・246**は深鉢になり、10区河道、１区河道最下層から出土している。

前期Ⅰ期

津島遺跡から出土したものを標識とするが、この時期に該当する土器はみられない。

前期Ⅱ期

壺等において削り出し突帯のものを基本標識とする。この遺跡において土壙、溝など最も多くの遺構がみられる時期であり、４区河道11を始め各調査区の河道からは大量の遺物が存在する。

壺**582**の器形は、口縁部が小さめに開き、胴部最大径が中央よりやや下気味になり、底部は**400・544**のように上底である。口縁部の形態には、逆ハ字形になるもの（**400・544**）と、**404**のように外方へ拡張するものがある。外面の文様には、２～３状の重弧文**544**、平行斜線文**400**、４列の刺突文**250**、削り出し突帯の上に刻目文がある**449**などがある。

甕は、口縁部がく字形で、わずかに外反し、頸部に２～４条のヘラ描き沈線文がある。胴部は、わずかに膨れるもの（**256・383**）、膨れずに底部に至るもの（**255・384**）などがある。**303**は、外面ハケ目調整の後、２条のヘラ描き沈線紋を施す。口縁部には刻目文があるものが多い（**383・255・303・384**）。**463**は大型の甕で、口縁部端面を指頭圧痕によって飾る。

鉢**261**は、口縁部が甕と同じでく字形になり、わずかに外反する。内外面とも丁寧にヘラミガキされる。

蓋は大型のもの（**560・８**）と、小型のもの（**296・276・295**）などがある。大型のものの器形は、頂部から裾部へなめらかに外反する。頂面は、木葉状文のあるもの（**560**）、へこむもの（**８**）、がある。小型のものには、頂部がわずかに持ち上がる笠形のもの（**296**）、突状になり頂面に３方の刺突文と中央に円孔を穿つもの（**276**）、がある。また**295**は、外面を無数の突起によって飾っている。

その他として線刻人面土器**314**があり、この期に含まれる。

前期Ⅲ期

門田上層式と呼ばれている弥生時代前期後葉の時期である。この時期の遺構は極端に少なく、河道出土の遺物がほとんどである。貼付突帯のものを基本とする**636・339・338**などがある。

壺は、器形がⅡ期より胴部が細めになる（**637・631**）。頸部から胴部にかけては明確な稜線をもたない**631・354**などがある。口縁部の形態は４種類に分かれる。逆ハ字形になり前段階より立ち上がりが強いもの（**636・631**）、立ち上がりが前段階と同じくらいのもの（**351・339**）、ラッパ状に強く外反するもの（**354・450・342**）、細頸壺状の**338**、などである。前２類は古相になり、後２類は新相にな

る。354・450の頸部には4条以上のヘラ描き沈線文があり、さらに450には縦の棒状浮文がある。342の口縁内面には突帯があり、注ぎ口を形作る。338は外面全面に漆を塗り、部分的に朱で彩色を施している。

甕は、頸部に5条以上のヘラ描き沈線をもつ（413・372・527・528）。口縁部の形態には、前段階と同じ、く字形になり、わずかに外反するもの（413）、逆L字形になるもの（372）、端部が下方に張り出すもの（527・528）、などがある。また378・567・527などは上面が波打っている。胴部は、口縁部より膨れるもの（413・378）、平行気味になるもの（372）、膨れずに底部に至るもの（527・528）がある。

鉢359は、口縁部を粘土貼付けで肥厚させ、4条の沈線で飾る。その直下には瘤状把手がある。483は口縁部を飾らない。566は、小型の鉢である。口縁部が横に小さく拡張する。

蓋は、大型のもの（559・821）と、小型のもの（272・273）などがある。大型のものには、8の系譜で頂部がさらに高くなる559と、296が大型になった821、などがある。小型のものには、頂部の持ち上がりが大きく、裾部が外方に強く張り出す273と、突状頂部の持ち上がりが高くなる272、などがある。

その他として、この時期にはミニチュア土器が多数見られる。879・388・565・387は、壺を模したものである。393は、鉢を模したものである。

中期Ⅰ期

この期の遺構は6区土壙48の1基のみで、極端に少なくなる。他の遺物は河道出土のものである。

甕は、頸部に櫛描沈線を施す。口縁部の形態には、逆L字形の84と、く字形になる891、がある。84は土壙48出土のもので86の分銅形土製品が供伴している。

鉢には、口縁部が直に立ち上がる492と、ジョッキ形の493、がある。

中期Ⅱ期

この時期の遺構は認められず、出土遺物もほとんどが河道内出土のものである。

遺物は壺のみで、2種類存在する。335は頸部が細く、口縁部が直気味に立ち上がる。口縁下方には指頭圧痕文があり、胴部上半には櫛描文がある。883は漏斗状の口縁で、外面には突線文がある。「菰池」式に該当する。

中期Ⅲ期

壺は、頸部が直に立ち上がり、口縁部が外方に拡張し端部を上方につまみ上げる731と、883の系譜を引き、漏斗状口縁が直気味になる732・753がある。731の口縁外面は凹線文が施られる。

甕には、口縁部がT字になる805・839・831がある。805はT字でも上方に強く張り出し、831は端面が上方を向く。

鉢には、口縁部が直に立ち上がる488と、算盤玉状になる832がある。

高杯は全形を復元できるものはない。756は杯部で、口縁が直に立ち上がり、外面に凹線文が施られる。834は脚部で、三角形透かしが貫通し、端部は上方へ張り出す。

器台は、口縁部が大きく外方へ広がり、器形全体の最大径になる（952）。端部は上方に立ち上がり、外側には凹線文が施られる。脚部は端部が上方へ張り出す953がある。

後期Ⅰ期

この期は後期初頭の鬼川市Ⅰ式に含まれるもので、主に上池調査区4区河道22からは完品を含む多

くの土器が出土している。

壺の器形は、口縁部から頸部にかけて**731**を退化したような形になる**842・841**がある。内面は胴部上半までヘラケズリされる。**843・844**は脚付きで、脚部に縦・横のヘラ描き沈線が施られる。

甕**849**は、口縁部のT字形が退化する。内面は胴部上半までヘラケズリされ、外面はハケメ調整である。

後期Ⅱ期

壺の器形は、胴部上半に最大径がくる（**537**）。口縁部は下方へ拡張し、面を作る。**782**は、小型の長頸壺で、胴部の張り出しが少ない。

後期Ⅲ期

壺には、**807**の長頸壺がある。口縁部上方は直に立ち上がり、下方は斜め下に張り出し面を作る。外面には鋸歯文が施られる。頸部には凹線文、頸部と胴部の境には列点文がある。内面は頸部との境までヘラケズリされる。

鉢は、口縁部付近が段になり、直に立ち上がる（**653・654**）。内外面とも丁寧にヘラミガキされる。

高杯の杯部は、同時期の鉢に似る（**874・875**）。脚部は短脚になる。杯部と脚部の接合は、差込みによる。**874**の口縁部は、擬凹線文で飾る。

後期Ⅳ期

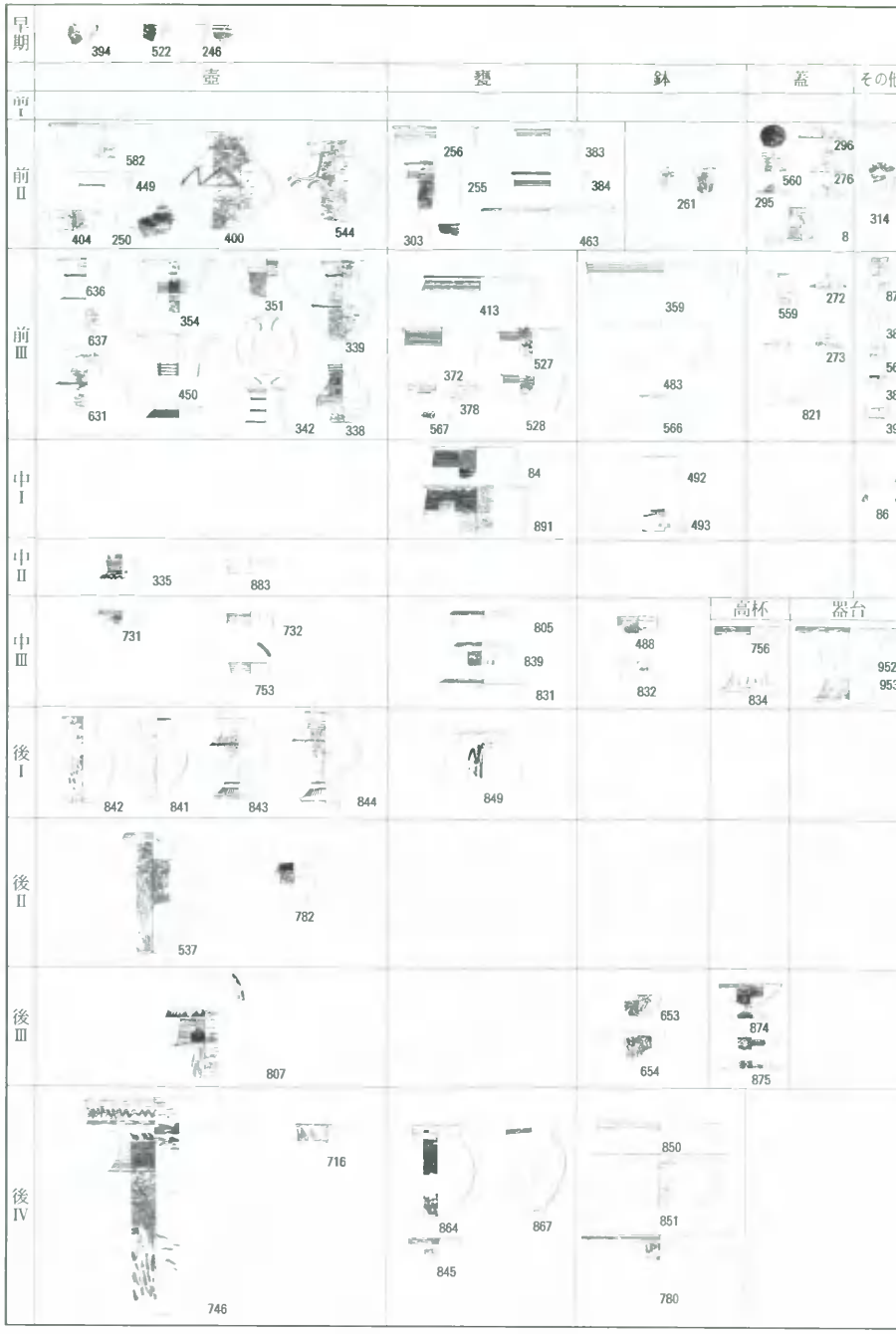
壺には、**746**の長頸壺がある。二重口縁の口縁端部は、やや外側を向きながら上方へ大きく張り出す。外面には櫛描による波形文がある。**716**の口縁部外面は、鋸歯文で飾る。**746**より小型である。

甕は口縁部が直に立ち上がり、外面に凹線のある**867・845**と、ない**864**がある。胴部の形態には、最大径が中央部になる**864**と、上方になる**867**とがある。底部はわずかに平底が残り、まだ丸底にはならない。内面は頸部との境までヘラケズリされる。

鉢には3種類あり、口縁部が二重口縁になり端部がやや外方に立ち上がる**850**、口縁部が外へ張り出し端部が肥厚する**851**、ほぼ真横に張り出す**780**がある。3者とも、頸部から胴部付近までがやや膨れて底部に至る。

参考文献

鎌木義昌「各地域の弥生式土器・中国」『日本考古学講座』4　1955年
鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成』　小林行雄・杉原荘介編　1964年
正岡睦夫ほか「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』　岡山県教育委員会　1972年
伊藤晃ほか「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集　岡山県教育委員会　1974年
柳瀬昭彦ほか「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16　岡山県教育委員会　1977年
高橋護「入門講座　弥生土器－山陽1・2」『考古学ジャーナル』173・175　1980年
藤田憲司「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」『倉敷考古館研究集報』第17号　1982年
正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社　1992年
平井勝「弥生時代への移行」『吉備の考古学的研究』近藤義郎編　山陽新聞社　1992年
秋山浩三「弥生前期土器」『吉備の考古学的研究』近藤義郎編　山陽新聞社　1992年
藤田憲司「弥生中期の地域性」『吉備の考古学的研究』近藤義郎編　山陽新聞社　1992年
平井典子「弥生土器からみた備前・備中南部とその周辺」『吉備の考古学的研究』近藤義郎編　山陽新聞社　1992年
高橋護「弥生後期の地域性」『吉備の考古学的研究』近藤義郎編　山陽新聞社　1992年


早期
394
522
246
壺
甕
鉢
蓋
その他
前I
前II
582
449
404
250
400
544
256
255
303
383
384
463
261
296
560
276
295
8
314
前III
636
354
351
637
339
450
631
342
338
413
527
372
378
567
528
359
483
566
559
272
273
821
879
388
565
387
393
中I
84
891
492
493
86
中II
335
883
中III
731
732
753
805
839
831
488
832
高杯
756
834
器台
952
953
後I
842
841
843
844
849
後II
537
782
後III
807
653
654
874
875
後IV
716
746
864
867
845
850
851
780

第230図　土器編年表

第２節　岡山県下出土の弥生時代人面表現について

はじめに

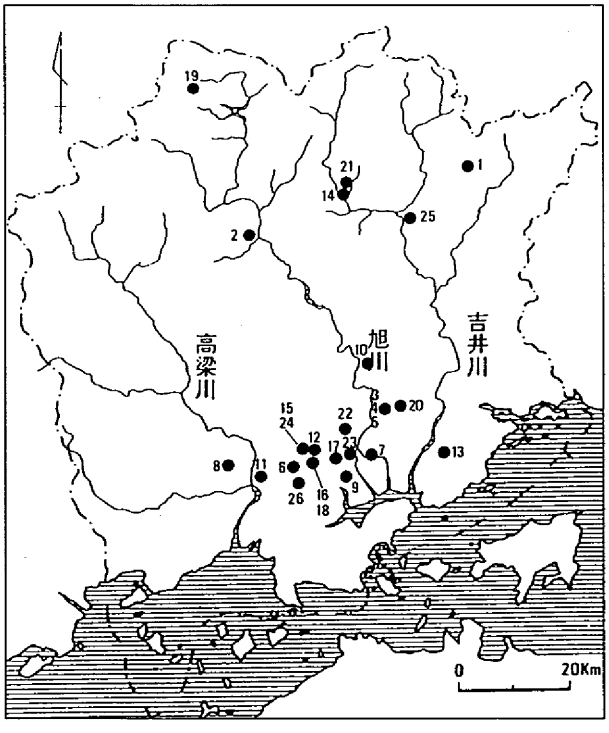
弥生時代の土器に描かれた絵画や記号文、人形の土製品等は、県内においても新資料の発見が近年とみに顕著で増加の一途である。従来、県内で最も古く報告されたものは県北奈義町の福田池尻遺跡出土の土製品が掲げられる。この他に吉備地方に分布の一中心がある分銅形土製品に、顔の表現をしたものが広く周知されていた。1970年代には、雄町遺跡の建物、城遺跡の舟、天瀬遺跡の竜等が絵画の表現として報告されている。1980年代以降は、銅鐸絵画の画材に見られる鹿や鳥の動物や建物を表した絵画の新資料も増加している。また、絵画土器には鹿や建物、人物等を複数組み合わせた絵物語風の構図のものも出土している。県内でも津寺遺跡や上東遺跡等に類例がある。本稿では田益田中遺跡出土例にちなんで、人面表現に限った土器、土製品の類例と特色を県内資料により概観と集成を行ってみた[1]。

出土例

写実的に人面を表現した土器、土製品の出土例は河本清氏集成による1992年時点で９遺跡10例報告され、神原英朗氏集成の分銅形土製品で４例である。その後の報告例を追加すると一覧表の如く、本遺跡を含めて合計26遺跡28例の人面表現が公表されている。このうち、人物全体像で顔の部分の表現が無いものが新庄尾上遺跡と下市瀬遺跡の２例である。人面に線刻を施す黥面を表したであろう例は４例出土がある。

なお、この他に銅鐸に表現された顔（邪視文銅鐸）と弥生時代の墳丘墓である楯築遺跡出土の弧帯文石に、浮き彫りされた顔がある。

26遺跡の出土分布は、県南部の沖積地の遺跡が大半を占めるものの、中間部の美作地域の河川流域や県北部の蒜山に立地する遺跡に出土地がある。ちなみに、黥面と見られる人面線刻例は県南部に集中している。



第231図　人面土器・土製品出土位置図

年代

絵画土器、土製品のうち３分の１ほどをしめる分銅形土製品は、弥生時代中期後半～後期が中心で、この他の人面表現の土製品もこの時期に種類も豊富で集中している。上限は、弥生時代前期の中葉から後半の出土例である田益田中遺跡と熊山田遺跡の土製品が、県内の最古例である。なお、瀬戸内海を隔てた香川県志度町の鴨部川田遺跡出土の人形土製品（弥生土偶）も弥生時代前期の人面表現の線刻例で、同時期中葉の田益田中遺跡例と類似する線刻を、両眼と口の周囲に施している。下限は共伴する遺物等

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	時期	種類	器種	文献
1	福田池尻遺跡	勝田郡奈義町	表採	弥生中期	人面	人形土製品	近藤義郎、高村継夫「弥生土偶について」『私たちの考古学　第3巻第4号』 1957年
2	下市瀬遺跡	真庭郡落合町	井戸	弥生後期末葉	人物、渦巻き文	高杯	「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』 1973年
3	用木山遺跡	赤磐郡山陽町	竪穴住居群埋土	弥生中期中葉	人面	分銅形土製品	「用木山遺跡」 1977年
4	用木山遺跡	赤磐郡山陽町	竪穴住居群埋土	弥生中期後葉	人面	分銅形土製品	「用木山遺跡」 1977年
5	さくら山遺跡	赤磐郡山陽町	包含層	弥生中期後葉	人面	分銅形土製品	「用木山遺跡」 1977年
6	上東遺跡	倉敷市	斜面堆積	弥生後期後半	人面	分銅形土製品	「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』 1977年
7	百間川兼基遺跡	岡山市	土器溜まり	弥生後期中葉	人面	人形土製品	平井泰男「百間川兼基遺跡出土人形土製品」『考古学ジャーナル　238号』 1984年
8	一倉遺跡	総社市	溝状遺構	弥生後期末葉	人面（顎面）	小形鉢	「一倉遺跡」『総社市史　考古資料編』 1987年
9	鹿田遺跡	岡山市	井戸	弥生後期末葉	人面２（顎面１）ほか	高杯	「鹿田遺跡」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告台３冊』 1988年
10	新庄尾上遺跡	御津郡御津町	竪穴住居	弥生中期後葉	鳥装人物、建物	壺	長谷川一英「御津町新庄尾上遺跡出土の絵画土器」『古代吉備第14集』 1992年
11	宮山遺跡	総社市	表採	弥生後期	人面、バチ状文	器台	河本清「絵画土器、人形、鳥形スタンプ文土器」『吉備の考古学的研究　上』 1992
12	津寺（加茂小）遺跡	岡山市	溝	弥生後期末	人面（顎面）	人形土製品	11の文献に同じ
13	熊山田遺跡	邑久郡邑久町	土壙	弥生前期末	人面	人形土製品	11の文献に同じ、馬場昌一教示
14	竹田遺跡	苫田郡鏡野町	竪穴住居埋土	弥生後期	人面	人形土製品	11の文献に同じ、安川豊史教示
15	加茂政所遺跡	岡山市	袋状土壙	弥生中期後半	人面	分銅形土製品	広瀬和雄「弥生時代の祖霊像」『弥生の神々』弥生文化博物館　1992年
16	足守川加茂A遺跡	岡山市	竪穴住居	弥生後期末葉	人面蛇体、鹿	器台	「足守川加茂A遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』 1995年
17	伊福定国前遺跡	岡山市	柱穴	弥生後期後半	人面	人形土製品	「伊福定国前遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告25』 1995年
18	足守川加茂B遺跡	岡山市	包含層	弥生後期	人面	分銅形土製品	「足守川加茂B遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』 1995年
19	下郷原田代遺跡	真庭郡川上村	竪穴住居	弥生後期後半	人面	分銅形土製品	「下郷原田代遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93』 1995年
20	斎富遺跡	赤磐郡山陽町	包含層	弥生後期	人面	分銅形土製品	「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105』 1996年
21	九番丁場遺跡	苫田郡鏡野町	竪穴住居	弥生後期前半	人面	人形土製品	井上弘「九番丁場遺跡」『所報吉備第21号』 1996年
22	田益田中遺跡	岡山市	河道	弥生前期中葉	人面（顎面）	人面土製品	当該遺跡 報道　1997年
23	上伊福南方遺跡	岡山市	包含層	弥生中期	人面	人形土製品	扇崎由「南方（済生会）遺跡」『発掘された日本列島'97』文化庁　1997年
24	加茂政所遺跡	岡山市	竪穴住居	弥生後期	人面	分銅形土製品	「吉備－大地からのメッセージ－」『発掘された日本列島'97』 1997年
25	西吉田北遺跡	津山市	土壙	弥生後期前半	人面（剥離）	分銅形土製品	「西吉田北遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告58』 1997年
26	上東遺跡	倉敷市	河道	弥生後期前葉	人面２（顎面１）ほか	小形鉢	下澤公明「弥生時代の波止場の跡か　倉敷市上東遺跡」『所報吉備第24号』 1998年

表１　岡山県における人面土器・土製品一覧表

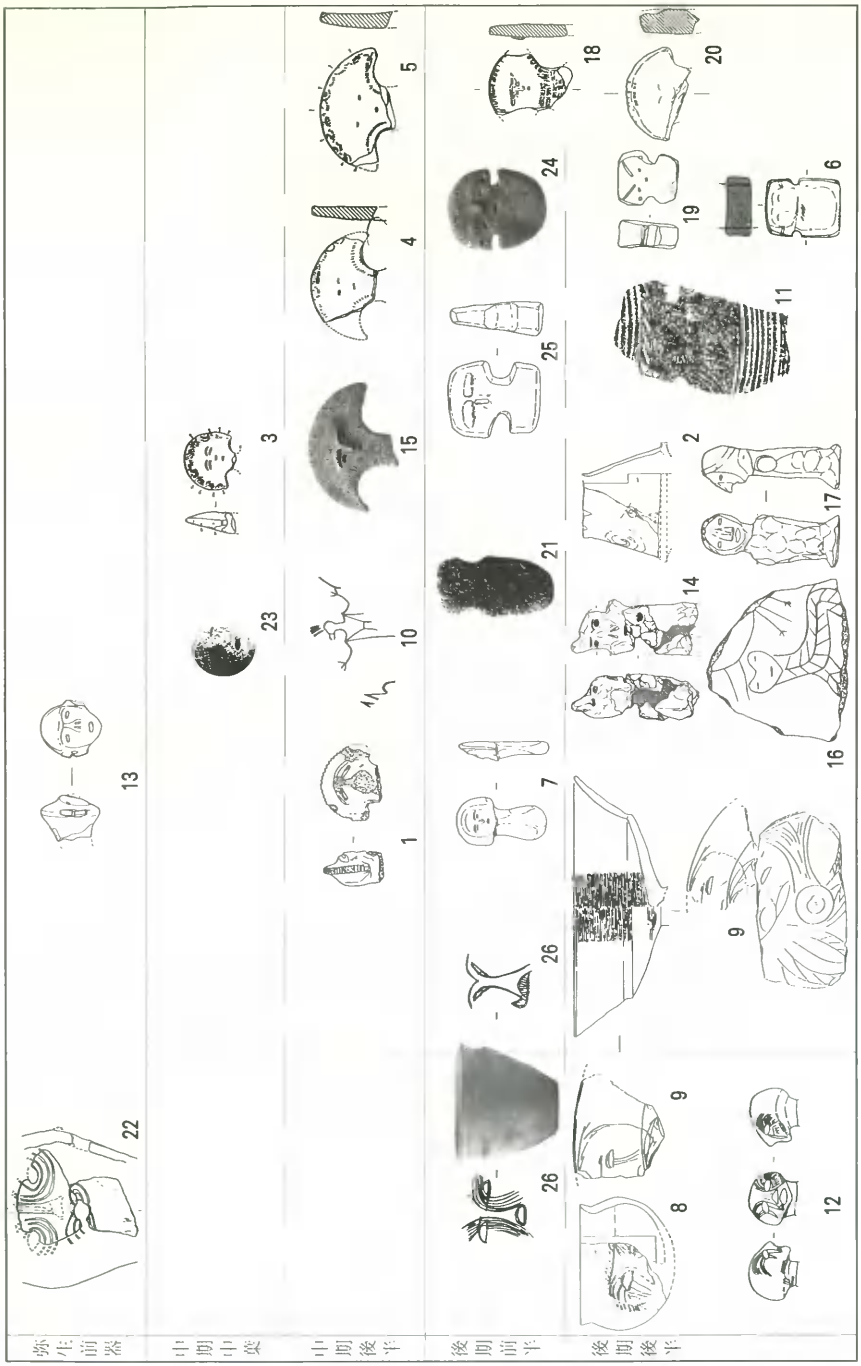
から津寺（加茂小）遺跡出土の土製品等が、後期の最終末である。

種類

人面表現を施した器種は、土器の表面に描く絵画土器、人形土製品（弥生土偶）、分銅形土製品等である。田益田中遺跡例は、1997年３月の報道機関への発表時では弥生時代最古の土面と報告したが、その後遺物の整理中に新たに接合するとみられる下顎部分の破片を確認した。このことから、東日本に多い人面付き土器もしくは容器形土器の形状に近い器種の可能性も考えられる。この他に、百間川遺跡出土の人形土製品は分銅形土製品に近い形状である。

出土状態

分銅形の土製品は、大半が破片で検出されるが、人面表現の出土例は10例中４点が完形品の出土で



第232図　岡山県における人面土器・土製品集成図　（各文献より改変して転載）

ある。出土場所については集落に密着した出土状況で、人面表現のない他の大多数の出土例と同様のあり方をなし、家族集団を対象とする祭祀に使用されたものであろう。分銅形土製品も含めた出土場所の26遺跡例中での内訳は、竪穴住居や住居の覆土中や柱穴からの出土が8例、土壙、井戸2例，河道、溝、斜面堆積等が5例、包含層、土器溜まり3例、墳墓遺構周辺1例、その他である。河道、溝、土器溜まり等から破片での出土例が多いことから最終的には廃棄されたものであろう。1998年1月に上東遺跡の波止場状の遺構から出土した、線刻絵画の小形鉢形土器を含む大量の土器は、航海の安全を祈る祭祀に使用されたものと考えられている。

施文特色

人面線刻の黥面を表したであろう絵画土器については、1990年の設楽博己氏の論考に詳しい[2]。全国で16遺跡32例の出土例が報告され、このうち岡山県では3遺跡の人面土器、土製品が報告されている。その後県内では当田益田中遺跡と上東遺跡出土の2例が、他県では福岡県上鑵子遺跡、岐阜県荒尾南遺跡例が追加された。線刻の特色は顔の中心線を基準に左右対象に眼から頬、口にかけて複数の線刻を施す例が多い。当遺跡例では眼と口の周囲に別個に線刻を施している。香川県出土の鴨部川田遺跡例とでは器種は異なるが線刻の施文が類似し、時期もほぼ同時期で共通する要素が強い。

人面を表現した土器、土製品には、眼だけは他の部分が省かれていても施している。また線刻を施した顔の眼はアーモンド状もしくは半月形をなし、瞳を描かず白眼であるのが大半である。ただ最近の上東遺跡の線刻人面例では、左の眼は瞼を閉じて瞼の上にも線刻を施している。また、線刻のないもう一方の人面には両眼に瞳を描き、さらに歯も表し、悪霊の怒りの表情を表したものと見られている。上東遺跡例を参照する限りでは、線刻土器に見られる白眼は目を開けた状態で、瞳の意識はあるもののあえて表現しなかった可能性が強い。

分銅形土製品に表現された顔は眼や口を刺突により表現し、垂れ眼や笑った表情に見えるものがあり、一見素朴な印象を与えるものが多い。瀬戸内を中心に広範囲に出土しており、他府県でも共通する人面を表している。百間川兼基遺跡や鏡野町九番丁場遺跡の人形土製品の顔にも共通するものがある。

性格

人面線刻の絵画土器、土製品は集落周辺での溝や河道、墳墓からの出土が多く葬送儀礼や集落での祭祀に使用されたものであろうと見られている。また、描いた器物も出土場所も指摘されているように各種で、限定されてなく、個々の祭祀場所で重要な役割を保ち使用されたと考えられている[3]。ただ、近年の線刻絵画土器や土製品例を含めると、確実に弥生時代前期までさかのぼる出土例が確認されており、弥生時代の終末期までの長期にわたり共通の習俗と祭祀行為が、広範囲に営まれていることを物語っている。また、上東遺跡検出の波止場の遺構は、吉備の中枢に位置する拠点的な集落を背後に保つ、外港的な意味合いの強いものと考えられる。したがって、そこで行われた祭祀行為は一集落のような狭義のものでなく、かなり広い範囲の集団により営まれた行為であり、その行為に大きな関わりをもった人面であったと想定される。

一方、分銅形土製品は人面表現を含め、集落の家族集団の単位で行われた祭祀の必需品で、居住空間で使用された私的な所産であると考えられている[4]。それに表現された顔は、柔和な表情からも推察されるように、白眼の線刻を施した顔面は必要としない祭祀の対象であったことは想像に難くない。

註

1　県内の集成及び一覧表は下記の文献がある。
　東潮「東高月遺跡群出土の分銅形土製品」『用木山遺跡』1977年
　伊藤晃「岡山県内出土の弥生時代絵画資料」『考古学雑誌』第66巻第１号　1980年
　河本清「絵画土器、人形、鳥形スタンプ文土器」『吉備の考古学的研究』上巻　1992年
　神原英朗「分銅形土製品」『吉備の考古学的研究』上巻　1992年
　平井泰男「河道６出土の線刻絵画土器について」『窪木遺跡』1997年
2　設楽博己「線刻人面土器とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集　1990年
3　２の文献と同じ
4　東潮「分銅形土製品とその祭祀」『福岡市立歴史資料館図録』第７集　1982年

註に掲げた文献以外に下記の文献を主に参照した。
『特設展　古代の顔』福岡市立歴史資料館　1982年
『特別展　弥生人のメッセージ　絵画と記号』　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　1986年
橋本裕行「弥生時代の絵」『季刊考古学』第19号　1987年
石川日出志「人面付土器」『季刊考古学』第19号　1987年
橋本裕行「弥生時代の絵物語」『古代史復元』５　1989年
『特別展　弥生の祈り人　よみがえる農耕祭祀』滋賀県立安土城考古学博物館　1994年
『特別展　卑弥呼の動物ランド　よみがえった弥生犬』大阪府立弥生文化博物館　1996年
岩永省三「弥生時代の装身具」『日本の美術』３　1997年
『特別展　縄文人と弥生人　その時代を生きた人々の表情』神戸市教育委員会　1998年
『企画展　遺物が語る　弥生人の顔』徳島市立考古資料館　1998年
天野幸弘『日本の原像』朝日新聞　1998年７月10日

調査区							
新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称	新名称	旧名称
上池調査区１区	ロ－１区	上池調査区５区	イ区	上池調査区９区	Ｎ２区	上池調査区13区	Ｒ１区（山陽道橋脚下１）
上池調査区２区	ロ－２区	上池調査区６区	Ｂ区	上池調査区10区	ニ区	上池調査区14区	Ｒ２区（山陽道橋脚下２）
上池調査区３区	ロ－３区（Ｎ－１区）	上池調査区７区	Ｅ区	上池調査区11区	Ａ区		
上池調査区４区	ハ区	上池調査区８区	Ｃ区	上池調査区12区	Ｄ区	下池調査区Ⅰ～Ⅸ区	Ⅰ～Ⅸ区
遺構	（上池調査区）					（下池調査区）	
土壙１（弥・前）	ロ－１ピット11	土壙41（弥・前）	Ｎ２ｓ－２	溝7（弥・前）	Ｅ－31	土壙１（縄・晩）	Ⅸ土壙10
土壙２（弥・前）	ロ－２－１・２・３	土壙42	Ａ－３	溝8（弥・後）	Ａ－18	土壙２（縄・晩）	Ⅸ土壙11
土壙３（弥・前）	ロ－３－１	土壙43（弥・前）	Ａ－４	溝9（弥・後）	Ａ－19	土壙３（弥・前）	Ⅸ土壙５
土壙４（弥・前）	ハ－７	土壙44（弥・前）	Ａ－５	溝10（弥・後）	Ａ－22，Ｄ－１	土壙４（弥・前）	Ⅸ土壙６
土壙５（弥・前）	ハ－５	土壙45（弥・前）	Ａ－６	溝11（弥・後）	Ｅ－26	土壙５（弥・前？）	Ⅸ土壙９
土壙６（弥・前）	ハ－11	土壙46（弥・前）	Ａ－７	溝11（弥・前～後）	ロ１－５・ロ３－２	土壙６（弥・前）	Ⅸ土壙７
土壙７（弥・前）	ハ－３	土壙47（弥・前）	ニ－５	竪穴住居１（古・初）	ロ１－Ｈ－１	土壙７（古・前）	Ⅸ土壙４
土壙８（弥・前）	イ－３	土壙48（弥・前）	Ｅ－６	竪穴住居２（古・初）	ロ１－Ｈ－２	土壙８（古・前）	Ⅸ土壙８
土壙９（弥・前）	イ－１	土壙49（弥・後）	ロ－３－３（井戸）	溝12（古墳）	ロ１－１	溝１（縄・晩）	Ⅸ溝20
土壙10（弥・前）	Ｅ－28	土壙50（弥・前）	ニ－１	溝13（古墳）	ロ２－１・２	溝２（縄・晩）	Ⅸ溝21
土壙11（弥・前）	Ｅ－27	土壙51（弥・後？）	Ａ－20	溝14（古・初）	Ａ－14	溝３（弥・後）	Ⅸ溝１
土壙12（弥・前）	Ｅ－１	土壙52（弥・後？）	Ａ－16	溝15（古墳）	Ａ－17	溝４（弥・後）	Ⅸ溝６
土壙13（弥・前）	Ｅ－19	土壙53（古墳）	ロ－１－２・ロ－３－２	溝16（古・後）	ロ１－２	溝５（弥・後）	Ⅸ溝５
土壙14（弥・前）	Ｅ－７	土壙54（古墳）	ハ－６	溝17（古・後）	ロ２－	溝６（弥・後）	Ⅸ溝16
土壙15（弥・前）	Ｅ－８	土壙55（古墳）	ロ－３－６（井戸）	溝18（古・後？）	ロ２－	溝７（弥・後）	Ⅸ溝14
土壙16（弥・前）	Ｅ－12・25	土壙56（古墳）	Ｎ１－４	溝19（古代）	ハ－・Ｅ－２ に－２	溝８（弥・後）	Ⅸ溝12
土壙17（弥・前）	Ｅ－17・42	土壙57（古墳）	ハ－２	溝20（近世）	Ｃ区溝状	溝９（古・前）	Ⅸ溝４
土壙18（弥・前）	Ｅ－18	土壙58（古墳）	ニ－３	溝21（古墳初）	ロ１－４	溝10（古・前）	Ⅸ溝７
土壙19（弥・前）	Ｅ－33	土壙59（古墳）	Ｎ１ｓ－５	縄文河道１	ロ１－溝10	溝11（古・前）	Ⅸ溝８
土壙20（弥・前）	Ｅ－40・45	土壙60（古墳）	Ａ－21	縄文河道2	ロ１－溝11	溝12（古・前）	Ⅸ溝11
土壙21（弥・前）	Ｅ－43	土壙61（古墳）	Ｒ－１－１	縄文河道3	ロ１－溝12	溝13（古・前）	Ⅸ溝10
土壙22（弥・前）	Ｅ－34	土壙62（古墳）	Ｒ－２－１	縄文河道4	ロ１－溝13	溝14（古・前）	Ⅸ溝13
土壙23（弥・前）	Ｅ－21	土壙63（古墳）	ロ－１－１	縄文河道5	ロ２－溝13	溝15（古・前）	Ⅸ溝12
土壙24（弥・前）	Ｅ－10	土壙64（古墳）	ロ－３－１	縄文河道6	ロ２－溝14	溝16（古・初）	Ⅸ溝18
土壙25（弥・前）	Ｅ－23	土壙65（古墳）	ロ－１－３	縄文河道7	ロ２－溝15	溝17（？）	Ⅶ・Ⅷ溝１
土壙26（弥・前）	Ｅ－20	土壙66（中世以降？）	ロ－３－４	縄文河道8	ロ２－溝12	溝18（？）	Ⅸ溝19
土壙27（弥・前）	Ｅ－29	土壙67（中世以降？）	ハ－14	縄文河道9	ロ２－溝16	溝19（近世）	Ⅶ・Ⅷ溝２、Ⅸ溝３
土壙28（弥・前）	Ｅ－32	土壙68（？）	Ｎ１Ｎ－３	縄文河道10	ハ－溝11・14	河道１（縄・後？）	Ⅰ区河道１
土壙29（弥・前）	Ｅ－16	土壙69（？）	Ｎ１ｓ－２	縄文河道11	ハ－溝16	河道２（縄・晩）	Ⅱ区河道１
土壙30（弥・前）	Ｅ－22	土壙70（古墳初）	ハ－１	縄文河道12	ハ－17	河道３（縄）	Ⅱ区河道２、Ⅲ区河道１
土壙31（弥・前）	Ｅ－37	土壙71（？）	ハ－12	縄文河道13	ハ－18・Ｅ－14・15	河道４（縄・晩）	Ⅲ区河道１
土壙32（弥・前）	Ｅ－38	土壙72（中世以降？）	ハ－15	縄文河道14（縄・後）	イ・Ｃ・Ｎ１・Ｄ縄文河道	河道５（縄？）	Ⅳ区河道1
土壙33（弥・前）	Ｅ－39	土壙73（？）	イ－２	弥生河道12（中）	ハ－溝19	河道６（縄？）	Ⅳ区河道2
土壙34（弥・前）	Ｅ－14	土壙74（？）	Ｂ－６	弥生河道13（前～中）	ハ－溝15	河道７（縄？）	Ⅳ区河道3
土壙35（弥・前）	Ｅ－36	溝１（弥・前）	ロ１－４・ロ２－４	弥生河道14	欠番	河道８（縄・晩）	Ⅸ区河道１
土壙36（弥・前）	Ｅ－35	溝2（弥・前）	ロ１－６	弥生河道15	ニ－７	河道９（縄・後）	Ⅶ・Ⅷ区河道、Ⅸ区河道２
土壙37（弥・前）	Ｅ－34	溝3（弥・前）	ロ１－８・ロ２－８	弥生河道16	ニ－９		
土壙38（弥・前）	Ｅ－９	溝4（弥・前）	ロ２－３	弥生河道17（前）	ニ－10・Ａ－13	上池弥生河道21	ハ－溝12
土壙39（弥・前）	Ｎ２ｓ－８	溝5（弥・前）	ハ－８	弥生河道18（前）	ニ－11	弥生河道22	ハ－溝10
土壙40（弥・前）	Ｎ２ｓ－３	溝6（弥・前）	ハ－１・Ｅ－２	弥生河道19（前）	Ａ－支流１	弥生河道23	ニ－１ａ・ｂ
				弥生河道20（前）	Ａ－支流２	河道24（古墳）	ハ・イ・Ｂ・Ｅ・９・ニ－溝１

表２　新旧対照表

付載　田益田中遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

田益田中遺跡（岡山県岡山市田益に所在）は、笹ヶ瀬川右岸の沖積低地からその背後の丘陵地にかけて立地する。本遺跡の発掘調査では、低地から縄文時代の河道、縄文時代後期の溝、弥生時代前期の土壙群、弥生時代～６世紀後半の溝、９～10世紀の溝などが検出されている。また、丘陵縁辺部では弥生時代前期～古墳時代初頭の竪穴住居跡・土壙・井戸跡・溝などが検出されている。

本遺跡では、これまでに縄文時代以降の堆積物を対象に、当時の古環境復元を目的とした自然科学分析調査が行われてきており、古環境に関する情報が蓄積されてきている。今回の発掘調査区でも同様の目的のもとに自然科学分析調査を実施する。今回の調査区では、植物遺体を多量に含む堆積物が確認されていることから、それら堆積物を中心に花粉分析を実施し、合わせて出土木材の樹種同定、種実・葉など大型植物遺体の同定を実施する。

１．試料

試料は、土壌および木材を併せて56点が採取され、通し番号が付されている（試料番号１～56）。この内の試料番号２・４～７、試料番号33・34、試料番号42～46が土壌試料である。

花粉分析は、試料番号２・４～７、について行った。試料番号33・34・42～46については堆積物中に花粉化石が含まれるか否か確認した。なお、試料番号２・４～７の５点の土壌試料には、葉など大型植物遺体が肉眼で観察されたため、これらの植物遺体の同定も行うことにした。表１に土壌分析試料の一覧を示す。

樹種同定は、土壌試料中に含まれていた材と旧河道などから採取された材合計46点（試料番号１～３・６・８～32・35～40・47～56）について行った。この内、試料番号11には異なる２つの木材が認められたため、それぞれから切片を作製することとした。また、試料番号41は炭化材であった。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表３に記した。

表１　土壌試料の一覧

番号	注　記	土質	
2	14区サンプルＢNo. 1	オリーブ黒色シルト質砂	葉を多く含む
4	13区縄文河道Ｆ	黒色シルト質砂	葉を多く含む
5	13区縄文河道Ｇ	黒褐色シルト質砂	葉を多く含む
6	Ⅲ区暗緑灰色粗砂下（堀り下げ最下層）	オリーブ黒色砂	葉を多く含む
7	５区土壌サンプル3.680～2.980㍍の間	黒色泥炭	
33	10区黒褐色粘質土（No. 12）	灰色オリーブ色砂混じりシルト	
34	10区黒褐色粘質土（No. 12）	灰色オリーブ色砂混じりシルト	
42	Ⅲ土壌サンプル１層	にぶい黄褐色砂混じりシルト	
43	Ⅲ土壌サンプル２層	灰黄褐色砂混じりシルト	
44	Ⅲ土壌サンプル３層	灰色砂混じりシルト	
45	Ⅲ土壌サンプル４層	暗褐色砂混じりシルト	
46	Ⅲ土壌サンプル５層	灰褐色砂混じりシルト	

2．分析方法

（1）花粉分析

試料約20ｇ秤量し、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝9：1）の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表と主要花粉化石群集の変遷図として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフォン(-)で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

（2）樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭水材は3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（3）大型植物遺体同定

試料は保存状態がそれぞれ異なったため、それぞれ違う処理を施した。葉が入っている試料番号2・4・5は、数％の水酸化ナトリウム水溶液に浸して試料を泥化させた後、水中で静かに層理面に沿って剥がし、葉や種実遺体を抽出した。これらの試料を、肉眼あるいは双眼実体顕微鏡下で同定を行い、種類ごとに瓶に入れて保存した。ただし、葉は非常にもろく、有効な保存方法が見つからないため、標本としての整理は行っていない。試料番号6・7は、葉が認められないので、数％の水酸化ナトリウム水溶液に浸して泥化させた後、0.5㎜の篩を通して残差を集め、それを双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体を抽出した。

3．結果

（1）花粉分析

結果を表2、図1に示す。花粉化石は、試料伴奏2・4～7で検出される。試料番号33・34および試料番号42～46では花粉化石はほとんど検出されない。以下、地点ごとに結果を示す。

〈14区および13区〉

試料番号2・4・5ともコナラ属アカガシ亜属が優占あるいは多産する。この他、モミ属・ツガ属・スギ属・クマシデ属－アサダ属・シイノキ属－ニレ属－ケヤキ属・エノキ属－ムクノキ属・キハダ属・ツバキ属などが検出される。これらの種類の中で、エノキ属－ムクノキ属が試料番号2・4で、またハダ属が試料番号4で多産する。

草本花粉は、イネ科、バラ科、マメ科などが検出されるが、出現率が低下である。

〈Ⅲ区〉

試料番号6では、マツ属（単維管束亜属を含む）が最も高率に出現し、次いでモミ属が多産する。この他、ツガ属、トウヒ属、カバノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、カエデ属などを

表2　花粉分析結果

種　類 ／ 試料番号	2	4	5	6	7	33	34	42	43	44	45	46
木本花粉												
マキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モミ属	8	12	20	71	40	-	-	-	1	-	-	2
ツガ属	5	1	-	10	48	-	-	-	1	-	-	-
トウヒ属	-	-	-	10	26	-	-	-	-	-	-	-
マツ属単維管束亜属	-	-	-	34	37	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	4	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属（不明）	4	2	5	96	85	-	3	1	2	-	-	-
コウヤマキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スギ属	3	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クルミ属	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	10	46	2	6	3	-	-	1	-	-	-	-
カバノキ属	-	-	-	23	3	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	1	1	-	5	4	-	-	-	-	-	-	-
ブナ属	-	2	3	2	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	6	7	6	7	18	-	3	-	-	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	115	72	181	-	-	-	20	1	-	-	3	1
シイノキ属	4	5	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニレ属－ケヤキ属	11	19	2	4	-	-	-	-	-	-	-	-
エノキ属－ムクノキ属	62	145	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラスザンショウ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キハダ属	-	63	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	1	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ニシキギ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	-	2	-	9	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クロウメモドキ科	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ツバキ属	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イボタノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉												
イネ科	3	2	1	1	21	1	-	-	2	-	-	-
カヤツリグサ科	2	1	-	9	75	-	-	-	-	-	-	-
ユリ科	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
ナデシコ科	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
キンポウゲ科	1	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ワレモコウ属	-	-	-	1	14	-	-	-	-	-	-	-
バラ科	2	6	3	21	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科	1	17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
フウロソウ属	-	-	-	1	11	-	-	-	-	-	-	-
トウダイグサ科	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
アカバナ属－ミズユキノシタ属	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	2	-	-	2	4	-	4	-	-	-	-	-
キク亜科	-	-	-	2	9	-	-	-	-	-	-	-
不明花粉	11	7	4	8	7	-	-	-	-	-	-	-
シダ類胞子												
シダ類胞子	15	5	1	21	84	1	6	235	177	12	74	67
合　計												
木本花粉	240	393	247	278	264	0	27	3	4	0	3	3
草本花粉	11	33	4	39	144	1	4	2	2	0	0	0
不明花粉	11	7	4	8	7	0	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子	15	5	1	21	84	1	6	235	177	12	74	67
総計（不明を除く）	266	431	252	338	492	2	37	240	183	12	77	70

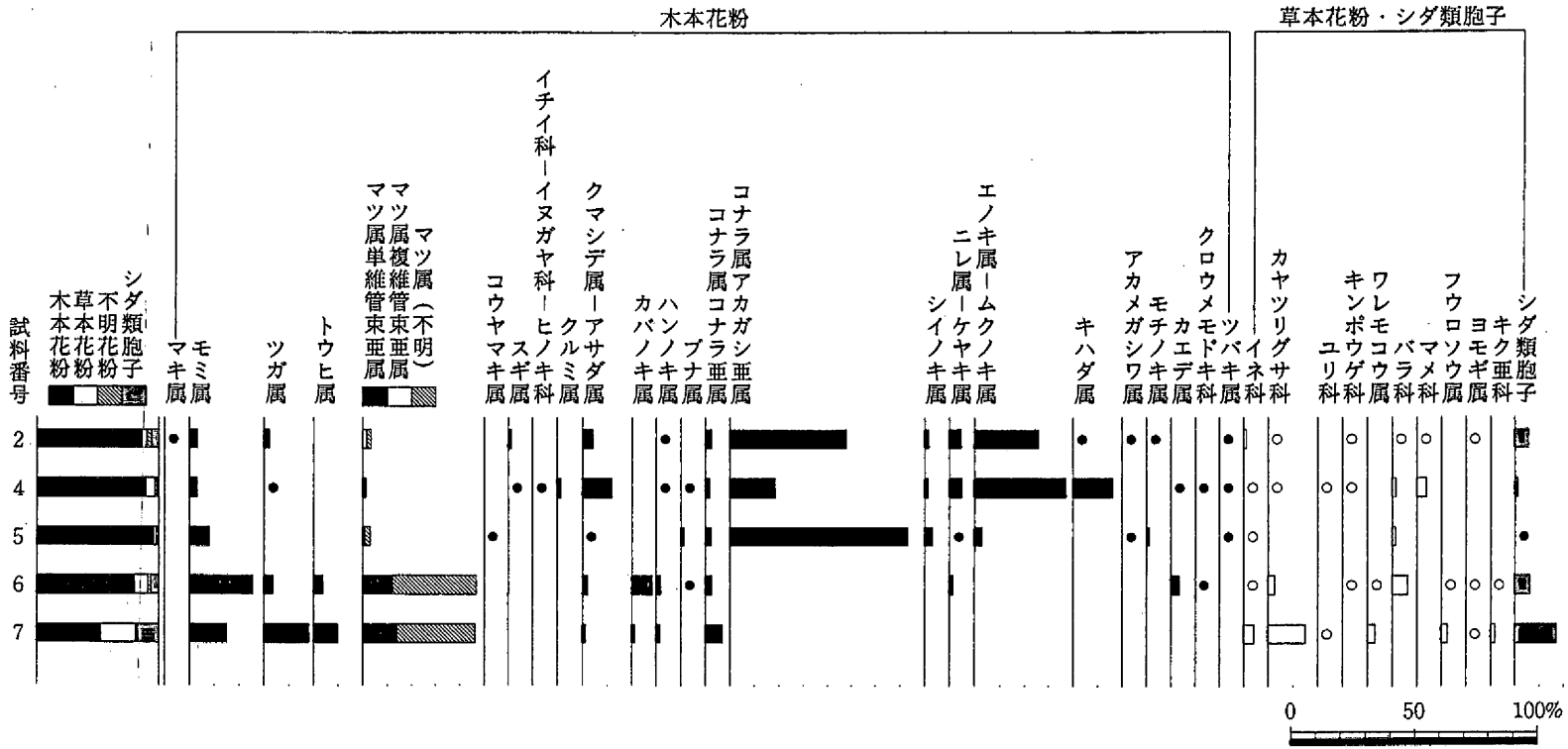


図１　主要花粉化石群集の層位的分布

出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基本として百分率で算出した。なお、○●は１％未満の試料について検出した種類を示す。

伴う。

草本花粉は、カヤツリグサ科、バラ科などが検出されるが、草木花粉の出現率が10%以下と低率である。

〈5区〉

試料番号7の花粉化石群集は単調であり、マツ属（単維管束亜属を含む）が最も高率に出現し、次いでモミ属・ツガ属・トウヒ属が多産する。他の種類は10%以下と低率である。

草木花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ワレモコウ属、フウロソウ属、キク亜科などが検出される。

（2）樹種同定

結果を表3に示す。試料番号9・28は樹皮であった。また、試料番号23は道管は認められるが、保存状態が悪いために樹種の同定には至らず広葉樹とした。試料番号41は木材組織を観察することができず不明とした。その他の試料は、針葉樹6種類（カラマツ・マツ属複維管束亜属・モミ属・ツガ属・イヌガヤ・カヤ）、広葉樹13種類（ヤナギ属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・ムクノキ・エノキ属・ヤマグワ・クスノキ・センダン・チドリノキ・カエデ属・ムクロジ・トチノキ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・カラマツ（*Larix kaempferi* (Lamb.) Carriere）マツ科カラマツ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、早・晩材部の境界は不明瞭。早材部が変形している。垂直樹脂道および水平樹脂道た認められる。放射柔細胞は滑らかで、じゅず状末端壁が認められる。放射仮道管の有緑壁孔のフチはカラマツ型を主とする。放射組織は単列、1～20細胞高。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・モミ属（*Abies*）マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・ツガ属（*Tsuga*）マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。放射組織は仮道管と柔細胞よりなり、柔細胞壁は滑らかで、じゅず状末端壁が認められる。放射組織は単列、1～20細胞高。

・イヌガヤ（*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch f.）イヌガヤ科イヌガヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行や緩やかで、早・晩材部の境界は不明瞭。樹脂細胞が早・晩材部の区別なく散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

・カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）イチイ科カヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

表３　樹種同定結果

番号	注記	時代・時期	用途など	樹種
1	14区サンプルA	（縄文時代後期？）	流木	モミ属
2	14区サンプルB No. 1	〃	〃	ムクロジ
3	14区サンプルC	〃	〃	チドリノキ
6	Ⅲ区暗緑灰色粗砂下（堀り下げ最下層）			カラマツ
8	6区B-13 付近河道部堀り下げ中	（弥生時代前期？）		モミ属
9	12区堀り下げ中			樹皮
10	Ⅶ・Ⅷ旧河道9	縄文時代晩期	自然木	ムクノキ
11	Ⅶ・Ⅷ旧河道9	縄文時代晩期	自然木	クリ
				ヤナギ属
12	6区B-6 付近河道部堀り下げ中	（弥生時代前期？）		コナラ属コナラ亜属コナラ節
13	6区B-15 河道部堀り下げ中	〃		マツ属複維管束亜属
14	Ⅸ旧河道9南端	縄文時代晩期	自然木	クリ
15	Ⅸ旧河道9南端	縄文時代晩期	自然木	クリ
16	Ⅸ旧河道9南端	縄文時代晩期	自然木	クリ
17	Ⅸ旧河道9南端	縄文時代晩期	自然木	エノキ属
18	Ⅸ旧河道9南端	縄文時代晩期	自然木	ヤナギ属
19	Ⅸ区北半	縄文時代後～晩期		ムクノキ
20	Ⅸ区北半	〃		コナラ属コナラ亜属コナラ節
21	Ⅸ区北半	〃		ムクノキ
22	Ⅸ区北半	〃		ヤナギ属
23	1区井堰1タッパ2	弥生時代後期		広葉樹
24	1区井堰1タッパ3	弥生時代後期		ヤマグワ
25	1区井堰1タッパ4	弥生時代後期		ツガ属
26	Ⅸ溝2杭A	中世	杭	マツ属複維管束亜属
27	Ⅸ住居址1内Pit1	古墳時代初頭	柱？	コナラ属コナラ亜属コナラ節
28	3区土壙53石組内木枠	弥生時代前期～古墳時代初頭	木枠	樹皮
29	4区溝14南半A	弥生時代前期～古墳時代後期		トチノキ
30	4区溝14南半B	弥生時代前期～古墳時代後期		センダン
31	4区溝14南半C	弥生時代前期～古墳時代後期		ヤマグワ
32	4区溝12南半	弥生時代前期～古墳時代後期		カヤ
35	13区東断面A	（縄文時代後期？）	流木	カエデ属
36	13区東断面B No. 1	〃	〃	ムクノキ
37	13区東断面C	〃	〃	ムクノキ
38	13区東断面D	〃	〃	カヤ
39	13区東断面E	〃	〃	イヌガヤ
40	11区河道部堀り下げ中	（弥生時代前期）	〃	コナラ属アカガシ亜属
41	11区（支流2）堀り下げ中	〃	〃	不明
47	Ⅶ・Ⅷ北半河道9	縄文時代晩期	流木	ムクノキ
48	Ⅶ・Ⅷ北半河道9流木	縄文時代晩期	流木	ヤナギ属
49	Ⅶ・Ⅷ北半河道9流木	縄文時代晩期	流木	ヤマグワ
50	Ⅶ・Ⅷ北半河道9流木	縄文時代晩期	流木	クリ
51	Ⅶ・Ⅷ北半河道9流木	縄文時代晩期	流木	ヤナギ属
52	9区旧河道2南半（たわみ）	縄文時代後期	〃	ムクロジ
53	9区西河道	（弥生時代前期？）	〃	モミ属
54	9区西河道	〃	〃	クスノキ
55	10区河道底部出土木材	（弥生時代前期）	〃	コナラ属アカガシ亜属
56	10区河道底部出土木材	〃	〃	コナラ属アカガシ亜属

・ヤナギ属（*Salix*）ヤナギ科

散孔材で、道管は年輪全体にほぼ一様に散在し、年輪界付近でやや径を減ずる。道管の分布密度は比較的高い。道管は単独または２～４個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、１～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus subgen.Lepidobalanus* sect. *Prinus*）ブナ科

環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cylobalanopsis*）ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外で急激～やや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15　細胞高。

・ムクノキ（*Aphananthe aspera*（Thunb.）Planchon）ニレ科ムクノキ属

散孔材で道管壁は厚壁、横断面では角張った楕円形、単独または２～３個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、１～５細胞幅、１～20細胞高。軸方向柔細胞は、周囲状～連合翼状、ターミナル状。

・エノキ属（*Celtis*）ニレ科

環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、１～15細胞幅、１～50細胞高で鞘細胞が認められる。

・ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）クワ科クワ属

環孔材で孔圏部は１～５列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、１～６細胞幅、１～30細胞高。

・クスノキ（*Cinnamomum camphora*（L.）Presl）クスノキ科クスノキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では楕円形、単独まれに２～３個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、１～３細胞幅、１～20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。大型の油細胞が認められる。

・センダン（*Melia azedarach* l.var. *subtripinnata* Miquel）センダン科センダン属

散孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減し、複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、１～４細胞幅、１～30細胞高。

・チドリノキ（*Acer carpinifolium* Sieb. et Zucc.）カエデ科カエデ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および２～３個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認めら

れる。放射組織は同性、1～15細胞幅、1～100 細胞高を越える。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・カエデ属（*Acer*）カエデ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～30細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・ムクロジ（*Sapindus mukorossi* Gaertn.）ムクロジ科ムクロジ属

散孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状～連合翼状、帯状およびターミナル状。

・トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）トチノキ科トチノキ属

散孔材で管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合して散在し、分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列する。

（3）大型植物遺体同定

同定結果を表4に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を記す。

表4　大型植物遺体同定結果

種類	部位	2	4	5	6	7
モミ	葉	2	7	6	-	-
モミ属	鱗片	-	-	-	2	-
ツガ属	葉	-	2	-	-	-
チョウセンゴヨウ	種子	-	-	-	6	-
カヤ	葉	-	1	-	-	-
クマシデ属	葉	2	-	-	-	-
イチイガシ	葉	3	10	6	-	-
ツクバネガシ	葉	-	2	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	葉	1	1	4	-	-
コナラ属	葉	-	1	-	-	-
スダジイ	葉	-	-	1	-	-
ケヤキ	葉	6	6	1	-	-
カエデ属	葉	6	-	-	-	-
カエデ属	果実	-	1	-	-	-
ムクロジ	種子	-	-	1	-	-
ツツジ科	葉	-	-	1	-	-
カヤツリグサ科	果実	-	-	-	-	4
オトギリソウ属	種子	-	-	-	-	1

・モミ属（*Abies* sp.）マツ科

葉と鱗片が検出される。葉は、黒褐色、針状、偏平で長さ4㎝、幅5㎜程度。千反歩は凹頭で、基部は楔状に細くなるが、茎に接着する部分は吸盤状に丸く広がっている。裏面中肋の両側には、気孔帯がある。切片を作製すると、2個の樹脂道が葉肉中央部に2個認められるほか、副樹脂道が両端近くに2つ認められる。これらの特徴から、モミ（*Abies firma* Sieb. et Zucc.）であると思われる。鱗片は黒色で、種鱗のみが残存する。種鱗は長さ1㎝、幅2㎝程度。半円形で基部は楔形に狭まる。

・ツガ属（*Tsuga* sp.）マツ科

葉が検出される。黒褐色、針状、偏平で長さ2㎝、幅3㎜程度。先端部は凹頭で、基部は急に細くなり、屈曲する。裏面中肋の両側には、気孔帯がある。

・チョウセンゴヨウ（*Pinus koraiensis* Sieb. et Zucc.）

種子が検出される。黒褐色で、亜三角形で、大きさ1.5㎝程度。種皮は厚くて堅く、表面はざらつく。

・カヤ（*Torreya nucifera* Sieb.et Zucc.）イチイ科カヤ属

葉が検出される。針状で、長さ2.5cm、幅mm程度。先端部は鋭く尖り、基部は楔形になり短柄がある。裏には中央寄りに2列の気孔列が並ぶ。

・クマシデ属（*Carpinus* sp.）

葉の破片が検出される。推定される大きさは8cm前後。長楕円形で縁に重鋸歯がある。

・イチイガシ（*Quercus gilva* Blume）ブナ科コナラ属

葉の破片が検出される。推定される大きさは、長さ7～10cm、幅2～3cm程度。革質で、倒披針形。先端部は急に鋭く尖り、基部は鈍形。葉柄は1cm程度ある。葉緑は上半部に鋸歯がある。側脈は裏に突出し12対程度。側脈から出る支脈は裏面に突出して目立ち、支脈間を平行につなぐ。

・ツクバネガシ（*Quercus sessilifolia* Blume）ブナ科コナラ属

先端部が1／2 ～2／3 ほど検出される。推定される全体の大きさは8cm程度。黒褐色、革質で光沢がある。先端部のみに浅い鋸歯がある。なお、アカガシ亜属やコナラ属としたものは、鋸歯の状態や、先端部、基部の形状が不明なものである。

・スタジイ（*Castanopsis cuspidata* var. *Sieboldii* (Makino) Nakai）ブナ科シイノキ属

ほぼ完形に近い個体が検出される。大きさは7cm程度。黒褐色を呈し、革質で厚い。楕円形卵形で、上半部にわずかな鋸歯がみられる。側脈は10対程度。葉柄は破損。基部はくさび形。

・ケヤキ（*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino）ニレ科ケヤキ属

葉が検出される。完形に近いものから破片まで存在する。完形に近いものはやや小ぶりである。黒褐色で大きさ6cm程度。卵状披針形で、先端部は欠損。基部は心形は、左右非対象。周辺には全体に鋸葉がある。側脈は10対程度確認される。

・カエデ属（*Acer sp.*） カエデ科

葉の破片が検出される。葉の基部から太い支脈が数本扇状に広がるのが特徴。写真図版に示した一つは、葉縁は全縁で浅く裂開するが、破片のため列数は不明。エタヤカエデなどの形状に近いものである。もう一つは、裂片の先端は鋭尖頭のもので、深く裂開し、鋸歯がみられるが、破片のため、裂開の個数は不明。

・ムクロジ（*Sapindus Mukorossi* Gaerth）ムクロジ科ムクロジ属

種子の破片が検出される。種皮は黒色で、堅くて厚い。一端に一文字状の「へそ」が存在する。

・ツツジ科（*Ericaceae* sp.）

葉の破片が検出される。推定される大きさは5cm程度。葉は長楕円形で、基部はくさび型。細鋸葉がある。

・カヤツリグサ科（*Cyperaceae* sp.）

果実が検出される。大きさは1mm程度で、3綾ある。褐色でざらつき、やや柔らかく弾力がある。

・オトギリソウ属（*Hypericum* sp.）オトギリソウ科

種子が検出される。黒色で光沢がある。楕円形で大きさは1mm程度。種皮は薄くやや堅い。表面は多角形の細胞が密に配列する。

4．考察

縄文時代移行の堆積物中の植物化石は、カヤ・イヌガヤ・モミ・ツガ属などの針葉樹、クルミ属・

クマシデ属－アサダ属・コナラ亜属・ニレ属－ケヤキ属・エノキ属－ムクノキ属・キハダ属などの落葉広葉樹、アカガシ亜属・シイノキ属などの常緑広葉樹などからなる。

これらの種類のうち、カヤ・アカガシ亜属（イチイガシ・ツクバネガシを含む）・シイノキ属・ムクロジ・センダン・クスノキなどは暖温帯性の森林を構成する要素である。また、モミ・ツガ属は、暖温帯から冷温帯の推移帯に成立する中間温帯林の構成要素でもある。クマシデ属－アサダ属・チドリノキ・トチノキ・キハダ属などは冷温帯の渓谷林を構成する要素である。これらのことから、当時の遺跡周辺の植物相は豊富であったことが推定される。また、同様の傾向がこれまでの分析調査でも確認されており（未公表）、本地域の古植生の特徴とみなせる。

したがって、縄文時代以降の時期は、遺跡周辺の丘陵地にはアカガシ亜属を中心とした暖温帯性の常緑広葉樹林が成立していたことが推定される。岡山平野内部で実施された縄文時代後晩期以降の花粉分析結果でも、アカガシ亜属が卓越していること（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社，1993a, b・1995など）から、県南地域の広い範囲にわたって照葉樹林が成立していたことが推定される。このような照葉樹林は、三好（1988）によれば、後氷期の向暖化とともにその分布を拡大し、約6,000年前の縄文海進期をピークに達し、ごく最近まで優占していたと考えられている。

当時のアカガシ亜属には、種実同定結果から、少なくともイチイガシとツクバネガシが分布していたことが推定される。このうち、多産したイチイガシは、現在では降水量の多い地域に分布しており、極相林の代表的な種類である。当時、イチイガシがどの程度の林分を形成していたかは不明であるが、調査地域に広く分布していたとすれば、当時の植生は人為的な影響の少ない、自然度の高いものであったことになる。また、気候的には降水量が多かったことになる。

ところで、河内平野では、縄文時代中期以降の時期にモミ・ツガ・スギ・コウヤマキなどの温帯性針葉樹の種類が増加するが、この原因として気候の冷涼化、降水量の増加が考えられている（那須，1989）。同様の傾向は、濃尾平野や関東平野でも確認されており、広域的な環境変化であったことが推定される。今回の植生も、このような広域的環境変化の結果、形成された植生の可能性があり、当時の森林構成要素であったモミ属・ツガ属もそのような気候変化に伴って増加した種類の可能性がある。

また、今回の植物化石の種類には、ヤナギ類・エノキ属・ムクノキ・トチノキ・チドリノキ・キハダなどの河畔林を構成する要素の産状が目立つ。これは、本遺跡が丘陵から低地にかけて立地環境と関係しており、当時も丘陵下部から低地にかけてこれらの種類が分布していたことが推定される。また、陽樹であるアカメガシワ、クリ、ヤマグワなどは林縁の植生を構成する要素であったとみられる。

このような縄文時代の堆積物で確認された植物化石とは全く異なる組成が、Ⅲ区暗緑灰色粗砂下（掘り下げ最下層）と5区土壌サンプル3.680～2.980mなどの堆積物で認められた。花粉化石群集は、マツ属（単維管束亜属：いわゆるゴヨウマツ類）・モミ属・ツガ属・トウヒ属などの針葉樹が優占する組成を示した。種実遺体・材化石でもカラマツ属・モミ属・チョウセンゴヨウなどの針葉樹の産状が目立った。これら針葉樹の種類は、現在では冷温帯から亜寒帯に分布する種類である。このことから、古植生としては、チョウセンゴヨウやモミ属・ツガ属・トウヒ属などの針葉樹からなる単調な植生で、気候的には冷涼でかつ乾燥していたことが推定される。

このような針葉樹の卓越する花粉化石群集は、県南地域で実施された完新世堆積物では認められておらず、玉野市八浜で得られた更新統のボーリング・コアの花粉分析結果にみられる（藤木ほか，

1991)。玉野市八浜では、深度2055～2995cmの層準で針葉樹の卓越する群集が得られている。その層準は最終氷期前期に相当すると推定されている。一方、県北地域では、山間部の湿原で実施された花粉分析結果では、最終氷期の堆積物から同様の化石群集が確認されている。今回の針葉樹の卓越する層準の地質層序は、現段階では不明であるが、これらの層準が更新統にあたる、あるいはその再堆積物の層準に相当することはほぼ間違いないと思われる。最終氷期の植生を反映している可能性もあり、本地域の旧石器時代の古環境を考える上で貴重な成果である。今後、調査層の地質層序学的検討を行い、今回の結果を再評価したいと考える。

引用文献

藤木利之・三好教夫・田中　元（1991）玉野市八浜（岡山県）45m堆積物の花粉分析．日本花粉学会第32回大会講演要旨，43p.，日本花粉学会.

三好教夫（1988）岡山県の植生変遷史．岡植研，7，p.1-9.

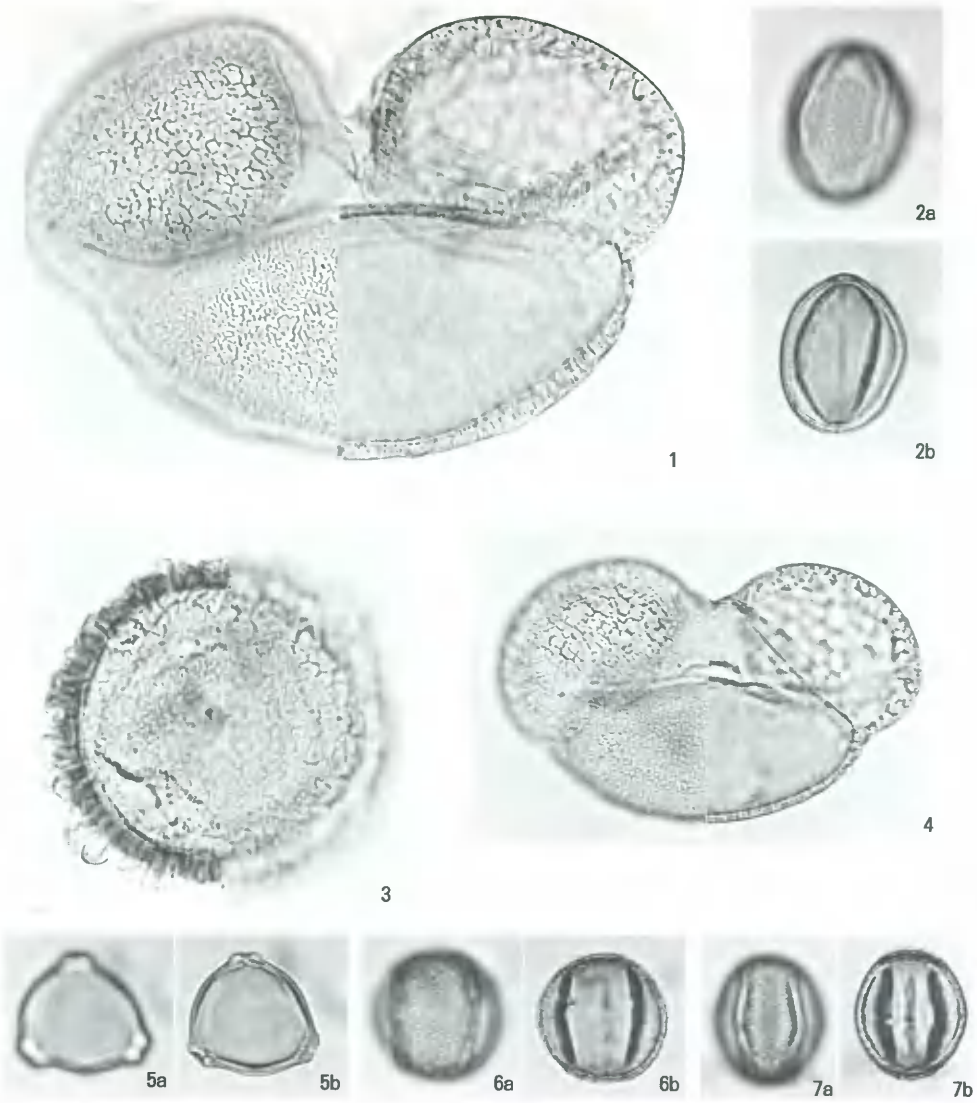
那須孝悌（1989）活動の舞台：概論．永井昌文・那須孝悌・金関恕・佐原真編「弥生時代の研究１」弥生人とその環境．p.119-130，雄山閣

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993a）植物化石分析報告．岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84「百間川沢田遺跡３　旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅷ（本文）」，p.405-417，岡山県文化財保護協会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993b）自然科学分析．岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84「百間川沢田遺跡３　旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅷ（本文）」，p.418-426，岡山県文化財保護協会.

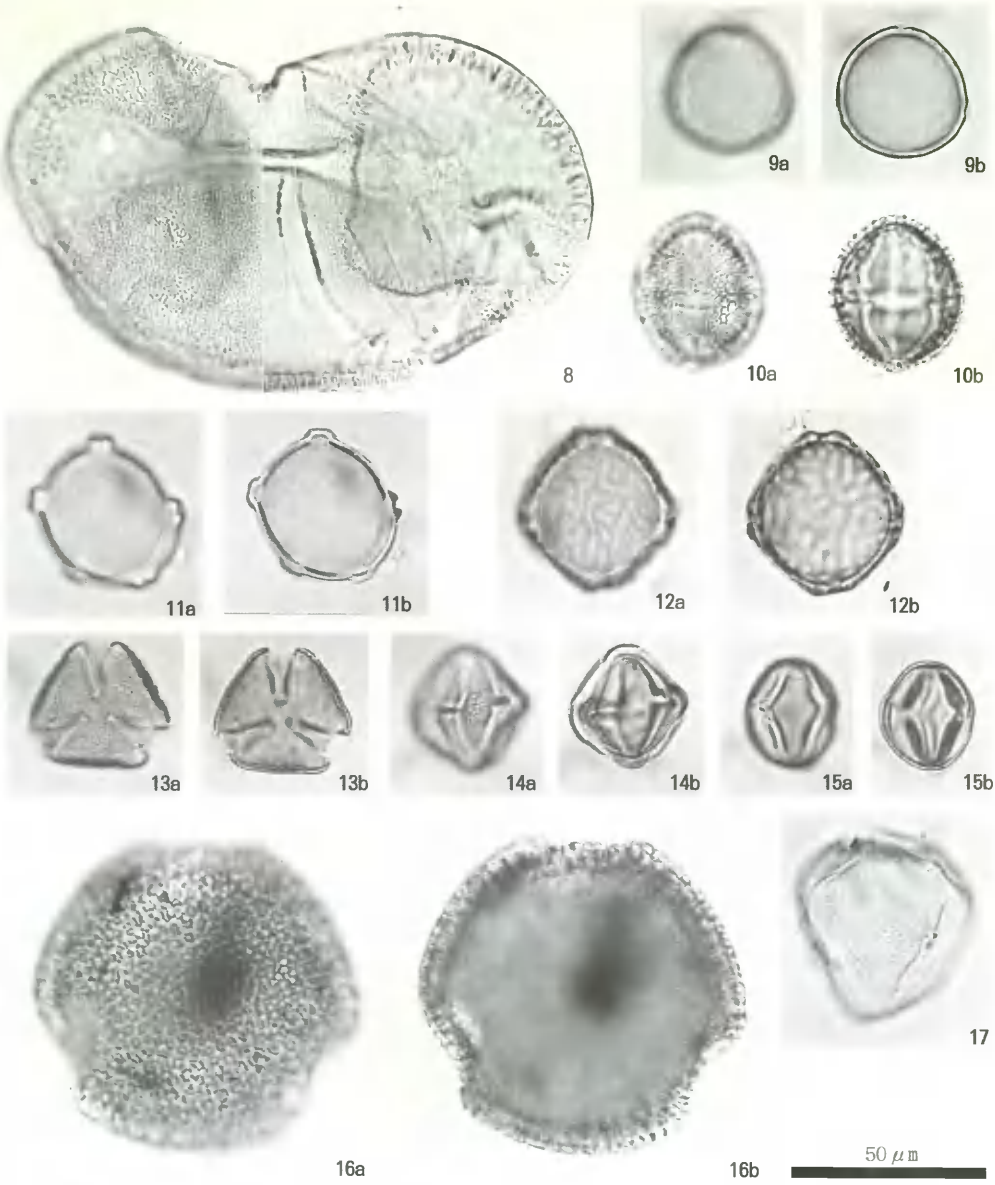
パリノ・サーヴェイ株式会社（1995）津寺遺跡西川調査区の土壌分析．岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98「津寺遺跡２　山陽自動車道建設に伴う発掘調査10（その２）」，p.629-634，日本道路公団広島建設岡山工事事務所・岡山県教育委員会.

図版１　花粉化石(1)



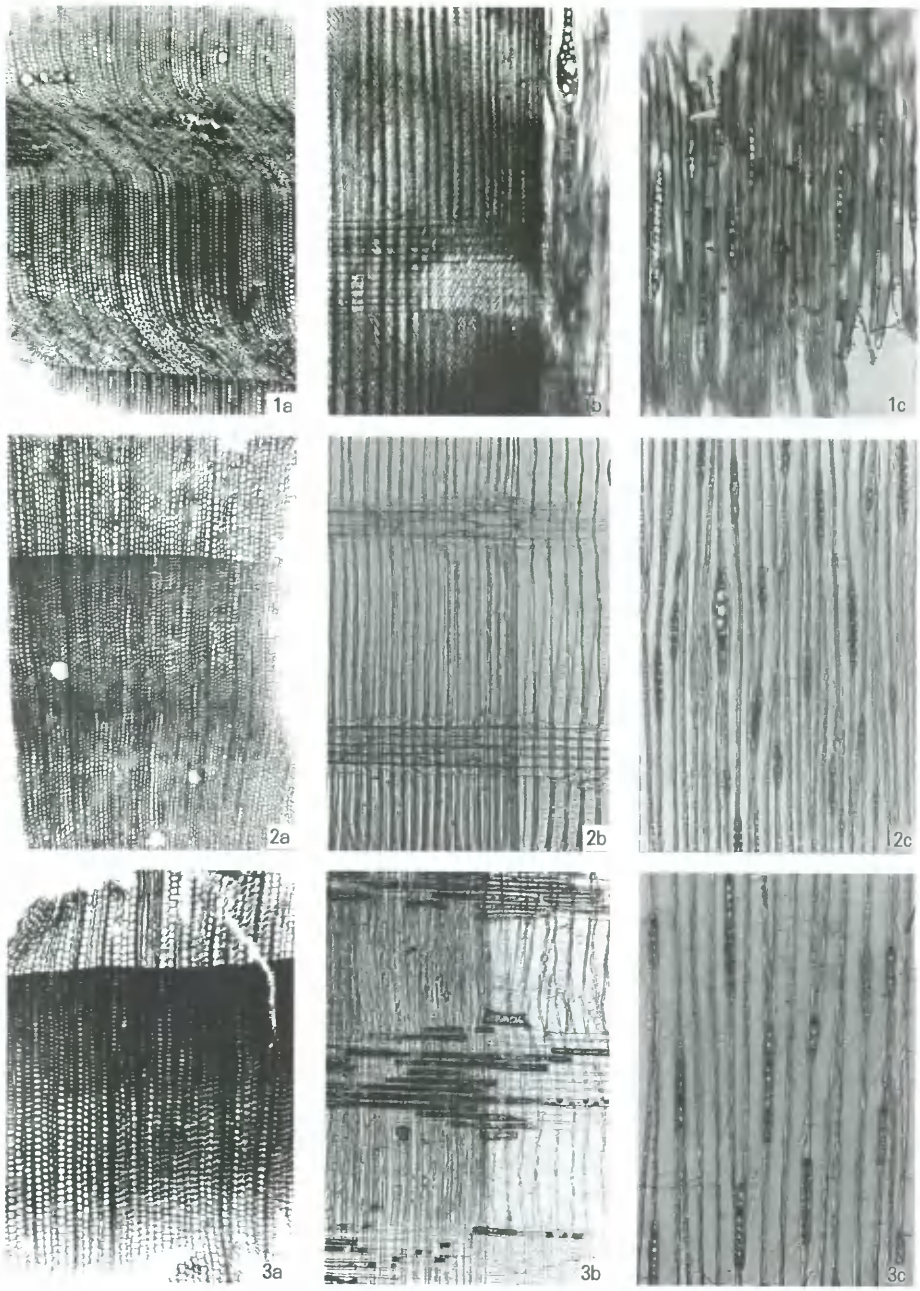
1．モミ属（試料番号６）
2．カエデ属（試料番号２）
3．ノガ属（試料番号１）
4．マツ属単維管束亜属（試料番号６）
5．カバノキ属（試料番号６）
6．コナラ属コナラ亜属（試料番号１）
7．コナラ属アカガシ亜属（試料番号１）

図版２　花粉化石(2)



8．トウヒ属（試料番号６）
9．エノキ属－ムクノキ属（試料番号４）
10．キハダ属（試料番号１）
11．クマシデ属－アサダ属（試料番号４）
12．ニレ属－ケヤキ属（試料番号１）
13．ツバキ属（試料番号２）
14．フレモコウ属（試料番号６）
15．バラ科（試料番号６）
16．フウロソウ属（試料番号７）
17．カヤツリグサ科（試料番号６）

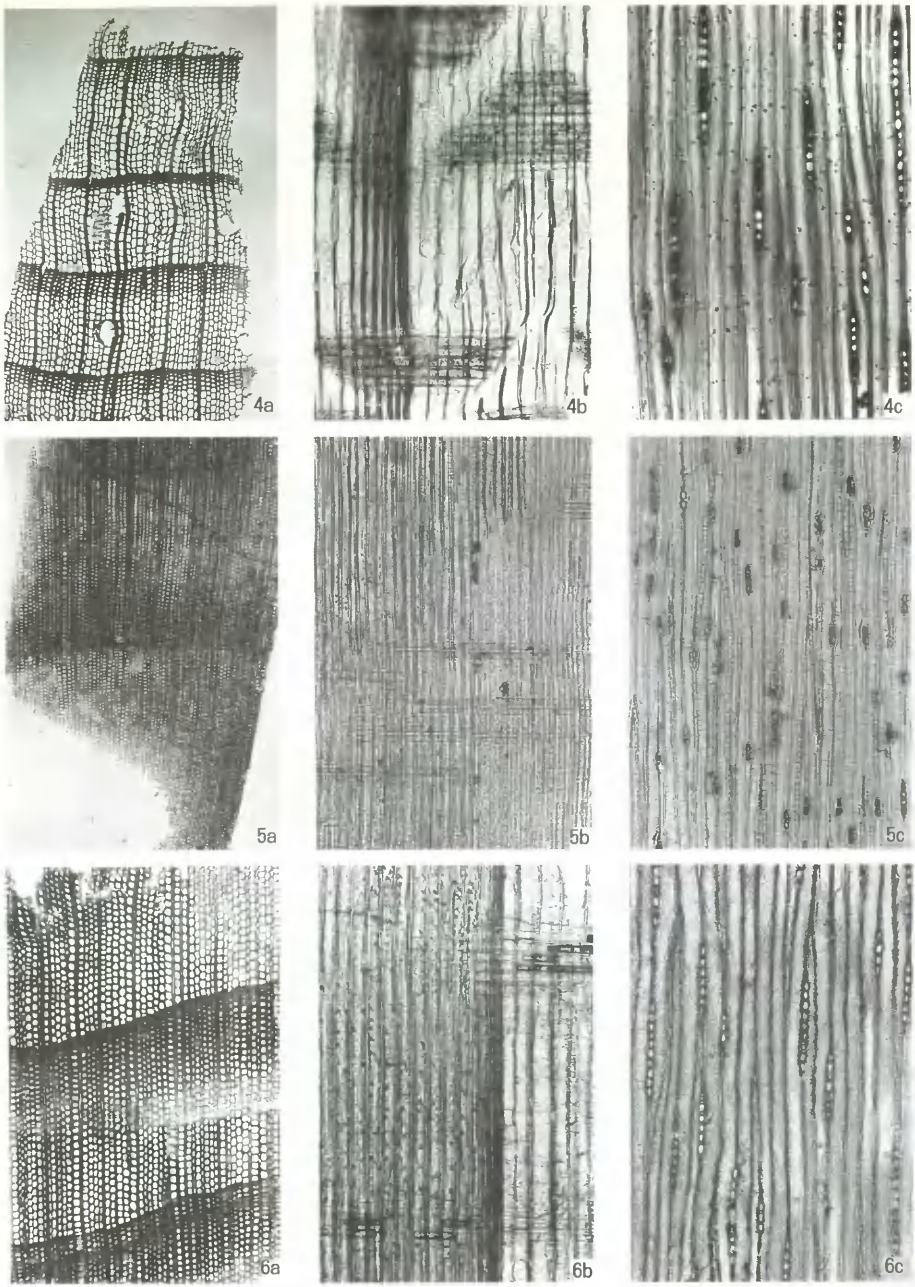
図版３　木材(1)



1．カラマツ（試料番号６）
2．マツ属複維管束亜属（試料番号26）
3．モミ属（試料番号８）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b，c

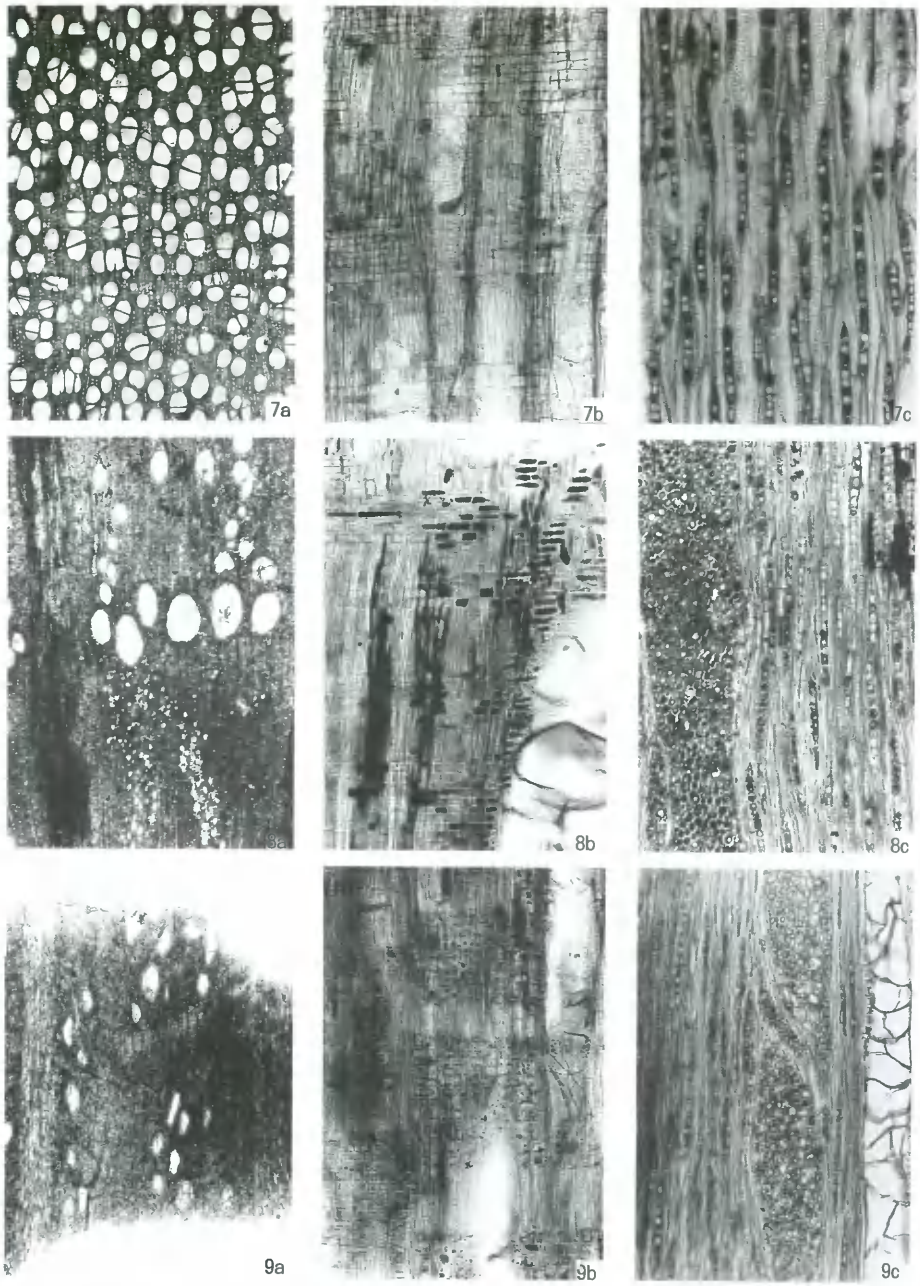
図版4　木材(2)



1．ノガ属（試料番号25）
5．イヌガヤ（試料番号39）
6．カヤ（試料番号32）
a：木口，b．柾目，c．板目

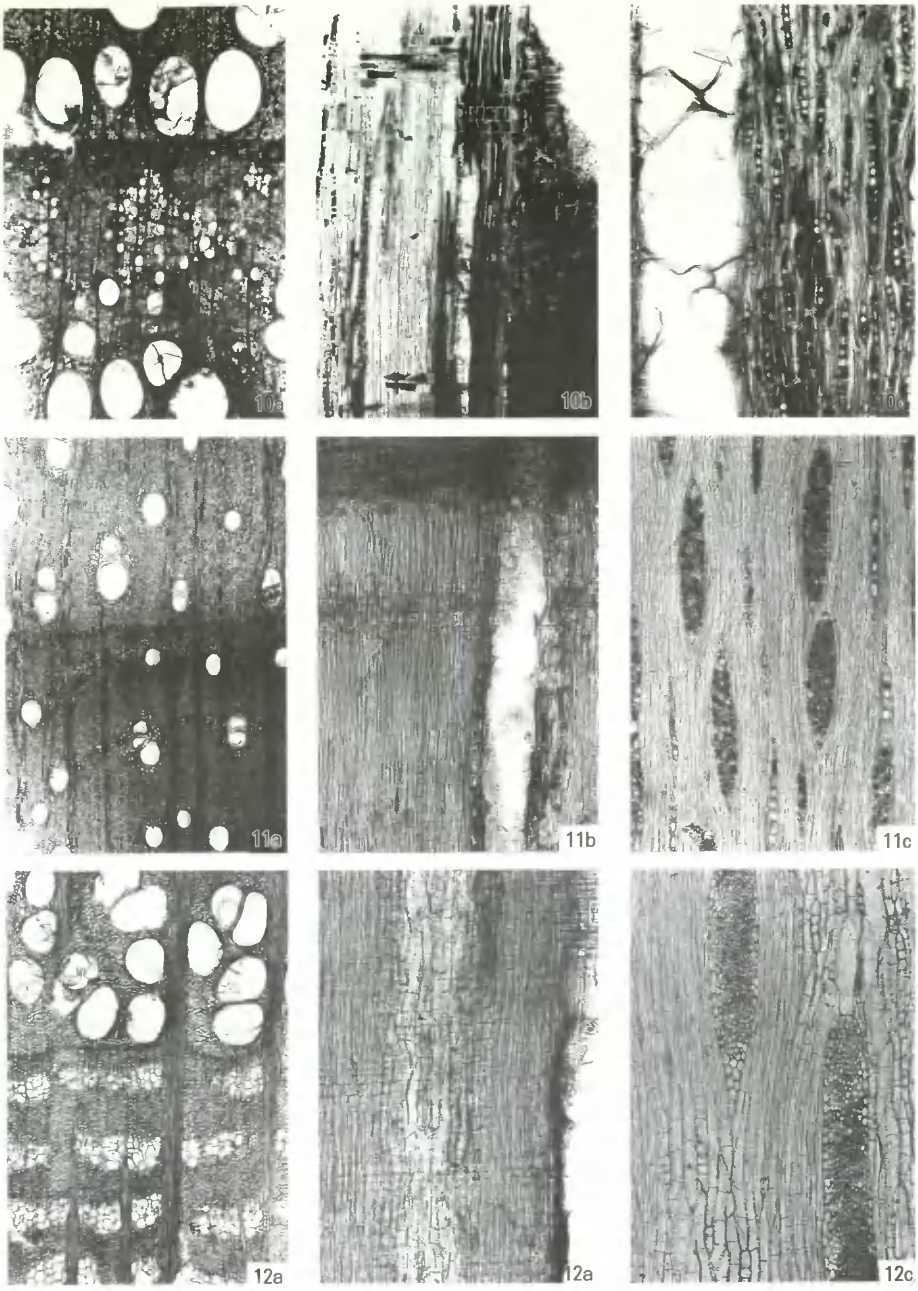
200μm：a
200μm：b，c

図版５　木材(3)



7．ヤナギ属（試料番号48）
8．コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号27）
9．コナラ属アカガシ亜属（試料番号40）
　a：木口，b：柾目，c：板目

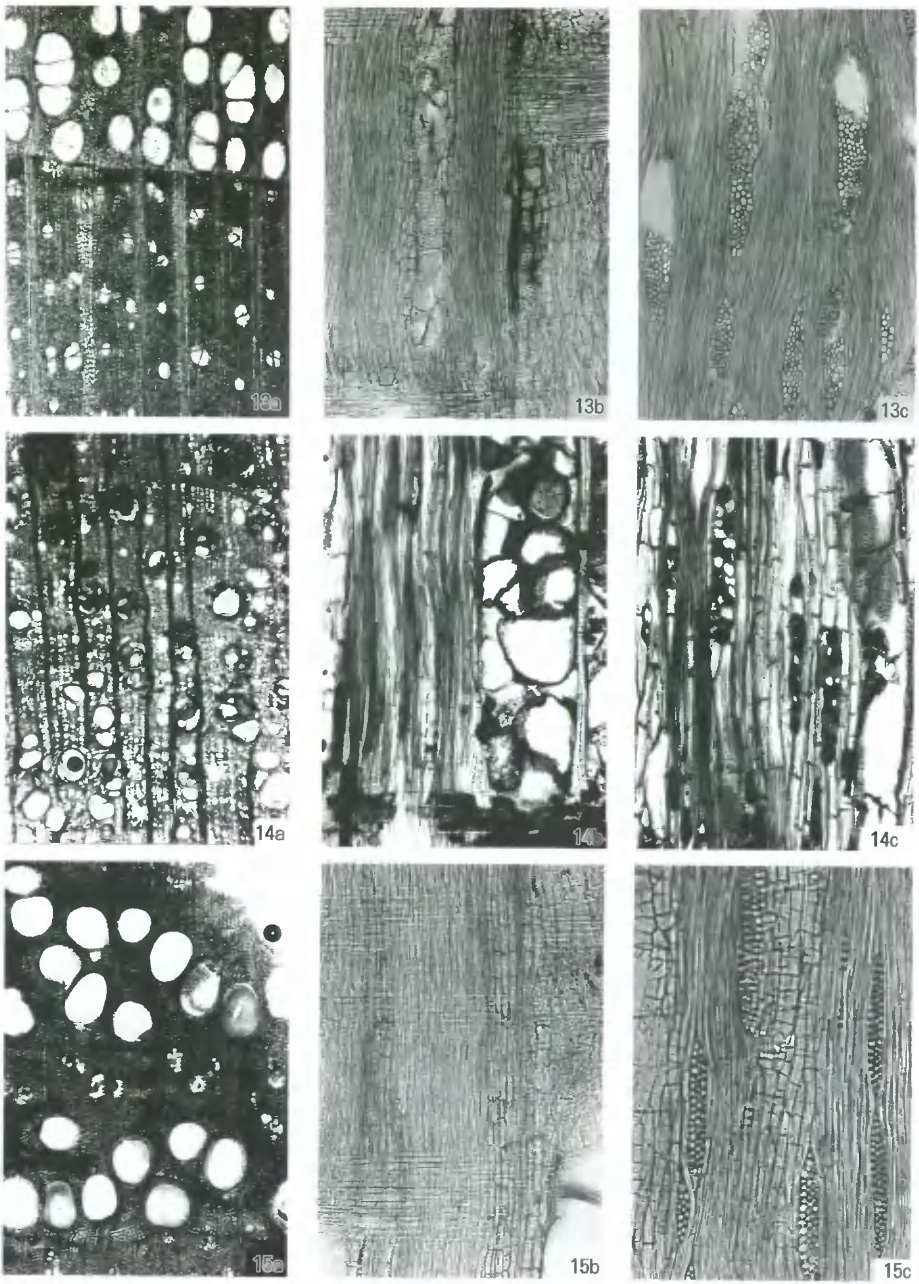
図版6　木材(4)



10. クリ（試料番号14）
11. ムクノキ（試料番号10）
12. エノキ属（試料番号17）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

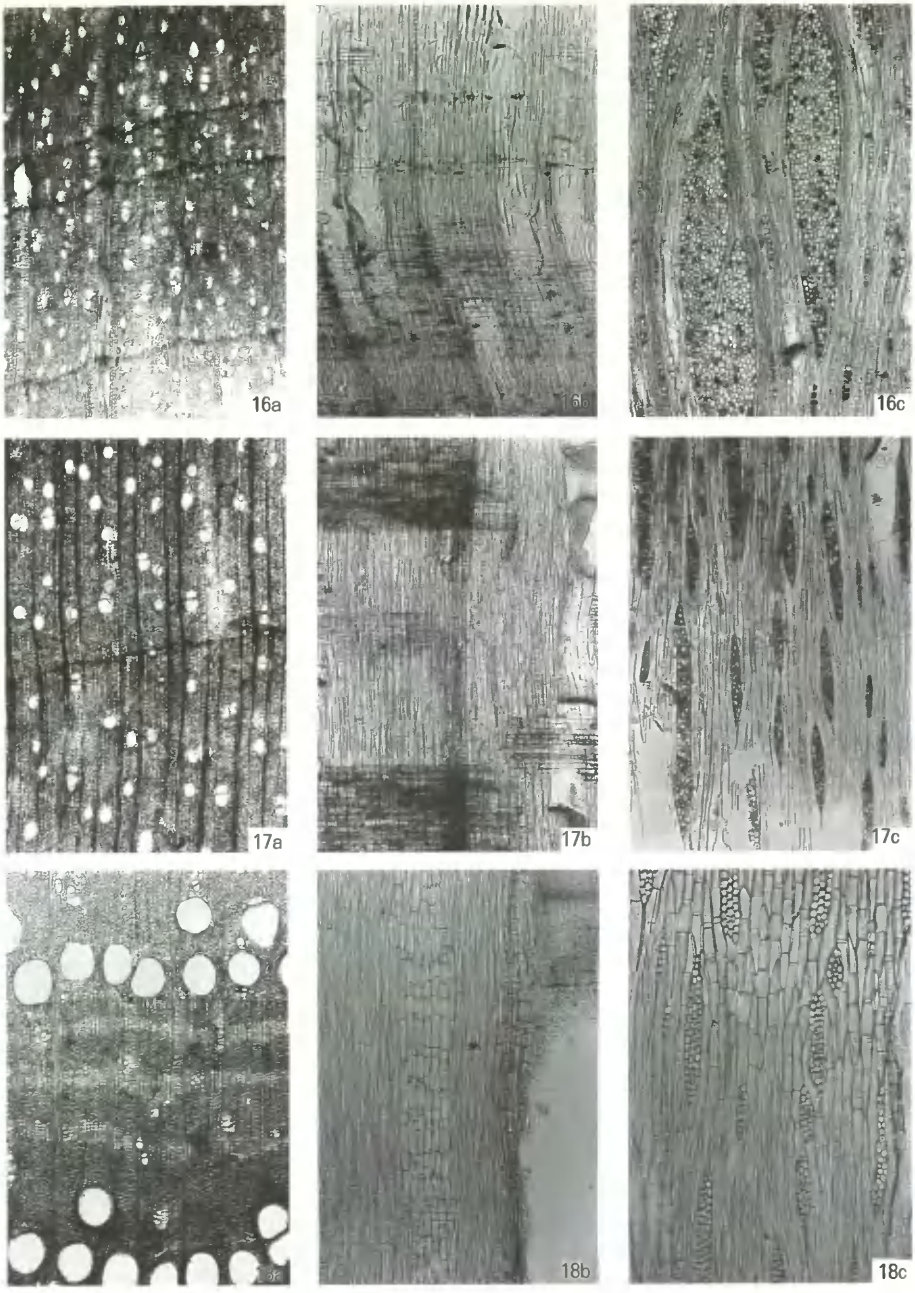
図版７　木材(5)



13. ヤマグワ（試料番号49）
14. クスノキ（試料番号54）
15. センダン（試料番号30）
　a：木口，b：柾目，c．板目

200μm：a
200μm：b. c

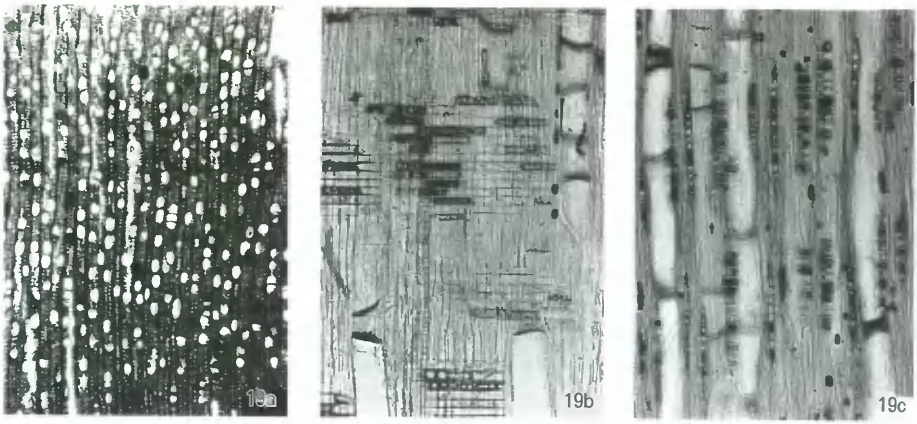
図版8　木材(6)



16. チドリノキ（試料番号3）
17. カエデ属（試料番号35）
18. ムクロジ（試料番号52）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b, c

図版9　木材(7)



19. トチノキ（試料番号29）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

図版10　大型植物遺体

1．モミ（試料番号４）
2．カヤ（試料番号４）
3．ツガ属（試料番号４）
4．クマシデ属（試料番号２）
5．クマシデ属（試料番号２）
6．ツツジ科（試料番号５）
7．スダジイ（試料番号５）
8．イチイガシ（試料番号４）
9．イチイガシ（試料番号４）
10．イチイガシ（試料番号４）
11．イチイガシ（試料番号４）
12．イチイガシ（試料番号４）
13．イチイガシ（試料番号４）
14．ツクバネガシ（試料番号４）
15．ケヤキ（試料番号２）
16．ケヤキ（試料番号２）
17．ケヤキ（試料番号２）
18．ムクロジ（試料番号５）
19．チョウセンゴヨウ（試料番号６）
20．カエデ属：葉（試料番号２）
21．カエデ属：葉（試料番号２）
22．カエデ属：果実（試料番号４）
23．ホタルイ属（試料番号７）
24．オトギリソウ属（試料番号７）

岡山理科大学三好教夫研究室による花粉分析

学名	和名	上池12区北壁上(縄文河道14)	上池12区北壁下	下池IX区東壁1河道9	下池IX区東壁2	下池IX区東壁下1	下池IX区東壁下2	下池IX区西壁2	下池IX区西壁上
Pinus	マツ属	10	2	9			2	12	3
Abies	モミ属	5	3	6			1	5	2
Tsuga	ツガ属	3	1	1	1			2	1
Cryptomeria	スギ属	9	6	3	6	1	4	4	2
Sciadopitys	コウヤマキ属	2		1	1		2		1
Podocarpus	マキ属	1						1	
Pterocarya	サワグルミ属	3		1				2	1
Betula	シラカンバ属		1				1		
Carpinus tschonoskii type	イヌシデ属	2	8					4	1
other Carpinus	他のクマシデ属	7	6	3	1			1	3
Fagus	ブナ属	1	1					1	
Quercus	コナラ亜属	30	14	35	31	2	15	29	45
Cyclobalanopsis	アカガシ亜属	105	113	102	223	4	21	189	112
Castanea-Castanopsis	クリ属－シイ属	10	2	17	5		1	21	16
Ulmus-Zelkova	ニレ属－ケヤキ属	6	8	1	1			6	2
Celtis-Aphananthe	エノキ属－ムクノキ属	8	17	2	30				
Acer	カエデ属		2	1		1			1
Aesculus	トチノキ属	2			7			2	1
Ephedra	マオウ属		1						
Salix	ヤナギ属				1				
Myrica	ヤマモモ属		1	2	1		2		3
Corylus	ハシバミ属							1	
Alnus	ハンノキ亜属						4		
Alnaster	ヤシャブシ亜属						1		
Illicium	シキミ属			1					
Camellia	ツバキ属		1					1	
Zanthoxylum	サンショウ属	2							
Rhus	ウルシ属		2		1				
Ilex	モチノキ属		1	1				4	
Parthenocissus	ツタ属							2	
Araliaceae	ウコギ属		1					3	
Trachelospermum	テイカカズラ属	1							
Fraxinus	トネリコ属				2				
Viburnum	ガマズミ属							1	
Gramineae	イネ科	6	1	2	2		4	7	2
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	1	4			1	2	3
Typha	ガマ属				1				
Moraceae	クワ科	1							
Urticaceae	イラクサ科				1				
Reynoutria	イタドリ属	1	1						
Thalictrum	カラマツソウ属								1
Leguminosae	マメ科	1							
Umbelliferae	セリ科								1
Artemisia	ヨモギ属	2	2	1	1	2	3	10	6
other Carduoideae	他のキク亜科型			1			2		1
1-lete type FS	単条溝型シダ胞子	6	15	28	5	5	34	16	12
3-lete type FS	三条溝型シダ胞子	3	1	6			4	2	5
Lycopodium serratum type	トウゲシバ型					1	1		1
other Lycopodium	他のヒカゲノカズラ属					1			
Pteris	イノモトソウ属							1	
Trees	高木花粉								
Shrubs	低木花粉								
Herbs	草本花粉								
Ferns	シダ胞子								
Unknown	不明	11	7	17	14	3	6	16	10

〈三好先生のコメント〉

下池IX区河道９東壁下層１、２の２点からは余り花粉が出ませんでしたが、残り６点はたくさん出現し、全て照葉樹林要素のアカガシ亜属が圧倒的に多いようです。トチノキ属やツバキ属も出現していますが、量的には少ないようです。

縄文海進の最盛期ではなく、今の気候と余り変わらないようですが、トチが含まれる特徴があるようです。

図版 1

1．上池調査区遠景
（南西大岩遺跡より）

2．1区全景（南西より）

3．1区河道
断面（北より）

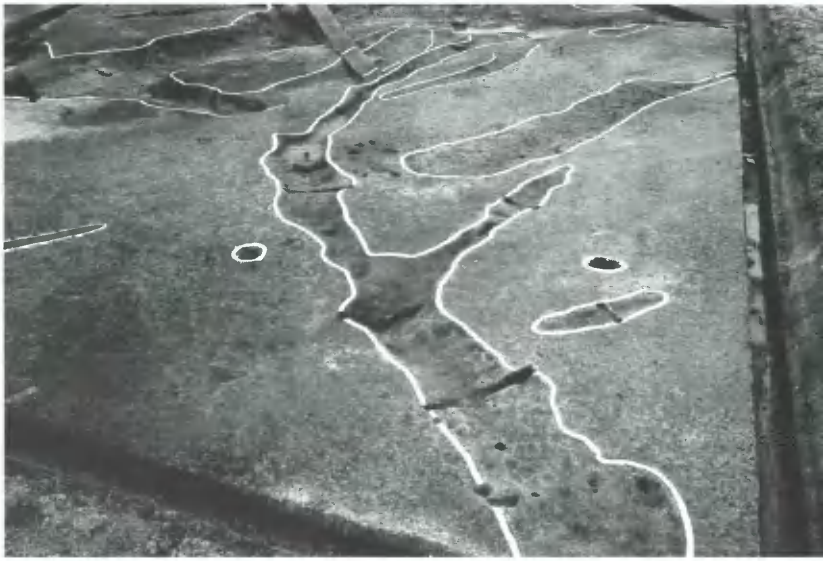
図版2

1．1区河道
井堰（北西より）

2．1区竪穴住居1（南より）

3．1区竪穴住居2（南より）

１．２区北半（南西より）



２．２区南半（南東より）

３．２区河道
断面（北東から）

図版 4

1．3区土壙49

2．4区北半（南より）

3．4区南半河道22
（南西より）

1．4区南半河道10
（南西より）

2．4区南半河道13
（南西より）

3．4区河道24
（南西より）

図版6

1．5区河道（南より）

2．5区河道（北より）

3．5区河道（南西より）

1．6区全景（北より）

2．6区全景（南西より）

3．6区河道底部井堰
（北東より）

図版 8

1．6区河道
木製品出土状態（南より）

2．7区縄文河道（北より）

3．7区河道14（北より）

1．7区土壙群（南西より）

2．7区土壙群（南より）

3．7区方形周溝遺構

図版10

1．7区土壙群（南東より）

2．土壙15（東より）

3．土壙23･30（北から）

1．7区溝19（北より）

2．7区溝19内遺物出土状況
（東より）

1．8区縄文河道14（北より）

2．8区縄文河道14（西より）

3．8区縄文河道14
（南東より）

1．10区全景（西より）

2．10区河道15･16
（北東より）

3．10区河道15･16（東より）

図版14

1．10区河道９・10（北より）

2．10区河道11（西より）

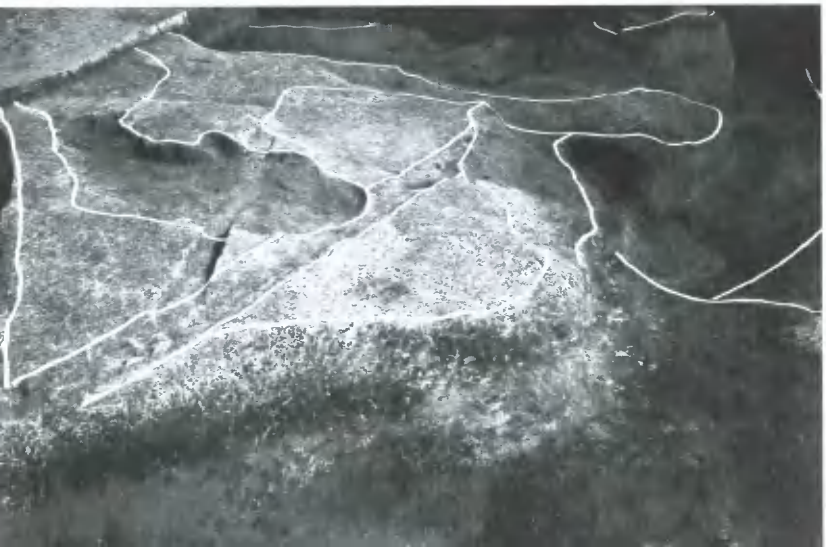
3．10区溝２（南より）

1．10区縄文前期土器溜まり
（東より）

2．10区縄文前期土器溜まり
（南西より）

1．11区全景（西より）

2．11区南部遺構群（西より）



3．11区河道（北より）

1．12区縄文河道14全景
（西より）

2．12区河道14北部
（東より）

3．12区河道14底部出土
縄文土器（西より）

図版18

1．Ⅰ区溝状遺構1・2・3
（西より）

2．Ⅱ区河道2・3（東より）

3．Ⅱ区河道2（東より）

1．Ⅲ区全景（北より）

2．Ⅲ区河道（南西より）

3．Ⅳ区全景（南西より）

図版20

1．Ⅶ・Ⅷ区北半河道９
（西より）

2．Ⅶ・Ⅷ区北半河道９
（南より）

3．Ⅶ・Ⅷ区南半河道９
（北より）

1．IX区南半全景（弥生面）

2．IX区河道８（南東より）

3．IX区河道９（南東より）

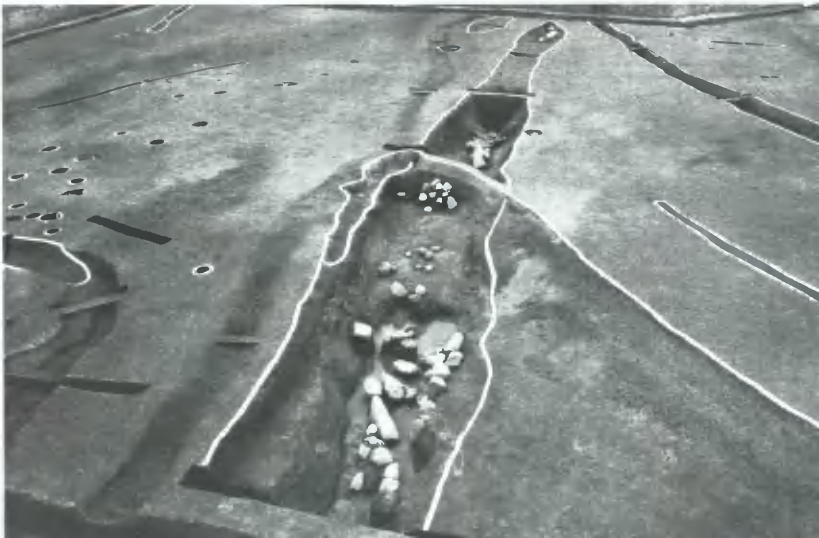
1．Ⅸ区住居跡１（南西より）

2．Ⅸ区溝15（南西より）

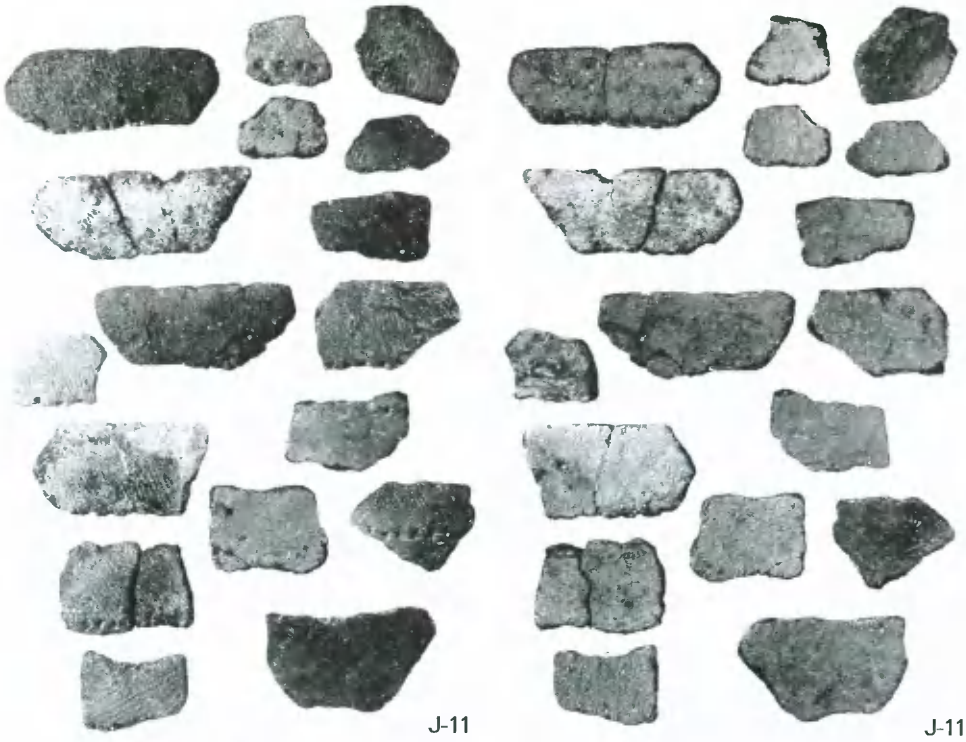
3．Ⅸ区溝２（南西より）

1．Ⅶ・Ⅷ区北半溝19及び断面（西より）

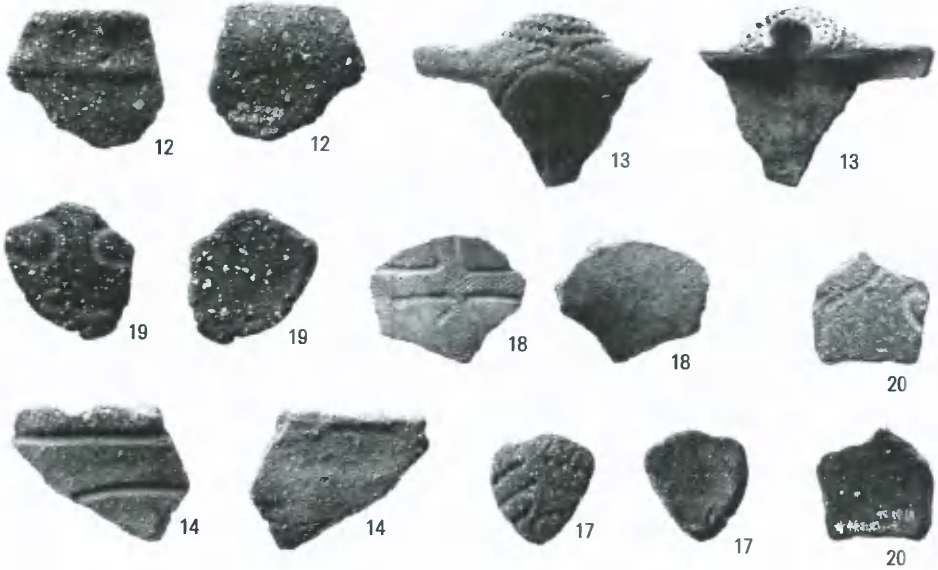
2．Ⅶ・Ⅷ区北半溝19（東より）



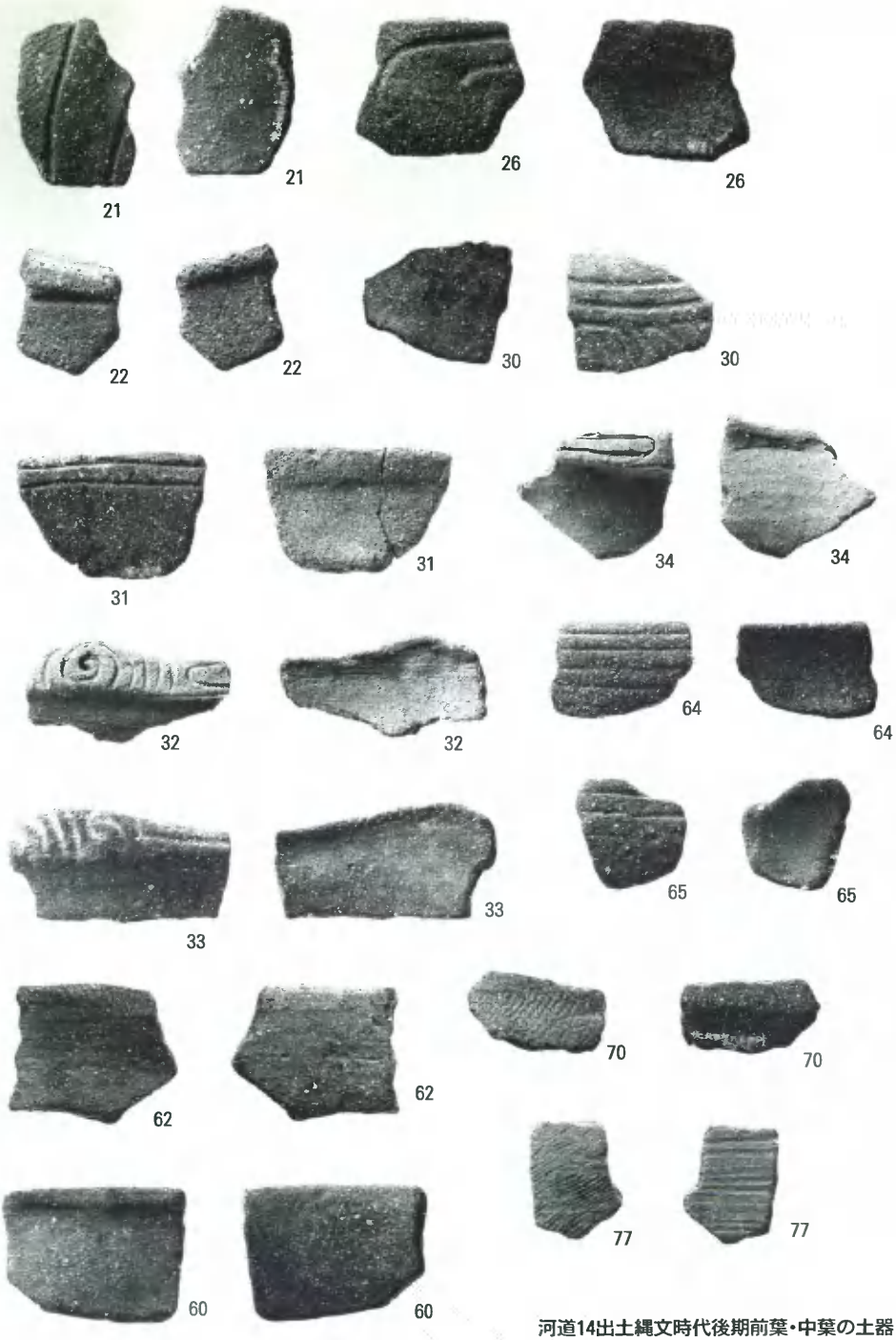
3．Ⅸ区溝19（西より）



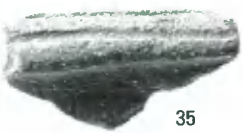
1　10区河道上面出土縄文前期の土器



2　河道14出土縄文時代中期・後期前葉の土器



河道14出土縄文時代後期前葉・中葉の土器


35

35

37

37

38

38

39

39

40

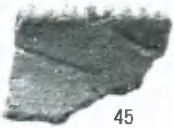
40

41

41

42

42


45

45

44

44

52

52

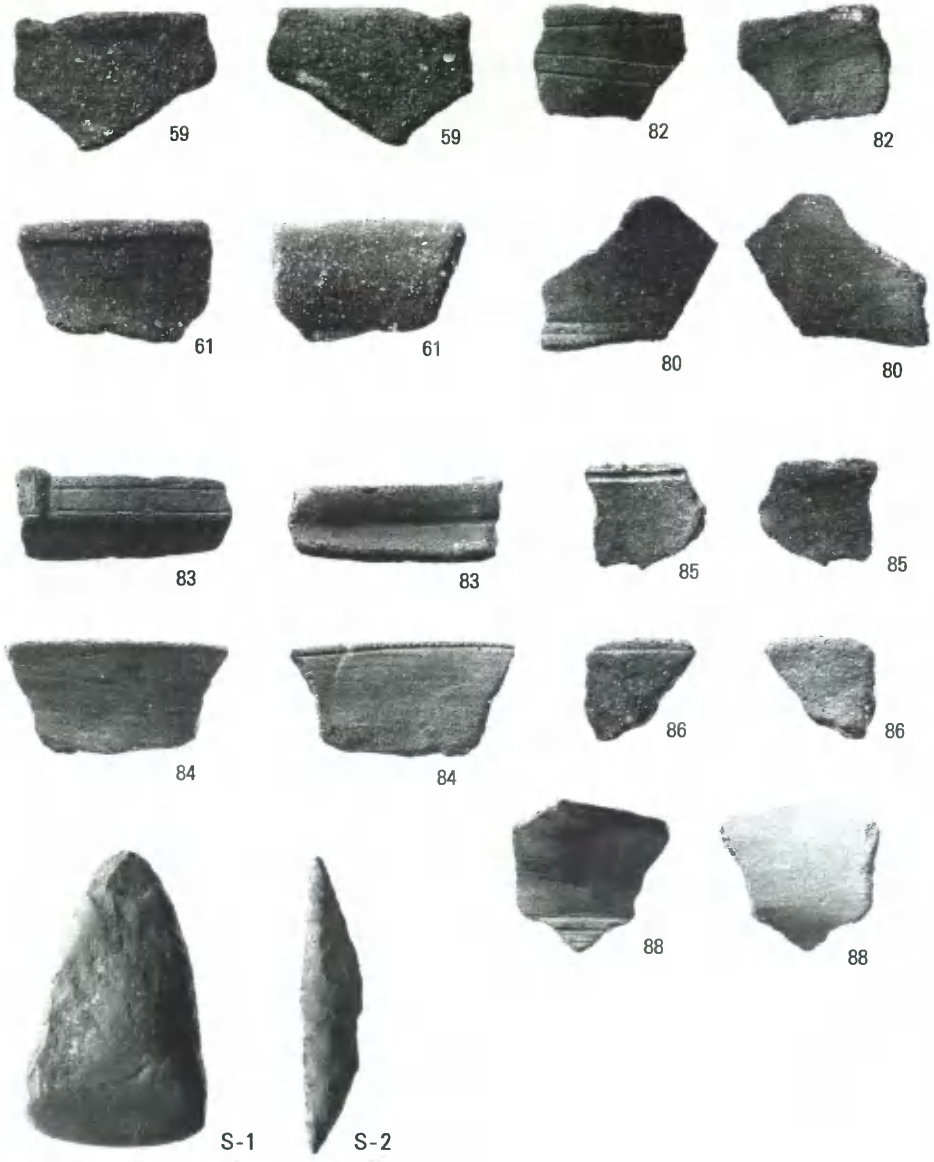
55

55

57

57

河道14出土縄文時代後期中葉の土器



河道14出土縄文時代後期中葉・後葉の土器及び河道出土石器

河道出土弥生前期の土器(1)

566

146

302

356

27（土壙13）

544

362

64（土壙28）

400

363

河道出土弥生前期の土器(2)

840

843

842

844

841

867

862

872

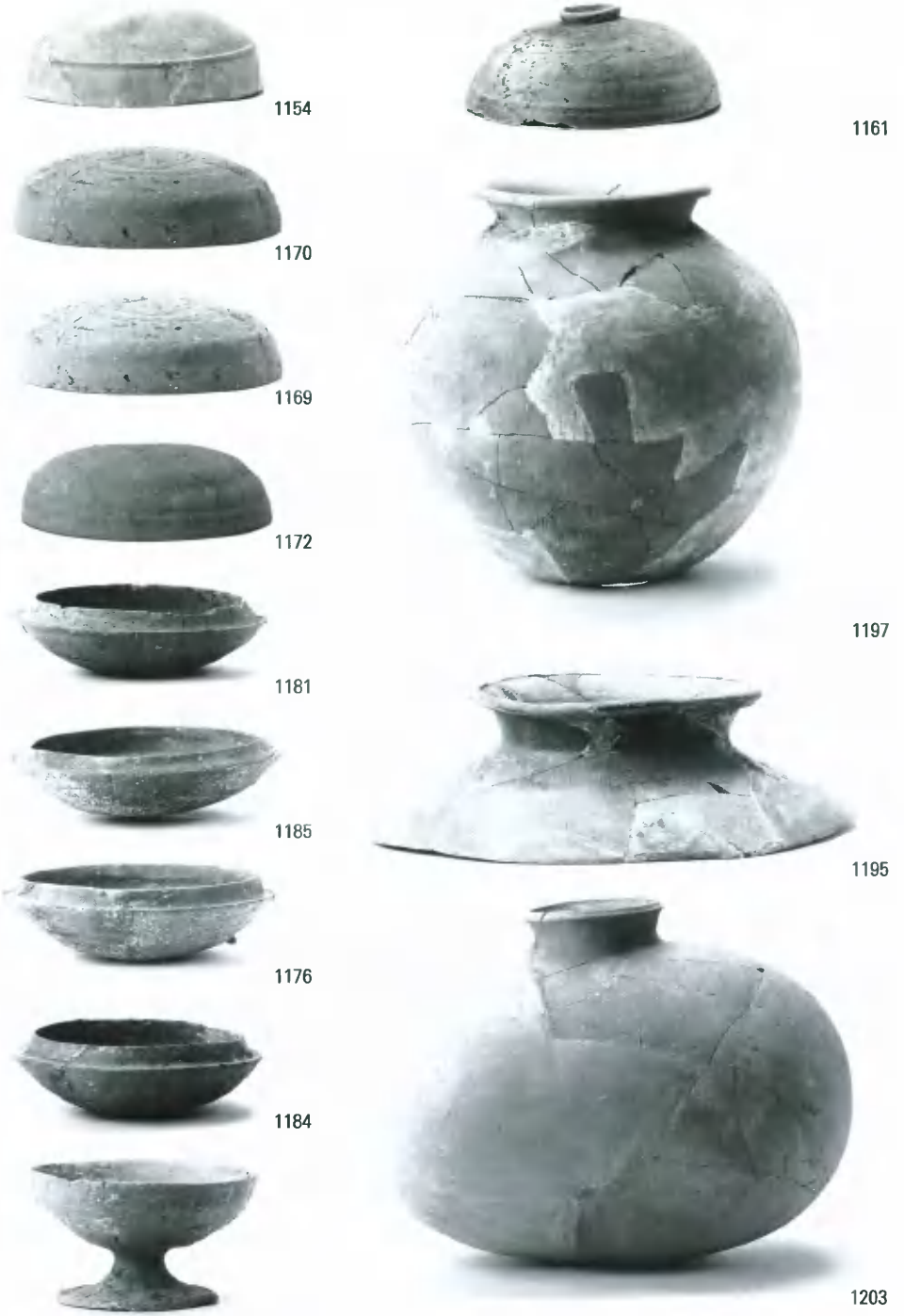
4区河道22出土弥生後期の土器

744

1　４区河道内出土篭目の付着した土器

746

2　４区河道出土
弥生後期の壺



河道24出土土器（須恵器）

209

218

301

210

219

226

211

220

224

225

228

231

229

233

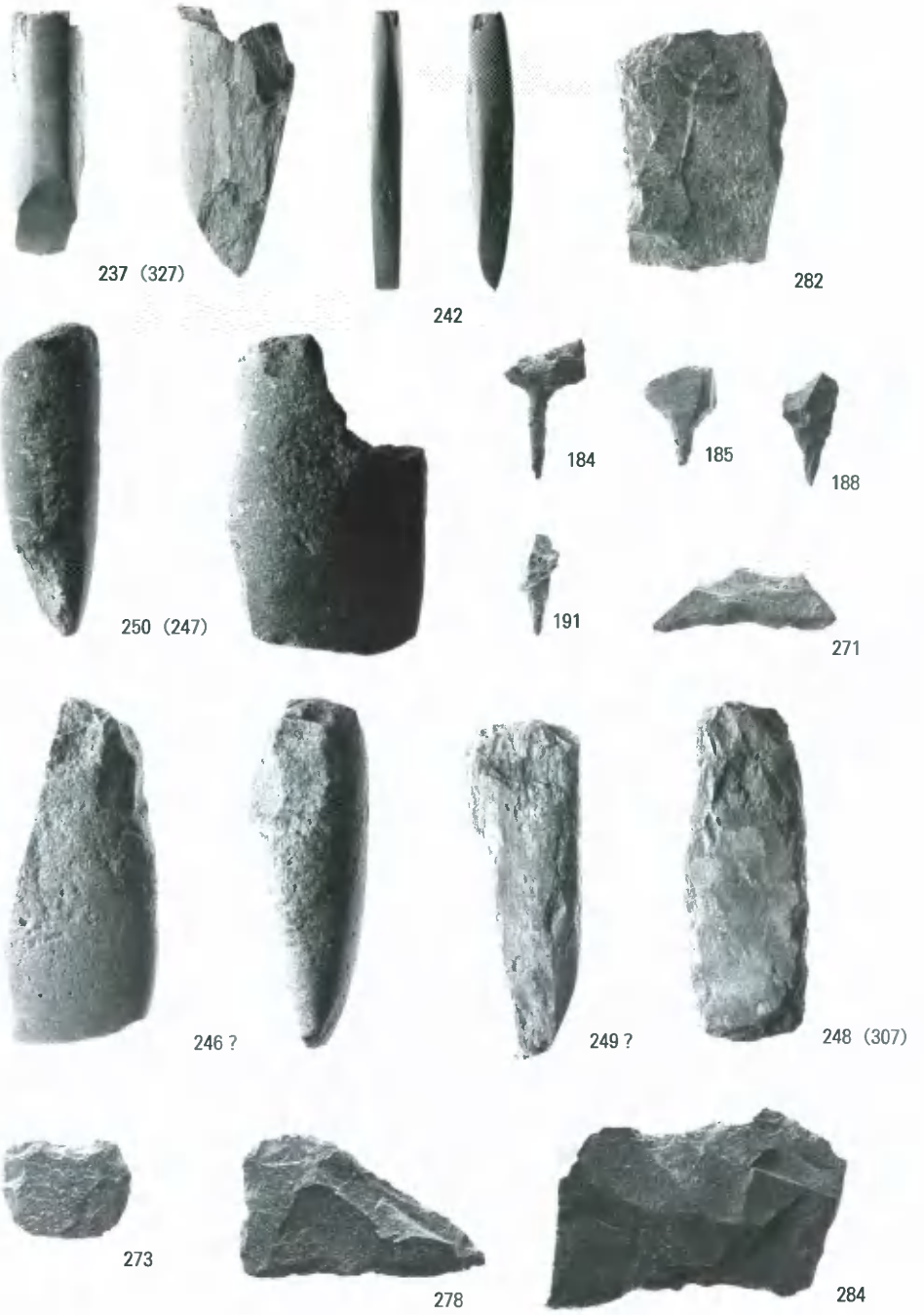
268

230

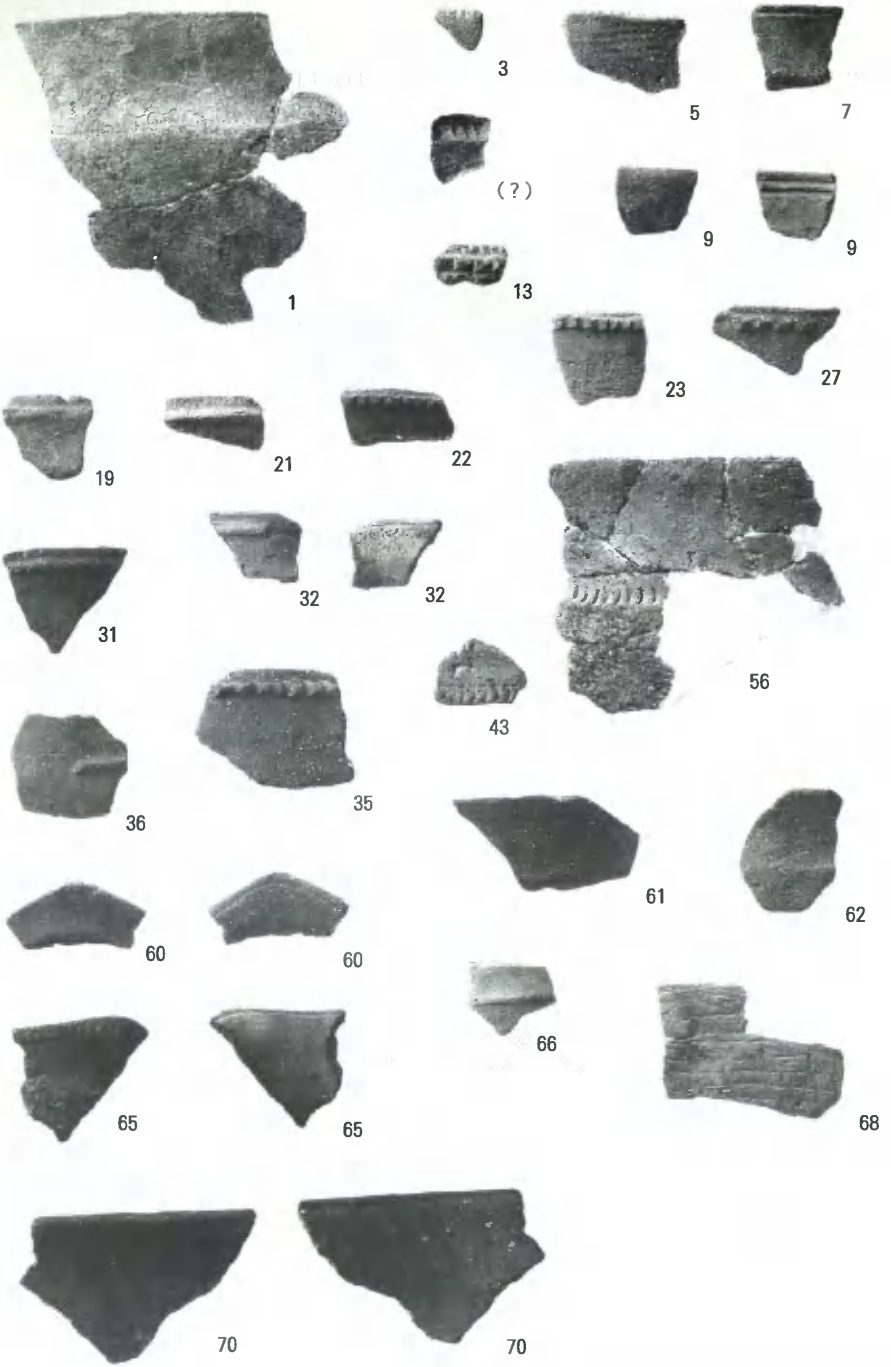
267

269

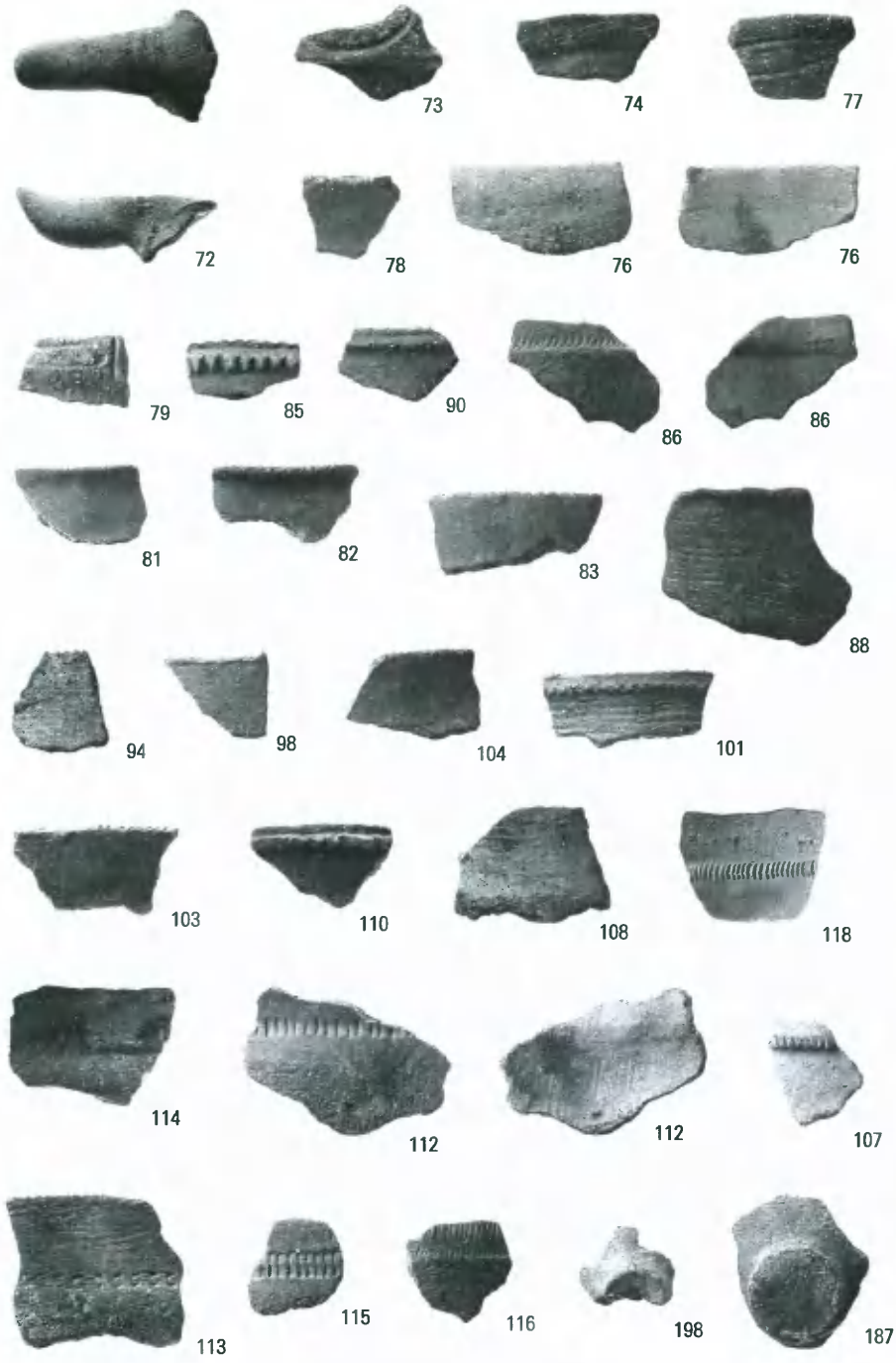
弥生河道出土石器(1)


237（327）
242
282
250（247）
184
185
188
191
271
246？
249？
248（307）
273
278
284

弥生河道出土石器(2)



下池調査区各地点出土縄文土器(1)



下池調査区各地点出土縄文土器(2)

117

117

119

119

123

124

124

125

136

126

130

132

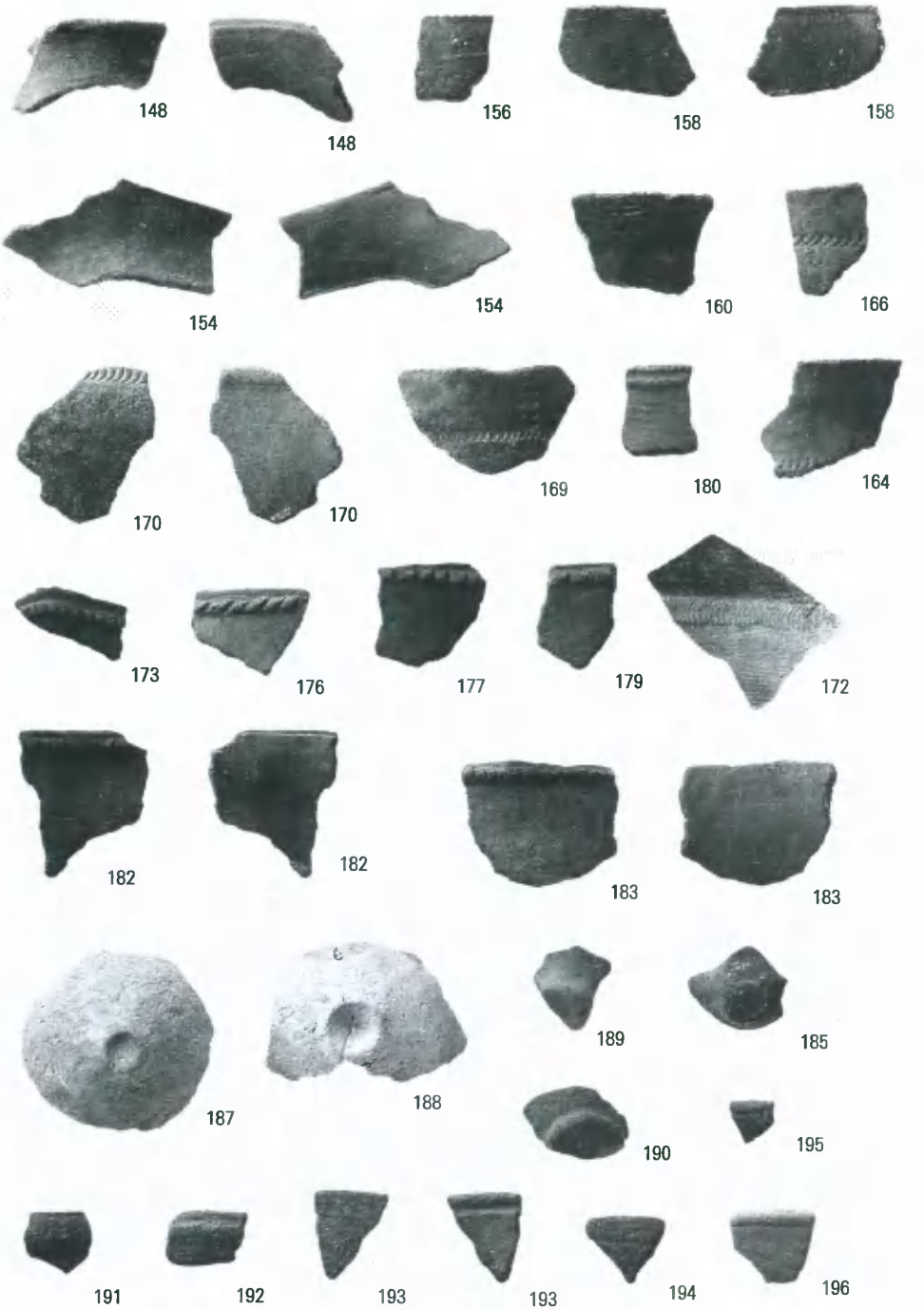
129

133

133

141

下池調査区各地点出土縄文土器(3)



下池IX区河道９出土縄文土器

12

20

21

18

22

下池調査区各地点出土石器

19

22

26

27

35

59

18

34

36

54

56

下池IX区溝15の土器(1)

40

43

55

44

41

42

47

57

33

53

下池IX区溝15の土器(2)

報告書抄録

ふりがな	たますたなかいせき
書名	田益田中遺跡
副書名	笹ヶ瀬川調節池建設に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	140
編著者名	伊藤　晃・下澤公明・山磨康平
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL.086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL.086-224-2111
発行年月日	西暦　1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市長村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たますたなかいせき 田益田中遺跡	岡山県岡山市田益（たます）	33201		34° 42′ 20″	133° 54′ 30″	1995年4月10日 ～ 1997年6月30日	4万	笹ヶ瀬川調節池建設に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田益田中遺跡	旧河道 集落	縄文時代 弥生時代 中世	旧河道・溝・竪穴住居・建物・土壙・井戸	縄文土器・弥生土器・石器・土師器・木器・土製品	旧河道の埋土中で縄文時代から弥生時代の土器・石器が多量に出土 鯨面土器

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 140

田益田中(笹ヶ瀬川調節池)遺跡

笹ヶ瀬川調節池建設に伴う発掘調査報告

1999年3月13日　印刷
1999年3月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発　行　岡山県教育委員会

印　刷　株式会社 三門印刷所